パンドラヒーローアカデミア

ぐち山ぐち

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界の人々の約８割が個性を持つ時代

そこに目覚めたのは＜魔法＞を操る異形種達…

主人公である出久くんが最高のヒーローになるために数々の困難を乗り越えているそばで、軍服埴輪が同じくヒーローになるために暴れまくる…！

【もしもパンドラが雄英高校に入ったなら？】

目次

プロローグ&登場人物① 1
登場人物② 5
学校生活
入試当日 22
実施試験 33
入学式 45
個性把握テスト 57
【番外編】とある姉妹の話 68
対人戦闘訓練 76
化け物達と悪の支配者 90
ＵＳＪ襲撃事件 101
宣戦布告 119
体育祭
ゲイン効果 129
正々堂々 142
乞うご期待 154
全力ＶＳ自分勝手 165
不完全燃焼 175
職場体験
開演時間にご注意を 186
轟少年の受難 197
課題 208
【番外編】すまっしゅ!!ネタ 217

開幕 228
仇討ち 238
ヒーロー殺し 247
そして日常へ 256
期末テスト
にゃーん 265
得体 277
ラスボスの倒し方 285

プロローグ＆登場人物①

昔々またさらに昔、世界には＜魔法＞が満ち溢れていました。
そんな世界に降臨するのは異形の者、あるものはおぞましい虫の姿、あるものは邪悪なオーラを放つ山羊の姿、見るものの恐怖を掻き立てる異形種の集まり。
その名は……
「アインズ・ウール・ゴウン」
その集まりの頂点に立つのは死のオーラを撒き散らす骸骨の姿をした「死の王」
その下で異形種達は我が物顔で世界を駆け回っていました。
人々は我が身に災いが降りかからぬよう必死に祈る毎日。しかし、ある時人々決意しました。己の安息を守るために、あるいは生まれてくる未来の子供たちのために……。
かくして「アインズ・ウール・ゴウン」は拠点ごと封印された。人々が持つ全ての力をもってして。

それから長い長い時がたった

時間は全てのものに作用する。いい意味でも悪い意味でも

ある日＜個性＞が蔓延する世界のどこかで

最凶最悪の異形種達が目を覚ました

彼らがもたらすものは支配か、滅亡か・・・
それは誰にもわか「「何この世界ｗｗｗクソワロタｗｗｗｗｗｗ」」
ｂｙ最凶最悪の異形種達

＜設定＞

アインズ・ウール・ゴウンが封印されてから、なぜか＜魔法＞と＜マジックアイテム＞は全て無くなりました。（深くつっこまないでください）ただその存在はあまり知られていないおとぎ話として今の世界に伝わっています。世界に数えるしかいないが研究している人もいるにはいます。

この物語のモモンガさん達は生まれた時から異形種です。ＮＰＣ達も拾われたりして育てられたガチの子供のようなもの。

好奇心の赴くままに行動していたら、力を恐れた人々に封印されました。結局封印解けたけど。

封印が解けたあと外の世界を見てモモンガさん達は驚きます。なんやねん個性って、俺ら知らん。ワクワクスっぞ。ということでＮＰＣ達と一緒に調査しに世界へ飛び立ちます。

とりあえず魔法・スキルの中から適当に選んで個性として登録して、完璧に社会に溶け込んで活動する者やまんまの姿で暴れまくる者など「アインズ・ウール・ゴウン」の存在がバレない範囲で割とみんな好き勝手している。＜転移門（ゲート）＞で月１ナザリック（もちろん隠蔽済み）に戻って報告会とかしてます。

今のところ世界征服とかは考えていません。どんな個性があるか分からないし今は個性に対する好奇心の方が強い。やるとしても最低でも１００年以上はあとだから出久くん達と敵対することは無い。やったね！

＜登場人物＞

・モモンガ

我らが主人公モモンガさん「アインズ・ウール・ゴウン」のまとめ役。

この物語では元からの異形の心や長年培ってきた支配者の貫禄があるがあくまで根は原作のまま。

鈴木悟の名前でサラリーマンとしてパンドラと共に完璧に社会に溶け込みながら個性の情報収集をしている。珍しい・レアな個性をみ

つけるとコレクターの血が騒ぐ。
原作では悲しい感じのモモンガさんですがここでは人生謳歌しています。最近の悩みはパンドラが親離れを全くしないこと。言動を矯正しきれなかったこと。
個性【筋肉弛緩】
実際はアンデットの能力や＜不死者の接触（タッチ・オブ・アンデス）＞を使っている。触れたものの筋肉を弛緩させることが出来る。

・パンドラズ・アクター
本作の主人公。モモンガさんの息子であり、鈴木二重と名乗っているが相手にパンドラと呼ぶよう強要する。建てた病院が逃げ出す程の重度なファザコンを拗らしており、ついでに治らない厨二病にもかかっている。
父上命、頭いいのに父上が関わると1周回ってバカになる。軍服とレアなアイテムが好き。
有名なヒーローになれば個性の情報が継続的に大量に早く手に入れられる。そして父上にレア・珍しい個性の情報を届けられると考え、ヒーローになることを決意。手っ取り早くヒーローになるため雄英高校に入る。ヒーロー名？　パンドラズ・アクターに決まってまぁすっ!!
個性【ドッペルゲンガー】
見たものの姿（服も含む）と能力の８０％（見た時着ていた服の能力も）を使うことができる。さらにコピーした能力は５５個ストックすることが可能。至高の御方達の能力はコピー＆ストック済みなので自由にストックできるのは１４個。写真越しなどでは姿だけしかコピー出来ない。
全身変化するまで1秒のタイムラグがある。だが必要とする部分だけでも変化すればそのコピーした個性が使える。
例：相澤先生なら顔だけ変化すれば【抹消】が使える
飯田くんは足を変化させれば【エンジン】は使えるが安定して使うには全身変化した方がいい　　などなど

あれ？　チートっぽくなってしまった??

登場人物②

・たっち・みー

アインズ・ウール・ゴウンの中で戦士職最強、ヨーロッパ地方でセバスと一緒に活動中、目覚めた世界にヒーローという職業があることにめちゃくちゃ喜んだ。最初は

「困った人を助けるのは当たり前」の精神で純白の鎧のまま目につく人を片っ端から助けていたが強すぎて、個性を使っていると思われヒーロー免許がないのに個性を使っているとしてヴィジランテ扱いされていた。（結構人気だった）

オールマイトの大ファンであり、戦闘力もだが何より「平和の象徴」であるための心ざしに憧れている。弱体化する直前のオールマイトに会ったことでヒーローとしてオールマイトの隣に立ちたいと強く思い。国家にしばられて自由に弱いものを助けられないのではないかなど、色々考えたが、ついにヒーローになることを決めた。

これまで着用していた純白の鎧を脱ぎ、年がわからない虫の顔を晒してヨーロッパのヒーロー学科のある高校に入学、本編1年前くらいにサイドキックとして無事ヒーローデビューした。

ヒーローネームはそのまま、鎧は適当なのを着ている。

後、戦闘力が高いことで有名になる。そして極悪ヴィランばっか対峙することになる。（ウルベルト含む）割と忙しく目的である個性調査が出来てない。

ここでもウルベルトと仲が悪い、しかもヴィランとして暴れているので本気で駆逐してやろうかと考えている。

個性【虫】

身体能力が虫が人型になったときと同じぐらいある。と説明しているが実際の身体能力はそれどころじゃないレベル。時々後ろに現れる「正義降臨」の文字は個性の1種なのかと人々の間で議論されているらしい。

・セバス

たっち・みーと共にヨーロッパで活躍中。たっち・みーと同じく困っている人が見捨てられず片っ端から助けてしまうので上と同じ理由でヴィジランテ扱いだった。オールマイトの大ファンであるが、隣にたちたい訳ではないのに加え、歳も歳なので主人がヒーローをめざしている間もずっとヴィラテンジとして活躍していた。

そのうち都市伝説扱いになる。マダムに人気。よく話しかけられる。

デミウルゴスと気が合わない、ヴィランとして暴れているので1発ぶちかませないかなと考えている。

個性【気功】

気功がめっちゃ操れる。それによって身体能力が凄いことになっている。ということにしている。ついでに瀕死の人も気功を使って治せるらしい。

・ウルベルト

アインズ・ウール・ゴウンの中で魔法職最強、デミウルゴスの親。ヨーロッパ地方でデミウルゴスと共に活動中。目覚めた世界にヒーローという職業があることにいい感情を抱いてない。実態をみて人気商売であることが分かりさらにげんなりしている。

敵サイドから個性調査をするということで見た目そのままでヴィランとして活躍中。だが性格上「弱者をいたぶって自分が強いと勘違いしている弱者の心を折る」ことが好きなので、そんなやつばっかり狙っていたら1部からダークヒーロー扱いされる。時たま市民を襲っても近くで他のヴィランが暴れていたりして巻き添えで吹っ飛ばしてしまい恐怖と共に感謝されるという意に沿わない結果になることが多い。それでも何年も繰り返しているうちにヴィラン達の中から一目置かれる存在になる。

オール・フォー・ワンとも面識がある。ヴィラン連合をちょくちょく煽りに行っている。

ＮＯ．１ヒーローであるオールマイトのアンチだが、自分以外がオールマイトの悪口を言うとキレる面倒くさいタイプであり、１周

回ってたっち・みー並の大ファンである。
ここでもたっち・みーと仲が悪い。ヴィランだし正義活動しているやつ抹殺してもおかしくないよねということでたっち・みーをぶちのめす機会がないかなとよく考えている。
個性【炎】
炎属性の魔法を使っている。あのエンデヴァーよりも温度が高い炎から家庭のコンロレベルの炎も出せる

・デミウルゴス
ウルベルトを親にもつ。ウルベルトと共にヨーロッパで活躍中、別に顔を見られてもなんの問題はないが一応仮面を被り、ヤルトバオトと名乗っている。
ウルベルトと違い「弱者が絶望してみっともない悲鳴をあげる」ことが好きなのでいたずらに街で暴れたり趣味でさらっても気づかれない人間を拷問したりとぶっちゃけウルベルトよりも恐れられいる。ウルベルトはその事には黙認している。頭がいいので株で稼いでおりめっちゃ所持金持っている。
セバスと気が合わない。正義ＶＳ悪って王道だよねということでちょっとあいつ焼けないかなとよく考えている。
個性【悪魔】
悪魔っぽい見た目になり悪魔っぽいことが出来る。そりゃそうだよ悪魔だもの。

・ペロロンチーノ
ぶくぶく茶釜の弟、シャルティアの親。個性調査という名の金髪ロリを探すためにシャルティアと共にアメリカの方で活動中。
別にヒーローになるつもりもヴィランになるつもりもなかったがシャルティアと共に美少女コンテストに乱入した際、わざとでは無いが美少女達相手にラッキースケベを発動させてしまい指名手配される。それからも同じような事件を起こし続け、主に戦犯はシャルティアだが保護者として一緒に行動していたこと・むしろ一緒に楽しんで

いたことで2人仲良くヴィラン認定されてしまった。
しかしとある事件を起こした際、「エロ」の真髄について魂の叫びをあげたところ同志がその叫びにいたく感激し熱烈なファンクラブができた。人気者ヴィラン
エロゲが大好きでありよく日本に買いに来る。最近ぶくぶく茶釜がエロゲ業界に進出したことにより、姉の声をエロゲで聞く羽目になりヤケになってまた事件を起こし続けている。
モモンガ曰く「ペロロンチーノとシャルティアがアインズ・ウール・ゴウンの一員だとバレたら全人類の記憶を抹消するために殺戮が開始されるかもしれない」
人類の命運はペロロンチーノにかかっているのかもしれない
個性【鳥】&【弓?】
見た目のまま鳥のように羽をつかって空が飛べる
攻撃する際様々な効果を持つ矢を放つことから、個性2つ持ちなのではないかとファンクラブで議論が重ねられている。

・シャルティア
ペロロンチーノを親にもつ。ペロロンチーノと共にアメリカの方で活動している。元々の素質もあったのかもしれないが、ペロロンチーノの英才教育をうけながら育てられたため立派な変態に成長した。
周りに暴走を止めてくれる常識人がおらず、行動しているのが同じく楽しんでいるペロロンなので多分今アインズ・ウール・ゴウンの中で1番やらかしている。
見た目は可憐な美少女なのでファンが多い。商品化もされている。
性癖は原作のままなのでモモンガが世界で1番美しい存在だと思っている。ペロロンと日本に来た際、よくモモンガ宅に突撃訪問そしてパンドラと押し問答している。
個性【魅了】
実際は＜魅了の魔眼＞を使っている。目が合った生き物を操ることが出来る。身体能力がやけに高いことや空を飛んでいるのは自分

自身に魅了をかけてパワーアップしていることにしている。

・タブラ

アルベドの親。裏世界から個性調査を始めることにしたので、裏世界と繋がりが深いいくつかの企業の株を買い占めて経営権を獲得した。世界に対する影響力をさらにふやすため現在アルベドと共にその優秀な頭を使って企業の拡大を目指し、全世界を駆け回っている。

見た目は脳食（ブレイン・イーター）いのまま。表情が読みにくいのに加え威圧感があるので一石二鳥だと思っている。さすがにボンテージは着ていない。どうやって着たのか謎だが会社にいる時はスーツを着用している。

アルベドは原作では恨みをもっていたが、この物語ではとくにない。むしろ尊敬しているし、育てて貰った恩は感じているのだがモモンガＬＯＶＥなのは変わっておらず、若干タブラに対する態度が雑。

しかも最近反抗期なのか知らないが、仕事の合間どころか勤務内にも抜け出してモモンガのもとにかよっているのでぶっちゃけ泣きそうになっている。

オール・フォー・ワンと面識がある。博士とも話をしたことがある。ホラー映画・神話・ギャップ萌えが大好きでありよく社員が捕まってげっそりするまで話に付き合わされているのが目撃されている。そろそろハラスメントで訴えられる日も近いのかもしれない。

個性【記憶開覧】

実際には＜記憶操作（コントロール・アムネジア）＞を使っている。記憶操作もできるが警戒されるのを恐れ、覗けるだけと周りに公言している。

魔力の消耗が激しく長くは使えない。

・アルベド

タブラを親にもつ。タブラと共に企業拡大に向けて世界中を飛び回っている。明晰な頭脳と美しい外見を活かして会談・交渉・従業員のケアなどを行いつつ秘書業もこなしている。

原作とは違いギルドメンバーに恨みを抱いてない。むしろ尊敬しているがその中でもモモンガは別格。小さい頃から告白しているが

子供としか見れないと断り続けられている。それでも諦めきれず、ずっと愛しているしこれからも愛し続ける予定。
普段は丁寧な美しい言葉遣いをしているが、モモンガのことになるとサキュバスの性か知らないがＲ１８ワードを口走る残念な子。
最近仕事を放ってモモンガのもとを訪ねている。そこでパンドラや時々シャルティアとキャットファイトを繰り広げている。
姉にニグレド、妹にルベドがいる。２人はナザリック待機組。
個性【カウンター】
実際は特殊技術（スキル）＜カウンターアロー＞や＜ミサイルパリー＞・＜パリー＞を使っている。相手の攻撃を跳ね返すことが出来る

・ぶくぶく茶釜
ペロロンチーノの姉。アウラ・マーレの親。日本に住んでおり、仕事は原作同様声優業。
最近の声優業界は見た目も大切になってきたので、さすがにピンクのち？こはやばいと思いキツめの美女の姿をとっている。
最近ロリボイスが評価され始め、人気が出てきた。エロゲの仕事も多く引き受けているのでペロロンチーノからクレームがくる。よく喧嘩（一方的な蹂躙）をしている。
休日は世界中をアウラ・マーレと共に旅行している。そのついでに個性調査もこなしている。
変態の姉であるだけあって可愛い男の娘（こ）と漢（おんな）の子が好き。旅行中貧しい子供を見かけたら性別が逆の服をプレゼントする。という有難いのかよく分からない活動をしている。
個性【ヘイトコントロール】
実際は特殊技術（スキル）の＜メガインパクト＞など防御系の技を使っている。相手の攻撃や感情のヘイトを自分に向けさせることが出来る。上手く使えば人間関係をコントロール出来る

・アウラ
マーレの姉。ぶくぶく茶釜を親にもつ。ぶくぶく茶釜が仕事に

いっている間はナザリック第6階層で魔獣達と遊んでいる。
休みの日はぶくぶく茶釜とマーレと一緒に世界中を旅行している。その際個性調査もしているのだが、個性よりも世界中の可愛い動物がみたいと思っている。
気に入った動物がいるとペットとしてナザリックに連れて帰ろうとするが、多分魔獣にビビって死んでしまうので毎回止められている。
今のところめでたくペットになったのは【透明化】の個性持ちのライオンのみである。魔獣に囲まれ自分はなんてちっぽけな生物だったのだろうと毎日しみじみと感じる日々を送っているらしい。
個性【匂い調合】
実際はアウラの常時発動型特殊技術（バッシブスキル）である。様々な効果を持つ匂いを体から発することができる。

・マーレ
アウラの弟。ぶくぶく茶釜を親にもつ。ぶくぶく茶釜が仕事に行っている間はナザリック第6階層でお昼寝をしたり、図書室で本を読んだりしている。
休みの日はぶくぶく茶釜とアウラと一緒に世界中を旅行している。その際個性調査もしているのだが、個性よりも珍しい植物や綺麗な景色を眺めたいと思っている。
旅行中、ぶくぶく茶釜（美女バージョン）をいやらしい目で舐めまわすように見ている男を見つけると、コソッと抜け出してお掃除をしている。
個性【回復】
実際は＜軽傷治癒（ライト・ヒーリング）＞などを使っている。周りには骨折が治る・インフルを治す程度しか出来ないと言っている。

・武人建御月
コキュートスの親。コキュートスと弐式炎雷・ナーベラルと共に個性調査の名を借りた武者修行の旅をしている。

売られた喧嘩は全て買う。乱闘にも進んで参加する。道場破りにほぼ毎日行っている。
なかなか自分達とタメを張れる個性持ちがおらず、毎日コキュートスや弐式と鍛錬をつむ日々だったが、ある日何故か全盛期オールマイトと手合わせすることになった。
どちらも本気でやると近くの街が1、2個平気で飛ぶので手加減した手合わせだったが、それでも自分と同じくらいの相手と戦えたことによりさらに強くなることを誓う。またもう一度戦いたいなと思っている。
人当たりのいい性格。初対面そのままうろついているせいで怖がられやすいが、一旦打ち解けると戦った相手とも仲良くなれる。
酒と強い人が好き。
個性【気迫】
実際は特殊技術（スキル）＜不動明王撃（アチャラナータ）＞などを使っている。動き気迫を乗せて凄まじいダメージを与えると周りに言っている。

・コキュートス
親に武人建御月を持つ。建御月のことは親としても師としても尊敬している。建御月と弐式炎雷・ナーベラルと行動している。
自分の未知の力である個性がさらなる高みに連れていってくれると期待していたが、吹いて飛ぶような弱者ばかりで内心がっかりしていた。
しかし全盛期オールマイトに出会い。建御月との戦いを見て感激し、自分も軽く手合わせしてもらった際自分よりも強いことを確信。さらなる強さを感じた興奮のあまりその日は普段飲まない酒をがぶ飲みした。
日ごろ全裸でうろついているせいか人間のくくりに入れてもらえない。個性持ちの動物として見られている。
建御月に早く結婚してもらい子供の世話係をやりたいという密かな願望がある。ナーベラルは親友。
個性【冷気】

実際は＜フロスト・オーラ＞を使っている。周りの相手に動きを鈍くする程度から氷漬けにするレベルの冷気を発することができる。

・弐式炎雷

ナーベラルを娘にもつ。弐式炎雷と建御月・コキュートスと共に個性調査の名を借りた武者修行の旅をしている。

行動パターンはだいたい建御月と同じ

全盛期オールマイトと両者手加減した手合わせした際、自分とタメを張れる相手がこの世界にいることに愉快な気持ちになったた。またいつか今度はこっちが得意なスピード勝負をして欲しいなと思っている。

こちらも見た目に威圧感があるが忍者ファンにはタックルする勢いで握手を求められる。

ナーベラルセコム。日々ナーベに求婚してくる相手に「自分よりも弱いやつにはナーベは渡せん！」と言って蹴散らしている。

個性【影縫い】

個性名まんまの特殊技術（スキル）。相手の影に短剣を突き刺すと動きが止められる。＜足殺し＞なども場合によって使い分ける

・ナーベラル・ガンマ

弐式炎雷を親にもつ。弐式炎雷のことは親、憧れの気持ちを持っている。弐式炎雷と建御月・コキュートスと行動している。

原作同様人間嫌いだが、どちらかというとアインズ・ウール・ゴウンの仲間以外全員見下しているようである。なぜ弐式炎雷様を満足させるウジムシが現れないのだろう。また、弱いくせになぜ私に求婚して弐式炎雷様のお手を煩わしているのだろうと毎日真面目に悩んでいる。

至高の御方と親友であるコキュートスを満足させてくれたオールマイトには少しだけ感謝している。

個性【雷】

実際には＜連鎖する龍雷（チェイン・ドラゴン・ライトニング）＞を使っている。手から雷を放出す

る。

・やまいこ

ユリの親。脳筋先生。貧しくて学校に行けない子供たちに勉強を教えている。みんなには子供たちの個性調査をしていると言い張っている。

見た目そのままで活動しているので、怖がって子供を狙う悪い人があまり襲ってこない。無謀にも突っ込んできた悪い人は女教師の鉄拳をうけ、お星様になりましたとさ。

性格は穏やかで悪いことは悪いと言える。意外に図太い。子供たちから好かれている。

個性【回復】

マーレとかぶっているが、周りにはちぎれた腕が再生して伝染病ぐらいなら治せると周りに言っている。

・ユリ・アルファ

やまいこを親に持つ。眼鏡・僕っ子・清楚美人

やまいこと共に子供に勉強を教えたり、仕事に行く母親から赤ちゃんを預かったりしている。

子供をだしに近づいてくる下心満載な男は全員殴り倒している。さらにやまいこがもう1回殴り倒している。

個性【衝撃波】

実際は＜気爆掌＞を使っている。直接接触した相手には直接衝撃波が、接触なしの場合衝撃波が周りに広がる。

・獣王メコン川

ルプスレギナの親。ケモナーである。世界中で個性調査を真面目にしているかと思えば、実際は動物の能力が使えてなおかつ変形型と異形型の個性持ちしか探していない。

月1回の報告会でも動物系の個性しか発表しないので、動物系は獣王メコン川の担当でいいや的な雰囲気が出来ている。

個性【???】

・ルプスレギナ・ベータ

獣王メコン川を親にもつ。犬耳・笑顔・褐色美人

獣王メコン川と共に行動している。そんな他のケモ耳なんかよりも自分にもう少し構ってくれないかなと思っている。

実はサディストである。サドの欲求を満たしていたところ連絡が遅くなり、危うくアインズ・ウール・ゴウンの存在がバレそうになったことがある。めちゃくちゃ怒られた。

個性【獣の勘】

個性名まんまの特殊技術（スキル）

相手の行動を時々先読みできる。

・ヘロヘロ

ソリュシャンの親。他多数ナザリックに待機している娘（メイド）がいる。社畜精神溢れる人。

日本でプログラマーをしている。別にブラック企業ではないが、働いた分だけ給料が出るので残業する人が多い。帰らない雰囲気に流されて結局自分も残業してしまう。

個性調査の時間がないと思うが、会社にプログラムの幅を広げるためにと適当に理由を付けて個性を書いてもらうアンケートを集めたりと、仕事と両立している。

ストレスが溜まるとヴィランが出没しやすい所をわざと通り、相手の武器や服を破壊して発散している。

個性【女剣士の酸】

道具にダメージを与える酸が出せる。デク君達がいる世界のものだったらほぼ1発で物体を破壊できる。

・ソリュシャン・イプシロン

ヘロヘロを親にもつ。巨乳・金髪・セクシー美人

ヘロヘロが仕事に行っているあいだはナザリックに連れてこられ

た人間を拷問したりして遊んでいる。ヘロヘロを拘束する会社も人間も全部溶かしたいと、常日ごろ思っている。
最近自分もバイトしようかなと考えているようだ。
個性【スライム】
種族そのままである。物理攻撃に耐性がある。

・ガーネット
シズの親。というか製作者。
機械類、その中でも拳銃に心惹かれている。
ヒーローの武器開発に関わる会社で働いている。仕事と個性調査を完璧に両立している。
個性【??】

・シズ・デルタ
ガーネットを親にもつ。眼帯・迷彩・ミステリアス美少女
ガーネットが仕事に行っているあいだはナザリックの第6階層で可愛い魔獣と戯れている。少し寂しいが、帰ってきたガーネットが開発している武器について楽しそうに話しているのを聞くのがすき。
最近やたら目つきの少女と友達になったようだが・・・
個性【機械化】
種族そのままである。体を機械化することにより身体能力増加・痛みを感じなくなるということにしてる。

・源次郎
エントマの親。
日頃からエントマを可愛いと思っている。ナザリック待機組の1人。暇なのでエントマと遊んだり、宝物庫の整理をしたりと自由気ままな隠居生活を送っている。
個性【???】

・エントマ・ヴァシリッサ・ゼータ

源次郎を親にもつ。華奢・喋り方カワユス・可愛い系美少女
源次郎と一緒にナザリックに待機している。いつでも源次郎に構ってもらえるし、おやつがそこらに落ちているのでご飯に困らない幸せな生活。
1回どうしても活きのいい人間が食べたくなりこっそり外にでて襲ってきたヴィランを返り討ちにして食べていたら、変な集団に絡まれ仮面をつけた小さい人間に殺されかけた。
探し出して嬲り殺そうとしたが、勝手に外に出たエントマも悪いということで手出ししないよう言いつけられた。
個性【虫召喚】
実際は＜剣刀蟲＞や＜硬甲蟲＞などを呼び出して使っている。
ある意味プレゼント・マイクを瞬殺できる。

・ぷにっと萌え
ナザリック待機組の1人。月1回の報告会ででた個性の整理をしていたり対策を考えてたりする。
ギルドメンバーの相談によく乗っている。
アインズ・ウール・ゴウンが誇る軍師
個性【???】

・るし★ふぁー
もうアインズ・ウール・ゴウンの存在を漏らさないことと月1回の報告会に来てくれたらいいからこっちに来ないでくれ、マジで。とほぼ全てのメンバーに思われている愉快犯。
最近オールマイトをかたどった筋肉マッチョなゴーレムを町に放つのがブームらしい。
個性【???】

小ネタ①

＜たっちとウルとパンドラ＞
「えっ？パンドラが入学する年オールマイトが教員なの？えっうらやま」
「はっ？ｗかわいそーに。絶対あいつ生徒に無茶ぶりしてくるぜ？そんなことしてる間にヒーロー活動でもしとけや」
「ウルベルトさん？なんでそんなこと言うんですか？彼は平和の象徴ですよ？きっと正義の心をもつ素晴らしいヒーローを育てあげるに決まっているでしょう。」
「正義の心？結構結構？ｗ？ｗ甘いんですよたっちさん。」
「所詮助けられるか助けられないかでしょう。その技術を教える際、どーせオールマイトは自分ができるから他人にもできると考えているパターンでしょう？そんなやつが人に教えるなんて無理？ｗ無理？ｗ」
「あの。」
「あなたはあの人の何を見てるんです？自分の目で確かめもせず批判するのは宜しくないのでは？」
「ちょっ。」
「ちゃんと見て発言していますよ？この前のヘドロ事件だって細かい内容言えますけど？」
「ｏｈ……」
「じゃあ言ってみてくださいよ！私もその事件についてはよく知っていますからね？ちょっとでも間違えると恥ずかしいですよ？」
「あ〟ぁ？上等だよ言ってやるよ。まず事件が起こったのは。」
「私を挟んで喧嘩しないでくださいっっっ!?　　父上ーー!!どうか哀れなわたくしをお助けださいィィ!!ヘルプ・みいーーー→」

小ネタ②
＜プレアデスとパンドラ＞
「いいわよねぇあなた達は」
「。確かに」
。。。。

「えっ？そーちゃんシズちゃんどうしたっすか？私たちなんかしたっすか??」
「あなた達、育ててくれた御方達といつでも一緒じゃない」
「私たちの親、昼間お仕事行っちゃっている」
「アァ～確かニィ～」
「あんまり考えたこと無かったわ」
「そう考えるとぼっ私たち恵まれているわね」
「羨ましい」
？バタンッッ／
「おぉ!!麗しいお嬢様方!!お茶会ですか？お茶会ですよね!?この私！パンドラズ・アクターも混ぜてもらぁってよろしいでしょうか？」
「うぁ」
「いっすよー！」
「いいですワァ～」
「それでは失礼して今しがた会話が聞こえてきましたが、親子の過ごす時間が少ないことに悩んでいると？」
「そうですわ」
「お気持ちよく分かります!!このワタクシの偉大なる父上も会社勤めであり！私との親子の！時間を！会社に奪われてしまっているのです!!あぁなんて悲劇!?」
「確かにモモンガ様も会社勤めだったわね」
「しかぁし!!こう考えればいいのです。会える時間が少ないからこそ相手への想いが強くなっていくと」
「それはつまり？」
「会えない時間が長いほど！互いの愛は深まるのですっ！そう私とモモンガ様のように!!」
「パンドラ様たまにはいいこと言うっすね！」
「そう考えたら待つ時間も楽しくなるもしれないわね」
「ん ガーネット様と話すこと、考えとく」

後日

「父上も仕事中、私への想いが強くなっていますよね!?」

「いや？仕事のことしか考えてないけど？」
「厳しいィッ!!!」

小ネタ③
＜??とパンドラ＞
「はぁ・・今日もまた馬鹿にされた1日だった・・」
「だって・・しょうがないだろう？憧れてしまったんだから」
「けど・・もう・・やめた方がいいのかな？」
ブツブツブツブツブツブツブツブツ
トントン
ハッ「なんですか？」
「そこの絶望に叩き落とされたような顔をしている少年っ！ノート・・・・落としていますよ？」
「あぁ!?僕のヒーローノート!!ありがとうございます！」
「いえいえこのくらいあ・た・りまえですっ！」
「それでもです！本当にありがとうございます!!」
「ところで！ここであったのもなにかに導かれた運命っ！1つ私から助言を」
「？」
「自分が満足していればそれでいいんですよ」
「???」
「私はカッコイイ！それは私の中では真実であり！世界の理なのです!!結局感じ方なんて人それぞれですよねって話です」
「・・」
「それでは私はこれで失礼！愛しの父上が待っておりますので！さらばっですっ！待っててください父上ぇぇぇ！この愛されしパンドラ！今すぐあなたの元へ参上しますぅぅ」
（なんだったんだろう？今の人・けど・・）
「もう少しだけ頑張ってみようかな」・・・
（そうだよ誰が何を言ったとしても・・・なりたいって思ってもいいじゃないか！）

▪▪後日

「▪」

▪▪どうしたの？デクくん？」

「あっ麗日さん」

「なんか▪悩み事？」

「いや▪▪なんかパンドラくんどっかで見たことあるような▪▪▪▪▪▪？

？バ▪▪ァン!!／

「ンンンン？どこからか運命という名にみちびかれているというときめく内容が聞こえてきたようなぁ!?」

「パンドラくん!?ここA組だよッ!?なんで聞こえるの!?」

「うるせぇぇぇ〃!!クソども！埴輪顔ぉぉぉ！」

学校生活
入試当日

全ての始まりはこの一言からだった

「父上っ！　このパンドラズ・アクター！　ヒーローになりとうございます！」

「あっそう・・・うん？　えっ!?」

・・・

雄英高校まで駅まで5分電車で3本に位置する築３０年のアパート。その名も『ナザリー』

部屋は1ＬＤＫ、家族で住むには狭く、ひとり暮らしでは少し大きすぎる広さだ。

目立つ特徴といえば日当たりがとてもいいこと。今も太陽の光が部屋にいる2人の姿を明るく照らしていた。

「父上。そう言えば今朝、監視対象の緑谷出久がオールマイトから個性を無事受け取ったみたいですよ？」

部屋にいる1人はテキパキと軍服を被り、学ランの袖に腕を通しながらハキハキと話している。顔に3つの穴があいた埴輪のような顔を持つ男。この人物こそ何を隠そう物語の主人公パンドラズ・アクターである。

「みたいだな。6時くらいに＜伝言（メッセージ）＞で皆さんが騒いでいた」

その声に返事を返すのはもう1人の男。優しそうな顔をした。良くいえば人好きのする顔、悪くいえばどこにでもいる30代位の男である。この平凡な人物こそ、悪のギルドアインズ・ウール・ゴウンのマスター。モモンガであり、パンドラの父である。
「研究サンプルとして、もう誘拐してしまおうかという意見も出ていますがどうお考えですか？」
「さすがに時期早々すぎるよ。【ワン・フォー・オール】は俺たちを倒せる程の凄まじい力を秘めている。この件は慎重に勧めないといけない。よってしばらくは要観察だな」
「かしこまりました」
「というか同じ高校受けるんだから、受かったらお前近くで観察できるな。緑谷出久と友達になってみたらどうだ？」
パンドラはモモンガの方を向き、なぜか舞台俳優のように大袈裟になオーバーアクション付きで話し出した
「分かりました！　このパンドラズアクター！　必ず緑谷出久と交友関係を築ききりっ！　ワン・フォー・オールについてより深く情報を引き出してきっ「いやいや別にこれ強制じゃないからな？　確かに同じ高校に入れたら緑谷出久の監視責任者を任せようと思っていたけど、それと友達になるかどうかは別だからな？　俺は純粋にお前に友達をつくって欲しいだけだ。1年間見てきたけど、緑谷出久は性格も良さそうにみえたから友達候補としてどうかと勧めただけだからな!?」
モモンガは慌てたように念押しする。
「ンンンっ！　なんて慈悲深いっ！　お言葉っ！」
パンドラがこの日学ランを着ているのはパンドラも緑谷と同じく、ヒーローとしての第1歩を踏み出すために雄英高校を受験しに行くためだ。
「おや？　もうこんな時間ですね？」
「何があっても落ち着いて行動するんだぞ」
「はい！　それでは行って参ります！」
「はい、行ってらっしゃい。頑張れよ」

天気は快晴。冬のピシッとした空気が身も心も引き締める。まだまだ気温の低い冬の寒さを溶かすように、暖かい太陽の光がパンドラに降り注ぐ。

「なぁ～んて素敵な受験日和でしょう！」

パンドラは思わずといった風にスキップをしながら最寄りの駅へ向かった。

傍から見ると、とても今から受験を受けに行くやつには見えない。

駅に着き、電車内で生暖かい目で応援されつつ、雄英高校校門前に無事到着する。

（今のところ問題なく動くことが出来ていますね。さて、最初は実技しけ・・おや？　あれは・・）

雄英高校の敷地内に入ったところに２人の男女がいた。男の方が転びそうだったのを女の方が浮かせて助けたようだ。この世界ではなんてことない試験前の一コマ。だが。パンドラにとっては浮いている男の方に問題があった。

（っっっ！　あれは緑谷出久!?　まさか入試前に出会うとは！）

その時、今朝モモンガが言ったことがパンドラの頭の中で再生された。

『緑谷出久と友達になってみたらどうだ？』

パンドラは今までの人生で友達といえる友達はいなかった。ナザリックの面々は友達――と言うよりは同志、兄弟、家族のようなものだ。指輪がないと外に出られない。宝物庫の守護者を任されているがゆえ、パンドラは外の生き物と触れ合う機会が今までほとんどなかった。

別にその事で、寂しいという感情を持ったことはない。父は自分に会いに来てくれるし、割と人の出入りは多かった。しかも、自分が大好きなマジックアイテムに囲まれていたので退屈もしていなかった。

しかし封印され、目覚めたら個性という謎の能力が溢れているこの世界を調査することになった今、パンドラの世界は広がった。できる

ことも増えた。父上の近くでもっともっと自分が父上のために働くことができる。
そんな父上が自分に友達を作ることを勧めた。
（ここで緑谷出久と遭遇したのも神（モモンガ様）のお導きでしょうか？）
友達になれば近くで【ワン・フォー・オール】についてより深く観察できるメリットもある。何より父上が自分のために考えて、言ってくれたことを無下にしたくなかった。
「ならばなりましょう。緑谷出久と友達に！」
そうと決まれば早速緑谷の元へ向かう。
なお、この時間は受験直前である。

???

「おぉおおおお」
（あわわわわ女子と喋っちゃった!?）
緑谷出久は感動していた。
こんな受験直前に限って転びそうになった所を親切な女の子に助けて貰ったのだ。しかも会話？　までしてしまった。今日はあのオールマイトから個性を貰うという素晴らしい体験してしまっているのに、こんなにいいことがあってもいいのだろうか？　反動で不幸がどっと襲ってきそうだ。とナンセンスなことを考えているといきなり突風が吹いてきた。思わず目を閉じる。
（えっ何？）
そっと目をあけると
「Ｇｕｔｅｎ　Ｍｏｒｇｅｎ!!　いやぁ～入試前に転んでしまいそうになってしまうなんてとぉんだ災難でしたね！」
皆様是非とも想像して欲しい。突然目の前をスライディングされながら行く先を防がれ、何故か背中をこちらに向けられたまま軍帽に手を添え、斜め４５度だけこちらを向きながら埴輪顔に挨拶されるのを。

「えっ？　あの、えっ？」
　今から受験だとか女子と喋った？　ことも一瞬忘れ、いきなり現れた謎の人物に混乱することしか出来ない。
　そんな緑谷をおいて謎の人物はさらに言葉を続ける。
「おや？　驚かせてしまいましたか？　これは失礼。私はただ後先不幸そうだった少年を励まそうと飛んできてしまっただけでございます。可愛らしいお嬢さんに先をこされてしまいましたが…」
「あっ…それはどうも…」
「いえいえ…」
【誰かが困っていたら、助けるのは当たり前】ですからね。お気になさらず」
　その瞬間緑谷の目がミラーボールでも装着したかのように輝きだす。
「あっ!!　その言葉！　圧倒的な戦闘力の高さで今後が期待されている最近日本に知られてきた期待の新人ヒーロー【たっち・みー】の決めゼリフっ!?」
「お～!?　その事に気づくとはなかなかのヒーロー通だとお見受けしますね」…
「えへへ…そう言ってくれると嬉しいよ！」
　進む方向は一緒なので、自然と謎の人物と共に説明会場の方へ歩きながら期待の新人ヒーロー【たっち・みー】について大いに盛り上がった。登場の仕方は強烈だったが、話してみるとヒーローを目指しているだけあってとてもいい人そうである。
「私、鈴木二重と申します。是非ともパンドラとお呼びください。よろしければ私とお友達になって貰えませんか？」
「友達!?　僕でいいなら喜んで！　じゃあパンドラくんって呼ぶね！」
　僕は緑谷出久。呼び方はなんでもいいよ！」
「おおおっ私に！　お友達が出来ました！　それなら私は緑谷くんと呼びましょう！　宜しければ個性について詳しく…あぁ!?　これは今聞かない方が良かったですかね」
「あっ！　いやっ！　大丈夫だよ？　僕の個性は…身体能力を上げ

…？
るって感じかな…」
緑谷は自分で個性と口に出してふと気づく
（そうか…僕はもう無個性じゃないんだ…オールマイトから貰ったこの個性、…無駄にするわけには行かない！…）
緑谷出久は必ず雄英高校ヒーロー科に受かってみせると新たに決意を固めた。しばらく歩いていると説明会場につく。
「私はあっちの方ですね。離れてしまいますがお互いがんばりましょう！」
「うんっ！」
（試験前なのに友達が出来ちゃった！…パンドラくんともっと話したかったけど、だいぶ席が離れちゃったな…そういえばパンドラくんの個性ってなんだったんだろう？　聞けば良かったな…）
???
「今日は俺のライヴにようこそー！！！
エヴィバディセイヘイ！！！」
「ｈｅｒｚｌｉｃｈ　ｗｉｌｌｃｏｍｍｅｎ！！！」
「それ何語？！」
「っ気を取り直して…受験生のリスナー！
実技試験の内容をサクッとプレゼンするぜ！！
アーユーレディ？！！」
「ｉｃｈ　ｈａｂｅ　ｇｅｗａｒｔｉｔ！！！」
「ねえ！　さっきから同じ謎言語からしか
返事かえってこないんだけど！？」
ちょっとした茶番が終わりプレゼント・マイクが話し始める。
簡単にまとめると
・各自１０分間模擬市街地演習を行う
・３種類それぞれ持ち点をもつ仮想ヴィランを行動不能にしポイントを稼ぐ
・好きな物を持ち込んで良い

・アンチヒーローな行動はＮＧ
・持ち点０のお邪魔虫がいる
パンドラは事前にナザリック情報収集班から聞いたり、自分自身で調べたり、要項を完璧に頭に叩き込んだりと準備してきたので説明を全て聞き流していた。
（私の指定演習会場は■■Ａですか。
アインズ・ウール・■■ゴウンの■■Ａですね。縁起がいいです。緑谷くんは残念ながら違う演習会場と■■こんなにあっさりとお友達ってできるんですねぇ）
■■
パンドラは緑谷出久のいる方をチラッと見る。
（お友達になったのはいいですが、緑谷くんが合格できなければメリットはあまりないですね。多分敵（ヴィラン）ポイントだけでは受かることはまず出来ないでしょう。あの身体はあくまで急造品、多分撃てて全力１発が限度のはず。ただこの学校が見ているのはそこだけじゃない。というのは確認済みです。さて、あっちのポイントで稼いでくれるでしょうかね？　できれば同じ学校に一緒に通いたいものです）
マイクの説明が終わった。　いよいよ受験開始だ。
「それでは皆よい受難を!!」

Ａ演習会場
そこにはひとつの街があった。
試験が始まるまで皆思い思いにすごしている。
入念にストレッチをするもの
精神統一を図るもの
持ち込んだ武器を確認するもの
パンドラは軍帽そのまま、学ランから赤の芋ジャージに着替え自然体で突っ立っていた。
そんな緊張感溢れる空気の中、軽く声がかかる
「はいスタートー！」
「「えっ？」」

皆が呆気に取られている中
唯一「スタート」の「ス」で動き出した赤と黄色の影が、集団の中から勢いよく飛び出していった。

続く

おまけ

＜受験前日の心得＞
アパート【ナザリー】にて
「これから受験前日の心得を実践していく！」
「Ｗｅｎｎ ｅｓ ｍｅｉｎｅｓ Ｇｏｔｔｅｓ Ｗｉｌｌｅ！」
「ドイツ語やめような？」
「えー」

1，　いつも通り過ごすべし
「それではいつも通り父上の膝の上でなでなでを!!」
「そんな事実はない」

2，　勉強するなら夜に単語を確認するぐらいにしとくべし
「全部覚えている時ってどうすればいいんですかね？」
「やっぱ頭はいいんだよなぁ」

3，　持ち物を確認しとくべし
「これはたっち・みー様から貰ったお守り、これはウルベルト様、そしてペロロンチーノ様、ぶくぶく茶釜様、タブラ様とああ後ぷにっと萌え様のも」
「パンドラ、全部持っていかなくていい。ただペロロンのおっぱい型お守りとるし★ふぁーの謎の異臭がするお守りは今すぐ捨てろ」

4，　食事は消化のいいもの食べるべし

「とりあえず豚汁作ったんだけどさ」
「でぃでぃうぇのあ〃いおううあんんま〃うね〃」（父上の愛情を感じますね）
「鍋ごと食べるのはやめろぉぉぉぉ!!」

5，　夜更かしするべからず

「別に寝なくても大丈夫なんですけどね」
「これは合格のための儀式だ。寝ろ」
「……添い寝してください」
「……今日だけだぞ」
……
＜芋ジャージ＞
「なぁパンドラ？　なんで芋ジャージなんだ？　なんでよりによって芋ジャージなんだ？」
「父上以外の至高の御方全員の気持ちだと貫ったのですが、曰くこれを着て勉強したギャルが難関大学に合格したことで、芋ジャーは合格率を上げる神聖な召し物になったそうで私が合格できるように、だそうです。あっあと普通に動きやすいです」
（ださいっ‼？信じられないくらいださいよパンドラっ！　あとみんなに騙されているよ！　なんだよ……ジャージが神聖な召しものって‼？まぁ動きやすいならもういいか……凄いださいけど）
……
＜たっち・みー＞
＊セリフは読まなくてもいいです
「まずたっち・みーがヒーローデビューしたのは丁度1年前。サイドキックからのスタート。この1年で捕獲したヴィランの数は５００人以上と言われている。これは彼の同期の平均ヴィラン獲得数を大幅に上回っている。そんな彼でも手を焼いているのがヨーロッパを中心に活動しているヴィラン、ウルベルトっていうやつなんだけど、そのヴィランとの戦いは街を平気でひとつ潰せそうな勢いなんだって。けど彼が上空にヴィランをおびき寄せて戦っているから今のと

ころ大きな被害が出たことはないんだって！　凄いよね！　個性については虫の身体能力を使えるとあるけど空を飛ぶ能力は明らかにここから来ているよね？　けどそれ以上の力を持っているんじゃないかなと僕はこれまでの彼の活躍から思っているんだけど、そこら辺パンドラくんどう思う？　彼の必殺技では次元を斬ることができるという噂もあるけどこれは実際自分の目で見ないと検証出来ないしなぁ。ヨーロッパ行く時間もお金もないからなぁ。あと後ろに正義降臨というエフェクトが浮かぶっていう目撃情報もあるんだけど、僕はこれはとてつもない力を持つヒーローが起こす自然現象の１種だと思うんだ。例をあげるとオールマイトも他の人と作画というか画風が違うとかそんな感じ。パンドラくんはそこについてどんな見解を持っている？　そういえばオールマイトとたっち・みーってどっちの方が強いんだろうね？　僕的には今まで応援してきたオールマイトに勝ってほしい気持ちがあるけど、たっち・みーが勝っても全然おかしくないんだよね。けどどっちも正義のためヴィランと戦っているから彼らが争うことは絶対ないだろうなぁ！　あっそうそう彼の装備は中世の騎士のような見た目をしているんだけどさ、これは彼の何かしらのメッセージ性があると僕は思うんだ。名前も日本語に訳すと私に触れてというニュアンスがあるから、僕は中世の騎士のような誇り高い正義の心を持ちつつ市民と寄り添っていきたいという。彼の弱いものを守りたいという心をコスチュームで体現しているんじゃないかな！　そこんとこどう思うパンドラくんっ！」

「そうですね。私もたっち・みーはまだまだ力を隠していると思います。正義降臨のエフェクトですか･･･。力の持つものが起こす超常現象というのは面白い考えですね。私は体に収まりきれない溢れ出したエネルギーが画風に異常を起こしたり、エフェクトを発現させるのではないかと考えていますね。オールマイトＶＳたっち・みーですか？　私はたっち・みーにぜひとも勝ってほしいですね！　造形物に興味を持ってしまう性なので剣を使っている方をつい応援してしまいます！　まぁおふたりとも正義の使者としてお互い本気で戦うことなど有り得ませんがね！　コスチュームの解釈はほぼ緑谷くんと同

じですが、私に触れてというニュアンスの裏には、強すぎるが故の孤独を誰かにわかって欲しいという切なる思いが含まれている深い深いバックストーリーがっ！　隠されておりっ！」

周りはドン引きしていた。

実施試験

受験者たちが戸惑っている間、パンドラはスタートダッシュを決めた。

パンドラはナザリックでは、宝物庫の領域守護者の任を預かっている。

宝物庫はいわばナザリックの生命線といっても過言ではない場所だ。ワールドアイテムを始め、強力な武器や膨大な力を秘めているマジックアイテム、極めつけは置く場所がないほどに積み上げられている金貨の山が保管されている。そんなところを守護するものが弱いだろうか？　いや、そんなわけない。仮想ヴィランは齢１５歳の少年少女が個性を使って倒せる相手である。

つまりパンドラにとっては雑魚だ。

「敵ハッケン！　ブッコロス！」

「お口が悪いですね！　Ｋｏｍｍ　ｓｃｈｏｎ！」

パンドラは個性として登録している十八番の変化すらしないまま仮想ヴィランの群れに突っ込んでいく。なぜなら使う必要などないからである。何も変化だけが武器では無いのだ。一見ひょろっとしているように見えるが、同じレベルの純粋な戦士職には到底叶わないにしても、パンドラの身体能力はこの世界の中では上から数えた方が断然早い。

仮想ヴィランは機械である。致命傷を与えてもなかなかしぶとく抵抗する人間と違い、重要な部分さえ破壊してしまえばもう動かない。

右にパンチ――ヴィクトリーが吹っ飛ぶ

左にキック――ヴェネターが空を飛ぶ

右斜めにカメラ――決めポーズ

正面にアッパ――――インペリアルが打ち上げられる

攻撃もクソもない。圧倒的な力の前には、仮想ヴィランはただただ破壊されていくだけのサンドバッグのようなものだった。

そして1分後・・・・

慌ててパンドラを追いかけてきた他の受験者達は青ざめた。道いっぱいに設置されていたであろう仮想ヴィランが、ポイント関係なしに全てガラクタ化していたのだ。

「やばいやばい！　ポイントがあっ！」

「他のところ探せ!!」

「まだ時間ある！　落ち着け俺!!」

「はにわぁぁぁあ」

全員他のところの仮想ヴィランを探しに行った。

（ざっと70ポイントはかせぎました。これでほぼ合格圏内に入ったでしょう）

他の演習場には貸して貰っているハンゾウに状況を報告してもらっている。まだパンドラほどポイントを稼いでいる受験者はいないようだ。

本当は仮想ヴィランごときに1分もかからず瞬殺することは可能だった。なぜ1分もかかったのか？

答えはいちいち行動に（無駄な）パンドラ作：カアッコォイイポーズを入れたり、全てのカメラにキメ顔を決めたりと何かと遊んでいたせいである。役者魂溢れるパンドラがカメラ映えを気にしてしまうのはしょうがないことなのかもしれないが。

（さて少し余裕が出来たので他の受験者の様子でも見に行きましょうか？　レア個性見つかるといいですねぇ）

あちこちで怒号や悲鳴、破壊音が聞こえる空間の中。パンドラだけが美しい庭園を散歩するように――優雅に受験者たちの方へ歩いていった。

???

「クソっ！　クソォ！」

心操人使は仮想ヴィランに、更には雄英高校の実施試験の内容に悪態をついていた。心操の個性は【洗脳】である。人に対しては強力な個性だが、もちろんロボットに効くわけがない。つまり、今ここにい

るのは個性をもたないただの一般人である。
（こんなんじゃヒーローになれない……）
悔しくて悔しくて、持ち込んだ鉄パイプで立ち向かってはみたものの、結果は運良くいい所に当たって倒せた1ポイントのみである。しかしその一撃で鉄パイプは曲がってしまいさらには手を痛めてしまった。今この瞬間にも、手から嫌な感じがするズキズキとした痛みが脳に伝達され続けている。
（人のためにこの個性を使いたい）
どう考えたってヴィラン向きのこの【洗脳】。周りからも言われ続けてきたし、心操自身もそう思っている。
（それでも憧れてしまったものは仕方ないじゃないか……）
ついに堪えきれなかった涙で前が見えなくなり心操は顔を下にむけてしまう。立ち向かわなくちゃいけないのにもうダメだと頭の中の自分が叫びだす。
そんなときふと頭上に影ができる。こちらに戦意がなくなろうと、ロボットには関係ない。プログラム通り敵を見つけ次第攻撃してくる。
「ブッコロス」
（あっ……）
周りは自分自身のことで精一杯だ。誰も心操が危機に陥っていることに気づかない。今最善策はとっさに腕で頭を守り、衝撃に備えるぐらいしか出来ない。
心操は覚悟を決め、きつく目を閉じる。……一瞬風が吹き荒れた気がした。
……衝撃まだは襲ってこない。
？……衝撃はまだこない。

不思議に思い、ゆっくりと目を開けるとそこには……

赤の芋ジャージが目の前に立っていた。
（服ダサっ!!?）
「大丈夫ですか？　いや大丈夫ではございませんね？　どちらかと言うと心の方が!!!」
こちらを振り向いた顔はハニワだった。
バッ＼（∵三∵）／バッとやたら大袈裟な動きでこちらの様子を確認してくる。
さっき項垂れていたのを見られていたようだ
（うう…恥ずかしい…てか何コイツ？）
項垂れていたのをスルーしてくれなかったのは理不尽にもイラッとしてしまったが、助けてくれたことにはお礼を言わなければならない。
心操は真面目な少年だった。
「助けてくれてありがとう」
「いえいえ!!　これでも仮にヒーローを目指すもの！　他者を助けるのは当たり前ではございませんか！　まぁ少し暇していたのもありますが」
（…暇ねぇ）
……

相手の応えを聞いて、心にモヤっとした気持ちが吹き出すのを心操は感じた。自分がこんなに焦っているのに、生まれ持った個性だけでこんなにも違いができてしまうのか。ずるい。羨ましいと。助けてもらったことも頭から抜け落ち、目の前の相手に黒い感情を向けてしまう。

『暇なんていいご身ぶっ！』

つい個性を使ってしまいそうになってしまうくらいに。心操は慌てて口に手をあてる。

（何やってんだ俺はっ!? これじゃほんとにただのヴィランだ！）

相手に多分他意はない。自分が勝手に嫉妬してしまっただけだ。そもそも自分がもっと個性を使わなくても戦えるほど鍛えていれば、技術を磨いておけば、何かしら出来たはずだ。それをしなかったのは自分自身だ。そう自分が悪い。自分がもっと、もっと。

「もしかして、あなたの個性は【洗脳】とかですかね？」

まだ立ち去っていなかった相手に不意に声をかけられた。

（っなんで分かった!?）

自己批判に陥っていた中、いきなり個性を当てられ思わず心操は目の前の相手の顔をまじまじと見てしまう。なんとも表情変化が乏しそうな顔である。

「おや？ その態度からして合っていたみたいですね？ 半分くらいはかけだったのですが」

「俺、ここに来てから誰にも見せてないし、言ってないんだけど？」

「ちょっとした推測ですよ。まずぱっと見、あなたは異形種型ではありません。次に仮想ヴィランに対して有効な手が打ててないことで身体強化、また攻撃系の発動型でもないことが分かります。さらに私に声を掛けかけたときに見せたバツの悪そうな顔。あのときに個性を使っていたのなら相手に影響を与える系統。あなたの全体的に見た態度から、あまり人から褒められない効果を持つ。と考えて真っ先に思いついたのが【洗脳】だった訳ですが、まさか当たるとは思いませんでしたね」

（・・凄い）

・・・

こいつは誂え向き（おあつらえむき）の個性だけじゃなかったようだ。
「…なぁひとついいか？」
「？　なんですか」
「俺がヒーローになるために、足りないものってなんだと思う？」
「ズバリっ！　身体能力のぉ強化でしょうっ!!　って自分でも分かっているでしょう」
「うん」
即答された。心操だって分かってはいるが自分に足りないものを持っているやつに確認したかっただけだ。
（残念だけど俺はヒーロー科に落ちるだろう。そんな予想はしていたから普通科も受けたんだ。けど普通科に入れば、とりあえず雄英高校にさえ入ればまだチャンスがあることを俺は知っている。体育祭のけっ）「いやちょっと待ってください。なんで俺の実施試験終わった～みたいな顔をしているのです？」
ハニワ顔はまだ立ち去っていなかったようだ。
「？　いやだって今俺手使えないし…」
手には痛みがピリピリと残っている。
「手が使えないなら脚を使えばよろしいのでは？」
（いやまぁそうなんだけど…）
「でも俺そんな蹴りの仕方なんて知らないし」
「蹴りは攻撃力だけでいえば拳より強いんですよ？」
「えーと」
「いい考えを思いつきました。このパンドラが懇切っ丁寧っに教えて差し上げましょう！　暇ですし！　申し遅れました。私は鈴木二重、パンドラと呼んでもらえると幸いです！　あっついでにお友達になりません？」
「はあ？　友達？　うんいいよ。じゃあ…よろしく頼む。俺は心操人使。呼び方はなんでもいい」
「なんとっ！　今日私はお友達が２人も出来ましたよ！　心操くんっ！」

（こいつ今まで友達いなかったのかな？）
心操は若干哀れみの目をパンドラに向ける。
「良かったな。えっと、パンドラ」
「ありがとうございます！　それでは話を戻しますが、そこに1ポイントの仮想ヴィランがいますね。あいつは顔ら辺に強い衝撃を加えると動かなくなります。とりあえずあれを華麗にぶっ飛ばしましょう！　お友達との初めての共同作業です！」
「いや共同作業じゃないと思うんだけど」
何故かパンドラに蹴りを教えて貰えることになり、狙いをつけた仮想ヴィランに気づかれないギリギリの所まで2人で移動する。やはり近くで見ると心操が思っていたよりスピードが速い。
「なぁパンドラ。あいつ結構スピードはやっ？ドンッ／いって」
心操は思いっきり仮想ヴィランと目？　が合う。パンドラに背中を押されたようだ
「ブッコロス」
「パンドラぁぁあ!?」
「さぁ敵をまっすぐ睨みっ！
大きく踏み込みっ！　背筋を伸ばし！
膝で蹴るイメージでっ！
Ｓｉｅｇ　ｈｅｉｌと叫ぶっ！」
「えっちょッジークハイル!!?」
わけも分からずパンドラのいうとおりに叫び、心操は体を動かす。すると奇跡的に美しい蹴りが仮想ヴィランの横っ面に直撃した。
顔から煙を出し、しばらく死にかけの鯉のような動きをして――
完全に動かなくなった。まさかの1発ｋｏである。
「えええっ!?」
「見ろぉ!?　仮想ヴィランがゴミのようだ!!」
「それどこのラ〇ュタ王だ!?　てか普通に足痛いっ！」
ほぼ素人が機械相手に全力で蹴りをかましたのだ。そりゃ痛くもなる。というかまだ動けてるだけ凄い。多分アドレナリンってやつが出ているのだろう。心操は中途半端な知識から己の状態を把握す

る。
「でも倒しましたよ？」
「1ポイントだけどなっ！　けど……」
（けど少し自信にはなったな……）
　さっきのようにもうダメだと叫ぶ自分はいなくなっていた。その代わり口から零れた言葉は
「やっぱりヒーローになりたい」
　心操は言葉から夢を諦める気が全くない自分に気づき、思わず笑ってしまったその瞬間轟音が鳴り響いた。説明されていたお邪魔虫が動き出したらしい。それにしてもでかい。周りにいた受験者たちはすでに避難を開始し始めている。慌てて気を引き締め直し、自分たちも逃げなければとパンドラの方を振り向く。
「パンドラっ！　逃げるぞっ！」
　振り向いた先にいたパンドラは何故かプルプルと震えながらうつむいていた。かと思えばバッ!!　と顔を上げ
「んんんこのシチュエーションはっ！　挫折しかけた主人公がッ周りの励ましによって新たな決意を固め成長していく王道パターンッ!!」
　なんかよくわからんことを興奮気味に叫びはじめた。
「おいってばっ！」
「そして！　こういう時にはだいたい背景で虹がかかるなど、レアな現象が起こっているのが常!!　そして御誂え向きに今っわたくしたちの背景で大型ギミックが暴れているっ！」
「何が御誂え向きなんだ？　おいほんとに何言って」
　ぐるりとパンドラの顔がいきなり心操の方を向き、ビシッと指をさされる。思わず肩が上がる。
「あなたはヒーローになれますよ」
（……えっ？）
　その瞬間大型ギミックが爆発した。それはもう見事に大爆発を起こした。まるで花火のようだ。
「はあ!?」
「なぜなら今！　あなたは王道パターン突き進んでいるのですから！

お友達大サービスですよ！　シチュエーションは私が整えてあげました！　さあ今こそ踏み出すのです！　ヒーローへの第1歩を！

それはもうジャンプ主人公の如く！」ビシィ！

（いやゴメン意味がわからない）

ドヤ顔？　をしているパンドラを置いて心操は思考を放棄したくなった。王道パターンを突き進んでいいのは漫画（コミック）の主人公だけだ。自分はとてもじゃないがそういう器ではない。というかそれを言いたいがために大型ギミックを壊したのか。シチュエーション整えたからってヒーローになれるわけじゃないんだぞコラ。

（どこまでもふざけてんなコイツ）

頭の上を瓦礫の雨が降り注ぐ

それでも嬉しいと思ってしまったのだ。

（俺はヒーローになれるんだな）

誰かから、ヒーローになれると言われたことが

???

（いや～まさかあんな熱く燃える展開に遭遇できるとは！　つい我を忘れて興奮してしまいました）

さっきの爆発はパンドラの仕業である。ウルベルトの＜核爆弾（ニュークリアブラスト）＞を借りてこっそり大型ギミックにしかけただけだ。もちろん他の受験者が周りにいないか確認済みだったのでけが人はいない。

実施試験が終われば次は筆記試験だ。中学校の内容はパンドラにとっては簡単すぎる。開始早々最初に配られた英語をとき終わってしまったので、さっきの出来事を振り返っていた。

（今日だけでも2人のレア個性とお友達になれました）

緑谷出久の【ワン・フォー・オール】は言うまでもなくレア中のレア個性だ。

そして偶然友達になった心操人使の【洗脳】。【洗脳】もパンドラ達にとってレアである。なんて言ったって声をかけるだけで相手の動

きを完全に止められるのだ。止めた相手を連行するも良し。必殺技を叩き込むのも良し。戦況を一気に逆転できる可能性を秘めている初見殺しもいいところの個性だ。さらに心操の【洗脳】はどんなにレベルが高くとも対策をしていない相手なら操ることが出来る。それこそオールマイトにも。使い方次第では非常に強い力を発揮出来る。

（このまま2人とも合格してくれると嬉しいですね。学生だけでなくヒーローになってからもお友達でいれるとなおいいです。むしろヒーローになってからこそお友達になったかいがあります）

あくまでパンドラが友達をつくろうと思い立ったのは父がそう言ったからだ。それ以外では情報網の拡大しか友達にメリットがあるとは思えない。

そんな心持ちでも心操に言ったことは紛れもないパンドラの本心だ。個性に頼らない戦い方さえ身につければ、心操はヒーローに、それも多くの場面で必要とされるヒーローになれるだろう。それほどまでに【洗脳】は強力な個性だ。

（こういう何かＧＥＴした時にいうセリフがありましたね。確か・・・）

「お友達（レア個性付き）ＧＥＴだぜ！」

某少年がモンスターを捕まえた時にいうセリフのテンションで、パンドラは心の中で呟いた。

一週間後

「パンドラー手紙来てるぞ。雄英から」

「合〜格通知〜！」

結果は分かりきっているが、ワクワクしながら手紙を開ける。

『私が投影されたっ!!』

「おーオールマイト」

「たっち・みー様にこの手紙あげたら喜びそうですね」

『入試お疲れ様!!　私はオールマイト

何故私かって!?　それはこの春から雄英に勤めるからさ』

「知ってます」

『えっ？　早く結果を教えろって？』
「知ってます」
『君の敵（ヴィラン）ポイントは７１ポイント！　だけど雄英が見ていたのはそこだけではあらずっ！　さらに君には救助活動（レスキュー）ポイントが５点入っている！　つまり合計７６ポイントだっ！　おめでとう！　次席合格！　雄英（ここ）が君のヒーローアカデミアだ!!』
「１位じゃなかったのかぁ」
「心操くんとお友達になっていましたからね」
「お前友達出来たんだなぁ。【洗脳】なんて凄い個性持ってるよな。それはともかく合格おめでとう」
「身に余るお言葉っ！　ありがとうございますっ！」

こうしてパンドラの雄英高校への進学が決まった。
「私、パンドラズ・アクターのヒーローアカデミア!!」

続く

おまけ
＜合格祝い＞
「タブラ様からは参考書、ぷにっと萌え様からは文房具集。やまいこ様からは電子辞書。ヘロヘロ様から元気ドリンクの箱詰め」
「妥当なチョイスだな」
「たっち・みー様からはオールマイトファンｂｏｏｋ、ウルベルト様からは悪魔の辞書」
「あの人達らしいチョイスだな」
「ぶくぶく茶釜様から何故か雄英高校女子の制服」
「うん？？？」
「ペロロンチーノ様からは
＜ドキドキッ!!　再婚相手の子供が俺に懐いてくれない!?　けど実はツンデレっ子でっ!?　＞（税込５６００円）とゲーム機本体です」

・・・
「・」
「るし★ふぁー様からは」
「それは言わなくていい」
「＜実物大！　オールマイトお着せ替えセット（メイド服つき）＞です」
「・・確か緑谷出久って重度のオールマイトファンだったよな」

入学式

実施試験後

「実技総合成績出ました」
上位３６名の敵（ヴィラン）ポイント、救助（レスキュー）ポイントが表示されていく。
「それにしても今年は豊作だったなぁ」
「確かに、特にあの３人が目立ちましたね」
「敵（ヴィラン）ポイントだけで入試１位通過、爆豪勝己。逆に救助（レスキュー）ポイントだけで７位通過の緑谷出久」
「そして２位通過、鈴木二重。実際、戦闘を行ったのは最初の１分のみ。その１分で７１ポイントも稼いだ実力者ね」
そんな感想を言い合っている教師陣に下から声をかける人物がいた。
「いや、僕はあれが全力じゃないと思うのさ」
「？　それはどういうことですか校長」
「鈴木二重が写っている映像を全て出して欲しい」
結果が消え、新たに映像が映し出されていく。
「っ！　これは」
「ｗｈａｔ!?」
教師陣の中からざわめきがおこる。
それもそのはず、全ての映像にパンドラのカメラ目線の決めポーズがうつりこんでいた。
「まさか・・・　そんなことをするぐらい余裕があったってことですか？」
「うん、僕はＡ演習場で倒された巨大仮想ヴィラン、あれも鈴木二重が倒したと僕は考えている」
「「っ！」」
そう、今年は例年より受験者が豊作だっただけではなく大型ギミックが２体も倒されている。しかしその内一体は誰が倒したのか分らず、皆首を傾げていたのだ。

・・・
「・・彼の個性は？」
「【ドッペルゲンガー】さっ。見るだけで相手の姿と個性の８割を真似できるらしい」
「ｗｈａｔ!? それはチョット・チートすぎない？」
「ナカナカノキョウコセイダ・・」
そんな会話をきいて１人顔を強ばらせる人物がいた。
（【ドッペルゲンガー】個性を真似する個性・・か）
もしかしたら【ワン・フォー・オール】も真似することが出来たりするのだろうか？ だとしたらそれはとても恐ろしいことなのではないか。
（だがそれは実際会ってみないと分からない。それよりも今は緑谷少年が合格したことを祝おうじゃないか！）
オールマイトは気を取り直してひっそりと笑顔を浮かべた。

???
雄英高校入学式
ｔａｋｅ１
「それでは行って参ります」
「ちょっと待て、なんで食パンをくわえているんだ？」
「これが通学の儀式と聞いたのですが」
「まさかそのあと『遅刻！ 遅刻～！』と叫びながら走れとか言われてないよな？」
「ンンンさすが父上！ この儀式を知っておられましたか!!」
「パンドラ１回家入ろうか」
ｔａｋｅ２
「それでは行って参ります」
「はい、行ってらっしゃい」
少し予定より遅くなったが、パンドラは常に余裕をもって行動しているので特に問題は無い。駅に行き、電車に乗ればあっという間に雄英高校だ。
「パンドラっ！」

声が聞こえた方向へ振り向くとそこには心操人使がいた。
「おぉ、無事雄英高校入学出来たのですね！」
「まぁ、な、普通科だけどな。俺C組」
「そんな謙遜しなくてよろしいじゃぁありませんか！　ここからがヒーローへの第1歩！　なのですから。私はB組です」
「隣じゃん。パンドラはやっぱりヒーロー科、合格出来たんだな」
「ふふふ、私に出来ないことなんてありませんよ」
（真に出来ないことがないのは至高の御方達なのですがね）
2人の目的の教室はそこまで離れていない。並んで歩き出す。
「そういやなんでかい仮想ヴィランを倒したこと申告しなかったんだ？　俺に口止めまでして…」
「いえいえ、頭のいいネズミから目をつけられたくないのですよ」
「？」
ぶっちゃけもう目はつけられているのだが。そんなことパンドラは知らないし考えていない。
なんやかんや話しているうちに1年B組の教室の前までついた。
「じゃ頑張れよ」
「そちらこそ」

パンドラは心操が1年C組に入るのを見届け、自分も馬鹿でかいドアに手をかける。
（確か父上が言うには）
「いいか？　人は第1印象が全てだ。そこからこれからの生活が決まってくる。絶対ドイツ語とか使うなよ!?　絶対にな！」
（なぜ使ってはいけないのか分かりませんが、父上が言うことには間違いはないのでしょう。あとは）
「それと挨拶はきちんとしろよ。ゾンビをアイドルにしてサガを救おうとしているプロデューサーもそう言っているしな」
（分かっております父上！　ゾンビをアイドルにするのはちょっと意味が分かりませんが）
父上が言ったことを頭のことで反芻しながらパンドラはドアを勢

いよく開ける。
ここでモモンガのセリフを思い出して欲しい。彼はパンドラに念を押したつもりだが、実際注意したのはドイツ語を使うなということだけだ。つまり。
「はいおはよぉぉぉぉうございまぁぁぁぁぁす！」
オーバーアクション＆ハイテンションはそのままだ。
パンドラはツカツカと壇上まで行きとびのる。この時点で教室にいたクラスメイトの視線を全てかっさらっていった。
「初めまして！　親愛なるＢ組の皆様！　私の名前は鈴木二重。よろしければパンドラとお呼びください！　私の好きなものは父上っ！　軍装っ！　そしてレア物ぉっ！　ぜひとも！　私と！　お友達になってください！　よろしくお願いしますっ！」ドヤァ
計１０個の「！」がつく度に毎度違うポーズを決めながら大音量でのビブラード付きの挨拶だ。
初めましてでの挨拶でこれは悪手である。この場合想定されるこれからのパターンは２つ。
何も無かったことにされ、これからの高校生活も人に避けられ腫れ物のような扱いを受けるか。
または面白いやつとしてクラスの中心人物になるか。
このＢ組は果たして。
「いい挨拶だなっ！　気に入ったぜっ！　俺は鉄哲徹鐵。よろしくな！　パンドラ！」
「お前とは何か近しいものを感じる。黒色支配だ。さあ一緒に闇に呑まれようか。」
「ヤッパリＪａｐａｎｅｓｅオモシロイ人多イデス！　ワタシは角取ポニーデス。ヨロシクデース！」
クラスの何人かがパンドラの方に集まってきた。
どうやら今のところ後者のようだ。
そもそも雄英高校ヒーロー科に入学出来た時点で一癖も二癖もある奴ばっかりだ。こんな挨拶でも受け入れてしまう柔軟さを兼ね揃えている人も多い。

まあ、それでも「うわぁ」という顔をしている人も何人かはいるのだが。
「よろしくね。パンドラ君」
パンドラを囲んでいる輪の中からヒョイッと手を差し出す人物がいた。
「こちらこそよろしくお願いします！　この1年間共に頑張りましょう！」
パンドラは差し出された手をガッチリ掴み上下にブンブンと振る。
その瞬間ガラリとドアが開き。いかつい巨体が顔を覗かせた。
「入学式、ワクワクするのは分かるが一旦席に着け！」
その人物は鋭く声をかけるがより一層ざわめきが大きくなるだけだった。
「ブラドキングだっ！」
「本当にヒーローが教師をやっているんだ」
「カッケー！」
「まあ落ち着け。とりあえず一旦席に着け！　話せん！」
再度注意され、ざわめいていたクラスメイトは大人しく席についていく。
「私達も席に着きましょうか」
「ああそうだね」
固く握りしめていた手を離し、パンドラは大人しく自分の席に――黒板に貼られていた出席番号順の2列目、1番後ろの席に向かっていった。

・・・
「・・スカか」
・・???
「さて、お前たちB組を担当することになったブラドキングだ。お前

たちを最高のヒーローにするため、全力を尽くすつもりだ。1年間よろしく頼む」
「「よろしくお願いします！」」
「次は自己紹介タイム。と言いたいところだが、入学式の時間がさし迫ってきている。速やかに廊下に出て出席番号順に並べ！」
「「はいっ！」」
ブラドの指示にやる気に満ち溢れている1年生はあっという間に1列に並んでいく。
「ｏｈ！　パンドラ！　私キミのウシロダヨ！　サッキのアイサツトテモ面白カッタデース！」
「面白い。とは？　確かあなたは角取ポニーさんでしたか」
「Ｙｅｓ！　私のヨビカタはポニーでイイヨ！　ワタシ早速キミとオトモダチにナリタイデース！」
「おお！　私とお友達になってくれるのですか？　このパンドラ！感激のあまり天にも登りそうな気分です！　じゃあ私はポニー殿と呼びますね！」
「ポニードノ！　ニホン独特デス！　カッコイイデス！　ワタシＪａｐａｎｅｓｅアニメスキデス。パンドラアニメ何がスキ？」
新たな友達と喋りながら歩いているとあっという間に講堂につく。パンドラは辺りを見渡すが他のクラスは揃っていたいるにも関わらず隣にいるはずのＡ組がいなかった。
「おや、Ａ組はまだ来ていないのですか？」
「Ａ組はさっき体操服を着て外に出てたよ」
パンドラの言葉に返事を返したのはこちらをくるりと向いた庄田二連撃だった。
「あなたは確か。庄田二連撃くん」
「まだ入って出席順の紙を見ただけなのによく覚えているね。うん。僕は庄田二連撃。よろしくパンドラくん」
「よろしくお願いします。ところでここで話したのも何かの運命！私達お友達になりません？　ぜひとも庄田くんとお呼びしたいのですが!?」

「私モ！　私モ！　オトモダチナリタイデース」
（いきなりだな）
　別に友達になるのは全然構わないが、このハニワのような顔をしている新しいクラスメイトはやたら友達にこだわるなと庄田は疑問にも思ったが
「うん。いいよ。パンドラくんと角取さん？」
　パンドラはポニーと共に庄田二連撃と握手を交わした。
　この１０分でパンドラは友達が２人も出来た。意外と世界は優しさに包まれているのかもしれない。
『校長のお話だ！　至急静かにグルブッファングルッ!!』
　生徒指導のハウンドドッグが吠えた所で、講堂は静まりかえる。パンドラは顔を前に向けると舞台には小さな影がテクテクと歩いているのが見えた。
『ネズミなのか犬なのかくしてその正体は校長さ！』
　正体は校長だったらしい。
『この度は雄英高校入学おめでとう。我が高校はヒーロー科、普通科、経営科、サポート科と４つの科に別れており、次世代のヒーロー社会に～』
　この空気では友達とヒソヒソ話をする訳にもいかず、話が長くなりそうだったので、パンドラは入学前に父上と約束していたことをもう一度思い出すことにした。

～～パンドラの回想～～
　アパート『ナザリー』にて
「さて、雄英高校に入学する前にひとつ聞きたいことがある」
「はいっなんでもお聞きください！」
「お前にとって雄英高校に入る意味とはなんだ？」
「ヒーローになるための踏み台です」
「うん、まぁそうなんだが。お前はとても優秀だ。身体。知能。技術。どれをとってもこの世界のトップクラスだと思っている」

「ちっ父上が私にこんなべた褒めをっ!!」
滅多にないモモンガからのお褒めの言葉にパンドラは堪えきれず涙を流した。しかしモモンガは気にした様子もなく話を続ける。
「それを踏まえて今からお前が行くのは学校だ。学校とは何かを学ぶために行くところだ。言いたいことが分かるか？　つまり俺はお前にさらなるレベルアップを望んでいるということだ。雄英高校はヒーローを育成する場としては最高峰。きっとお前がヒーローになるために足りない何かを学ぶことができるだろう」
「おおお」
「ということで俺からの入学祝いだ」
パンドラの手に渡されたのは、鎖が着いている鉄のブレスレット？
だった。
「これは？」
「<ＥＸＰ・コラー>の改良版だ。お前の素の能力はこの世界ではいきすぎているからな。学校では少し縛りプレイをしてもらう。色々な機能を付けていたら容量が足りなくなってお前の身体能力を７０％しか抑えることしか出来なくなってしまったが」
他にも色々な縛りプレイをモモンガから言い渡された。
まとめると
・原則アインズ・ウール・ゴウンからは学校の情報を与えない。（任務などの時は別）
・至高の４１人の能力を使ってはいけない。（緊急事態、何かしらの任務を与えられた場合を除く）
・マジックアイテムを使ってはいけない。
「ＮＯＯＯＯＯ!?」
「いやこれでもお前普通の学生より全然スペック高いからな!?　高すぎる能力は学べるものも学べなくなるからな」
「なぜ変化を制限するのです!?　父上の姿になれないじゃないですか!」
「えっそこ!?」
「せめて！　せめて学校でも父上にいつでも変化する権利を！」

「なんで俺にそんななりたいんだっ！　ええい近づくなっ！　離れろ！」

〜〜回想終了〜〜

（結局学校でと父上に変化できる権利は失ってしまいました。ああなんて悲劇っ）

パンドラは思わず上を向き手で顔を覆ってしまう。

だが、この縛りプレイは父上からの命令。できる出来ないではない。やるのだ。

（あっでも父上からの縛りプレイってなんか響きがいいですね）

今度は口に手をあて「ふふふ」と笑う。

実はパンドラは父上からの縛りプレイだけではなく、個人的に目標を立てていた。

モモンガとの会話の後、パンドラが学校について調べた結果。学校とは仲間を作る場所ということが分かった。父上が言ったことを踏まえてもやはり友達はつくったほうがいいらしい。だからパンドラはしばらくの目標を『友達１００人つくる』に設定した。これはとある古の歌の一節にあったものを参考にした。誰にも強制された訳では無い。パンドラが自分で考えて、自分で決めたことだ。

（そして友達１００人と富士山へ。）

そっと軍帽に手をかけたところで

『〜ということで僕の話は終わりさ！』

丁度校長の話が終わった。

考える人のポーズをしようとしたパンドラは体制を崩した。

一方隣ではパンドラの奇行を目撃した庄田二連撃が、軽率に友達になったことを少し後悔し始めていた。

――教室に帰ったあとはガイダンスと軽く自己紹介タイムだったが、最初ぐらい優位な立場を保ちたいのか誰も個性について話さな

い。
放課後は黒色支配と木刀と銃のストラップを見せ合い互いに硬い握手を交わしたり、塩崎茨と『神』の定義についてガチ談義を繰り広げたりして今日が終わる。ちなみにこの２人は無事友達の関係になった。
（目標達成まであと９４人。おや？）
校門を出たところでパンドラの目に入ったのは深緑のモサモサ頭――緑谷くんだった。
隣には試験日に見かけた少女と真面目そうな青年もいる。
見つけたからには声をかけなければならない。
「みーどりぃーやくぅーんやーい！」
「あっパンドラくん！　受かってたんだ！」
「デクくん知り合い？」
「どちら様だ？」
突然声をかけてきたハニワ顔に２人は首を傾げる。
「えっと、試験日に友達になったパ「ご紹介に預かりました鈴木二重です！　ぜひともパンドラとお呼びください！」ンドラくんだよ」
「くっ食い気味。　私は麗日お茶子。よろしくねパンドラくん」
「了解したパンドラくん！　僕は飯田天哉だ。友達の友達は友達。ぜひとも僕達とも仲良くしてくれ！」
「おおお！　今日だけでお友達がこんなにも！」
飯田とパンドラは互いに腕をブンブン振り回し自己紹介をする。
（２人とも動きが独特だなぁ）
「ところで今日の入学式なぜ出席しなかったのですか？」
「ああ。個性把握テストを受けてたんだ」
「個性把握テスト？」
「個性ありきの体力テストの事だよ」
「ほほう」
パンドラの目が光る。早速友達が役に立ちそうだ。
「それでね。デクくん危うく除籍にされちゃうところだったんだよ」
「！　それは災難でしたね。」

「あっ……でも除籍自体嘘だったから大丈夫だったよ!? そんなことよりも麗日さんだよ。ボール投げの記憶がなんと無限！」
「おおなんと！ それは素晴らしい！ 一体どんな手を……」
「いやぁ照れますなぁ。まぁ私の＜無重力（ゼログラビティ）＞と相性が良かっただけで……」
「ほほう……」
しばらく会話（という名の情報収集）を楽しみ。緑谷達とは駅で別れた。
帰り際の会話で今後の予定が分かったのは大収穫だ。アインズ・ウール・ゴウンから情報を貰えない今、今後の予定を知ることにおいて友達は貴重な情報源だ。予定が分かれば対策をたてることが出来る。
（早速体力テストに役に立ちそうなヒーローでも洗ってみますか……＜伝言（メッセージ）＞おや？）
『パンドラか？ モモンガだ。これからマジックアイテムの整理しようと思っているんだけど、ナザリックに一緒に戻『戻ります！』ああじゃあナザリックで待ってるな』
「……父上とマジックアイテム整理！ これはオタオタしていられません。今すぐ駆けつけなければ！ ＜転移門（ゲート）＞！」
この時、個性把握テストのことはパンドラの頭の中から完全に消え去っていた。

続く

小ネタ
＜先生＞
無事入学式が終わった夕焼けが差し込む職員室の通路に、1匹の2足歩行のネズミが一般的より大きい2人の前に立ち塞がっていた。
「相澤くん、ブラドくん。今日はお疲れ様！ どうだい今年の1年生は。相澤くんがまだ誰も除籍にしていないなんて珍しいじゃないか

！」
「全員見込みゼロじゃなかっただけです。まぁ全体的に今年は質がいいんじゃないですかね」
「それはいい！　ブラドくんはどうだい？　例えば鈴木くんとか」
「みんないい子そうです。鈴木二重は今のところ特にないです。自己紹介の時にパンドラと呼ぶよう何度も繰り返していたことと1年間の目標が友達１００人つくると宣言したこと以外は」
「そいつここに何しに来たんだ」
「ＨＡＨＡＨＡ！　えっ小学生かな？」

「ヴェイッグション！　これが俗に言う誰かが私の噂でもしているということですかね？」

個性把握テスト

パンドラは１２時間近くマジックアイテムの整理、整備をひたすらモモンガとこなした。

まさかあんなところにあんなレア物が眠っていたなんて知らなかったのだ。人には――ドッペルゲンガーには譲れないものがある。あれは磨かなければならない。

そして気づくと登校時間になってしまっていた。

（というわけで個性把握テストの準備は今日頑張りましょう！）

失ってしまった時間はしょうがない。ならば取り返すために努力すればいい。そう今こそ雄英高校の教訓

（Ｐｌｕｓ　ｕｌｔｒａ!!）

３時間目

「今日は個性把握テストを行う。体操服を着てに集合！」

（あ～～～今日でしたか～～）

Ｐｌｕｓ　ｕｌｔｒａ以前の問題だった。こうなっては仕方ない。今ストックしてある個性で何とかしなければならない。

これはパンドラに対する試練である。

???

「今から行うのは個性把握テスト。わかりやすく言えば個性ありきでの体力テストだ。この取り組みの目的は今自分の最大限を知ること、そして何ができるのかを明確に理解することだ。まぁ後々必要となってくるからな。ただの体力テストと思わず全力で取り組んで欲しい」

「個性を思いっきり使えるのか!?　やる気が出てキタァァ！」

「何かを学ぶならまずは己からという訳ですか…」

ブラドは生徒達の反応を見て少し表情を崩した。はしゃいではい

るが、だれることなく皆やる気に満ち溢れている。
（これでめんどくさいとか言い出す奴がいたら様子を見なければならなかったからな）
　さすがに隣のクラス担任であるイレイザーヘッドのように入学式をすっ飛ばしてテストしたり（自分も当日まで知らせはしなかったけど）直ぐには除籍などしないが、それでもやる気のないやつを放って置くほどブラドは優しくない。教育し、それでも何も変わらなかった場合ブラドだって除籍勧告をだす。このテストはそういうヒーローとしての自覚を足りない生徒を炙り出す意味合いもある。今のところ自分のクラスは大丈夫そうだが。
（そもそもイレイザーは合理的といって生徒に入学式にも参加させないとはどういうことだ。学校行事はいわば生活における節目。生徒をきちんと参加させるべきだろう）
　ついでに同僚の愚痴が出てしまったが心の中なので問題は無い。
「それでは出席番号順で２人づつ。最初は５０ｍ走から測っていくぞ！」
「「よっしゃー！」」
　１番　　泡瀬洋雪　　６．４８秒
　２番　　回原旋　　６．５４秒
「いやむしろ個性使ったら遅くなる！」
「俺の個性使えねぇー！」
　まぁそういうこともある。その場合はヒーローとしての基礎体力があるかどうかを判断するだけだ。２人の記録はその点十分だ。時間も勿体ないのでどんどん測っていく。今のところいいタイムは宍田獣太郎の４．０５秒だろうか？
（次は庄田と鈴木・パンドラか）
　昨日の自己紹介でパンドラと呼ぶまで抗議され続けられたのでもうブラドへ鈴木二重のことはパンドラと呼ぶことにした。
（そういえば校長が何かとパンドラを気にかけてたな。そんなに実施試験の結果が気になっているのか？　確かにあの個性はチートと言われてもしょうがないが・がたとえ周りからどんな風に思われてい・・

たとしてもＢ組に入ったからには俺の生徒だ）
　改めてこのクラスの生徒を立派なヒーローに育てあげるとブラドが決意したところでパンドラと庄田がスタート地点に着く。
「位置について、よーいドンっ」
　２人が走り出した瞬間パンドラの姿が崩れ始めた
「ッ!?」
　１秒後にはパンドラの姿は完全に消え失せ、そこにいたのは
「「ホークス!?」」
　ホークスは赤い羽を広げどんどんスピードを上げていった。タイムは
「３．４５秒!!」
「まぁそんなもんですか」
　走り終わった瞬間、姿はハニワに戻った。
　続いてあとからゴールした庄田が驚いた顔で話しかける。
「パンドラくん　今のは」
「うは?ッうはは。ハーハッハッハッハ！　これこそが！　これこそが私の個性です。その名は　【ドッペルゲンガー】」ドヤァ
「【ドッペルゲンガー】会ったら死ぬというあの?」
「パンドラ！　Ｙｏｕ　ａｒｅ　ｇｒｅａｔ！　Ｉ　ａｍ　ｓｕｒｐｒｉｓｅｄ！」
「何今の恨めし」
　生徒達からもざわめきが起こる
（　やはり実際に見てみると凄いな。いったい体の造りはどうなっているのだろう）
「興味深いのは分かるが落ち着け！　時間もあまり余裕はない。次行くぞ次！」
　自身も体の構造が非常に気になるが、今は授業中である。感想は後だ。ブラド生徒達を落ち着かせ記録をとり続ける。
　それからもパンドラは好記録を叩き出し続けた。
　立ち幅跳び、持久走もホークスで空の彼方まで飛んでいき、握力はＭｔレディで巨大化した状態で測った結果器具を壊しかけ、反復横跳

びはうさ耳の生えたミルコで地面に足跡を残し、長座体前屈は取蔭切奈の【トカゲのしっぽ切り】で手を飛ばし、ボール投げは記憶が正しければＡ組にいるはずの麗日お茶子の姿でボールを大気圏に乗せた。
（麗日お茶子と知り合いだったのか）
　それなら麗日お茶子の個性を真似するのは当然だろう。
　ちなみに上体起こしだけは自力で頑張っていた。
　パンドラのことばっかりだが他の生徒ももちろん頑張っていた。拳藤も握力は学年内でも上位の成績を叩き出したし、取蔭は今のところ長座体前屈で１位だ。
　柳レイ子がボールを投げ終わり、全員の体力テストの結果が出揃った。
「これで全員全ての科目が終わったな。それでは早速結果発表だ」
「「はやっ!!」」
　持っていた端末を操作すると生徒たちの目の前に順位が表示されていく。
「今回の体力テスト１位はパンドラだ。はいみんな拍手！」パチパチ
「僕も負けていられない」
「さすが俺が認めた同士だ。ところで俺の姿にもなれるのか？」
「これも全て神のお導き。友に祝福を」
　生徒達は素直にパンドラを賞賛する。
「ふふふ。ハァーハッハッハッ。それほどでもっございますっ！」
　パンドラも素直に賞賛を受け取っていた。
「だがパンドラ以外の他のみんなも思っていたより個性を使いこなしていた。さらに基礎体力もバッチリだ。これからのヒーロー基礎学ではその力をさらに伸ばしていく。きついとは思うが限界を超えて――Ｐｌｕｓ　ｕｌｔｒａの精神でついてきて欲しい」
「「はいっ！」」
「それでは授業は終わりだ！　解散！　昼ごはんはきちんと食べろよ！」
「「失礼します！」」
「今日は学食行ってみようよ～」

「なあなあちょっと鱗飛竜だっけ？　アイヤーて言ってみて！」
「アイヤー」
　早速新しいクラスメイトと親睦を深めようと皆揃って食堂に向かっていく中
「おう！　物間おつかれ！　おまえ長座体前屈2位、握力3位！　そのほかも上位！　合計順位3位じゃねぇかすげぇな」
「おつかれ鉄哲。君も握力ではなかなかの成績だったじゃないか」
　物間は爽やかな笑顔で鉄哲を褒め称える。
「拳藤にもおまえにも負けたけどな！　それにしてもおまえパンドラと個性ダダ被りじゃねぇか。どっちもすげぇ個性だけどよ」
「ああ、ありがとう」
　なお鉄哲も後に自分とダダ被りの個性持ちに出会うのがそれはまた別の話。
　キーンコーンカーンコーン
「ああっチャイムなっちまった！　俺席先取っとくな！」
「うんよろしく頼むよ」
　鉄哲の姿はあっという間に見えなくなった。
　そして物間は表情を消した。

「個性ダダ被りか・・・そんな訳ないだろ」
???

　時は過ぎて放課後
　そこは寂れた場所だった。何年も手入れがされていないせいで雑草がそこら中に生え散らかり、放置された機械は全て錆び付いていた。
　ここは＜ナザリー＞の近くにある廃工場。数ヶ月前から幽霊が出ると噂され、もはやここを訪れるのは好奇心旺盛な子供か夜に肝試し

■に来る若者しかいない。
「■で、何で俺はここにいるんだ？」
「それはヒーローになるためでしょう」
「■いきなり拉致してきてその説明はないと思う」
心操としては今日は普通に家に帰る予定だったのだ。友達になったC組の友達と談笑しながらさあ帰ろうとカバンを背負った瞬間気づいたら荷物のように脇に抱えられていたのだ。ドアから出る時見えたの顔は見ものだった。スマホがさっきから振動しているので心配のＬＩＮＥでも来ているのかもしれない。後で大丈夫だと返信しなければ。
「心操くん。あなたの課題は覚えていますよね？」
「ああ。身体能力の強化」
「私がじっくりねっとりと教えてもよろしいのですがね、せっかくなら本職の方に見ていただいた方がいいと思いまして。という訳で今日はその方に来て頂きました！」
「いきなりすぎない!?」
「それではどうぞ！」

ドオンッッッ!!

廃工場のドアを蹴破り煙の中から人が現れた。
高い身長。見ただけで分かるぶ厚い筋肉。顔の造りから外国人だろうか。目はサングラスに隠され髪は角刈り？　革ジャンとジーンズを着こなし、手には穴抜きグローブをはめている。パッと見どこかの
（ターミ？ータかな？）
「ご紹介に預かりました。セーバスド・チャンルツェネッガーです」
見た目は無骨そうだが喋り方は執事のような丁寧な口調だった。■■■■■
「えっはい今日はよろしくお願いします。セーバルド・チャンツネすみません」
「いえいえ、私のことはジャスティスとお呼びください」

（名前と1ミリもかすってないんだけど）
「はい。えっと。ジャスティスさん」
「はい。心操様。事情はパンドラ様から大体伺っております。ヒーローになるために強くなりたいそうですね？」
「はい！」
「まず最初に少し体の方を拝見してもよろしいでしょうか？」
ジャスティスはそういいながら遠慮なく体を触っていく。どうやら筋肉のつき方などを見ているようだった。
「分かりました。はっきりと言いますが、まだまだ薄いですね」
「そうですか。」
分かってはいたが実際に言われると少し悲しくなってくる。
「さてあなたに何かを教える前に1つ聞きたいことがあります。あなたには本当にヒーローになる覚悟がありますか？」
「っ！」
「ヒーローとは誰かを救うために存在しています。自分を守るのも難しいこの世の中で、あなたは名も知らぬ誰かに命をかけることが出来ますか？」
心操はこの質問にほぼ反射で答えた。
「出来ます！　俺はっ。俺は誰かのためにこの個性を使いたい！」
「では私にそれを示してください」
とその瞬間パンドラはジャスティスに飛びかかった。肩を組んで何か内緒話をしているようだ
（セバス様！　さすがに手加減なしの殺気をいきなりぶつけるのはヤバいです）
（よく私がやろうとしたことが分かりましたね。パンドラ様。しかし覚悟を確かめるためにはこれが1番かと）
（それでもです。あなたの殺気は常人にとってはオール・フォー・ワン並です。そんな伝説級をぶつけてしまったら育つものも育つ前に枯れてしまいます！）
（それを乗り越えてこそではないでしょうか？　Ｐｌｕｓ　ｕｌｔｒａと雄英高校の校訓にもあるでしょう）

（げ・ん・どがあります！　恐怖に慣れることは大切ですが過程というものがあります！　モモンガ様もたっち・みー様も無益な殺傷はお嫌いでしょう。お友達の心操くんが死んでしまうのは私も困ります）
（分かりました。ならば心操様の心臓が止まるギリギリの殺気に抑えます。これくらいで倒れる程度ならヒーローなどとても務まりません）
（分かりました）
「ではいきます」
こちらを向き直したジャスティスがそう言った途端
心操の世界は凍った。
（寒い。これはなんだ。怖い。つめたい。分からない。コワイ。逃げたい。動けない。これは殺気というやつなのか。歯のねがかみあわない。ここからにげたい。だれか。だれか。）
「ッカ!!　ダレッ　カ」
「ヒーローはあくまでヴィランを捕獲するのが目的です。一方ヴィランはあなた達ヒーローを容赦なく殺しに来ます。あなたはそれに立ち向かわなければなりません。誰もあなたを助けてはくれませんよ？」
心操は目を見開いた。
（そうだ。おれがなりたいのはヒーローだ。だれかを助けることができるヒーローだ。誰かを助けるにはどんなときでも自分が立ち向かわなければいけない。こんな冷たい。こんな殺気に怯んでいる場合では無い。この寒さから市民を守るのがヒーローの役目だ！）
ガタガタと止まらない体の震えを抑えながら必死に声を絞り出した。
「俺は　誰かを守れるっヒーローにっ！　絶対にっ！　なるんだ!!」
目の前の光景は何事も無かったように元に戻った。
「カハッゲボッゲボッッあなたは　いったい」
パチパチパチパチ。後ろを向くと手を顔の横の位置で固定して拍

手をしているパンドラがいた。心操は少しイラッとした。
「素ん晴らしいっ！　素晴らしいですよ心操くん！」
「ええ。よく耐えました心操様。あなたの覚悟はよく分かりました」
　それから1時間は現在心操に必要な効率的な筋トレの仕方を丁寧に教えて貰い。基本的な突きと蹴りの型を時間ギリギリまで体に教え込まれた。ジャスティスは忙しいらしいので次来れるのは体育祭後らしい。本当はそれまでに色々教えて欲しかったが、基本も出来ていないうちに複雑な動きを練習しても変な型がついてしまうだけだそうだ。体育祭までに出来ることは今日習ったことをひたすら反復練習して、完璧に仕上げることだけだ。
　ちなみにこの時間パンドラは体育座りで古典の百人一首を復習していた。真面目か。
「ゼェゼェ。今日は。ありがとうございゲホッました」
「お疲れ様でした。これが今のところあなたに教えられる全てです」
「あの。1ついいですか？」
「はい？」
「俺のことは心操でいいです」
「分かりました。心操。それではまたいつか。Ｉ☒ｌｌ　ｂｅ　ｂａｃｋ」
　ジャスティスは影のようにスっと消えていった。
「それでは私達も帰りましょうか」
「パンドラ。」
「ほぉ？」
「あの人ってターミネー？ー？」
「ちがいますけど？」

続く

小ネタ

＜昼休み＞

雄英高校大食堂

雄英高校昼休み。授業を終えた生徒たちが一同に集まる。

クックヒーローのランチラッシュがつくる一流の料理を安価で楽しめることで大食堂は人気スポットだ。

「なのになぜパンドラは弁当を食べているんだい？」

庄田は不思議そうに大盛りカツカレーを頬張りながら尋ねた。

「それはですね。これは私の父上が作ったものだからです」

別にパンドラは食べなくても全く問題は無い。そもそも味覚がないので穴の中に消えていく食材に謝らなければいけないぐらいだ。なのになぜモモンガはパンドラに弁当を作ったのか？　答えはパンドラが駄々をこねたからである。それはもう玩具売り場で泣き喚いている子供も我にかえるレベルでの泣き喚きぶりであった。

パンドラに根負けしたモモンガが作ったのがこの＜愛妻弁当＞いや、この場合は＜愛父弁当＞と言うべきか。

箱の半分にギチギチに詰められた白米。卵のカラが入っている食感に遊び心を加えた卵焼き。タコさんウィンナーを作ろうとして細切れになった漆黒のウィンナー。ベーコンとアスパラが分離したアスパラベーコン。塩ゆでしていないブロッコリーなど。１００人中９９人が酷いと感じる出来だ。そしてそれを美味しそうと感じる１００人中の１人はパンドラだった。

残念ながらパンドラには味が分からない。だが違うのだ。パンドラは味ではなく父上の愛を味わっているのだ。愛こそが最高のスパイスとはよく言ったものだ。父上が自分のために時間と手間をかけたという事実がパンドラにとっての最高のスパイスだった。

「んんんっフェルテッシモ!!　絶妙なハーァモニィィィ!!」

涙を垂れ流し、賛美を口にしながら弁当箱まで貪りそうなパンドラを見て

庄田は本格的にパンドラをヤバい奴だと結論づけたのであった。

＜ター？ネーター＞

ナザリックにて

「〜という訳でセバス様に私のお友達である心操くんに基本的な動作を教えて欲しいのですが」
「分かりました。未来のヒーローのために一肌脱ぎましょう。ただこの姿は世間にはヴィジランテとして認識されています。ありのままの姿はさすがに……。変装をした方がよろしいと思うのですが」
　そこにヒョイッと顔をだす人物がいた。
「おっ珍しい組み合わせだな」
「たっち・みー様！」
「たっち・みー様！　変装とはまず何をするべきだと思いますか？」
「ちょっパンドラ様!?」
「えっ？　目を隠すとかじゃないか？　サングラスとかかな……」
「お――――ー」
「いやいや、やっぱりそこは髪をいじるべきでしょう。角刈り？ｗとかどうだ？ｗ」
「ウルベルト様!?」
　いつの間にかウルベルトが近くに来ていた。他にも何人かの至高の御方たちがこちらに集まりつつあった。
「ここは普段の逆のイメージの服とかどうだ？」「執事服の逆ってなんだ？」「ワイルド的な……」「ダメージジーンズとかか？」「上は？　裸？」「革ジャンとかどうだ？」「裸に革ジャンってなんか変態っぽくないか？」「軍服ッ!!」「漢は黙ってタンクトップ」「靴は黒の編み上げブーツだろ。底に鉄板とか入れたヤツ」「突然だけど穴あきグローブってかっこいいよね」
　そんなこんなで出来たセバスの姿は
「「どっかで見たような??」」

【番外編】とある姉妹の話

少女はどうする事も出来なかった。
目の前には男がいた。自分達を殺そうと今にも腕から生えた鋭い刃を振り下ろそうとしている。
この状況では個性を使ってもどうにもならない。それでもせめて後ろにいる妹だけは、妹だけは守ろうと少女はその場を動かなかった。数秒後にくる痛みに備えて、目を閉じ、歯を食いしばる。

――痛みは襲ってこなかった。

そっと目を開ける

そこには

「もう大丈夫。俺が来た」
???
「いーいーないーいーなにーんげんっていーいーな」
夕日が綺麗な午後5時、仲睦まじそうに手を繋いで楽しそうに歌いながら歩く姉妹がいた。
「ねぇネム。今日の夕飯は何がいい?」
栗色の髪を三つ編みに結い、真新しい制服に身を包んだ少女――エンリ・エモットは妹に問いかけた。
「ネムなんでもいいよ!」
火を連想させる赤い髪をおさげにし、弾けるような笑顔で姉に返事

を返すのはエンリの妹――ネム・エモットだ。
名前の通り2人は元々外国に住んでいた。数年前のある日突然この日本に引っ越してきたのだ。両親に理由を聞いても頑なに理由を教えてくれなかった。まぁリ・エスティーゼ王国に住んでいた時よりは格段に暮らしが良くなったので特に文句はないのだが
（すっかりいい子になってしまって……）
エンリはネムの返事を聞いて少し俯いた。
数ヶ月前まではネムはわがままばっかりで手を焼いていたというのに
（やっぱりあんなことがあったから？）

「おっと？　そこにいるのは隣のお嬢様方では？」
声をかけられ慌てて前を向くとパンドラさんが手を振ってこちらに向かってきていた。
「パンドラさんこんばんは」
「パンドラさん！　こんばんは！」
「ｇｕｔｅｎ　ａｂｅｎｄ！　お二人共今お帰りですか？」
「はい。今ネムのお迎えに……「パンドラさん今日も楽しかったんだね」こらネム」
「はい。今日も父上がこの世に存在していて、なおかつ私にお友達が出来ましたからね！」
「お友達!?　すごーい!!」
「良かったですねパンドラさん！」
「ふふふふふ」
パンドラさんは隣のアパートの2階にお父さんと一緒に住んでいる。数ヶ月前までは関わりもなければ存在すら知らなかったのに、人生とはどう転ぶのか分からないものである。今は会ったら世間話をするような仲だ。
（ああ、そういえば。パンドラさん達とはじめて出会った日もこんな綺麗な夕日だったなぁ）

――数ヶ月前

「こらっネム！　はやく家に帰るよ！」

「ヤダ――――！　もっと遊んで帰るの！」

ネムはまだまだ遊び足りないと、エンリを振り払って駆け回っていた。

「いい加減にせんとお姉ちゃん本気で怒るよ？」

「べぇーっだっ！」

「こらっ」

凄んでも全く効果がなかった。そればかりかどんどん先に走り去っていく。見えなくなってしまう前に追いつかなければと角を曲がるとネムは柵に開いた穴から不気味な廃工場の中へ入っていってしまった。

「ネムっ！　そこは危ないから入っちゃダメ！」

「えへへーぼうけーん！」

注意しても聞く耳すら持たない。さすがに廃工場は危ない。転んでどこか切ってしまったらどうするつもりなのか。それ以前に衛生上よくないと思う。

「ああもうっ」

こんな不気味な廃工場など本当は近づきたくもないが、ネムを連れ戻さなければならない。幸いにも穴はギリギリ自分にも通れそうな大きさがあった。勇気をだして中に入る。

「ネムーどこにいるのー返事をしてー」

何となく声を潜めながら辺りを見回す。全く手入れをされていないようで雑草は生えっぱなしだし、機械類も全て錆び付いてしまって

いる。
（もうはやく帰りたい）
しばらく歩いているとだいぶ奥の方に来てしまった。
「おっおねえちゃん」
近くでか細い声が聞こえた。声がした方に顔を向けると目を赤くしたネムがいた。
「ネムっ！　どうしたの？」
「はやく！　はやく逃げようお姉ちゃん！　あの人たちの色怖い！」
「落ちついてネム。何があったの？」
「だから　オールマイ　ゆうえ」
「おびき　ここ」
遠くから声が聞こえる。こんな所に人がいたのか？　ネムがこんなに脅えているのはこの声の人達のせいなのか？
よくよく耳をすましてみる。
「だからここら辺の住宅地は場所的には丁度いい。火をつければ大きな騒ぎになるだろう」
「何人か犠牲者が出てしまうが、そんぐらいではないと奴は――オールマイトはこないだろうからな。確実性が欲しい」
（えっ火をつける　オールマイトってあの？）
何の話かはよく分からないが良い相談事ではないようだ。
斜め下を見るとネムが自分の腰にしがみついて震えている。
「ネム。ゆっくり移動するよ」
「うん」
とりあえず外に出て通報しなければと動こうとしたが、震えていたネムは上手く足が動かなかったらしい。近くにあったドラム缶に足をぶつけてしまった。
ガンッッッ
「誰だ！」
「逃げるよ！」
必死に足を動かして逃げる。追いかけてくる足音の数が思っていたより多い。

「お姉ちゃん！」
『頑張ってネム！　そして私も！』
　後々の負担がきついのであまり個性は使いたくなかったがそうも言ってられない。自分の出せる全力でネムを引っ張って走る。けれど限界は早かった。
「きゃあっ！」
　落ちていた廃材でつまづいてしまった。
「コイツら手間取らせやがって。どうしますか」
「話の内容を聞かれた。殺せ」
　追いついてきた男達は同じ服を着て、顔を隠していた。会話の声に温度はない。
（頑張れ私。頑張れ私）
　一か八かさらに自分自身に個性をかけ反撃を試みる。
「ていやぁぁぁあ!!!」
「ぐふぅっ」
　起死回生の突きをかました。腕で塞がれてしまったがダメージは与えられたようだ。だがそれだけだった。
「この小娘がァァァ」
「アッッッ」
　殴りつけた男の腕から鋭利な刃が飛び出し――背中を切りつけられた。
「お姉ちゃん!!!　お姉ちゃん!!!」
「ネム」
「はぁ。もう殺す」
　男は腕を高く高く上げる。
（せめて、せめてネムだけは）
「お姉ちゃん!!!　おねえちゃぁぁぁぁぁあん！」

「グハッ」
（えっ？）
切りつけようとしていた男が倒れていた。

目の前には男の人が立っていた。
「もう大丈夫。俺が来た」
こちらを振り向いた顔はとても優しそうだった。
「あっ・・あなたは？」
「おい今何が起こった!?　何者だ!?」
「・・パンドラ。この人たちを外に連れて行け」
「Ｗｅｎｎ　ｅｓ　ｍｅｉｎｅｓ　Ｇｏｔｔｅｓ　Ｗｉｌｌｅ！　さあお嬢様方、しっかりとおつかまり下さい」
後ろにもいつのまにか人が立っていたようだ。あっという間に２人とも抱き抱えられる。
「あっあの！　あの人は置いてっていいんですか？」
「大丈夫です。あの方は私の父上です。私の父上はとても強いんですよ」
その瞬間後ろからありえないくらいに怯えきった悲鳴が聞こえてきた。
「あっあの」
「大丈夫です。死んではいません。多分」

パンドラさんの足は早かった。幾分もたたないうちに廃工場から脱出する。下ろしてもらったが途端にへにゃりと座り込んでしまう。横を見るとネムも同じ状態だった。

「酷いお怪我です。少しじっとしといてください」

ホアッと暖かいものに包まれたと思ったら背中の痛みが無くなっていた。

「嘘」

「もう暗くなってしまいましたね。家はどちらですか。送ってさしあげましょう」

「あのっ助けてくださってありがとうございます。本当にありがとうございますっ！」

「ありがとうございますっ！」

姉妹揃って同じタイミングで泣き土下座をしてしまった。怖くて怖くてその場をしばらく動けなかった。その時のパンドラさんは慰めようと玉ジャグリングやスティックから花をだす芸などをしていたらしいが全く見る余裕はなかった。

私達が落ちついた頃、パンドラさんのお父さん——鈴木悟さんが帰ってきた。鈴木さん曰く、隙をついてあの男達は逃げてしまったらしい。だけどトラウマはガッツリと刻んだのでここでは多分何もしないだろうと。

この時にはあたりは真っ暗だったのでお言葉に甘えて送ってもらった。すると鈴木さん達はお隣のアパートの人だと判明した。次の日、両親に頼んでできる限りのお礼を持っていった。要らないと断られたけど、それでも命の恩人には何かを送りたかった。最終的には受け取ってくれたので本当にいい人達だ。そこから見かけたら声をかけていったらいつの間にか親しい隣人くらいの関係になっていた。

「それでですね。その時の父上はとても愛らしく」

「エンリさん？　大丈夫ですか？」

「えっあっはい！　大丈夫です」

少し過去に意識を飛ばしすぎたようだ。
「じゃあ私はそろそろ失礼しますね」
「はい。お元気で！」
「じゃあねっ！　パンドラさん！」

「パンドラさんはいつも楽しそうな色をしているんだよ」
ネムはパンドラさんのことが大好きだ。
ネムはあれから自分がわがままだったからお姉ちゃんが死にかけたんだと一切のわがままを言わなくなった。もしあの男達の言う通りに住宅地が火に包まれたらもっと犠牲者が出てたかもしれない。それを考えたらネムのしたことはある意味良かったのかもしれない。けれどネムは自分自身がずっと許せないらしい。素直に言うことを聞いて、言われなくても家のお手伝いをする。それが少し寂しいと感じてしまう。
（もしかして私って、意外とシスコンだったのかな）
いつかまたネムがわがままを言う時がきたら、その時は全力で叶えてあげよう。
なぜなら私はお姉ちゃんなのだから。
エンリはそっとネムの手を握った。

対人戦闘訓練

「これで俺のレッスンは終わりだァァァ!!　しっかりご飯を食べて午後に備えるんだＺＥＥＥＥ!!」

４時間目の授業が終わり、パンドラはホッと息を吐く。

終始あのテンションだが内容は普通だった。

今日は午後にヒーロー基礎学が入っている。なんとあのオールマイトが指導してくれるらしい。後に楽しみがあると、暇な授業でも全く苦行ではなかった。

「パンドラ！　一緒にご飯食べようぜ」

「食堂が混沌に包まれる前にはやく行かなければ……」

「ってまたお前弁当？」

パンドラにそう話しかけてきたのは円場・黒色・回原だった。円場と回原は先に黒色と友達になり、友達繋がりでパンドラとも仲良くなった。つい先日から一緒にご飯を食べる仲だ。ちなみにこの前共に居た庄田は他のクラスメイトと食べているようだ。

「次はヒーロー基礎学だな！　一体今度は何をするんだ？」

「最初は戦闘の基礎だろ。【空気凝固】ってあまり戦闘向きではないんだよなぁ」

「まぁ何が来ても全力で取り込む所存。ところでパンドラはなぜ毎回泣きながらご飯を食べるのか」

「ふふふ。今日は卵焼きの量がいつもより多いです。これはきっと私がヒーロー基礎学があると話を聞いて父上なりのエールに違いありません。愛されていますねわたしふふふ」

「おっと黒色。パンドラは取り込み中らしい。ほっとこう」

さすがＢ組常識人男子四天王の１人円場である。出会ってそうそうパンドラの扱い方を悟った。

「いや、やばいだろこれは。多分そのうち弁当箱まで食いはじめるぞコイツ」

それに即座に突っ込むのはＢ組のツッコミ担当回原であった。残

念ながらパンドラはもう手遅れである。一瞬目を離したうちに弁当箱は消えていた。
「えっ食った？　もしかしてもう食った？」
「んんん美味でした！」

???

そしていよいよ午後の授業
「わーたーしーがー!!　普通にドアから来た!!!」
「オールマイトだぁぁあ！」
「生マイトだぁぁあ！」
「画風が違う！」
オールマイトを見て生徒達は興奮に包まれる。
「ヒーロー基礎学！　前回は個性把握テストだったが、今回は戦闘訓練!!!　そして入学前に送って貰った要望に沿ってあつらえた戦闘服（コスチューム）を着用しておこなってもらう。着替えたら順次グラウンド・βに集まるんだ！」
「「「ヒーローぽいのきた――――!!!」」」
クラスメイトが次々と教室の横から出てきた戦闘服（コスチューム）手に取る中。パンドラは自分のバックを大事そうに抱えた。

みんながワイワイと着替える中。ひとりパンドラは神聖な儀式のような雰囲気を醸し出していた。
まず軍帽を脱ぎ、靴下を履く。アイロンのかかった赤いシャツをシャツガーターで固定する。腹回りが痛くない程度にズボンのベルトを締める。ジャケットのボタンを止め、またベルトで固定する。紋章やチェーンの位置を寸分違わずいつもの位置に付け、コートを羽織る。少し底に厚みのあるブーツに足を通して、軍帽をもう1回被り直せば。
そこにいるのは

誇り高きナザリック地下大墳墓
宝物殿領域守護者
パンドラズ・アクター

「おおおパンドラ軍服カッケーな！」　？
「軍服　＜・＞　＜・＞」
「なんだろう？　妙にしっくりとくるな」
「ええ。皆さんもお似合いですよ」
格好から入るということも大切なことである。
つまりパンドラは今日1つ肩書きが増えることとなった。
（今日から私もヒーロー！）

グラウンド・β

「さあ始めようか有精卵共!!!　戦闘訓練のお時間だ!!!　みんなコスチューム似合ってるぜ!!」
オールマイトは相変わらず堂々とした態度だ。
「あの！　ここって入試の演習場ですけど市街地演習ですか？」
手を挙げてオールマイトに質問を投げかけたのは拳動だった。
「いいや！　君達が行うのは屋内での対人戦闘訓練さ!!!」
「ああ、確かにヴィラン退治は屋外でよく見るけど監禁・軟禁・裏商売など凶悪犯罪は中の方が動きやすいだろうしね」
「なるほど、このヒーロー飽和社会の中では真に小賢しいものは屋内（やみ）に潜むというわけですか」
物間・パンドラは即座にオールマイトの言いたいことを理解した。
「そこのおふたりさん察し良すぎない!?　まあそういうこと。だから君たちにはこれから敵組とヒーロー組に別れて2対2の屋内戦を行ってもらう!!」
「基礎練習なしですか!?」
声をあげたのは昼休みに基礎練習だと予想をつけていた円場だ。
「その基礎を知るための実践さ！　状況設定は敵がアジトに核兵器を

隠していてヒーローはそれを処理しようとしている」
「じゃあヒーローは制限時間内に敵を確保。または核兵器回収ってところかな」
「それでは敵の方は制限時間内まで核兵器を守り通すか、ヒーロー確保ってところですかね」
「ねぇ君たちエスパー？　個性エスパー??　はいその通りデス。この捕獲テープ巻き付けたら捕獲ね。敵チームが先に入ってセッティング。５分後にヒーローチームが潜入でスタート。１０分間ね。コンビ・対戦相手はくじ!!」
「急増チームアップを想定しているのか」
「うんもう私と一緒に先生してみない？　じゃあ早速くじ引いて始めようか！」

結果パンドラはＡチーム、バディは
「よろしくねー」
取蔭切奈だった。
「最初のヒーローチームはＣ！　敵チームはＡ！」
（初っ端からですか）
そして相手は
「よろしくね」
「よろしく」
物間寧人と骨抜柔造だった。
「おー！　推薦者対決とまねっこ対決！」
「まねっこって」
「面白くなってきた！」
クラスメイトは面白くなりそうな対決に好き勝手に騒ぎ始める。
「じゃあ私達はモニターで見ているから敵チームはすぐに準備してね！」
オールマイトの声と共に４人は演習場の方へ押し出される。とりあえずパンドラはまだあまり親しくない今回のバディである取陰の

方へ近づいた。
「パンドラどうする？」
「まずは私とお友達になりましょう！」
「はい？」
???

「で、どうすんの物間」
「まずは自分達の個性を確認しようじゃないか。僕の個性は【コピー】触れた人の個性を5分間使える。けどスカの場合もある。今のところ3個はストックできるけど今回は関係ないかもね。5分後に僕達スタートだし」
パンドラと取陰と話し始めたと同時に物間と骨抜も作戦会議を始めていた。
「次は俺か。俺の個性は【柔化】触れた物を柔らかくする。もう1回触れると解除。生物には使えない」
物間は腕を組む。
「じゃあ次は相手の情報をすり合わせとこう。とりあえず知っていることは？」
「取蔭は体をバラバラにして動かせるってぐらいしか情報がないなぁ。あと宙も浮かべるみたい。パンドラは相手の姿に変化して個性を真似することができる。今のところホークス・Mtレディ・ミルコ・取蔭と重力をなくす個性？　が使えるってとこか。おまえの意見は？」
「大体君と一緒かなぁ。パンドラはどのくらいストックできるのか？
僕みたいに時間制限があるのかどうかすら分からない。変化する条件は易々と触れることが出来ないプロヒーローに変身していたからあまり難しい条件ではないのかな？」
「見るだけとか？」
「そんな感じ。それだと僕達のマネもされるかもね」
骨抜は物間がパンドラのことばかり話していることに気づく。

「ん？　取蔭は？」
「彼女は今のところ３５分割分けられる。１０分間は余裕で動かせるよ」
　物間はスラスラと答えた。
「えっなんでそんなこと知ってるんだ？」
「この数日間でクラス全員コピーを試してみた」
「やたらスキンシップが多いやつだなと思ってたらそういうことかよ!?　ん？　なんでパンドラについてそんな分からな……っあ？　スカってやつか」
「察しの通り、パンドラはスカだったんだよ」
　骨抜も物間と同じように腕を組む。
「うーん。取蔭もだけどパンドラが厄介すぎる。おまえと似ているけ……」
「似ていないよ」っ？」
　すぐさま骨抜の言葉は物間によって否定された。
「全然似ていない。はっきりいって【ドッペルゲンガー】は僕の【コピー】の上位互換というのもおこがましいぐらいだ」
「物間……」
　これはさすがに無遠慮すぎたと骨抜は反省した。個性は個人のアイデンティティ。物間にはっきりとパンドラが上だと口に出させてしまうのは酷な話だったのかもしれない。
　が当の本人はケロリとした顔をしていた。
「あぁ、勘違いしないで欲しい。僕は別にそのことについては全く気にしていない。それに少しは僕の方が有利なこともあるみたいだしね」
　物間は一息ついた後、一気に話し始める
「まずパンドラは個性を使うためにその姿に変化しなければならない。どんな個性を仕掛けてくるかを見た目で判断することができるかも。あとは体力テストでさ、長座体前屈の結果覚えている？」
「１位が取蔭。２位がおまえ。３位がパンドラ……あれ？　そういえば２位と３位の結果って割と差があったような？……」
　骨抜は目を閉じ思い出しながら答えた。

「そう。オリジナルと差が開くのは分かるけど、性能的には同じ個性を持つ僕とパンドラの差がひらくっておかしくないか？　僕が個性を使うのがうますぎるっていう線もあるけど」
「もしかして　パンドラって１００％再現出来ない？」
　はっとした顔で物間を見つめる。物間はニヤッと笑っていた。
「その通り。今のところ僕がパンドラに勝ってんのはこのぐらい。さあ時間もないし早速作戦を考えようか。警戒しすぎて悪いことはない。パンドラは目に入れるだけで変身できる。変身に時間制限はなし＋今わかる６つ以外にも個性を使えると仮定しとこう」
　骨抜は慌てて脳を作戦モードに切り替える。
「俺たちの戦力は【柔化】??２ってところか。まず核の場所を探すべきじゃないか。じゃないとどうしようもないと思う」
　その問いかけにすぐさま物間は答えた。
「それは僕も賛成。多分取蔭なら目を操作して相手の出方を伺う。見つからないように核を探せる方法とかない？」
「あるぞ。ビルを柔らかくして体を潜り込ませて移動していけばいい。それなら目につかない。なんなら不意打ちにも使える」
「それはナイスアイデアだ！　ちなみに僕にも出来るのかな？」
「ムリ、俺めちゃくちゃ練習してやっと出来たもん」
「否定早くなァい!?　姿隠せるの君だけじゃなァい!?　僕はァ!?　ふぅ、じゃあ僕は普通に移動するよ。でなんかあったら【柔化】で撤く。核見つけたら小声で連絡。状況を正確に把握してから作戦をたてよう。まぁ大体あっちの考えも限られてくるけど確信が欲しい。取陰に聞かれる可能性は高いけどしょーがないか。それに」
『５分経過！　ヒーローチームスタート!!!』
「やべっ始まっちゃったよ!?」
「とりあえず核の場所を探し出す！地図覚えたァ!?　君は上の方から探してくれ！　大体ラスボスは上の方にいるのが定石！君の方が見つかりにくいはずだから任せる！　くれぐれも見つからないようにね！」
　物間の姿はビルの側面に移動したことによってもう見えなくなっ

ていた。
「分かった。柔軟に対処していこう」
骨抜の呟きを聞く相手はもうどこにもいなかった。
???

（さて、侵入成功っと）
物間は適当な場所を柔らかくして、音もなく侵入した。
（取蔭らしき人物はいないっと）
多分パンドラは核のある場所に待機しているだろう。あの個性なら1人でもある程度対応できる。
数日間過ごしてパンドラの性格を物間は何となく理解していた。彼は自分と同じだ。
注目を浴びてこそ輝くタイプだ。
常に背筋が伸び堂々とした振る舞いが、それを物語っている。少し我を通しすぎるところはあるが・・・
（彼が僕と違うのは主役になれるかどうか）
物間の個性は他人がいないと何も出来ない。一方パンドラはまだ詳細は分からないが何となくパンドラは骨抜に話した仮定通りの個性だと物間の勘が告げている。
つまり他人がいなくても、1回コピーしてしまえばパンドラは1人で戦えてしまう。
1人で主役になれてしまう。
（だけどさ、主役を喰らう脇役もいるんだよ）
パンドラに出来なくて物間に出来ることはある。チャンスはあるのだ。下剋上という名の主役を引きずり落とす瞬間が
（まぁ難易度は高いだろうけどね）
ははっと少し諦めに似た笑いを漏らす
物間は周りに気をつけながら建物の中を散策していく。

1階には多分何もないだろうとさっさと調べて2階に上がり、同じように調べていくが特にない。3階に向かおうと階段の方へ――

ペタ　　ペタ　　ペタ

（足音!?　取蔭か？　けどこんな分かりやすく音を出すか？罠？）

音はどんどん近づいてくる。

（とにかく覗いて見るか）

音のなる方に足音を忍ばせながら近づいていく。そっと覗くと――

「わっ」

足だけこちらに飛んできた。

サッと右に避け、足を目で追いかける。

Uターンしてまたこっちに飛んできた。

今度は頭を下げて避ける。

さらにUターンしてくる

避ける

負けじとまた足がUターン

「あぁもう何がしたいの！」

足止めつもりだろうか？　あまり時間もないのだ。物間に引っかかってやる余裕はない。

（よし【柔化】で撤こう）

壁に手をつき隣の部屋に移動する。階段の方角にまた手をつき、壁抜けをする。

・・・

（・・追いかけてこない。様子見か？）

・物間が首を傾げていると骨抜から連絡が入る。

『・物間！　核は5階の真ん中フロアだ。パンドラ1人。ホークスの状

態で羽を撒き散らしながら、核持って空中で待機している。邪魔なのか知らんが柱が全部破壊されている』
『おｋ。作戦会議しよう。４階の階段辺りに集合。すぐ向かう』
物間はすぐさま移動を開始した。
がなかなか思う通りに進まない。
取蔭のパーツがまた行く手を阻んでくる。
（時間稼ぎ？　タイムアップを狙っている？　それとも体力を削るため？　だけどこんぐらいなら）
物間は【柔化】でパーツを撒きまくった。
そのせいで集合場所に着いた時にはもう残り時間を５分きった。
骨抜が心配そうにこちらを見ている。
「物間大丈夫か？」
「ゲボッあぁちょっとフッ１回個性コピーさせて」
骨抜に触れながら息を整える。そのついでに取蔭が盗み聞きしていないか周りに気を張り巡らせる。
――今のところ近くにはいないようだ。物間の息が落ち着いたところで小声で骨抜が話始める。
「パンドラは俺達が【柔化】で建物のどこからか出てきて不意打ちしてくると読んだんだと思う。俺らの勝利条件の１つは核にタッチするだけってのもあるからな。思いもよらないところから攻めてこられても対処できるよう核と一緒に空中待機しているんだろう」
物間もそのようにできる手段があるのならそうしている。ホークスの個性を持っていれば可能だ。
ただ作戦を立てる前に１つ物間は聞きたいことがあった。
「ホークスって何の個性だっけ？　飛ぶだけ？」
骨抜は困った顔をした。
「確か羽を動かせるんじゃなかったか？　覚えてないけど。・・・・で取蔭は？」
骨抜はホークスの個性より取蔭の動向が気になるらしい。
「多分そろそろ核のある部屋に戻って来てるんじゃない？　僕達がもう４階に来ていることはあっちも分かっていると思う」

「やばくないか？」
骨抜の額から汗が吹き出す。物間も眉を寄せる。
「そうだね。彼らに対して僕達では正面対決は分が悪すぎる。そんなの分かってたさ。よし僕が囮になるから骨抜。奇襲しろ」
「おい、そんな上手くいくのか？」
骨抜は不安そうな顔だ。そう思うのは仕方がないだろう。だが
「ふつーにやったらあっちも予想してるはずだから失敗する確率の方が高いだろうね。だけど。ふふふ、実はさっきね取蔭のパーツをかすったんだ。多分取陰はその事に気づいてないと思う。僕が中央の部屋の壁を【柔化】で通り抜けて、いきなり分裂して彼らに飛びかかるのさ。さすがにパンドラも取蔭も僕に目が行くはず、その瞬間に君は。」
あっちは物間の言いたいことを理解してくれたらしい。
「分かった。じゃあ俺は奇襲するベストポジを探してくる。準備が出来たら連絡する。それまでに物間も適当な位置にいて」
「了解」
骨抜が建物の中に入っていったのを見届け物間も上の階に移動する。

『ついた』
いよいよ正念場だ。２人の身体に緊張がはしる。
『じゃあ5秒後に僕が飛び出す。２秒後に君は核に飛びかかれ。５．４．３．２．１』

『Ｇｏ!!!』

物間は【柔化】で壁をすり抜け【トカゲの尻尾切り】で体をバラバラにしてパンドラ（ホークス）に飛びかかる。確かにパンドラ（ホークス）はこちらの方に顔を向け、取陰も予想外の動きをされたような顔になった。作戦通り２人はこちらに気を取られている。しかし

「取蔭さんっ！　真上です！」

「りょーかいっ！」

上から飛び出した骨抜が、部屋中に待機していたバラバラの取蔭に捕まる。

ガシッッッ

「ナアッ!?」

「建物から離しちゃえば【柔化】できる物はないよね？」

骨抜にすぐさま捕獲用テープを巻き付けられた。

（骨抜っっ！　僕に気を取られていたはず！なんで骨抜が出てくる場所がそんなすぐ分かる!?くそっだけど僕がまだいる！）

こちらの勝利条件は核をタッチさえすればいいのだ。この物間のバラバラの体がどこかが当たれば

ドドドドドッ！

部屋を覆い尽くす量の赤い羽が邪魔する。

（――ッ!?　ホークスの個性かっ！　そういえば骨抜が言ってたやつ！）

さらに追い討ちとばかりにバラバラの取蔭まで襲ってくる。

「この場合って巻き付けるのってどこでもいいの？」

「わかんないですねっ！　じゃあちょっと私の後ろに移動してください！」
そんな会話が聞こえた途端、暴れていた羽根がくたりと落ちる。そして

物間のバラバラだった体が元通りになる。
「ハァッ!?」
視線をパンドラに向けるとホークスの姿は無く、代わりにどこかで見た小汚い男がいた。
「ハイ捕獲〜！」

物間が個性を使えなくなったことに呆然としているといつの間にか取蔭にテープを巻かれていた。つまり

『勝負あり！　ヒーローチーム２人が捕獲されたことにより、勝者はヴィランチーム！』
「いえーい！」
パンドラと取蔭は無邪気に飛び回り始める。非常にうるさい。
特にパンドラ、君は顔もうるさい。穴３つという子供の落書きのような顔なのになんか顔がうるさい。　なんで？

「あぁもう　参ったよ」
「カカカ」

とりあえず物間は自分達が負けたことは理解した。

化け物達と悪の支配者

「ところで君たちはなんでそんなに僕達の動きをよめたんだい？」
　オールマイト達の元へ戻る道すがら、物間はパンドラ達に尋ねた。
「あなた達はホークスの個性を詳しく説明出来ますか？」
「パンドラ。質問を質問で返すのは辞めてくれない？」
　物間ははぐらかされたのかと少しムッとした表情を浮かべる。
「まぁまぁ、そこが今回のあなた達の敗因と言っても過言ではないんですから。まず私は入学式からクラス全員の個性を調べていました」
「つまりこちらはそっちの個性の発現条件、効果、デメリット云々はわかっていたってこと。物間達だって私達の個性、コピーで調べられたでしょ？」
　取蔭が補足するように言葉を続ける。
（パンドラの個性は分からなかったんだけどね）
　今言うことでもないので物間は心の中でそっと呟く。
「戦闘力は【柔化】??2。壁の中を動ける。私達との正面戦闘は分が悪い。それらのことから最も勝てる可能性が高い方法は物間君が囮に、個性を使い慣れている骨抜君が壁の中から奇襲して核をタッチすることだと考えました」
（まあそれは皆が思いつく方法だよな）
「けどどこからどのタイミングで骨抜が来るかは分からない。そこでホークスの個性が関係してくるんだよねー」
「ねー。割と皆さん有名なヒーローでもやんわりとした個性しか知りませんよね？　よほどのヒーローオタクでもなければ。この数日間であなた達がそういうタイプではないことは分かっていました」
「そうだね。僕達はホークスの個性をよく知らなかった」
　ぶっちゃけ物間も骨抜もホークスのファンではない。個性もかろうじてテレビで聞いて知っていただけだ。
「ホークスの個性は【剛翼】飛ぶだけではなく、羽を自由に操れます。さらにあの羽は詳しく周りの状況を感じることができるんですよ」
　ここまで言われたら誰でも分かる。

「じゃあ俺が見た時、羽が散らばっていたのは」
「羽を部屋全体にばらまいて振動を確認していました。ついでに出てくる範囲を狭くするため柱もぶっ壊しました」
（羽にそんな意味があったのか。てっきり・・）
「羽散らばっていたのとか柱壊れてたの演出かと思っていた」
「ラスボスのいる部屋って大体ちょいちょい壊れていて羽舞っているし」
（パンドラのカッコつけかと・・・）
「私のことなんだと思ってるんですか!?　ちょっとこの光景魔王の最終演出っぽいな、父上似合いそーとは私も思いましたけど！　ゴホンッそして取蔭殿には」
「私は君たちの様子見係。もしかしたらタイムアップ狙えるかもというお邪魔虫係。で最後捕獲＆テープ巻く係」
「彼女のおかげで作戦の成功を確信できました。あなた達は思った通り、壁を移動できるのを確認出来ましたからね。それに私、ホークスのように細かい作業はまだ練習中ですからあの奇襲で骨抜君を確実に捕まえるには心元なかったんですよ。取陰さんが物間くんに個性コピーされていたので余計に、コピーさせないようにと散々注意したんですけどねーでも結果的に彼女が居て助かりました」
「ごめんって！あんなちょっとかすったぐらいなら大丈夫かなーと思っちゃったんだもん。でもさーパンドラ1人でも今回の訓練何とか出来ちゃったよね？　ちょっと悔しいなぁ」
　パンドラと取蔭が互いの健闘を称えてあっている中、物間と骨抜は2人に言いたいことがあった。
「ところで君達さ」
「なんですか？」「なにー？」
「テープ外してくんない!?」
　終わった後、何故か新たに上半身動かせないようにぐるぐる巻にされたのだ。今までの会話中そのまま移動させられていた。
「帰るまでが戦闘訓練っしょー」
「幼稚園で習わなかったのですか？　またあなた達が暴れ始めるかも

しれませんからね！　真のラスボスとは最後まで油断しない者を言うのですよ」
「それは遠足でしょ！　てか暴れないし！　パンドラはいつからラスボスになったのオオ!?」

「お疲れ様ー!!　講評のお時間だよ！　ところでなんで物間君と骨抜くんそんなぐるぐる巻なのかな？」
「帰るまでが遠足だからです！」
「今戦闘訓練なんだけどなぁ。外してあげてね」
　オールマイトの評価は４人とも上々だった。憧れのヒーローに直接褒めてもらい、３人はそれぞれ頬少し赤く染める。
（オールマイトより父上に褒めて貰いたいですね）
　パンドラは心の中で緑谷を敵にまわしそうなことを考えていた。

　　???
　　|
　　???

　自分の息遣いが聞こえるような静寂の間に、ＡＦＯは誰かがやってきたような気配を感じた。
「やあ久しぶりだね？　ぷにっと萌え」
ＡＦＯは誰もいないはずの空間に声をかける。
「ははっ。君も元気そうじゃないか」

その声に反応するのは、さっきまではそこにいなかったヴァイン・デスだった。
「君からしたらこの姿も元気なうちに入るのかな」
「まぁ怪我のうちに入らないかなぁ」
２人は仲が良さそうに軽口をたたきあう。
「じゃあ治してくれてもいいんじゃない？」
ＡＦＯは期待を込めた声で返事を待つ。
「それだとつまんないよ。ただでさえオールマイトも弱体化しているというのに。力が拮抗しているからこそ勝負は面白くなるんだよ」
空白がその場を支配する。口火を先に切ったのはＡＦＯだった。
「ああそういえば君たちに朗報だ。物語が進み始める」
ふっと息を吐く音がやけに響く。目の前の化け物には呼吸など必要ないのに
「あー知ってるよ。死柄木を動かすんだろ。今日はその事で話をしにきた。結論を言おうか、やめろと言ったら君は従うかい？」
ＡＦＯは首を振った。
「契約を結んだだろう。忘れたとは言わせないよ？」

――＃＃年前
しとしとしとと雨が降る。
雨が人と人の繋がりを断つ中、廃ビルの屋上に異様な光景が広がっていた。
ＡＦＯは何歩か足を後ろに動かす。後ろには錆びた柵が申し訳ない程度に設置されていた。さすがにあれに体重はかけたくない。それでも、ＡＦＯは目の前にいる存在から少しでも離れたかった。彼の

目の前には、まさに物語に出てくる

（魔王）

失礼、正確には魔王だけでは無い。
死のそばを陣取るのは白銀の鎧を着た騎士。邪悪なオーラを撒き散らす悪魔。
後ろには体格の大きい忍者と武士。ピンクと濁った２匹のスライム。
さらには醜いゴーレムと黒い鎧とバトルアックスを携えた女。
遠くからは金色の何かがこちらを見つめているのを感じる。それだけでは無く、ここでは無いどこかでもっと多くのなにかに見つめられている感覚にＡＦＯは身体をぶるっと震わせた。
「君達のような存在が、僕なんかに何のようかな」
額から雨以外の雫が流れる。
「ああ。この世界の悪の支配者とやらがどんな奴か見たかっただけだよ。確かに強いな。悪の支配者よ」
魔王の口振りには明らかに余裕を感じられる。ＡＦＯは無性に腹が立った。
「ははは、嫌味にしか聞こえないねぇ。今ここで君達と戦っても１人２人しか道連れに出来ないと言うのに」
そう、今ＡＦＯと対峙しているこの異形達は強い。周りにいたはずの側近達に、誰一人にも気付かれずに自分をここに連れてきた時点で只者ではない。
１人１人なら何とかなりそうだが、この人数ではフルボッコにされるのが落ちだろう。

「道連れか。お前は私達と敵対する気なのか？」
心無しか少し声が低い。
（冗談じゃない）
まだ自分にはやり残したことがある。しかし彼らに好き勝手介入されては、出来るものも出来る気がしない。どうすれば彼らは大人しくしてくれるだろうか？　何百年共にした優秀な頭をＡＦＯはフルに回転させ始めた。
「まさか。僕だってまだ死にたくないからね」
さて、考えろ。彼らが望むものは
「賢明な判断だな。まぁそちらが敵対心を持とうと持たまいがこちらとしてはどうでもいい。邪魔な虫は潰せばいいだけだからな？」
魔王達は人間を虫程度にしか思っていないようだ。いるならいればいいし、邪魔なら排除するだけ。傲慢な考えである。
だが、この世界で悪の支配者についたＡＦＯとしてはその気持ちは分かる気がした。
もし強さも名誉も金も欲しいものを何もかも手に入れてしまったのなら、次に何を求めるのか？
――変化だ。貪欲に変化を求め続ける。目新しい刺激を得るために。
「つかぬ事を聞くけど、君達はこの世界に何を望む？」
まさかもうこの世の中は私達のもの、とか言い出したりしないだろうか。最悪な返答に怯えながらＡＦＯは答えを待つ。
「望み。か。そうだな、イベント。そう、面白いイベントでも起きないかなと思っているよ。まだこの世界で姿は見せたくないからな。見る専でも楽しめるような。まぁこっそりこちらから仕掛けてもいいんだが」
人間でなくとも考える事は一緒だったらしい
やはり彼らが求めるのはイベント――変化。
幸いにも見る専希望。これならば
「僕が用意しようか？」
「ほう？」

赤い灯火がこちらを向いた
「『この世は舞台、人は皆役者』とシェイクスピアは言った。ならば演じようじゃないか。僕達が君達に楽しい楽しい劇(イベント)をお届けするよ。題名は・【正義ＶＳ悪】面白そうじゃないかい？　ありふれすぎて」
ブハッと後ろで吹き出す音が聞こえる。
「？いいじゃないの？　モモンガさん。ちょっと俺それ見てみたいわ？ｗ」
後ろの山羊が笑いを堪えながら魔王に話かける。どうやら興味は持って貰えたようだ。ＡＦＯはこのまま畳み掛ける
「その代わり僕達に一切手を出さないで欲しい。劇場でいきなり客が舞台に乗り込んできたら、作り上げてきた世界観が台無しになってしまうだろう？　つまり僕が君達に要求することはただ１つ、マナーを守る客に徹していて欲しい」
反応はと目線をやるが、正面の異型達はピクリとも動かない。
（何か不味いことをしてしまったのだろうか？）
そのまま数分が経ち、声をかけようか迷い始めた頃
「よかろう。その提案受けようじゃないか」
良い返事が返ってきた。ＡＦＯはほっと息をつくが本当に守る気はあるのだろうか？と新たな不安が芽生える。するとこちらの考えを読んだのか
「心配するな。アインズ・ウール・ゴウンの名に誓ってお前たちには手を出さないさ」
ダメ押しとばかりに今までの会話を録音したボイスレコーダーと記入済みの誓約書まで投げ渡された。確認したところ罠などは仕掛けられていない誠実な物だ。
「では、楽しみにしているよ」
ＡＦＯが気づいた時には側近達があたふたしている元の場所に戻されていた。
とりあえず化け物達との会談（強制）は無事に終わったらしい。
ＡＦＯはまだ雨が降り続けている空を見上げた。
早速アジトに戻ったら、駒達の格好をもう少し悪役っぽくしなけれ

ばと心のメモに書きつける。
（頑張ろうな、オールマイト。僕のために正義のやられ役になってくれ）
勝手にオールマイトを配役に入れ込んだ。けどこれは彼らの為でもあるのだ

最後に魔王はこう言った。
「お前の劇（イベント）がつまらなかったら、契約は破棄だ。その時は私達が監督を務める、面白い劇（イベント）をお見せしよう」
（そんな舞台はお断りだ）

続けたい

小ネタ
＜オールマイト＞
1年B組の授業が終わり、職員室についてやっとほっとひと息をつく。すると筋肉隆々だった体から煙が漏れ出す。そして現れたのは骸骨のような風貌の男だった。この男こそが真のオールマイトの姿である。
（性格問題無し、周りとの関係も良好・・・特に警戒するような思想を持っている訳でもない）

思い浮かべるのは1人の生徒――鈴木二重またの名をパンドラの事だった。彼の個性は一個人が持つにはいささか強力すぎる。ヒーロー側にいて貰えると非常に心強いが、これがヴィラン側だった場合を考えるとゾッとする。今回直接会ってみたところ危険人物ではないことが分かった。

分かったはずなのだが

（どうしても私の感が、彼は正義側の人間ではないと告げている）

そう、今までＮｏ．１ヒーローとして培ってきた勘が、彼は自分や緑谷少年、他のヒーローでも生徒でも多少は持っているはずの正義感が皆無だと告げているのだ。

かと言って悪かと聞かれたらそれはＮＯだ。

良く言えば正義にも悪にも平等、悪く言えばどちら側の人間にもなれるということ。

（あと確認しときたいのはワン・フォー・オールを彼は真似することが出来るかどうかだけど）

さすがに皆の前で聞くのははばかられた。けれど、もし使えたのならば今日の戦闘訓練でも使えたのではとも思う。オールマイト自身が言うのもなんだがこの力を使えば、不意打ちでも骨抜と物間を目にも止まらぬ速さで捕獲は出来た。

（彼は私の個性を真似出来ないのか？）

これればかりは本人に確認してみなければ分からない。だが1回は絶対にオールマイトの個性を真似しようとしたはずだ。その時彼は

（彼は一体何になったんだろうね）

もしかしたら彼はこのトゥルーフォームになってしまったのかもしれない。いきなりこんな骸骨になってしまったら驚くだろう。

（今度お昼ご飯にでも誘ってみて聞いてみようか）

余談だが、偶然か故意かこの日から昼になってパンドラを探してみても全くと言っていいほど会うことはなかった。

オールマイトがパンドラと話すのはだいぶ後になってからの話である。

＜ポケモンＧ？＞

皆さんは学生の頃、友達との仲を深めるために何をしただろうか？

おしゃべり？　ケンカ？　それともショッピング？　美味しいものを一緒に食べるのも良いかもしれない。

部活生の声が聞こえ始める放課後、今日の戦闘訓練で仲を深めたパンドラ、取蔭、物間、骨抜の４人は教室でだべっていた。

今日のこと、将来の夢、好きなヒーローとあっちこっちに話が飛ぶ中、スマホを片手に持っていた取蔭が話題を振ってきた。

「そういや皆ポケモ？ＧＯやってる？」

「「もちろん!!」」

「でもやっぱり時間がなぁ…俺達にはやり込むには時間が無さすぎる。でも伝説級ポケモンとか欲しいなー」

骨抜は悔しそうに声をあげる。そう、彼らはこう見えて最高峰のヒーロー科生徒である。ヒーローとしての能力の向上だけではなく、勉強もやらなければならない。時間はいくらあっても足りないのだ。

「そうなんだよねー！　あんまやり込めんから、私は強さ云々じゃなくて可愛いポケモンをできる範囲で集めて育ててるわ。ねぇねぇこのミュ？ツーとか可愛くない？」

「待って、ミュ？ツーＧＥＴしといてやり込んでないとは？」

「ねぇねぇ僕のも見て！　ホ？オウだよ！　僕にピッタリだと思わない？」

「どこが？　てか２人とも伝説級ポケモン持ってんじゃねぇーか!!

やり込みの意味調べてこい!!」

「でもレベルあんまり上げられないから～」と謎の言い訳を述べる取蔭と物間に骨抜はちょいキレつつ、いの一番にポケモンを自慢してきそうなパンドラが静かなことに気づく

「パンドラはどんな感じなんだ？　パーティーにどんなの入れてる？」

「んー私のはちょっと趣味に走りすぎたというかなんというか」
３人がパンドラのスマホを覗き込んでみるとそこには骨・骨・骨
「ちょっ？なんでガ？ガラオンリー!?」
「ガ？ガラってそんな強くないよね？」
「待って、僕はそれよりガ？ガラの名前が左から父上、パパ、ダディ、お父さん、ｖａｔｅｒ、神の方が気になるんだけど!?　あっごめんやっぱり無しで、言及したらいけない気がする！」
パンドラのパーティーにはガ？ガラしかいなかった。
「あと育てているのは　この大口ゴリラとデミウルゴスとコキュートスと　」
「１匹悪口が入ってるぞ!?」
ギャーギャー喚く声が開いたドアから廊下に響く。
こうして青春の一コマはあっという間に過ぎていく。
そしてパンドラはまたクラス内でよく分からない謎の人物と認識されていくのであった。

「父上エ！　ヤ？ップ持っていませんか？」
「えっなんでそんな強くもないポケモンを　」
「んーなんか集めないといけないと不安になるというか　はっ!!　これが底に沈む人格の狂騒「俺ポケモン集めてくるわー」ああんっ父上お待ちください！　ご一緒させて下さァい!!」

ＵＳＪ襲撃事件

ここはナザリック９階層、会議室。ナザリックのギルド武器を保管しており、４１人のギルドメンバーが座れる円卓が置いてある。現在席は全て埋まっていた。

今日は月１回の定期報告会。ギルメンは子供を各１人づつ連れてきており、計８２名が様々な話題で議論を交わしていた。

「はい！　オール・フォー・ワンの所へ交渉しに行きましたがダメでした～」

そう声を上げたのはアインズ・ウール・ゴウンが誇る軍師ぷにっと萌えだ。

「えー去年までだったらどんだけでも襲ってもよかったんですけど、今年はパンドラいるからやめて欲しいんですが」

１番ヒーローとして有名になるのに手っ取り早いのが雄英高校に入る事だった。今回の襲撃で雄英高校の価値が下がってしまえば入れた意味がなくなってしまう。息子が通っているモモンガにしてみれば是非ともやめて欲しい案件であった。

「去年じゃオールマイト居ないから襲う理由もないだろ。やっぱりあいつはトラブル呼ぶ存在だったんだよ。なーにがＮｏ．１ヒーローなんだが、大人しくヒーロー活動だけやっときゃよかったんだよあの中途半端野郎」

「オールマイトさんのことを悪くいうのは辞めてくれませんかウルベルトさん？　後継を育てるのに尽力を注ぐのはこれからの平和を考えてのことですよ。これも立派なお仕事です」

「黙っとけ正義厨」

「なんですか、大厄災さん（笑）」

「あーもう！　たっちさんもウルベルトさんも落ち着いてください！

会議が進みません」

すぐに険悪になる２人を止めるのはモモンガの役目であった。もはやこの流れは伝統芸になってしまっている。

「話戻しますけど、とりあえず今回の目的は死柄木とオールマイトを

対面させること。それさえ達成出来れば私達は横槍を入れてもいいみたいです。ただ死柄木にバレないようにと」
「何故です？」
「失敗を糧に人は成長します。私達が関わったら私達のせいにしてしまって成長の機会が失われてしまうかもしれないでしょう？」
　確かにと何人かが同意する。
「それはそうと我々アインズ・ウール・ゴウンはパンドラの為にもガッツリ横槍を入れさせて貰います。私達の力を持ってすればなんの被害も出さず死柄木を退散させることも可能。１人でも生徒に死傷者なんて出てしまったら体育祭が中止になってしまうかもしれませんからね。あくまで被害は雄英高校に侵入され襲われただけに抑えなければいけません。それぐらいの被害ならあのネズミも体育祭を開くでしょう」
　言われなくても分っているだろうがネズミ＝校長だ。
「将来的にどのようなヒーローになるか関わってくる大切な行事なので体育祭の開催は絶対。とにかく私達がしなければならない事は最低でも生徒だけには傷１つ付けないこと」
「プロヒーローは守られる者ではない」
　会話の隙間、唐突にたっち・みーは呟いた
「たっちさん？」
「あっいえ、生徒を守るのは当たり前の事ですが　プロヒーローまで守るべきなのかなぁと思いましてね。気づかれないとしても守ってやると言う行為は彼らの誇りを汚しているような気がして」
　釈然としない態度で視線を下に向ける。
「じゃあプロヒーローはほっといて生徒だけ守るって事にします？」
　モモンガはあっけらかんと提案する。
「別にいいんじゃない」「俺どっちでもいい」「意義なーし」「プロヒーローがロリっ子だったら全力で阻止する」「黙れ愚弟」
　他のギルメンのどうでも良さそうな反応にモモンガの方針は決まった。
「いいですよね？　ぷにっとさん」

「彼らも曲がりなりにもプロヒーローです。まぁオールマイトもいますし何とかするんじゃないんですか？」
　オールマイトって結構な頻度で制限使い切っているけどそこはプルスウルトラでどうにかするだろうと、そろそろ時間が迫ってきているせいかぷにっとにしては投げやりな思考で返事を返す。
「じゃあ雄英の問題だし。パンドラ頼むよー」
「えっ」
　パンドラは突然話を振られ困惑する。授業があるし、ナザリックにはもっと暇な人物がいるのにと反論しようとした瞬間
「頼めるか？　パンドラ」
「お任せ下さい!!!」
　愛する父上の頼みを断る選択肢などパンドラは最初から持っていなかった

???

「突然だが学級委員を決めてもらいたい」
「「学校ぽいの来たァァァ!!!」」
　反応は隣のクラスとほぼ同じだ。なんて言ったって彼らもヒーロー科である。リーダー力を鍛えることができる学級委員にときめいてしまうのは仕方ない。我はこそと皆手をあげる。学校内での情報収集が捗りそうなのでパンドラもちろん手をビシッとあげていた。
「ここは自由が売りの雄英高校だ。俺はうるさく口出しする気はないが。一個人としては男女1人づつ選出するのがいいと思うぞ。男には男に、女には女にしか言えないこともあるだろう」
「「はい!!!」」
　と勇ましく返事をしたのはいいものの先生が口を出さないのなら、自分たちで選出方法から話し合わなければならないということだ。

まだ出会って1ヶ月も経っていない自分達に自らを殺して相手に譲り合う信頼関係は築いていない。誰だって自分が委員長になりたいのだ。
「例年揉めに揉めるからな。最低でも今日のホームルームまでに決めろよ」
ブラドは腕を組んで傍観の構えにはいった。
「やっぱ多数決？」「誰だって自分に入れるだろ」「そこは自分以外という指定付きで」「天からの祝福という手もありますが」「それってジャンケンとか？　くじ？」「男らしく腕相撲で決めようぜ！」「おめーに有利すぎるだろ」
皆、自分勝手に意見をあげ始める。
＼パンッッ／
「とりあえずブラド先生も男女1人づつの方が良いって言ってるんだからさ！　とりあえず男女別々で別れて話し合ったらどう!?」
早速混沌としてきたクラス内で手を叩き、声を上げたのは拳藤だった
「そうだね。そっちの方が意見もまとまるって女子の方が有利じゃないか!?」
「あんまり変わらないでしょ！」
物間が講義の声をあげかけたが見事に一蹴される。
黒板側に男子が固まり、後ろに女子が固まって話し合いが再開された。
種族の性質的には男にも女にもなれるが精神構造上、自分は男だと認識しているのでパンドラは前に移動する。
「で、どうします？」
男子側の話し合いは熾烈を極めた。
まず選出方法から話が進まない。理由は徹鉄が腕相撲にこだわりすぎたからだ。そこから男らしさ＝腕相撲なのか？　という議論になり、最終的には男らしさの定義とは？　を13人全員頭を悩ませて考える羽目になった。
ブラドも話を戻そうと何回も声を掛けたが、あまり効果はない。そ

れ程まで男らしさの議論が白熱してしまったようだ。
しかしあと3分程でチャイムがなる時間になるので、生徒に元の席に座るよう指示を出す。
「女子の方はもう何となく方向性は決まったみたいだな。それに比べて男子は話が飛びすぎだ！　女子を見習え女子を！」
返す言葉がない男共は黙り込むしかない。
「学級委員だけは絶対今日中に決めてもらうからな！　出なければ強制的にクジだ」
「「「え〟　えええ」」」
そんな選ばれ方学級委員になれたとしてもモヤモヤが残るだろう。なるならやはり選ばれたいとクラスメイト全員が考えていた。
「それが嫌なら頑張って決めろ。以上。日直、号令！」

――時が過ぎて食堂にて
「どうする？　学級委員」
昼休みになり、1年B組男子は食堂にそれぞれ昼ご飯を手に持ちつつ集合していた。
「やはり自分以外の投票が1番無難だと思いますぞ。この短い付き合いだからこそ真のリーダーというものが結果として現れるかもしれません」
意見を提示したのは宍田だ。何人かは首で同意を示している。
「じゃあ選出方法は自分以外投票でいい？」
物間がもう一度確認したところ、弁当に夢中であるパンドラ以外全員首を縦に振った。中には苦虫を噛み潰したような顔もいたが、それ以外いい考えも思いつかないのだろう。
「パンドラもいいね？」
一応パンドラにも意見を聞く。

「ングッ私も別にそれで異論は――」
《ウウ――――――ー!!》
「何!? 警報!?」
《セキュリティ3が突破されました。生徒の皆さんはすみやかに屋外へ避難して下さい》
「おい! セキュリティ3ってなんだ!?」
「校舎内に誰かが侵入してきたって事ですよ。鉄哲くん。雄英パンフレットに載っていましたよ?」
「へぇ~そうなんだ~よくそんなところまで読み込んだねパンドラくん。すごいね~」
「ふふふ~それほどでも~」
「凡戸くん! パンドラくん! 和んでいる場合じゃないですぞ。私達も避難しなければ!」
「そうは言っても宍田。この状態で動いても僕達が怪我するだけだ」
物間が目を向けたのは2つある食堂の出入口の内、自分達に近い方。生徒達が外に出ようと詰めかけたせいでパニックが起こり始めている。負傷者が出るのも時間の問題のような有様だ。もう片方の出入口も似たようなものである。
「じゃあどうするんだよ!?」
鉄哲が頭を掻きむしっている間、パンドラは冷静に状況を把握していた。
(死柄木弔が学校を襲うのは今日ではない。もし予定の変更があるならば私に連絡が来るはず。我々アインズ・ウール・ゴウンの力でも把握しきれない事があった? 仮にそうだとしても学校に配置されているハンゾウがすぐさま状況を報告しに来る。ハンゾウがやられた? そんなことがあれば父上達が何かしらのアクションを起こすでしょう。ならばこれは故意に私に与えられた学びの機会? この状況でヒーローならどう動くか考えさせるために。だから私には何も情報がまわってこないし、知らされてもいない)
パンドラが出した答えは

【アインズ・ウール・ゴウン側は今日この騒ぎが起こることを知っていた。だから情報をわざと流さず、パンドラにヒーローとしてどう動けばいいのかを考えさせよう】
（突発的な試練ということですか!?　父上!!）
　そういえば今日、珍しく「頑張れよ」とわざわざ玄関まで見送りに来て応援の言葉をかけて下さった。その時は嬉しさばかりが先行して深くは考えなかったが、このことを言っていたのかもしれない。
　とにかく今自分がするべきことは、起こりかけているパニックを抑える事だ。
（今使えそうなのはこの人の個性ですね。つまらっ　興味のない授業を紛らわすためにコピーしといて良かったです）
「凡戸くんっ！　肩乗せてください！」
「??　別にいいけど　てあれ？　パンドラくん？」
　凡戸はいきなり肩を貸してくれと言われ困惑しながらパンドラの方を見た。だが、そこにはパンドラはいない。
　代わりに

「マイク先生？」
『パンドラです。肩、失礼します』
（使い方は分かるんですが　割と調整が不安定ですね）
　実はパンドラはマイクの姿になるのは初めてだった。【ヴォイス】は思っていたより繊細な個性だ。下手すればパニックを止める前に、多くの人が耳から血を吹くことになる。
（気持ち小さめに　ハイテンションを意識して）
『あーａｈーＡＨ！。Ｈｅｙ！　Ｈｅｙ！　Ｉ　ａｍ　プレゼント・マイク!!　Ａｔｔｅｎｔｉｏｎ　Ｐｌｅａｓｅ!!!』

パニクッていた生徒達がこちらに視線を寄越したのを感じた。残念ながら声が小さすぎてもう一方の出入口には聞こえてはいないようだが仕方なかった。とりあえずこちらから片付けようとパンドラは声を張り上げる。

『リスナー落ち着いて聞いてくれ！　現在各Ｈｅｒｏが対処にあたっている！　だからＮｏ　ｐｒｏｂｌｅｍ！　ｅｌｅｍｅｎｔ　ｓｃｈｏｏｌで習ったろ？　お・か・し・も！　覚えてるだろぉ!?　押さない・駆けない・喋らない！　最後に戻らない！　ＯＫ!?　とにかく落ち着いて行動するんだＺＥＥＥＥＥ!!!』

だいぶふざけた避難指示だが、ヒーローであるプレゼント・マイクが指示している姿を見て安堵の表情を浮かべる者は多かった。生徒達は次第に落ち着き避難を再開し始める。さてもう片方の出入口もと思ったが、あちらはあちらで落ち着きを取り戻していた。

（こんなもんでしょうかね…）

Ｂ組の男子達の元へと戻る。

『さて、私達もぼちぼち外へ避難しましょう！』

「はい！　マイク先生！」

『宍田くん。パンドラです』

――さらに時間が過ぎＬＨＲ

「えー昼休みの警報はマスコミが雄英バリアーをこえて侵入してきただけだ。何も心配することはない。さてそれは置いといて、学級委員決まったか？」

取陰が手をあげる。

「はい！　私達女子は拳動一佳さんが学級委員に相応しいと結論が出ました！」

「ふぇっ！　えっ！　ちょっ切奈ちゃん？」

「まぁ拳動なら安心して任せられるな。頼んでもいいか？」

「…私でいいの？」

…

拳動は不安そうな目で様子を伺うが、女子達はニコニコしながら賛同の意を示す。
「男子はどうだ？」
しばらく誰も反応を示さなかった。が、1人おずおずと手をあげた。
庄田だ。・・・
「はい。僕は・・・庄田二連撃はパンドラ君を推薦します」
教室がざわめきだす。
「僕自身も学級委員になりたい気持ちはあります。ですが、今日の昼パンドラは真っ先に場の混乱をおさめようと行動しました。そして実際に混乱をおさめきった。パンドラの行動力・判断力は多を率いるのに相応しいと思うのですが皆はどう思いますか？」
またしても無言の時間が過ぎた。だがそれも短い時間であった
「確かになぁ」「なんだかんだいってパニックおさえたしな！」
徐々に賛成の声があがってくる
最終的にはクラスの男子全員がパンドラを推薦した。
「庄田くん・・・」
「僕は僕自身がそう思ったから君を推薦しているだけだ。どうしたいのかは君が決めてくれ」
「もちろんやりたいです！　学級委員！」
断る理由などありはしない。
「よし。2人決まったな。立て続けに悪いがどちらが学級委員長か副学級委員長になるかを決めて欲しいんだが。もう多数決でいいか？」
2択しかないので異論を唱えるクラスメイトはいなかった
「じゃあ拳動が学級委員長にいいと思う人」

パンドラと黒色以外全員が手をあげた。
「差がえぐくないですか？」
思わずパンドラは前の席にいる庄田の背をつつく。
「いや、あの、学級委員長はクラスの顔だから。うん、それだと拳動さんかなぁと」
庄田は言いずらそうにしているが本音を言うとパンドラが学級委員長になった場合、奇行をおかした時Ｂ組の印象が奇人の集まりと思われかねない。推薦した時に言ったことは心の底から思ったことだが、学級委員長と言われたらやはり拳藤を選ぶ。どちらかと言うとパンドラは率いると言うよりは、周りをカバーする縁の下の力持ち的なリーダーが似合うと思う。だからこその副学級委員長だ。
黒色除くＢ組は大体同じようなことを考えていた。
「じゃあ学級委員長は拳藤、副学級委員長はパンドラで決定だな！　次は他の委員会決めていくぞ！　学級委員よろしく頼む！」
「はい！」

――数日飛び、ＵＳＪ襲撃事件当日
オールマイトや緑谷出久にとっては大変な日になるだろうが、パンドラにとってはほぼほぼいつも通りの一日だった
死柄木達が攻めてくるのは午後の授業。こちらも日本史の授業があるが、内容は全て頭に入っているのに加え織田信長に微塵も興味はないので問題は無い。今回の任務でパンドラは素手戦闘や特殊技術が得意なフウマ達を１０体借りた。個人でアイテム等使っても良かったが、今回は専門職に任せようと判断した。（ハンゾウの活躍をフウマ達は羨ましがっていた事だし丁度いい）パンドラの役目はせいぜい遠隔視（リモート・ビューイング）で動向を観察して、何かあったら指示を与えるだけ。

（失礼します。パンドラ様）
　その何かが起こったらしい。
（肝心のオールマイトが制限ギリギリまで使ってしまったせいで参加出来なくなったみたいです）
（それを見越して至高の御方達からあなた達を１０体も借りたのですよ？　何も問題はありません。誰にも気付かれずに生徒を守るという任務に集中してください）
（御意）
　案の定オールマイトは制限ギリギリまで使ってしまったようだ。ヒーローとしては間違ってはいないのだが、それは教師としてはどうなのだろうか？　各自が自分の役目を全うすることで社会はまわっている。アインズ・ウール・ゴウンという組織の中で生きてきたパンドラにとって役目を放棄することはとても考えられない事だった。
　そろそろ昼休みが終わる。簡単な仕事ではあるがパンドラは気合いを入れ直す。そもそもこの仕事の目的はパンドラのためである。手を抜く訳にはいかなかった。
（さて、始めましょうか）
＜遠隔視（リモート・ビューイング）＞

???
　我の名はフウマ１号
　今回の任務の為に結成された通称【すねこすり】のリーダーを務めている。
　我々がやるべき事はただ１つ、雄英高校１年Ａ組の生徒達をヴィラン連合とかいうチンピラ共からこっそりと守ることだ。そしてアインズ・ウール・ゴウンのお役にたつことが我々の生きる意味である。
　現在我はフウマ２号とセントラルゾーンを警戒中である。相澤消太が戦闘中だが、守護対象ではないので助ける義理はない。

・なぜ2体で行動しているかというとヴィランの1人、脳無を我1人で止めきれない可能性があるからだ。スピードはこちらが断然格上・・忌々しいことに奴はパワーと体力が桁違いに強い。とは言っても至高の御方達や階層守護者様達又、今回の任務の責任者パンドラ様には取るに足らないゴミのようなものなのだが。

（こちら水難ゾーン。敵一体撃破。生徒達は敵を拘束。セントラルゾーンに移動中。追跡します）

（こちら暴風・大雨ゾーン。こちらはほぼ出番なし。常闇が強い）

（こちら土砂ゾーン。なにかする前に轟が敵を凍らせてしまった。葉隠が凍らされそうだったので氷を砕いてやった。以上。ん？　轟が移動し始めたぞ）

（こちらは火災ゾーンよ。尾白きゅんが1人で頑張っていた。所々で後ろから攻撃されかけていたけど、あたしが全部やっつけてあげたわ）

（火炎ゾーンちゃんとやれ。こちら倒壊ゾーン。爆豪と切島が完勝していた。1人触れた相手の意識を奪うという強個性を持っているやつがいたが、早々に始末した。何もしなくてもぶっ飛ばされていただろうがな。あっセントラルゾーンに向かい始めた）

（あーこちら遊撃。青山が1人で隠れている。数人のチンピラに見つかってしまった。応戦するも1人ビームを跳ね返すという相性が悪すぎる相手が存在。青山がビームを打つ瞬間我が片付けといた。自分が倒せたと無事勘違いしたから問題ナシ。「僕のキラメキにかなうものはないのさ！」と言っているのがイラッとした）

（こちら山岳ゾーン！　八百万が絶縁体シートを創造している間、い

くらか危ない場面があった。後の2人は大丈夫そうだったので八百万に付きっきりだったが、おかげで間近でオッパ■■いいものを見せて貰ったので隠れていた通信妨害の敵を始末しといた■■）

（えーこちら入口近く。13号がやられてしまったが保護対象ではないので無視。現在黒霧の動きに警戒中）

次々とメンバーから報告があがる。今のところ大きな問題は起こっていないようだ。

何故生徒達計5名は逃げればいいものをわざわざ危険な所へやってくるのだろうか？　大人しく守られていて欲しい

少し愚痴ってしまった所に水難ゾーンからフウマ4号がやって来た。

「そろそろ相澤が不利になってきているな」

4号の視線はヴィランを投げ飛ばしている相澤に向いている。

「まぁ生身の人間にしてはよく頑張ったほうだろ」

戦闘技術もだが個人的には捕縛布？　という武器をどう動かしているかが気になる。

「あっ、やられた」

ヴィラン連合のボスに肘を崩された挙句、動き出した脳無にあっさり捕まってしまった。

（入口近くから報告。飯田が外へ助けを呼びにいった。黒霧がそちらに■■向かったと思うんだが）

（■■あぁ来たぞ。ん？　もう帰るのか）

■■ゲームオーバーとか呟いているが、まだ油断は出来ない。今回あいつ■■らの目的はオールマイトの抹殺。■■何もしないで帰ることなどあるのだろうか？

「平和の象徴としての矜持を少しでも■■■■■■へし折っブハァ」

いや、ない

やはり矛先は水辺にいる生徒に向かっ■■ていた。

生徒に手を出すならこちらは黙っている訳にはいかない。

ヒョロガリに見える身体にしては素早いが、スピードで我々に勝と

うなど100年早い。死柄木の足に軽く蹴りを入れる。

ズザァァ

――転んだ

姿を見せずに行動しているので傍目には自爆したようにしか見えない。贔屓目に見てもとてもダサい。本人も羞恥を覚えているのか中々顔を上げないがまぁ生徒襲った自業自得だということで納得してくれ。

死柄木が転んだのをチャンスとみた緑谷がスマッシュを打つ。やめてくれ。ほらもう脳無が来てしまったではないか。こやつを転ばすにはだいぶ体力を使うんだぞ

バァン！

「私がきた!!」

生徒の行動に辟易としていた所、オールマイトがやって来た。

グッドタイミングだ

鮮やかに敵を打ち倒し、生徒達と相澤を回収していってくれる。

「オールマイト」

念入りな床ドンを喰らっていない相澤はフラフラだが意識はあった。

「相澤くん、皆を入口へ頼んでもいいかい？」

相澤は軽く頷く。ナイス判断だ。見直したよオールマイト！　さすが至高の御方達がお認めになる方だ

程なくしてオールマイトと脳無の戦いが始まった。

あまり長い時間戦えないオールマイトは早めに決着をつけたいのだろう。相手はショック吸収の個性持ち、そうなると殴り倒すよりコンクリにつき立て動きを封じた方が早い。早速バックドロップの体勢に入った。

黒霧がゆらりと動く。それを確認したのは我々　ともう1人気づ

いたみたいだな
ズド
人が出したと思えないような音をだして塵が舞う。その後見えた光景は

床に垂直に突き刺さった脳無だった。
「おい黒霧、いいチャンスのはずだったんだが？」
「すみません、死柄木。個性を抹消されたようです」
そう離れていない場所で目を赤く光らせ、こちらを睨みつけている血だらけの相澤がいた。いいぞいいぞやったれ相澤消太
「ちっ、かっこいいなぁイレイザーヘッド」
おいおい敵を褒めていいのか？　皮肉だろうけど
ＢＯＯＯＯＮ
爆破の音が響き渡り、黒霧の身体が吹っ飛ばされ押さえつけられる。
「オメェ全身モヤじゃねぇんだろ？　怪しい動きをしたら爆破するからなぁ!?」
おお！　あんだけの情報だけでそこまで分かったか！　凄いぞ！
では無い。お願いだから引っ込んでいてくれ
パキパキパキィ
脳無の身体が氷で覆われていく。
「平和の象徴はてめぇら如きに殺れねぇよ」
そうだな。多分これオールマイト勝つぞ。だからさっさと避難してくれ
爆豪、切島、轟が合流する。なんでだ？
ついでにフウマも2体合流した。計5体セントラルコーナーに集合。過剰戦力である。
「出入口を抑えられた。ピンチだなぁ。まぁいい脳無、とりあえず爆破小僧をやっつけろ」

うんうんピンチだなぁ。追い詰められたはずなのに敵は余裕の態度を崩さない
コンクリートに突き立てられ氷漬けにされたはずの脳無が動き出す。凍らされた足が崩れ落ちるが【超再生】で復活し、凄まじい速さで爆豪の元へ殴りかかる。だから生徒に手を出すんじゃない。
さすがオールマイト用のサンドバッグ人間、我だけでは無理だったので3体が力を合わせ

ドゴッッッッ

――全力で転ばせた

微妙な空気が流れる。見せ場を奪ってしまった気もするが我は悪くない。
「俺はなオールマイト！　怒っているんだ！」
空気に耐えきれなかったのか、死柄木がオールマイトに思想を語り始める。
「自分が楽しみたいだけだろ嘘吐きめ」
オールマイトも空気を読み、返事を返す。
「逃げるぞお前ら。ここにいても邪魔になるだけだ」
今にも飛びかかりそうな子供たちを制して相澤が撤退を再開した。ナイス！
オールマイトは平和の象徴としての気迫をまといながら、脳無に殴りかかる。ショック吸収するなら吸収出来ないまで殴ればいいと云う究極の脳筋戦法で勝負をつけようとしているらしい。
戦いの風圧で敵は1歩も動けない。少し離れた場所まで撤退していた緑谷達でさえも少しづつしか動けない。
我々も思うように動けない。凄まじいなオールマイトよ

……

永遠にも思う時間殴りあっただろうか？　ついに決着がつく

「Ｐｌｕｓ　Ｕｌｔｒａ!!」

脳無は空高く飛んでいった。がオールマイトも制限時間がギリギリのようで蒸気が身体から発生している。

「やるっきゃないぜ……目の前にラスボスがいるんだもの……」

なのに敵は戦うことを選んでしまった。

「オールマイト!!!!」

「おいっ緑谷！」

緑谷が個性を使い超スピードでオールマイトの方へ駆けつけようとする。今止めると余計に怪我しそうだと判断した相澤が緑谷の方を消すのを諦め、敵の方を見る。これで緑谷が敵によって負傷する可能性はほぼ無くなった。だが念には念を、我々もまた任務を遂行する為超スピードと負けじと劣らずの速さで死柄木を転ばした。

そうして出来た構図は

……何もない所で躓くドジっ子死柄木だ

「……」

……しかもいつの間にか助けに来た教師陣にはじめから終わりまでバッチリ見られている。

教師達が来た所で気を失ってしまった相澤により抹消が解けたようで

「ゲームオーバーだ。帰るぞ黒霧」

死柄木は何事も無かったように立ち上がり明らかな早口で帰ろうとしていた。この後１３号が頑張ったけど逃げられたり、マイクが雑魚を倒したり、セメントスがオールマイトを隠したりと色々あるが、パンドラ様が遠隔視（リモート・ビューイング）を切ってしまったのを確認したので我々の任務はこれで終わりらしい。

無事ミッションコンプリート！

(▪▪)???

▪▪パンドラは茶番を見たような気分となった。▪

続いて欲しい

宣戦布告

「あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟お〟のれＡ組、Ａ組おのれぇぇぇ!!!」
「物間が発狂した！　学級委員んんん!!!」
　ＵＳＪ襲撃によって臨時休校になり、１日明けの清々しい朝の教室に似つかわしくない恨みがましい声が響き渡っていた。
「どうしたんですか」
「パンドラ！　丁度良かった。物間の怒りを鎮めてくれ！」
　パンドラは持っていたバックを上へ放り投げ
「吹き荒れろ！　エタナールブリザード!!」
　思いっきり物間に向かって蹴りつける
「ブエバッッッ」
　今バックが凍っていたように見えた？　気のせいだろう。とりあえず一時的だが物間を黙らすことができた。
「一体何をそんなに荒ぶっているのですか？」
「パンドラも受けなかったのか!?　あのマスコミの屈辱を！」
　鼻息荒い物間から話をまとめると
　先日あったＵＳＪ襲撃事件の為取材に来たマスコミに１年Ａ組に間違えられ取り囲まれた挙句、違うと分かった瞬間悪態をつかれながらほっぽり出されたらしい。
「あー俺も囲まれたわ」「私もー」「ん」
「あっそういえば私も囲まれましたね」
　至極どうでもいい事だったのでパンドラの記憶に残っていなかった。
「僕だけがｄｉｓられるならまだいいよ!?　けどあいつらなんて言ったと思う？『１年Ｂ組とかどうでもいいんだよ』はぁ!?　僕らだって雄英高校ヒーロー科だっ！　なんで襲撃にあったＡ組だけチヤホヤされてＢ組が虚ろにされなきゃいけないんだ!!」
　話がみえてきた。物間が怒っているのはＢ組が下に見られた事。普通そこはマスコミに怒りが全集中するところだが、怒りですっとばしてＡ組の方に恨み辛みがいってしまったようだ。

話している間も物間は怒りで今にもまた暴れだしそうである。
＼ピコン／
「ん？」
ポケットからスマホを出し確認してみると
（心操くん？）
心操　：　昼休み一緒に食べないか？
（珍しいですね）
普段は２人とも同じクラス同士でご飯を食べている。心操とはスマホでは毎日一言二言は言葉を交わしているが、面と向かって喋る機会最近あまりなかった。
「ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛憎い憎い憎い!!!　Ａ組いいいいい!!!」
再び物間が発狂してきたがもう少しで先生が来るので放置する。
それよりもパンドラは心操の事が気になっていた
（何かあったのでしょうか？）
???
昼休み
（さてパンドラは来るかな）
朝連絡はした。返事も来たし意味もなく約束を破るような奴では無いことを心操は十分承知している
「心操一緒に飯食おうよー」
「あっごめん今日他のクラスの友達が来るんだけど」
「おっ他クラスに友達いるのか!?」
この２人はいつも自分なんかをご飯に誘ってくれる。更に心操のヒーロー科に入りたいという夢も笑わずに聞いてくれたとても良い友達だ。今回パンドラをＣ組に呼んだのも彼らを紹介したい気持ちもちょびっとだけあった。
「うん１年Ｂく「Ｇｕｔｅｎ　ｔａｇ!!」みの」
「あー!!　誘拐犯！」
「そこのお嬢さん！　だぁれが誘拐犯ですって!?」

「お前えええ！　心操は渡さねーぞごらぁ！」
２人は心操がジャスティスに会った日のことを忘れていなかったようだ。
「待って、今日は俺が呼んだんだ」
心操は一発触発になる前に慌てて止め、席に座るよう勧める。
「自己紹介しといた方がいいですかね。私のな「鈴木二重、あだ名はパンドラだろ」おやまぁ」
「すまん、勝手にこいつらに教えといた」
心操はプライバシーの侵害かと手を合わせて謝るが、紹介する手間が省けましたとパンドラに顔をあげるよう促される。
「それでは早速私とお友達に！」
２人はじっとパンドラを何秒間か見つめた後「マジで心操が言ったまんまだな」と息を吐いた。
「よろしくね／な。パンドラ」
険悪な雰囲気だった気がするが解消されたようだ。
「はい！　よろしくお願いします。　ところで心操くん、何か私に相談したいことでもあるんですか？」
「ああ。相談というか俺の中では確定しているんだが一応聞いて欲しいなと思ってな。俺、１年Ａ組に宣戦布告しようと考えている」
パンドラの様子を伺うがまだアクションはない。心操は続けろという意味だと解釈したので話し続ける。
「この行為は俺の覚悟を示すものだ。それとチヤホヤされて調子のってるＡ組にさ。俺みたいな奴がいるってことを知っていて欲しい」
一瞬間が空いた――次の瞬間
「素晴らしい！　素晴らしいですよ！　心操くん！　自らを追い込むその心意気！　アッパレです！　宣戦布告！　まさに王道主人公じゃないですか!?」
答えは心操の予想していた３倍の勢いで返ってきた。
「で」
と思えばパンドラはずいっと心操に顔を近づけてくる。
「私には宣戦布告してくれないのですか？」

とんちんかんな言動で皆忘れかけているが、彼もあのヒーロー科の人間である。ならば心操がするべきことはただ1つ。
「俺はお前に勝ちを譲る気はない」
パンドラならこの布告を大袈裟に受け取って無駄な語彙力で返事してくるだろうと心操は思った が
「 私だって譲って貰う気はないですよ?」
その声色は深かった
ゾクッとした感覚が心操の体を這いずり回る。
「私が行うのは」
やけにパンドラ言葉はゆっくりだ
数秒前まではいつも通りの日常だったはずだ。
動かないと思い込んでいた彼の空っぽの目が形を変えていく。
「一方的な蹂躙ですよ?」
パンドラが笑った。なのにどうしてか心操はまるで得体の知れない何か恐ろしいものを目の前にしている気分になった
そしてこの感覚は前に彼は似た感覚をどこかで
「そう、体育祭。血気溢れる少年少女達が己の全てをぶつけ合う舞台。それはまさに古代のコロッセオを彷彿とさせるじゃあありませんか! あるものは力であるものは知略でまたあるものは技術・経験・運あらゆるものを駆使して掴むのは栄光の証! なんてドキドキする催しなのでしょう! 何よりも父上に私の! 私の勇姿を思う存分ご覧いただける絶好の機会! ああ今この時から胸から溢れるだしそうになるこのワクワク感! たまりません!」
心操はズッコケそうになった。体をくねらせるパンドラの姿にホッとするような複雑な気持ちになるやら
(気のせいだったのだろうか?)
「そういえばいつ宣戦布告をするのですか? 今日ですか? 放課後ですか? なんなら私がカッコイイ宣言の仕方を「お断りします」何故ですかァァァ!?」
机に頭をガンガンと打ちつけて不満を表現してきた。教えて貰えばいいのにーと外野がワイワイと騒いでいるが、今までの言動から碌

でもないセリフになりそうだと心操は確信していた。
「実行は今日の放課後」
「じゃあ私もA組に宣戦布告したいです」
「えっ」
何がじゃあなのだろうか
???
「うおおお・・何ごとだァ!!!?」
緑谷出久は困惑していた。授業も終わったので帰ろうとしたら教室が生徒に囲まれている。これでは家に帰れないどころか教室からも出られない。
どうしようかと迷っているうちに幼なじみである爆豪勝己が口を開いた。
「意味ねぇからどけ　モブ共」
(アワワかっちゃん今ので結構な人数を敵に回したんじゃ・・)
この人だかりは襲撃を耐えた1年A組がどんな奴らなのかを偵察しに来たらしい。確かにもし自分がA組ではない他のクラスの生徒であったなら興味津々で出待ちしていただろう。
(かっちゃんは大胆すぎるんだよ。もっとマイルドな表現に出来ないかなぁ。それはもうかっちゃんと呼べるかどうか分からないけどさ。でもその言い方だと反論してくる人が1人か2人絶対)
「ヒーロー科に在籍する奴は皆こんななのかい?」
「ああ〟!?」
(出てきちゃったあああ)
緑谷の予想通りくまを目の下で飼っている紫髪の男の子が挑発的な言葉を口にしながら前に出てきた。
「こういうの見ちゃうとちょっと幻滅するなぁ」
ズモモモモ
「普通科とか他の科ってヒーロー科落ちたから入ったって奴、けっこ

ういるんだ知ってた？」
ピシャーっン!!!
「体育祭のリザルトによっちゃヒーロー科編入も検討してくれるんだって」
パァァァァ!!!
「その逆もまた然りらしいよ……」
ズンッッッ
「敵情視察？　少なくとも普通科は」
　シーン
「調子のってっと足元ゴッソリ掬っちゃうぞっっ――宣戦布告しに来たつもり」
ドバァァァァン!!!
（（この人も大胆不敵だな!!　……　けどそれよりも））
　緑谷・麗日・飯田の気持ちが1つになる。
　視線は宣戦布告してきた人ではなく
　宣戦布告してきた人も困った顔をして後ろを向いた。
「なぁパンドラ……」
「？　なんですか」
「「「何してんのパンドラ／パンドラくん？」」」
　4人の言葉が重なった。そしてこの疑問はここにいる全員が持っていたものであった。
　心操が宣戦布告をしている間、ずっとパンドラは後ろで壁紙とサンプラーを持ってスタンバイしていた。そしてさっきからセリフの場面ごとに雰囲気にあった背景を設置し、効果音を垂れ流していたのだ。
「私なりのエールです。こっちの方がカッコイイでしょう？」
「確実にエールの仕方間違ってるよ……」
「いい宣戦布告でしたよ心操くん」……
「話を聞こうかパンドラ」
　（この人パンドラくんとのお友達なのかな……）
「心操くんに乗っかる形になりますが……はじめまして私は1年B組、

鈴木二重と申します。パンドラと呼んで貰えると幸いです」
心操より前に出て、パンドラは大袈裟に腰を曲げる
「まず最初に……襲撃を無事耐え抜いたこと。誠に感服いたしました！」
「テメェは何が言いたいんだよ。簡潔に話せ」
やたらキザったらしいセリフが爆豪の琴線に触れたらしい。目に見えてイライラしている。
「言葉にちゃちゃを入れるのはあまりよろしくないですねぇ？　心操くんのような普通科だけではなく私達B組もあなた達を叩き潰そうと牙を研いでいることを……くれぐれもお忘れのないように」
「……」
「とわざわざ忠告しにきてあげたんですよ。ねえ？　入試首席合格の爆豪くん？」
パンドラは小首を傾げた。
爆豪はおもむろに手を挙げ
「去れ、カス!!」
中指を立てた。
「喧嘩売られてしやいましたね心操くん」
「首洗って待っとけとでも言っとくか」
「だそうですよ！　首どころか全身洗って待っときなさいですって！」
「毎日全身洗っとるわクソが!!」
宣戦布告をした2人組は踵を返して野次馬の中に消えていった。
「な……なんだったんだ？　今の？」
「緑谷達あのパンドラだっけ？　あいつのことなんか知ってんのか!?」
「あっうん、入試の時ちょっとね」
緑谷はパンドラのことについて話そうとして気づく
自分はパンドラについて多くのことを知らないと
個性すら知らないということを
「けどよー紫髪にしろパンドラって奴にしろ、今回の事でおめーのせ

いでヘイト集まりまくっちまってるんだけど!!」
「関係ねぇよ…」
「はぁ――ー!?」
「上に上がりゃ関係ねぇ」
その言葉にハッとする
（バカか…僕は…）
自分は最高のヒーローになる為にここにいるんだと

???

――次の日
「ハハハハハァ聞いたよパンドラァァァ!? あの1年A組に宣戦布告したんだってぇ!? 君なら何かやってくれると思ってたよ!!!」
パンドラは朝っぱらからテンションが壊れている物間に絡まれてしまった。視界の端ではこちらに向かって手を合わせ頭を下げている鉄哲がいる。昨日あの野次馬の中に鉄哲が居たのは分かっていた。多分その時の様子を事細やかに話してしまったのだろう。
だからといって話を聞いただけで物間がこの状態異常になるのだろうか
数日前までは少し頭がまわる策略冷静キャラだったはずだ。なのに今となってはただのA組アンチモンスター。大半のクラスメイトがヤバい奴リストに物間を追加している。
（もうこれは呪いか精神汚染なのでは？）
そんなことを考えている自分もとっくの昔にヤバい奴リストに乗っていることをパンドラは知らない。
「さあさあさあ一緒にあの憎きA組にギャフンと言わせてあげようじゃないか！ 楽しみだなぁァァァ」
体育祭は団体戦ではなく個人戦なのだが、物間はそこら辺を分かっているのか心配である。
まぁ楽しみなのはパンドラとて同じ気持ちだ
「ええそうですね、楽しみですね！」

――体育祭当日

「何故この世に体育祭などあるのだろうかと私は考える。女子高生に囲まれて暮らしたい」
「何があったパンドラ!?」
「女子高生なら囲まれてるだろ。週６日で」

＜需要＞
「死柄木という名前：触れたものを粉々にする個性：２０～３０代の個性登録を洗ってみましたが該当なしです」
　そう報告するのはオールマイトとの古くからの友人である塚内だ。
　いわゆる裏の人間。こちらは敵について何も分からない。ただ今回の襲撃でみえてきた死柄木の人物像は
「幼児的万能感の抜け切らない〝子ども大人〟だ」

力を持ってしまった子ども。そしてその子ども大人に従う裏の人間達

「抑圧されてきた悪意たちはそういう無邪気な邪悪に惹かれてるのかもしれないね」

「・・」

「肝心なところで転んでしまうようなドジっ子属性に保護欲でも湧いたのかな」

「・・ｗ」

・・死柄木のドジっ子属性に需要はあるのだろうか

「ないよ!?」

「Ｎｏ!!!」

「無いな！」

「ないわ！」

「ナイ」

「ないだろ」

「ＨＡＨＡＨＡ！」

体育祭
ゲイン効果

「ＮＯＯＯＯＯ!?」
爽やかな風、程よい雲、万物を照らす堂々とした太陽。体育祭にはこれ以上ないおあえつら向けな天気の中をパンドラの悲鳴が切り裂いた。
「しょうがないだろ。俺これでもギルドマスターなんだよ」
パンドラにお弁当を作り、カメラの準備まで終えたところで緊急の＜伝言（メッセージ）＞が入った。内容はナザリックに不備が発生したという割と重要な知らせである。それに伴ってギルマスであるモモンガはナザリックに帰宅しなければならなかった。理由はギルマスの許可が必要な場所であったり、ギルマス本人しか開けられない場所まで一旦全て点検しなければならないからだ。
「全体を調べないといけないからなぁ。俺はギルマスとして最後まで付き添わないといけない」
だから体育祭はもしかしたら見に行けないかもしれない
パンドラはこの世に絶望した。
「大丈夫だパンドラ！カメラは特別招待されているタブラさん達に託すし、雄英体育祭ＤＶＤも3枚予約済みだ！それに既にプロカメラマン並の腕を持つハンゾウ達も待機してある。お前の活躍はちゃんと確認させてもらうよ。それにほら！今日の弁当タコさんウィンナー上手く出来たと思わないか？」
よくパンドラのファザコンっぷりが目立つが文句を言いつつモモンガもモモンガで十分親バカである。
パンドラはそんなモモンガの愛をひしひしと感じながらそれでも、それでも自分の活躍を熱心に見る父上の視線、麗しい声援、圧倒的なオーラを直接生身で感じたかった。
応援席とコーナーは離れている？自分の愛にとってはその距離は問題ではない。

「父上ぇ……グス」

という訳で今のテンションは５０％程である。いつもは１５０％のテンションで生きているパンドラからしたらありえないぐらい低いテンションだ。１度でも彼と関わった者なら一目で異常事態だと分かる。

だが時は待ってくれない。プレゼント・マイクが高らかに入場の合図を告げる。

『どうせテメーらアレだろこいつらだろ!!?敵の襲撃を受けたにも拘わらず鋼の精神で乗り越えた奇跡の新星!!!ヒーロー科１年!!!Ａ組だろぉぉ!!?Ｂ組に続いて普通科Ｃ・Ｄ・Ｅ組……』

「なんか今サラッと流されたんだけどぉ!?贔屓だ！差別だ！僕達は引き立て役ですかァ？そうなんですかァ!?」

「物間シャラップ」

物間は拳動に引きずられながらの入場となった。

「選手宣誓!!」

今年の１年主審はミッドナイト、ザワつく生徒を黙らし生徒代表爆豪勝己を壇上に呼び出す。

「せんせー俺が１位になる」

「絶対やると思った!!」

／ＢＯＯＯＯ／

「どんだけ自身過剰だよ!!この俺が潰したるわ!!」

なあ物間と鉄哲が振り向くと怒りで白目を向いている物間と未だ姿勢を曲げたままオブジェ化しているパンドラを見てしまった。スっと前を向き何も見なかったフリをする。

「さーて第１種目！いわゆる予選よ！毎年ここで多くの者が涙を飲むわ!!今年の運命の第１種目は……障害物競走!!!」

総計１１クラスでの総当りレース。……コースはスタジオの外周４キロ。

コース……さえ守れば何をしたって構わない

「なあ皆……ちょっと僕から提案があるんだけど」

近頃ず……っと情緒不安定であった物間に理性の欠片が戻ったような

発言を聞いてクラスメイトは思わず目を向ける。
「この種目あえて下位に甘んじないか？」
「ハァ？」
「何位まで次に進めるのかわかんないんだぞ!?」
まだ情緒が安定していないらしいと何人かは可哀想な目で物間を見つめる。
「別に全員に賛成してもらおうとは思っていない。いち意見として耳を傾けて欲しい。僕達が目指すのは真の頂点だろ？」
「父上エ」
「そのためにさ第１種目はＡ組の様子を見ないか」
「グス」
「考えてみてよ？予選である第１種目からそんなに数を減らすと思うかい？」
「はぁ」
「多分おおよそ４０名は通過できると思うんだ。だから予選ではライバルの個性や性格をさ！観察させて貰おうよ」
「エグッ」
「ねぇ、その場限りの優位に執着しても仕方ないと思わないか？」
「うわあああぁん」
「パンドラちょおっと黙っとこうか？ゴホンッつまり予選を捨てての長期スパンを組まないかって話しさ！それにＡ組が食っていた空気を後半で覆すことでより強い印象も与えられるし」
物間の頭はちゃんと機能していた。
パンドラは情緒が安定していなかった。
「さあ！早く位置につきまくりなさい」
ミッドナイトが生徒達にスタート地点につくようせかす。
「まっどうするかは自分次第さ」
物間の提案を聞いて迷う者は多かった。
結果数名はズンズンと前のスタート地点を目指し、残りは真ん中辺りで止まった。パンドラは後者だ。
当初の予定では全てにおいて完璧な勝利をもぎ取るつもりであっ

たが、1番活躍を見て欲しいモモンガが来ていないのならばそこまで完璧な勝利を求める必要はない。
パンドラがこの体育祭で求めているのは1位では無い。
今この場にいるヒーローに自分をどれだけ深く印象づけられるか、将来の選択肢を拓けるかだ。
ゲイン効果を知っているだろうか？同じ能力を持っていたとしても元から優秀な人と特に何も思われていない人ならば後者の方がすごいと感じてしまう。簡単に言うとギャップ。
最初は真の実力を隠し、最も注目されるであろう後から全力を出す。ギャップですごいと強く思わせてからの自己アピールゴリ押し祭りでヒーロー達の心に自分の有能さをインプットしてもらう。
そのために物間の作戦にのった。
（しかぁし！私に観察は不必要！）
パンドラとてこの数週間ただ遊んでいたわけではない。
この＜ドッペルゲンガー＞で1年生徒全ての個性を調べ終えていた。やり方は簡単だ。見て、変化すればどんな個性なのか、性能なのか把握することが出来る。
縛りプレイのせいで14個ずつしか調べることが出来なかったので思ったより時間がかかってしまったが
周りの緊張が高まっていく、もう少しで始まるのだろう。
さあ位置について
「スターーーーーート!!」
そして初っ端からのふるい落とし
（私には効きませんけどね!!）
ジャンプして迫り来る氷を避ける。
ちなみにパンドラの身体能力は抑えられているとはいえ生身勝負なら学年トップレベルだ。避けるついでに人様の頭を踏みつけしれっと前の方へ移動する。
「ハッハーー!!」
後ろの方でハニワァァァと負け犬の遠吠えが聞こえるがここは勝負の世界。弱い者は奪われるだけなのだ。

「おっとあれは……」

走っていると目の前に現れたのは入試試験にいたおじゃま虫。パンドラがウルベルトの核爆弾（ニュークリアブラスト）で木っ端微塵にした相手だ。

先頭を走っている轟がさっさと凍らし先に進んで行くがあんな体制で凍らしてしまえば……

ＣＲＡＳＳＳＨ!!!

崩れてしまうだろう。

鉄哲が潰されているのがパンドラの目に映りこんだがきっと彼なら大丈夫と信じ進み続ける。

（ぶっちゃけただのでかい鉄の塊ですからね。それ以外も今の私にとっても雑魚です。相手するだけ無駄無駄）

パンドラは追跡して襲ってくるロボはカメラ部分を壊し、おじゃま虫は愚鈍すぎるのをいいことにヌルヌルっと避けていく。

「殺？んせー？」

パンドラの方を見た飯田が呟いたが共通点は全体的に黄色な所だけだ。

（そういうあなたは生徒会かなんかに入っていませんでしたが？生徒会長が理事長と対決しているような……まあそんなのどうでもいい）

くだらないことを考えているうちに次の関門に辿り着く。

「綱渡りですか……」

ホークスやミルコの個性を使えば一気に飛び越えることが可能だろう。だが披露するにはまだ早すぎる。

「まぁこのぐらい私なら……いけますね☆」

パンドラはロープの長さが比較的短いルートを割り出し、そこに向かって勢いをつけ跳び

「よいっしょ」

ロープの真ん中辺りに着地し反動さえも利用して進んで行く。ボディコントロールは全盛期そのままのクオリティであるからこそ出来る芸当だ。ロープの反動のせいで何人かを地の底に叩き落としてしまったが弱い者は（略）

なお縄の上を走っていけば犠牲は無かった

パンドラ自身は無事渡りきり次の関門に急ぐ。順番は２５位前後だ

距離的にも最後であろう関門は

「これはこれは」

一面の地雷ゾーンであった。

（前の人の様子から踏みつけたらドガン、威力は体が少し跳んでしまうだけですが体勢を崩してしまうけれどこんな地雷イッパイ再現可能）

パンドラは昔たっち・みーから借りたＤＶＤをモモンガと一緒に見た。そこで１番興味を持ったシーンが

（いやいやしかし今は目立つ時ではありません。今は）

不意に地面を掘る音が後ろから聞こえる。緑谷がドロップした素材で地雷を掘り起こしているようだ。

（まさか緑谷くんあなた）

パンドラの優秀な頭脳は瞬時にやろうとしている事が分かってしまった。ほぼ賭けのような行為だが彼にはそれしか逆転する方法がないのだろう。

（けれどこれはどさくさに紛れるチャンスなのでは？）

緑谷が思いっきり地雷の上にとびのり

ボオオオオン!!!

爆発の勢いにのって前にすっ飛んでいった。

よく聞くと爆発の音がまだ続いている。

「ハーハッハッハッハッハーァ!!」

パンドラが地雷関係なしに突っ走っているからだ。

爆発するよりスピードがある為体勢を崩さずに走り続けられている。

その光景はまさに昔のヒーローが爆発を背にバイクに乗って登場するシーンそのままであった。（バイクに乗ってはいないが）

好きなシーンの再現により完全にいつものパンドラの調子に戻っている。

普通に目立つ行為だがほとんどの人が緑谷の方に注目していたの

に加え煙で上手いことカメラに映らない。
ボオオオオン!!!
２回目の爆発が起こる。その頃には十分楽しませてもらったので、真面目にパンドラは轟が作った氷の道を有難く利用させてもらいゾーンを抜けさせて貰った。
会場の声がどんどん近づいてくる。
『緑谷出久の存在を!!』
マイクの声が聞こえてきた。どうやら緑谷が１位だったらしい。
（たとえラッキーだとしてもまさか個性なしで１位になるとは）
しかも身体能力が飛び抜けている訳でもないのに、そこは素直に賞賛に値する。パンドラもさりげなくゴールしながら緑谷の方をガン見する。
（ですが最終的に勝つのは私っ!!）

「ようやく終了ね、それじゃあ結果をご覧なさい！」
（１５位　ほう）
突っ走ったことにより順位が上がっていた。
「そして次からいよいよ本戦よ！さーて第２種目は～騎馬戦!!!」
参加者は２～４人のチームを自由に組んで騎馬を作る。基本は普通の騎馬戦と同じだが先程の結果に従って各自にポイントが振り当てられる。入試のようなポイント稼ぎ方式だ。
「そして１位に与えられるポイントは１０００万!!!」
（緑谷くん　ＤＯ・Ｎ・ＭＡ・Ｉ）
同情はするがしょうがない事であった
（だけど安心して下さい緑谷くん！自分は敵対するつもりはありません）

制限時間は15分間。振り当てられたポイントの合計が騎馬のポイントとなり、騎手はポイント数が表示されたハチマキを装着。取ったハチマキは首から上に巻かなければならない。そしてハチマキを取られようが騎馬が崩れようがアウトにならないせいで敵が減らないのが普通の騎馬戦と違う。
(プロの世知辛い社会構図を学生である私達にやれというのですか)
雄英高校もなかなか憎いことをやってくれる。
15分の組決めタイムが始まってすぐパンドラは動き出した。組む相手はルールを聞いている間に決めている。やはり友達とはいいものだ。これからも積極的に作ることにしようとパンドラは今強く思う。
「心操くん組みましょう」
「!?俺?」
最終種目で一気に印象を覆すためにも第2種目も目立つのは避けたい。ならば組むのは個性の特性上目立つことを良しとしない心操だ。しかも彼の個性プラス自分がいれば確実に上位4チームを入れるとパンドラは確信していた。

???

「あなただから良いのです。私もまだ目立ちたくないんですよ」
(こいつ目立ちたがりだと思っていたんだが・・)
「ささっ早く残りのメンバーを集めましょう!今から<洗脳>で集める気だったんでしょう?」
「あっうん」
心操は近くにいた尾白と二連撃に声をかけた。
「私にも<洗脳>をかけますか?」
「いや、お前がいるとメリットがあるんだろ?」
「ええありますともと言ってもあなたがやろうとしていたことをちょっとお手伝いするレベルですけどね」

心操が考えていたプランは＜洗脳＞で支配した3人を土台にして時間制限ギリギリまでハチマキを取られないように逃げに徹する。そんでもって最後の最後に点数の高い騎馬に＜洗脳＞をかけてハチマキを奪うなのだが、欠点をあげるとするなら土台を自由に動かせるとはいえ捕まらない保証はないこととそもそも声をかけて相手が答えてくれるかどうかも確実ではないことだ。

「1回だけ悪魔と軍人と魔術師で騎馬戦をやったことがありますけどね。その時は土台だったんです。なので騎手やってみたいんですよ！こう見えて視野の広さにはそれなりの自信が！」

「悪魔？軍人？」

ファンタジーな言語が出てきたがパンドラなりのジョークに違いない。確かに自分よりはパンドラの方が能力がある。任せて損はないと心操は判断した。

「後あなたの＜洗脳＞をもっと有効活用できるアイテムを差し上げます」

パンドラの腕から何かが出てくる。

（待て、何かおかしい）

パンドラの指は4本しかない。なのに今は5本、それにやたらそこの部分だけ肌が白い。

パンドラが取り出したのは

「テッテレー変声可変機構マスクゥ～」

（待て待て待てつっこませて欲しい）

最初に今まで聞いてこなかったけどお前の個性はなんなのか。それとなんで指が増えているのか。肌白いんのか。なんでドラ？もん風なんのか。そのマスクのデザインよりによってなんでドクロなのか、心操は心の中で突っ込みまくった。

「なんだなんだうるさいですよ心操くん。んん友達のよしみとして教えますがまず私の個性は＜ドッペルゲンガー＞他者に変化、変化した相手の個性を使えます。指や肌はその個性で腕だけ八百万さんに変化したからです。ドラ？もん風の件についてはお約束としか言いようがございません。ドクロはカッコイイでしょう？ねぇカッコイイ

でしょ？」
　パンドラは心操の知りたいことを一気に教えてくれた。他にも話を聞きたくなったが競技中である。後日ゆっくりと話して貰おう
「で、そのマスクは何だ？」
「心操くんの個性は強力ですからね。よりこの個性を活用するにはどうしようかと考えました。そして思いついたのです！声色を変えてしまえば最強なのでは？と。私は＜洗脳＞について徹底的に調べあげました。結果あなたの個性は電気信号に変換してしまうと効果が無くなってしまうことが判明！ならばと更に研究・開発を押し進めて完成したのが！この！変声・可変・機構マスク!!声色を変えて直接外部に声をお届け出来ます。原理云々はめんどくさいので説明をパスすることをご了承ください」
　つまり＜洗脳＞の個性を保ったまま声色を変えることが出来るらしい。
　これは勝手に研究されていたのがどうでもよくなるぐらい心操にとって最高の武器になる
「私の個性を使って作ったものなのでルール違反では無いはずです。最終種目ではそれ使えませんからね？横のダイアルで声を調整出来るようにしていますが今回既に私の声をすでに設定してあります。私の声ならば少なくとも１年Ｂ組の方達なら１００％返事してくれるでしょう」
　不安事項がほぼ掻き消えた。これなら、これなら
「これならいけるかもしれない」
「いけるかもではありません。いくんです。上位４チームに！」
　そろそろチーム決めが終わりそうなので騎馬を組む。
『いくぜ!!残虐バトルロイヤルカウントダウン!!３！２！１！ＳＴＡＲＴ!!』
「心操くん！緑谷くん達からできるだけ離れてください！」
「おう！」
　１番狙われるのは１０００万ポイントをもつ緑谷チームだ。下手に近づいてパンドラ達が巻き込まれたら溜まったものでは無い。

「心操くん！目つけられました！右上に避けて下さい。拳動チームに矛先を向けさせます！」
「至急左に避けてください！」
「後ろから来ています。右！やっぱ左で！」
「あそこカメラ密集していますね。ピースします？」
「轟チームから距離をとってください。無差別攻撃が来ます！」
「回れ右！」
パンドラの的確な指摘のおかげで今のところ誰からも狙われていない。
時間はどんどん過ぎ去って心操の額に少し汗が伝ってきたころ
「心操くん！残り1分半です。そろそろ狩りにでます！心の準備は出来てますか？」
遂にパンドラの攻める指示が飛んできた。心操はより一層気合いを入れる。
「ああ！」
「狙いは鉄哲チームです！ＬＥＴ，Ｓ復唱そこの鉄哲くん塩崎さん骨抜くん泡瀬くん！ハイ！」
【そこの鉄哲くん塩崎さん骨抜くん泡瀬くん！】
４人がこちらを向いた
「「「パンドラ？」」」
【そこで止まれ】
４人はピタリと動作をやめる。洗脳が上手くかかってくれたようだ。
「おっ４１５ポイントもありますねー？峰田チームのものでしょうか？これも貰っておきましょう」
パンドラは容赦なくハチマキをむしり取っていく。
「さて次はポニー殿のところにでも行きますかね？あっあっちに小大チームもいますねぇ。それはそうと尾白くんにもう1回声をかけてあげてください心操くん」
さっき少しぶつかってしまった時に個性が解けてしまっていたようだ。パンドラは本当によく見ていると心操はこっそり感心する。

尾白に「大丈夫か」と声をかけると戸惑いながらも馬鹿正直に返事をかえした。これで問題は無くなった。

急いで角取チームのハチマキも同じ要領でＧＥＴしさぁ小大チームの所へ行こうかとなった瞬間ＴＩＭＥＵＰ！の声がかかる。

『早速上位４チーム見てみよか!!1位轟チーム!!』

『2位爆...ってええ!?まさかの鈴木チーム！いつの間に!?しかも2位シウ〃イーー!!』

（よし！よし!!入れた。しかも2位だ。ありえない！）

こんなに良い結果に終わるとは思ってもみなかった。マイクもビックリしているが1番驚いているのは心操自身であった。

ちらっとパンドラの方を見てみるとさも当然という顔をしており先程とは違う意味で心操はまた感心してしまった。

『3位爆豪チーム!!』

「だあああああ」

獣のような悔しそうな声が会場に響き渡る。

（俺たち入試1位のやつに勝ったのか。俺だけの力でも無いし、ここで勝ってもそこまで意味ない...けど少しスカッとしたな。はぁ...そんなこと考えてしまうなんてつくづく俺、...性根が腐ってんな...）

『4位緑谷チーム!!以上4組が最終種目へ...進出だあああーーー!!』

続け.....られるかな

小ネタ

＜気持ちの差＞

「パンドラァァァよくやってくれた！よくやってくれたよ！僕たちB組の希望の星だよ君はァァァ！」
昼休憩になり弁当を取りに行こうとしたパンドラは物間に見つかってしまう。
「ありがとうございます。物間くんも惜しかったですね」
物間も爆豪から逃げ切れば最終種目に残れた可能性もあった。
「ところで物間くん。あなた負けた原因分かりますか？」
「奴が粘着質すぎたこと」
「まぁそれもありますが気持ちの問題もあったんじゃないでしょうかね？」
「気持ちの差？」
物間は首を傾げる。
「ええ、トップを狙うものとそうでないもの、その気持ち次第で人間は発揮できる力に差ができるそうですよ」
パンドラは物間に背を向け歩きだす。
「昔、誰かがそんなこと言っていた気がします。私にはよく分かりませんがね」

続く

正々堂々

パンドラは走る
走る。走る。特別招待企業ブースの個室へひたすら走る
パンドラの手のひらに握りしめられている紙には

『Dカップ以上の女性』

最終種目に進んだ生徒はレクリエーションに出るか出ないかは自分で決められる。パンドラは少しでも観客に姿を覚えて貰うために参加することに決めた。だが断じて女性にセクハラ発言をする変質者として覚えて欲しい訳ではない。将来有望なヒーローの卵として記憶して欲しいのだ。

そのためにも大声でお題を読み上げる訳にはいかなかった。

幸いにも今この会場に条件に合う身内がいる。

会社の代表としてタブラ様と一緒に特別招待されているアルベドだ。

問題は素直に着いてきてくれるかどうか

アルベドに拒否されてしまえばそれまでであり、親バカの気がある

タブラ様が許さない可能性もある。

会社帰りの父の言葉が蘇った。

「交渉って勢いが大事だと思うんだ。少しでも気持ちが引いちゃダメ。ミスっても強引になっても絶対流れを途絶えさせちゃダメだ」

あの日の言葉を胸に抱き、名乗りながらノックする。ドアを開けたアルベドがなにか言葉を発する前に

パンドラは見事なスライディング土下座を決めきった。

「タブラ様！　アルベド様！　失礼いたします！　突然の無礼をお許しください！　至急アルベド様をお借りしてよろしいでしょうか!?

このお題をクリアするにはアルベド様の力が必要不可欠なのです!!」

「・・・何を言っ「護衛はいいからついていってあげなさい」お父様!?」

「ありがとうございます！　ありがとうございます!!」
間髪入れずアルベドを連れ出す。頭に手をあてていたのでもしかしたら＜伝言（メッセージ）＞中だったのかもしれない。慌ててたとはいえ失礼な態度を取ってしまった。後で謝罪しなければ
『――突然途切れてしまってすまないね。――ああ。――それは良かった。――じゃあ？　――うん喜ぶと思うよ』
ステージに戻ってきたパンドラは審査員にはえっ本当に連れてきたのと怪訝な顔をされ、３位と微妙な結果に終わり、お題の内容を知ったアルベドに軽く肩パンされた。
「んん解せぬ（∵）」
パンドラは気を取り直して心操のところへでも行くことにした

???

選手控え室
「ふぅ」
心操は何度目か分からないため息をつく。外ではレクリエーションで盛り上がる声が聞こえてくるが参加する気にはどうしてもなれなかった。
「Ｇｕｔｅｎ　Ｔａｇ！　心操くん！」
テンションの高い挨拶に顔を上げると普段通りのパンドラがいた。
「心操くんは参加しなかったのですか？」
「俺にはそんな余裕ないよ」
「参加しなくて大正解でしたね」
何かあったのだろうか
会話が続かず少し重苦しい空気が流れる。
「なぁ、俺はヒーローになってもいいのか？」
暗い空気に影響されてしまったのか、自分でも何故聞いてしまったかのか分からない質問を投げかけてしまう。しかし心の片隅にしつこく残っていた疑問でもあった。
どんな手を使ってでもヒーローになりたい気持ちは本物だ。その

ためにヴィラン向きと言われてきたこの個性を惜しみなく使ってここまで来た。皆が正々堂々と自分の力でやってきた中でだ。
【洗脳】も自分の力と言えばそうなのかもしれないが、それでも他人の力を強制的に利用してきた自分は他の人と違い卑怯者のように思えた。そんな自分がヒーローとして相応しい人物なのか
　尾白や庄田の棄権を聞いてからその疑問が頭の中でずっと渦巻いていた。
「あなたの言うヒーローとはどんなヒーローですか？」
　逆に問われてしまった。それはやっぱり
「悩みの原因は個性の事ですか？　正々堂々としていない個性だと？
　だから自分はヒーローに相応しい人物ではない。だとしたら私の個性も正々堂々としていないでしょうね？　他人の力をコピーして使っているだけですから」
　いやでも
「困っている人を助けるのは当たり前、それを実行出来る実力がある人物のことをヒーローと呼ぶと私は思うんですがね。人によって考え方は千差万別ですが共通認識としてはそんなもんじゃないですか？　最終的にやり方はどうであれ困っている人を助ける能力があるかどうかです。その能力を証明する絶好の機会がこの体育祭でしょう？」
「……」
「今悩むのは卑怯でもなんでも助けられる能力があることをどう証明するかどうか、勝てるかどうかです」
　ちなみに私は1・2回戦で個性の有能さを知らしめ、3回戦は個性だけではなく私自身の有能さをアピールするためプロヒーローではなく同じ土俵にいる生徒の個性を使い分け4回戦は――と優勝する前提でペラペラと喋り倒された。
　確かに自分が目指しているのは人を助けられるヒーローだ。戦いに勝てばこの個性でも助けられる能力はあると証明出来る。そもそも入試ではその能力がないとみなされて普通科に落ちたのだろう。体育祭の目的はヒーローになる為のスタート地点に立つ実力がある

ともう1回見てもらうためであり、能力すらなく、スタート地点に立ててていない自分がヒーローになってもいいのか考えるなどお門違い

やることは1つ、とにかく勝つ。そしてスタート地点に立つ。

「ああ、そうだな。その通りだ」

「気分を立て直せたのなら幸いです。勝ち続ければいずれ私と戦うことになります。正々堂々としていない個性同士・・・正々堂々と戦いましょう？」

矛盾している言葉に少し笑ってしまった。

そろそろ時間だ。パンドラの横を通り過ぎ、ステージに向かう。

入場門に近づいているのに大きくなる周りの声がシャットアウトされていく。自分の心臓だけがやたらうるさい。

『対（バーサス）ごめんまだ目立つ活躍なし！　普通科心操人使!!』

何だか失礼なことを言われた気がするが足元がフワフワしていて現実味がない。首から上が熱く、冷ますため首に手をあてながらステージに上がる。対戦相手の緑谷出久も自分と同じような気分だろうか？　とてもそうとは思えない

（落ち着け、俺の勝負はスタート前からだ）

プレゼント・マイクの説明を聞きながら、丁度いいタイミングで話しかける。自分が考えたセリフを、卑怯者とも言えるかもしれない相手の心を抉る言葉

自分の本心を包み込んだ言葉

（なりふり構ってられない、証明しなきゃいけない）

『レディィィイSTART!!』

【チャンスをドブに捨てるなんてバカだと思わないか？】
緑谷の肩があがる
「何てこと言うんだ!!」
――かかった
爆豪や轟かならかからなかっただろう。それに比べこいつお人好しな奴だ。尾白から忠告されていたとしてもクラスメイトを貶めれば必ずかかると思っていた
【振り向いてそのまま場外まで歩け】
緑谷が外へ向かって歩いていく、場外に出せばこの戦いは心操の勝ち。誰がなんと言おうとこれが現時点での自分の勝ち方だ。
（もうヒーローのスタート地点に立っている）お前にはわかんないだろうけど…こんな（正々堂々としていない）個性でも夢見ちゃうんだよ……
「さぁ負けてくれ」
お前らのように俺をスタート地点に立たせてくれ
後一歩で
バキ
嫌な音がしたと思えば目の前に突風が吹き荒れた。動いている。動けないはずの緑谷が動いている。
――自力で解いた!?　いや体の自由は効かないはず!?
【何したんだ！】

もう一度個性にかけようと問いかけたがさすがにもう答えてくれない。
個性が解けるなんてありえない
こっちに緑谷は走ってくるなどありえない
想定外すぎる出来事のはずなのに

「グッッ」

心操は冷静に緑谷の顔に右ストレートを打ち込むことができた。
いくらジャスティスに指導してもらい、1ヶ月頑張ったとしてもヒーロー科に入れるような人間との殴り合いで心操が勝つことはほぼ不可能だ。多分相手は何倍も何十倍も努力してきている。勝つには洗脳にかけるしかない事は十分承知していた。
けれど今回の場合、相手をよく見ると左手の指2本がとんでもない事になっている。見た目から想像できるように痛みも相当酷いもののようで動きにも影響が出ていた。そこから推測するにこいつはあの強大なパワーを使うのに相当の痛みを伴うのでそんなに連発出来ないことが分かる。
心操の戦闘スタイルはあくまで個性をかけることを優先としている。スタイルを崩すつもりは無いがこれなら殴り合いで決着をつけられるかもしれない。
体勢の崩れた緑谷に今度は左手でクロスを打つ
綺麗にきまる
心操はジャスティスに習った通りに突きを繰り出していく
緑谷も守りの姿勢に入っているが着実にダメージが積み重なっているはず
はずなのだが
――なんで倒れない!?
鼻血も出している。頬も腫れている。しかし倒れる気配がまるでしない。
――なぜだ？　なんで!?

ならば蹴りならどうだと足を振り上げた瞬間待っていたかのように胴体に頭突きを喰らう。
「ぐえっ」
攻撃の手が止まったところにお返しとばかりに緑谷が右ストレートが顔に直撃する。
――痛い！　痛い!!
だけど負けるわけにはいかない
緑谷に殴られたのなら心操も殴り返す
蹴られたのなら蹴り返す
やはり戦闘しなれている分緑谷の方はカウンターをしかけたり避けたりするのがうまかった。一方避ける余裕がなく全てモロに受けてしまっていたとしても突きと蹴りの基本がしっかりしており上背もある心操も負けてはいなかった。
更に殴り合いながらも再度個性がかけられないかと心操は棘のある言葉を投げかける。
【個性使えよ！　指動かすだけであんな威力出せるんだろ!?　羨ましい限りだな!!】
手と胸を捕まえられ地面にぶん投げられる
【俺はこんな個性だからこんな戦い方しか出来ない！　恵まれた人間に言っても分からないか!?】
マウントを取られ重点的に顔を殴られる
【挑向きの個性に生まれてスタート地点に立てる奴らにはよ!!】
何とか両腕を止め、頭突きで緑谷の体制を崩し
「俺はお前らみたいになりたいよ!!　頼むからスタート地点に立たせてくれよ!!」
フラフラになりながら立ち上がる
「俺だってこんな俺だってヒーローになりたいんだ!!」
棘だらけ心操の本音。正々堂々と戦える皆が羨ましい
そんな奴らに勝って証明しなければならない。こんな自分にだってやれることを、だから今回は勝ちを譲って欲しい。
なのになぜ立ち上がるのか、フラフラしているのに、いい加減倒れ

て欲しい。頭に懇願と疑問がうずまいていく

なぜ緑谷がそんな悲しそうな顔をするのか心操には理解することが出来なかった。

「お願いだから早く倒れてよ!!」

緑谷の後ろに入試の時の絶望が揺らめき立つ
心操は一瞬後ろに下がりたくなった
さぁ敵をまっすぐ睨みっ！
大きく踏み込みっ！　背筋を伸ばし！
膝で蹴るイメージでっ！
Ｓｉｅｇ　ｈｅｉｌと叫ぶっ！
パンドラの声が蘇る
赤ジャージでふざけてて無茶苦茶な奴
（そうだあの時だってやれたんだから）
緑谷をまっすぐ睨み
大きく踏み込んで背筋を伸ばして
膝で蹴るつもりで
叫ぶ
「Ｓｉｅｇ　ｈｅｉｌ!!」
蹴りは緑谷の頭を直撃したように思えたが
――避けられた！
バックステップで避けられ目の前には勢いのついた拳が

本当は心操だって分かっていたのだ。ただ気づくのが遅すぎた。個性に囚われすぎて基本的な身体能力によって戦うことに目を向けられなかった。スタートから大幅に遅れてしまった。それでもどうしてもこの体育祭で結果を残したかったのだ。だからあんな風に個性を使うことしか出来なかった。

心操が目を開けると蛍光灯が見えた。主に顔ら辺がズキズキしている気がする。

「心操が目覚めたぞ！」

「心操～大丈夫？　大丈夫じゃない？」

「ちょっ私の顔に肘がめり込んっめり込んでいま」

「お前ら……」

横を見ると心配な顔をしているクラスメイトが勢揃いしていた。

「そっか……俺……負けたのか」

「……うん。お前が倒れた後、緑谷だっけ？　あいつも崩れ落ちて隣で治療受けていたんだけどな。先に目覚めて他の奴らの試合見に行ったぜ。あいつサイボーグかな」

「ちょっ私にも心操くんの様子確認させて下さい！　年月的に私が1

番付き合いがながいんですからねっあっちょっ痛い痛い」
　私ら差し置いて親友ヅラか？　やるか？　あん？　とクラスメイトにポコポコ叩かれながらパンドラが前の方に出てくる。それは心操にとってナイスタイミングだった。
「なぁ聞きたいことがあるんだけどさ」
「なんですか？」
「Ｓｉｅｇ　ｈｅｉｌってどういう意味？」
「ドイツ語で勝利万歳です」
　そんな意味だったのかと弱々しく心操は笑う。自分は意味を知らないで叫んでしまった大馬鹿者だと
「勝利　万歳か　勝利出来なかったな俺は」
　（やばい、皆がいるのに目が）
「いいえ、ある意味あなたは勝利しました」
「えっ　」
　（何を言って）
「あの後ヒーロー達の反応凄かったんだぜ？」
「そうだよ！　皆びっくりしていた！　普通科なんて勿体ないって！
　雄英馬鹿だなって」
「あいつ障害物競走１位だったんだろ？　そんなやつをお前はボコボコにしたんだぞ！　正直ビビった」
「俺ら普通科の星だな！」
「お前はすげぇよ。強いよ」
「ちゃんとあなたの能力はヒーロー達に評価されましたよ。心操くん」
　だからヒーローになってもいいんじゃないんですか

　　
（　目の辺りが熱い）
　次私の試合なのでもう行きますねと言うだけ言ってパンドラは保健所を出ていった。と思えばドアからヒョイッと顔を覗かせ

「そういえば緑谷くんから伝言預かってました。『待ってる』だそうです」
（あいつめ何なんだ、なんなんだよクソ）
そんなことを言われてしまえば心操も緑谷に返さなければならない。
「パンドラ、俺からもあいつに伝言お願いしていいか？」
「いいですよー」
「『俺は絶対諦めない。みっともない負け方すんなよ』って」
心操はこれからヒーローの卵の背中を全力で追いかけていく。遅れた分はその分だけ頑張っていくしかないのだ。

???

パンドラは入場門に向かいながら考える。心操が負けた理由はなんなのか、最低でも3つは理由がある。
1つ目は心操の攻撃の威力だ。
心操はこれまでの人生ほぼ暴力とは無縁だった。そんな人がいきなり人間を殴るとなるとどうなるだろうか？　興奮状態や慌ててた場合など以外は普通躊躇する。試合での心操の突きや蹴りは今まで練習でだしていた威力よりも格段に下だった。想定外の出来事でも冷静さを忘れていなかったことにより無意識にブレーキをかけてしまっていたのだろう。これは慣れればそのうち治るのでそこまで気にすることでもない。
2つ目は思いのほか緑谷のダメージ耐性が高かったこと。
あの怪我では痛みで満足に動けないはずなのに緑谷は心操とやり合った。緑谷はあの爆豪と幼なじみであり、いじめを受けていたらしいがその際殴ったり蹴ったりと暴力を受けてきたおかげなのか痛みを我慢強く受け止められるようになってしまったのではないだろうか？　元々痛みに強かっただけかもしれないが
3つ目、これが1番の原因であり謎だ。緑谷が個性にかかった状態

でワン・フォール・オールを発動させたこと。
【洗脳】は状態異常無効化を切れば至高の御方達でさえ自分の意思で個性を解除することは出来ないと実験済みだ。あの暴発さえなければ心操は普通に勝てた。
（ますます意味が分かりませんですねぇワン・フォー・オール）
きっと緑谷は後でオールマイトに相談するだろう。その時に何か分かるといいのだが
『次は第５回戦!!』
「さてここからが本番です」
いつの間にか入場門に着いていた。
相手はＡ組の芦戸。パンドラは十分勝てると確信していた。
有望なヒーローの卵としてのデビュー戦。注目を集めるならば、変化はこの体育祭をある意味支配しているあの人が良いだろう。
『今のところ大人しいぞどうしたぁ!?　あだ名はパンドラ！　ヒーロー科鈴木二重！』
さぁさぁ幕があがる。ヒーローの卵、パンドラズ・アクターの活躍を乞うご期待！

次回へ続く

乞うご期待

怪我を治療して貰った緑谷出久は急いで観覧席に戻ってきた。まだ寝ている心操相手に言いたいことはいっぱいあったが、どうしても伝えときたい言葉はパンドラに伝言を頼んだ。

「あっデクくんおつかれー席空いているよ！」

出迎えてくれたのは麗日だ。

お礼を言って席に座らせてもらう。

「怪我大丈夫？」

「うん。リカバリーガールに手当してもらったから大丈夫」

「ならよかった！　それにしても普通科の人すごかったね」

「うん……」

心操との戦いは身体的な痛みも酷かったが、殴り殴られながらの隙間に聞こえた言葉。個性にかからない為にも返事や反応は出来なかったが自分と重なりすぎて精神的にくるものがあった。

自分が今スタート地点に立てているのは周りに恵まれていたからだ。だからこそこちらも負けるわけにはいかない。

「ところで今これどんな状況？」

「轟くんと瀬呂くんは轟くんが勝利」

数秒にも満たない時間で会場を覆うほどの大氷壁をつくりだし拘束して勝負を決めたらしい。

「で今は上鳴くんがB組の塩崎さんに瞬殺されて運ばれているところ」

「うんそれは見たら分かるね」

現在ステージ上で上鳴はアホ面になっている。全力放出を防がれた後、あのツルで拘束されてしまったのだろう。凄い個性だ。

「そんでもってこれから飯田くんと発目さんが戦うところ」

「なるほどありがとう」

「いえいえー」

結果、飯田が勝った。と言うより発目さんが10分間アイテム解説付きで鬼ごっこしただけだった。

「っしそろそろ控え室行ってくるね」
気合いを入れた麗日を見送る。
「えっと次は芦戸さんとパンドラくんか」
いよいよパンドラの個性が見られる時がきた。今までの競技で彼が個性を使った場面はなかったが、宣戦布告の様子から随分自信を持っているように感じる。
（一体どんな個性なんだろう？）
緑谷は今からノートをスタンバイしてワクワクしていた。
『続けていくぜぇ!!　次は第５回戦!!　今のところ大人しいぞどうしたぁ!?　あだ名はパンドラ！　ヒーロー科鈴木二重！　対あの角からなんか出るのねぇなんか出るの!?　ヒーロー科芦戸三奈！』
「にしし悪いけど勝たせてもらうよ～！」
「それはこちらのセリフですね！　可愛らしいお嬢さんを傷つけるのは趣味ではありませんが」
『ＳＴＡＲＴ!!』
先に動いたのは芦戸だった。
「てりゃぁっ！」
足から酸を放出しスケート選手のように移動して攻撃を仕掛けようとする。それに対してパンドラはどこからか軍帽をとりだし軍帽？
『芦戸勢いよくパンドラにアッパーを仕掛けるも避けられるぅ！　一方パンドラは軍帽をかぶりだしたぞ？　どこから出したァ!?』
『何やってんだアイツ』
（パンドラくんが何かしらの個性を使った？　軍帽を出す個性？　不味い何をしたのか全然分からなかった）
「なんで軍帽!?」
思わず芦戸もつっこむ
「これがないとパンドラズ・アクターではありません！」
なぜか自慢げに返事をする。
芦戸の攻撃を再度かわし、少し距離をとろうとしたのか後ろへジャンプと同時にパンドラの姿が崩れ落ちて

『えっ』
「えっ」
（えっ）
　着地したのはパンドラではなくプレゼント・マイクだった。
　彼は大きく息を吸い込
ＹＥＡＲＲＲＲＲＲ!!!

　思わず耳と目を塞ぐほどの爆音が会場を襲った。
　こわごわと目を開けると
『っ勝者鈴木二重ェェェェ！　けどその絵面はヤメテ欲しい！　俺が倒したみたいでヤダッ！』
「ミッドナイトも慌てて鞭を掲げる
「っ勝者！　鈴木二重！」
「ミッドナイト、出来ればパンドラとお呼びください。パンドラと」
「勝者！　パンドラー！」
　予想斜めの展開にうわあああ!!　と遅れて会場のボルテージが急上昇する。
　主にプロヒーローの席からの動揺が凄かった。
　パンドラもそのざわめきに応えるようにプレゼント・マイクの姿のまま色々な方向にポーズを決める。
『ちょっ俺の姿でそんなポーズ　えっヤメテヤメテこの年でそのポーズはキツイ！　パンドラ？　パンドラァァ!?』
『いやお前いつもこんな感じだろ』
「ＨＡＨＡＨＡ!!　ねぇ見た!?　塩崎に続いてパンドラも勝ち抜いたよ!?　やっぱり多けりゃいいもんじゃなくて大切なのは質だね質！
　その点僕らＢ組は大変優秀で」
「物間シャラップっあ」
「甘いな拳動！　僕の危機察知能力は短い間でプルスウルトラ、君の

攻撃など恐るるに足ら「シャラァップ！」ぐえっ」
「個性のコピー？　物間くんと同じ個性か？　けれど彼と違いパンドラは姿も変えることが出来る。ならば個性だけではなく身体能力もコピーしていると考えられるな。そういえば服もちゃんと変わっていたけど服のサポートアイテムまで再現出来る？　だとするとさっきの軍帽も誰かの服をコピーした？　個性はストックできるのかなそれとも何か条件を満たさないと変身出来ないのかそれによって戦い方は変わってくるけどどっちだろう。どっちにしても状況によって個性を使い分けられるとなると万能型な個性であり八百万さんと通ずるものが」
　会場はカオスな状況になっているが、緑谷はそんなこと気にならないくらい考察に没頭する。パンドラの個性を用いた戦い方、特徴、性格。相手になった場合の対策、自分の個性をどう使うか。ペンで文字を書くことを止められない。
「緑谷絶好調だな。」
「ブツブツうるせぇ」
　クラスメイトが何か言っているが内容など緑谷の耳には入ってこない。確かにこの個性ならあんな自信に満ち溢れた態度が取れるだろう。紛うことなき強個性の分類だ。
（んっ待てよ？）
　緑谷は手を止める。今のところパンドラの個性は相手の体をコピーし相手の個性を使えると仮定しているが、オールマイトにもなれるのだろうか？　だとすると
（パンドラくんはまさかオールマイトの秘密を。）
　パンドラがどこまでコピーできるか分からない。もしかしたらコピー出来ない条件などもあるかもしれない。だがもし誰でもなれるのなら、全てをコピーできるとしたら。
（僕がオールマイトと同じ個性を持っていることもそのうちバレるんじゃ。）
『あーっとパンドラァァァ!?　意識を失った芦戸を華麗に姫抱っこで運んでいく！　けどいつまで俺の姿でいるの!?　お姫様抱っことか

俺のキャラじゃないからね!?』
『うわぁ』
『イレイザーは何に引いているの!?』
かといってストレートにパンドラに聞くのはリスクが高い。
突如として現れた問題を緑谷はどうすればよいか分からないまま、ルンルンと退場門に向かうパンドラを見送ることしか出来なかった。
???
一方緑谷に警戒されてしまったとはつゆ知らず、パンドラは結果に満足していた。
(予定通りですね)
観客の反応もプロヒーローの驚いた顔も無事拝むことが出来た。次も更に自分の個性の有能さをその目に焼き付けて貰わなければならない。
芦戸を保健所に送り届け、パンドラは考えを巡らしながら観客席へ移動していた。時間的に次の試合は見ることは叶わなそうだが問題は無い。
(多分常闇くんが勝つでしょう)
常闇の【黒影】は攻撃、防御、移動全てをこなせる強力な個性だ。八百万の個性も悪くはないのだが1体1では勝利するのは難しい。弱点さえ分かっていたらまた違う未来もあるのかもしれないが
(そう弱点!　私は彼の弱点を知っているのです)
パンドラは常闇に変化した際、本人のより少し小さめのダークシャドウを発現することが出来た。召喚のような扱いなのか彼はパンドラが主であると最初から認識していたので、自分の弱点やらなんやら全てさらけ出してくれたのだ。
戦いは始まる前から終わっている。
この教えは父に出会った頃から耳にタコが出来るほど言われ続けた。
本当にその通りだと思う。おかげで次に変化する人物はもう決まっている。プレゼント・マイクなどより知名度も話題性も格段に上

のヒーローだ。
（ふふふ、観客にはもっともっと私に夢中になって貰いましょうか）
「パンドラ1回戦突破おめでとう！　さぁ席にお座り！　一緒に徹鉄を応援しようじゃないか!?」
　考え込んでいると上に着いていたらしい。物間をはじめとするB組の生徒達が声をかけてきた。一つ一つに反応をかえしながら目線はA組の方に向ける。パンドラには席に着く前にやらなければならないことがあった。
「緑谷くん！」
「あっ、パンドラくん」
　目的の緑谷は今観客席に戻ってきたようだ。それにしても何だか反応がよそよそしい。
「心操くんから伝言です。『俺は絶対諦めない。みっともない負け方すんなよ』だそうです！」
「っ！　分かった！　伝えてくれてありがとう」
「ところで態度がよそ『両者ダウン！　引き分け！』ありゃま」
　疑問を口にしようとした瞬間ミッドナイトの声で遮られる。その間に緑谷は意識をステージに向けてしまっていた。
（うーん気になりますね）
　とりあえず心操との約束は果たしたので自分もステージに集中しよう。とは言ってもそこまで心動かされる出来事はなかったが。
　爆豪VS麗日は麗日の方は工夫をしているなと感じただけであり緑谷VS轟も両者の威力の強さを再確認するだけであった。この年では凄いなとは思うが、興味を持つほどではない。今の緑谷のパワーぐらいならナザリックにゴロゴロいるし、氷と炎を両方出せるのも魔法という概念がある身としたらだから？　という程度だ。
　次は塩崎VS飯田。ステージ修復で時間がかかるらしいが早めに行動しとく。クラスメイトの声援を聞きながら下に降り、適当に時間を潰していると
（おや？）
　異形種ならではの発達した聴力が聞き覚えのある声を拾う。

「けどな私も無個性だったんだぜ」
（っ!?）
いきなりの衝撃発言でパンドラは思わずズッコケそうになった。オールマイトは無個性だったのか。それが【ワン・フォー・オール】に何か関係あるのかと聞かれれば疑問だが、至高の御方達が注目している存在の新情報を棚ぼたで聞いてしまい密かにラッキーと思ってしまう。
だけどこんな誰に聞かれるか分からない場所で堂々と言ってしまっていいのだろうか
「あっあとパンドラくんのことなんですが」
自分の名前がいきなり出てきてドキッとする。
どうやらパンドラの試合を見た緑谷があの個性によって自分達の秘密がバレてしまうのではないかと懸念しているらしい。先程の態度に納得する。なるほど傍から見ればパンドラの個性としている【ドッペルゲンガー】ならばやろうとすればやれるなと改めて思う。
（尋ねてきた場合どう答えましょう…）
試合前なのに悩みが出来てしまった。さすが至高の御方達が認めたお方。恐るべしオールマイト（と緑谷）

???

轟焦凍は考えていた。
内容は先程の試合のこと
（俺は一体どうしたいんだろうな）
自分は今までエンデヴァーを見返すために努力してきた。今回の体育祭でも母の個性だけで優勝してあいつの曇った顔を拝んでやろ

うと思っていたのに
『君の！　力じゃないか!!』
緑谷の声が頭に響く。あの時だけはあいつへの憎しみを忘れていた。
あいつの・・忌まわしいはずの個性を使ってしまっていた。
それが正しいのか間違っているのか
（俺は・・）
『次はパンドラＶＳ常闇!!』
プレゼント・マイクの声で我にかえる。そうだ、まだ試合は終わっちゃいない。戦うかもしれない相手はしっかりと観察しとかなければ
ステージ上に立っているのは攻守両方優秀な常闇と・・もう１人は鈴木？　パンドラ？　プレゼント・マイクの姿に変身していたやつだ。鈴木の方はまだ未知数な部分が多いとは言え、どちらも厄介そうな相手のように思える。
『ＳＴＡＲＴ!!』
「いけっダークシャドウ!!」
「アイヨ！」
素早くダークシャドウが突進していく。
「ふんっ」
鈴木はダークシャドウを避けるように宙返りを決めながら常闇の後ろへ着地した。頭にはさっきまでなかった軍帽をかぶっている。前の試合でもかぶっていたが何か意味があるのか？
ダークシャドウが引き返してくるのと同時に鈴木の姿が崩れ落ちる。これも前の試合で見た光景だ。またプレゼント・マイクになるつもりなのか、それとも別の人物にでも
「Ｖｅｒｂｒｅｎｎｅｎｄ　Ｆａｕｓｔ」
ステージに眩い炎が揺らめき立つ
「Ｊｅｔ　Ｂｕｒｎ!!」
「ギャンッ！」
「ダークシャドウッ!?」

「はぁ？」
炎を纏った拳に殴られたダークシャドウは一気に勢いがなくなる。
ステージに立っているのは軍帽を被ったエンデヴァーの姿？
いや違う、あれはあいつじゃない。鈴木だ。
「黒き影をその身に宿す者よ……」
常闇はそんな名前じゃない……
「陰が光を嫌うのはこの世の運命（さだめ）」
あいつはそんなこと言わない
「っ！　それでも立ち向かわなければならない時がある」
「フフッ……フーハハハ!!　それが貴方の選択ですか？　この身に纏いし獄炎は唯一無二の陰を焼き尽くす！　降参をオススメします」
「ぐっ」
片手で顔を覆いながら常闇を指さすな
「エル・プサイ・コングルゥ……貴方へ送る最後の言葉です。さあ選択を！」
やめてくれ。荒ぶる鷹のポーズをしながらその言葉はやめてくれ。

なんだエルプサイコングルゥって
「トコヤミィ」
「降参だ」
「苦渋の決断に賞賛を。しかしこれで終わりではない！　これからが始まりなのです！　我が同士」
ビッ　ビブラートだとぉっ?!
「パンドラ。同じ世界を見る者よ。」
「常闇くん降参！　パンドラの勝利!!」
盛り上がる会場に向かって鈴木は溢れんばかりの笑顔で役者のようなお辞儀をする。
やめろ。あいつの満面の笑みとか洒落にならないし頭なんてさげない。
あいつは母さんを壊した。
俺はあいつの思う通りになりたくなくて、その思いでヒーローを目指して
母さんだけの個性でＮＯ．１をとって
けれど俺の個性は俺の力だって
何が正しいのか分からなくなって
今そこで内股でピョンピョンしているのは一体誰だ？　俺が憎んでいた奴はあんなこと。
何が正しくて何が間違えているのか???
「しょ。焦凍の頭がショート。」
「何言ってるんだ轟!?」
「おいっ白目向いているぞ！」
「轟くん落ち着いて！　あれは君のお父さんじゃない！　パンドラくんだ!!」
「ふぇ?」
「轟イイイイ!!?」
もう何も考えたくない

続く？

全力ＶＳ自分勝手

「待てぇぇぇぇ!!」
パンドラは走っていた。
なぜならエンデヴァーが追いかけてくるからだ。
廊下では個性を使ってはいけない。それに従いパンドラは全力で生身で逃げているのにも関わらず、エンデヴァーは若干個性を使って追いかけてくる。
（なんでヒーローがルール守らないんですかっ!?）
縛りプレイさえなければ生身でも余裕で逃げ切れる……そもそもなぜ追いかけ回されなければならないのか……
「なぜ追いかけてくるんです!?」
「胸に手をあてて考えてみろ！」
パンドラは言葉の通りにしてみるが、全く分からない。
「分かんないです！」
「とにかく一旦止まれ！」
このまま追いかけっこしても拉致があかない。とりあえずパンドラは足を止めてみた。
「なにか用ですか？」
「用もクソもあるか！　貴様なんだあの試合は!?」
（先程の常闇戦の事ですかね？　Ｎｏ．２ヒーローに恥ずかしくないよう気合いを入れて望んだつもりなんですが）
「何かダメでした？」
「全てに置いてダメだろバカ！」
「ええ～」
「ええ～じゃない！　舐めとんのか貴様！」
『爆豪エゲツない絨毯爆撃で３回戦進出!!　これでベスト４が出揃った!!』
「ああ、切島くんと爆豪くんの試合終わってしまったじゃないですか!!」
「知るか！　……俺に変化する時はあの動作はやめろ」……

「カッコイイのに？」
「どんなセンスしとるんだ!?　とにかく俺になる時は余計なこと喋るな・動くな堂々としとけ！」
「了解しました」
　エンデヴァーは長いため息をついた。
「まぁ愚痴はこのぐらいにしといて・貴様、中々の強個性だな」
　急に褒められパンドラは不思議そうに首を傾げた
「お褒めいただき光栄です」
「だが・１００％は再現できてないな」
　真実を言い当てられて先程と反対側に首を傾げる。ジェットバーン１発でそこまで分かるものなのかと
「この個性と何年付き合っていると思っている？　自分の個性ならそのくらい分かる」
　伊達にＮｏ．２ヒーローをやっている訳では無いらしい
『準決！　サクサク行くぜ』
「いい加減上に行きたいんですけど」
「ここからならヒーロー専用の観客席の方が近い。一緒に来い。話がある」
・（出来ればご遠慮したいのですが逃がしてくれそうもなさそうです・）
・パンドラは渋々エンデヴァーの後をついて行く。ステージでは飯田が動き出したところだった。
「焦凍をどう思う？」
「顔色が悪いように見えますね」
「ああ、そうだな・違う！　そっちじゃない。強いと思うか？」
「氷と炎の特性によりそれぞれのデメリットの解消、規模・威力の強さ、それを使いこなす技量・は少し大雑把な印象は受けますが総合的に見たら強い方だとは思います」
　パンドラは正直に答えた
「そうだ。焦凍は強い。だがあれではダメだ。あいつにはオールマイトを超える義務がある。さらなるパワーアップが必要だ」

エンデヴァーは轟を見つめていた視線をパンドラに向ける。
「そこで貴様だ。万能型の頂点に近い貴様を倒すことが出来れば、あいつはさらなる高みに登りつめることができる」
「私に経験値になれと？」
「話が早くて助かる。俺は貴様を買ってはいるのだ。個性で他に何が出来る？　誰にでもなれるのか？」
「なぜ私があなたにそこまで教えなければ？」
情報は武器だ。財産だ。B組の生徒は授業での課題をこなすためお互いの個性をよく知らなければならないので教えるが、話題の一環で個性の詳細を教えるには情報の価値が高すぎる。
「・」
「私とチームアップでもするなら別ですけどね」
丁度轟が飯田を氷で動きをとめた。結局炎の方は使わなかったようである。
『飯田行動不能！　轟炎を見せずに決勝進出だ！』
「時間なので、失礼」
パンドラはエンデヴァーと話して1つ分かったことがあった。
きっと周りの人間なら轟家の内情に何か思うところがあるのだろう。興味がないので彼自身は何も感じない
（親としての格なら私の父の方が上ですね）
自分の父は他と比べて誇らしい。それだけは彼の中で真実だった。

???
『もう1組の準決！　どちらも勢いフルスロット!!　パンドラ対爆豪勝己!!』
爆豪勝己は目の前のパンドラを睨みつけていた。
（気に入らねぇ・）
最初は宣戦布告の挨拶での態度が気に食わなかったのを引きづっているのかと思っていたが、これまでのパンドラの活躍を見てピンと来ていた。

（コイツ、舐めプしてやがる）
　自身の優秀な観察眼に間違いなど無い。絶対コイツはまだ何かを隠してやがると爆豪は確信する。
（轟といいコイツといい随分余裕ぶっているじゃねぇか・・ぶっ殺す）
　最終的に考えはそこに着地する。隠しているなら隠す余裕が無いほど追い詰めてやればいい。全力で挑んできたところを完膚なきまでに叩き潰す。
『ＳＴＡＲＴ!!』
「死ねぇっ!!」
　最初っからパンドラに爆発をかます。
　周りは爆豪というキャラクターに粗野な印象を抱いているようだが、彼だって対戦するかもしれない相手の観察ぐらいする。結果分かったことは変化する時1秒のタイムログがある。
（誰にでもなれるのか、制限などあるのか、分からないことは多いがタイムラグの隙をつけば勝てるわクソがっ！）
「イッタイ！　イッタイヨパンドラ！」
「軍帽ぐらいかぶらせて下さいよ」
（・っチ）
・煙から現れたのは常闇だった。今の爆発をダークシャドウで防いだようだ。
「ダークシャドウじゃないです！　黒ちゃんです！」
「名前だせぇ！」
　そう簡単に次の手など打たせない。ダークシャドウはさっきの試合で光に弱いことは分かっていた。
「イッタイ！　イッタイ！」
　闇が尽きるまで、補充する暇などつくらせないほど連続で殴り続ける。
「これで終わりだぁ！」
　今にも死にそうなダークシャドウにトドメを刺そうと大ぶりに拳を振り上げたが急にダークシャドウが動き出し
「ぐぶっ」

勢いよく飛び出した常闇（パンドラ）から鳩尾に肘鉄喰らう。
しかし所詮体は小さな常闇、威力はたかがしれている。そこまでダメージはなかった。
だが1発くらったことに爆豪はイラッとする。
「クソがぁっ！」
すぐさま攻撃に転じようとするが続けて鳩尾に重い拳を入れられる。
1秒も経っていない。常闇にはそんな威力はない
よく見るとパンドラの体はぐにゃりとなっているのにも関わらず拳だけは
「切島！」
（しまった、部分だけの変化も出来たのか！1秒もかからずに？というかさっきからコイツなんで・・・）
疑問が1つ
（プロヒーローにならない!?）
???
空を飛んで仕掛けてくるなら塩崎で上鳴で近づけさせない
連続で攻めくるなら芦戸で飯田で距離を取り
カウンターを狙うなら徹鉄で体を守りながら
軍帽をつくるなら八百万
今も麗日の案をパクリ小規模の流星群を降らせ
腕を上げて対処している間に瀬呂のテープで外にぶん投げる
もう少しで外に出せそうだったが爆破でテープを引きちぎられ逃げられた。
（そろそろつっこまれる頃ですかね）
「なんでプロヒーローにならねぇんだよ!?」
そう、パンドラはこの試合ガチンコバトルで負けた生徒の個性しか使っていなかった。
「私自身の能力を見て欲しいからですよ」
今までは個性としている【ドッペルゲンガー】の能力を見てもらうため話題性、有能性を宣伝しやすいプロヒーローで相手を倒してき

た。
　だが、いくら武器が良くても使う人が無能なら意味が無い。今自分が宣伝しているのはパンドラ自身の優秀さ、個性を使いこなす手腕・判断力。
　プロヒーローで戦ってしまえば結局個性かとなってしまう。ならば見ている人に分かりやすく同じ、もしくは少し下のレベルの生徒で戦えばどうだろうか？
　一言でなんとなくパンドラの考えを悟ったのだろう。爆豪の機嫌がみるみるうちに悪くなってきた。
「てめえぇぇ！　ふざけんじゃねぇ!!」
　爆豪が目指すのは完膚なき1位、自身の行動はそのプライドを叩き壊すどころか燃やして塵にして海に撒いているような行為だ。激昂されるのはしょうがない。ただ舐めプしているつもりは毛頭ない。パンドラだってこの条件で勝つ為に全力で頭を回している。全然余裕ではないのだ。
（下手したら負ける！）
　パンドラの個性は8割しか再現できない。それは個性だけではなく身体能力にも言えることだった。爆豪は身体能力でもトップクラスに位置するのに加え個性の使い方も光るものがある。それに比べて今の条件でパンドラが爆豪に勝っているのは圧倒的な手数の多さだけだ。
　更にパンドラの頭を悩ましているのは
（情報がうるさい）
　パンドラは変身する際、精神操作系の特殊能力で自動的に対話している相手や周囲の簡単な表層思考を読み取っている。普通はそこから変身元の人物の情報を抽出してなりきるが
（今はいらない）
　今必要なのは生徒の個性のみだ。
　ドッペルゲンガーとして優れているがゆえよって読み取れる周囲の範囲はこのドーム全体に及んだ。
　それに加え連続で相手を変えているので、いつもより情報がパンド

ラの頭の中を錯綜している状態だった。別に慣れているので行動に影響はない

《お前の名前はパンドラズ・アクター。そして今日から俺の息子だ》

自分には父がくれた役割がある。この役割さえ忘れなければいくらでも誰にでも演じ続けられる。自分を見失うことなんてありえない。

(けど煩わしいことこの上ないですね、父上～私は貴方様が恋しく――)

「全力だせやぁっっっ!!」

相も変わらず爆豪は突進してくる。発目に変化し、同じく再現できた油圧式アタッチメントバーで楽々――は回避できなかったがギリギリ避ける。

爆豪は息が上がってきている。彼だって無限に攻撃をし続けられる訳がない。焦ってきている。

(仕掛けますか)

決勝戦進出した生徒の中で、あと変化していない人物が2人いた。そのうちの1人は

「ねぇかっちゃん」

「あ〟ぁ!?」

明らかに爆豪の雰囲気が変わった。ただでさえ凶悪な顔だったのにそれを通り越してもうヴィランだ。

「てめぇおちょくってんじゃねぇよ!」

「僕はおちょくってなんかないよかっちゃん!」

「黙れ!」

緑谷だって1年間死ぬ気で鍛えた筋肉がある。その8割だとしてもパンドラの優れた動作予測によりギリギリ爆豪の攻撃を避けていく。いや爆豪の方もヒートアップしているので何発かは当たっている。まぁ緑谷の体だから持つだろう。爆破と共に煙で視界が阻まっていく。

「レシプロバースト!!」

パンドラは足だけ飯田に変化し、強烈な蹴りをお見舞いしてやる。

いきなりのレシプロで少し体勢を崩したがあちらにはそれなりのダメージを与えられただろう。しかし目的はそこじゃない。距離をとると同時にこちらの姿を相手から見えないようにすること

ここでクエスチョン、激昂している爆豪に確実に返事をしてもらうには？

【あっかっちゃん大丈夫？　怪我してない？】

「っ！　それやめ…」

（――かかった）

心操の声でも役者にかかればそれなりに緑谷の声に近づけられる。緑谷の姿で冷静さを失わせたのと煙で相手にこちらは見えていないのも効果を発揮した。

【振り向いてそのまま場外へ出ろ】

『爆豪停止ィィィィ！　心操と同じパターンかぁ!?』

爆豪は言葉の通り行動し始める。緑谷の例があるので念の為歩く爆豪の隣をついて行く。

パンドラはプロヒーローの個性を使えるのにも関わらず生徒の個性しか使っていない。これは全力でないと言えるのか？　そういえば緑谷が轟に言っていた。「全力も出さないで1番になって完全否定なんてふざけんなと思っている」

だからなんだ

最高のヒーローになるため自分が来たことを知らしめる訳でもない

最強のヒーローになるため完膚なき1位をとる訳でもない

この体育祭にかける思いは人それぞれ、あくまで個人戦なのだから誰がどうしようとどうでもいいではないか、だから目的のため爆豪の全力にパンドラは応えない。主人公は自分とばかりに自分勝手に踊り続ける。全力には全力を、普通は緑谷や爆豪の考えを正しいと言うかもしれない。それでも勝ちは勝ちだ。所詮勝った方が正義

もうすぐ場外に足をつく

あと3歩

2歩

1

「クソがァァァァァ!!」

「!?」

『爆豪洗脳解いたァァァ!?』

破られた。【洗脳】が破られた。

（8割の弊害がここに来て……）

個性を8割しか再現できない弊害は使ってみないと分からない。時間制限があるものは時間が、数に限りがあるなら数がと分かりやすいものなら予想できる。心操のは洗脳が本物より解けやすくなるものだったらしい。それでも至高の御方たちが解けなかったものを爆豪が解けるのか？

（意志の強さ……）

実験で御方たちは絶対解かなければならないという決意はなかった。

考えられるのはそこしかない。

つまり爆豪は勝つという目的のもと全力で抗った。

（そうだとしてもあと1歩！　強く背を押せば私の勝ちです！ありがとう緑谷くん心操くん！　念の為に横にいて良かった！　これでおしま――）

・・・・・・?

『あれ? パンドラ消えたァァァ!?』

続く

不完全燃焼

・・・・・・

『・・・　あれ？　パンドラ消えたァァァ!?』

・・・・・・

その動きを認識できたのはこの会場には４人しかいなかった。

「パンドラ〟ァァァ」

１人は拳を握りしめる美しいサキュバス

「まじ？」

１人は腹を抱えて笑うブレインイーター

「えっえー!?」

・・・１人はやせ衰えたとしても動体視力は現役なＮｏ．１ヒーロー

「・・」

・・・最後にパンドラに抱きつかれて現在声が出せないモモンガ

何が起こったのか説明するのは簡単である。パンドラがモモンガに抱きついてしまっただけだ。

いるはずのない父が来てくれた嬉しさか

それとも戦いの中で父の言葉を思い出したのが悪かったのか

この体育祭を個人戦と捉えていたからか

それとも全部なのかは分からない。

不運にもトドメをさす直前に遅れて応援に来たモモンガを見つけてしまった。つい反射で、しかも解けるはずのない縛りプレイを打ち破り人外じみた身体能力で父に飛びかかってしまったのだ。

爆豪は勝つという目的によって意志の強さを見せつけたが、同じようにパンドラは父への愛による意志の力で縛りプレイの呪縛を解き放ったのだ。それが良いことだとは一言も言っていない。

『おーっとパンドラァァァ消えたと思えば観客席にいるぞ！　どーゆーこと!?』

『意味が分からん』
実況の2人がやっとパンドラを見つけたようだ。ザワザワと会場がうるさくなっていく。それでもパンドラもモモンガも動かない。
『えーと・・これは・・』
「パンドラ場外！・・・爆豪くんの勝利!!」
「ふっざけんなぁぁぁぁぁぁ!!!」
爆豪は思わず爆破をかました。そりゃそうである。どう考えたってあの状況は爆豪の負けに王手がかかっていた。
完全に叩き潰すどころか追い詰められた挙句ふざけた理由で勝利を譲られた。普通の人でも納得のいく勝利ではないと思うだろう。
それを普通の人よりプライドの高い爆豪でやってしまった。
「おいゴラァァ降りてこいや！　こんな勝負無効だくそがァ!!　俺が目指しているのは完膚なき1位なんだよ！　やり直しだオラァァァ!!」
爆豪の声を聞いたのかパンドラはステージに戻ってきた。

自分の父を姫抱っこして
「まじふっざけんな！　ふざけんなぁァァ」
一般人がいるからか攻撃はしなかった。だが八つ当たりとばかりにステージで地団駄をふむ。
ここでようやく茫然自失していたモモンガが動いた。
「うちの息子がすみませんでしたぁぁぁ!!」
パンドラに1発入れてから地面に降り立つ。そのままパンドラの頭を鷲掴み自分と一緒に頭を下げさせた。
「本当にすみません。息子がこんな大切な勝負を投げ捨ててしまい申し訳ありません！　ほらパンドラも謝れ！」
「まさか・・・本当に体育祭見に来てくれると思わなくて・・・・・・つい。ごめん

なさい爆豪くん」
全力には全力を、応えなかったとはいえさすがに度が過ぎる行動だったかと、パンドラにも謝るべきことをしてしまったという自覚はあった。
「幼稚園児かよてめぇはよ」
爆豪は素直に謝られて拍子抜けしてしまったのか怒りが一時的に収まってしまった。
幼稚園の時、遊んでいる途中にも関わらず母が迎えにきたらすぐにそちらへ飛び込んで行く子供がいた。甘ったれと嘲笑っていた記憶がある。パンドラの行動は正にそれだ。思わず冷静につっこんでしまう
「本当にごめんね、俺の教育が行き届かないばかりに　えっと爆豪くんだっけ？」
爆豪は内心殴り掛かりたい気持ちでいっぱいだが何の非もない一般人を巻き込んではいけないという常識はある。
「ッチ」
『まさかのパンドラの敗因はファザコンンンンン！　そんな負け方ある!?　クレイジーだぜ!!』
『合理的じゃない　てか馬鹿だろ』
観客席からちらほら「ファザコン」と野次があがる。
ついにモモンガは顔を手で覆ってしまった。
こんな締まらない決着のつき方が今までにあっただろうか？
そんな不完全燃焼の雰囲気の中、パンドラだけは特にダメージをくらった様子がまるでなかった。むしろ父に生で活躍を見てもらい幸せそうでさえある。
「でも私的には大勝利」
「反省しろよ馬鹿ぁ！」
「今俺の嫌悪ランキング２位にランクインしたわゴラァ！」

――１０分後

さすがに生徒の席には保護者を入れることは叶わなかったので残念ながら父とは待機室で別れた。決勝戦までいけなかったのはパンドラとて予想外の出来事だったが自分の実力はある程度は伝えられたと思う。父も来てくれたしパンドラ自身は体育祭の結果にはそれなり満足していた。

「パンドラァァァ!!」

物間には泣かれたが

3位決定戦はないようなので、グチグチとうるさい物間のそばで決勝戦を観察する。

（ほぉー）

パンドラの感想

（顔凄っ）

爆豪はヴィラン顔で固定されたままだし、轟はさっきからずっとクトゥルフでも見てしまったような顔だ。SAN値チェックをおすすめする。

そんな状態で戦っているからか知らないが、最終的にもっとキレた爆豪に勝利の女神は微笑んだ。

『今年度雄英体育祭1年優勝は――……A組爆豪勝己!!!!』

???

オールマイトはドームの上で思わず苦笑いをしてしまった

（表彰台の上に喜怒哀楽が全部揃っている）

喜は飯田、楽はパンドラ、表彰台に乗れたのだから嬉しいのだろう。それは分かる。おかしいのは1・2位だ。まず轟は途中からずっと哀の表情を顔に貼り付けっぱなし、爆豪は爆豪で1位になれたのにも関

わらず拘束されてしまうほど怒り狂っていた。
（まぁ爆豪少年の気持ちは分からなくもないんだけどね！）
爆豪はただ1位になりたい訳では無い。完膚なき1位を取りたかったのだ。それが1・2種目ではトップを取れず、ガチンコバトルでは…
「今年…メダルを贈呈するのはもちろんこの人！」
オールマイトは少し思考に浸りすぎたと気持ちを切り替え、ミッドナイトの声に合わせてドームの屋上から飛び降りる。
「私がメダルを持って「我らがヒーローオールマイト！」来た！」
見事にすれ違った
（カブったあああああ！けれど私はめげないぞ！早速今回頑張った少年達にメダルをお届けする！）
心の中でひと騒ぎした後、シラケた空気をものともせず飯田の方へ歩き出す。
「飯田少年おめでとう！　君の戦いは正にインゲニウムを彷彿とさせるものだった。この調子でこれからも励んでいこう！」
飯田は恐縮です！　と勢いよく頭を下げる。ちらっと見えた顔は口元がムズムズしており嬉しさが隠しきれないようだ。可愛いなぁと思いつつオールマイトは思わずハグをかましてしまう
（さて次は）
横に目を向けると思いっきりパンドラと目が合ってしまった。
「パンドラ少年おめでとう！　君は個性も凄いが何よりそれを使う技量に驚かされたよ。これからもその力を存分に人助けで発揮していってくれ！」
飯田にもハグをしてしまったので流れでパンドラにもハグをする。ついでに疑問に感じたことを小声で尋ねてみた。
「なぁ君は民間人と父親、どちらを優先して助ける？」
「父上ですね」
即答された。思わずパンドラの顔をまじまじと見てしまう
「あなたも誰が聞いているか分からない廊下で大声を出さない方がいいですよ」

「っ！　君はどこまで」
（あの時居たのか？）
「轟くんが待ってますよ」
　意味深な言葉は気になるが今はメダル授与だと、とりあえずパンドラを今日の帰りに呼び止めようと心のメモに書き留めた。
「轟少年おめでとう！　途中から顔色悪いけど　それは決勝戦で炎を収めてしまったのと関係あるのかな？」
「全てに於いて分からなくなりました」
（なんだか深刻そうだ）
「俺は　あなたのようなヒーローになりたかった。けれどその前に精算しなきゃいけないことがある。そう、例えば親父との　親父？　試合で満面のえガガガガガガガ」
「轟少年んんん!?」
　ガタガタと震え始めたのでハグをする。轟は何とか落ち着いてくれたようで身体の震えは収まった。
（さて最後は）
「伏線回収お見事！　爆豪少年！」
　可哀想なのでオールマイトは口だけでもと拘束具を外してあげた。
「オールマイトォ俺はこんな屈辱的な1位いらねぇんだよ　認めねぇ　認めねぇぞ特にパンドラァ〟」
「顔やばいですけど大丈夫ですか？」
「ああ〟ん？」
「そこケンカしない！　うん、君のいい所は自分自身の中で絶対の不変評価を持ち続けられるところだ。今回は忘れぬ傷としてメダルは受け取っとけよ！　いつかちゃんと認めることが出来たらこのメダルを割るといい！」
「上等だァ！　完膚無きまでに叩き潰してメダルを粉々に砕ききってやんよ！」
「粉々に砕くよりも売った方が資金「黙れ！」えー」
　このままだとまたパンドラとの掛け合いが始まりそうだ。オールマイト急いで爆豪の首にメダルをかけ締めの言葉に入る。

「さァ！　今回は彼らだった!!　しかし皆さん！」
一息置く
「ご覧いただいた通りこの場の誰にもここに立つ可能性はあった!!
競い！　高め合い！　さらに先へ登っていくその姿！　次代のヒーローは確実にその芽を伸ばしている!!」
彼らは成長している。自分を超えて空高く
「てな感じで皆さんご唱和ください!!　せーの」
そんな彼らに今日贈る言葉は
「「プルス「おつかれさまでした!!!」ラ」」

（あれ？）
・・・・・・
???

パンドラは仮眠室にいた。いや、正確にはオールマイトに拉致された。
ＬＨＲが終わった直後に飛び込んでこられては流石にパンドラも逃げる暇など無い。俵抱きされてここまで連れてこられた。心操もあの時こんな気持ちだったのだろうと柄にもなくパンドラは悪いことしたと反省した。そして今度からは姫抱っこで連れて行ってあげようと決意する。
「君はどこまで把握している？」
パンドラは問い詰められることは分かっていたが思ったよりオールマイトは直球だった

「どこまでとは・・・？」
「聞いていたんだろう」
「師弟関係のことですか？」
「んん・まぁ」
「その口止めだけで私を拉致するわけないでしょう？」
　オールマイトはゆっくりと顔を正面に向ける
「なぁ」
「私はあなたに変化してみましたよ」
「・」
「私の知っているオールマイトにはなれなかった」
「・っ」
「そして1番不思議なのは」
　可哀想にＮｏ．１ヒーローは肩が硬直してしまっている
「個性が発動できない。私の【ドッペルゲンガー】は他者そのものに変化する能力。個性を持って生きてきたのなら変化した際、多少なり本体から読み取れるはず。しかし読み取れなかった。それが出来なかったのは今まで貴方と・もう1人」
　ヒーローは観念したように目を閉じてしまった
「彼も変化した際、個性の発動、読み取ることすら出来ませんでした。彼の名は緑谷出久、今日貴方が私も無個性だったと告白していた相手ですね」
「君はもう分かってしまったのだろう」
「それだけだったら言いきれなかったかもしれませんが貴方たちの個性は似すぎている。無個性から個性持ちになった件についても。疑念は確信に変わりましたね。これはもう私が貴方達2人に変化した時点で決まってしまった運命だったんです。清く話してしまった方が宜しいのでは」
「私は今君に話すのを躊躇している」
「表彰台の答えが原因ですか？　あれは貴方の質問が悪すぎます。民間人も父上もどちらとも救う努力はします。究極の選択なら父を取ると言うだけで」

「いやそれは・・。それだけじゃない、巻き込みたくないんだ」
「余計なお節介はヒーローの・なんでしたっけ？」
・オールマイトはため息をつき、トゥルーホームに戻った。
「・分かった。これから話すことはくれぐれも」
「口外しません。・私だってヒーローの端くれです。知ってしまったからには貴方達の力になりたい」
　諦めてしまったオールマイトはワン・フォー・オールについて語った。その話には元々ナザリックが把握していたものもしていないものもあった。
（個性ってなんにでも理由になり得るんですね・・）
　確信も何も緑谷出久のことも個性が受け継がれていることは事前に知っている。だがパンドラはいかにも【ドッペルゲンガー】の個性と今日の会話で確信を得たとオールマイトに思わせた。
　今回パンドラは（傍から見れば）個性故に疑問に思っていたピースが偶然聞いた話によって揃い衝撃の事実を知ってしまった被害者の立場だ。秘密がパンドラにバレたのは警戒を怠ったオールマイトの方に非がある。
　パンドラは警戒された時どうしようかと一瞬悩んだが、そのうちオールマイトと緑谷の秘密の会議に入れてもらうつもりだったので良く考えれば丁度いい機会だったのだ。
（ワン・フォー・オール継承者に堂々と直接質問する権利を手に入れることが出来ました。これで研究も少しは進むはず・・）
「さて、こちらも秘密を話したんだ。君のことについても教えてくれないかい？」
　いつの間にかオールマイトの手には様々な種類の飲み物とゲーム盤が

「てな訳で最終的にオセロで私が全勝しました」
「オールマイトと緑谷に自然に情報を聞き出せる状況になれたのはデカイな。良くやった。けど遅くなるならちゃんと連絡しよう？」
「申し訳ございません。ところで誰かこの家に？」
　机の上には2人分のティーカップが置かれていた。
「ああ、ちょっとウルベルトさんがな」
「あの方ヨーロッパ地方で活動していませんでしたっけ」
「うん、なんか興味深いのを見つけたからしばらく日本にいるんだって。なんだったけ。　あっ！　そうそうヒーロー殺しだ。ほら今丁度テレビでやっている」

『現在各地で存在が確認されているヒーロー殺し、今日もまた新たな土地保須で2名もの被害者が出てしまいました。1人は重症、もう1人は死亡。死体には拷問された痕跡が――』

続く

職場体験
開演時間にご注意を

体育祭翌日
「ねぇあれファザコンのお父さんじゃない？」
「ファザコンのｆａｔｈｅｒ」
「体育祭３位に一発入れた男」
「思ったよりやつれているんだな」
（パンドラァァァ！　泣）
モモンガはパンドラを恨んだ。
いつもの時間にいつものように電車に乗っただけなのに何故こうも注目されないといけないのだと、これも全て全国放送で自分をステージなんかに連れ出すからだと
こんな事になるなら馬鹿正直に電車なんか乗らず転移魔法で会社に行けば良かったと後悔した。だがもし何かあった場合アリバイがなくなってしまう。つくろうと思えばつくれるが人間として溶け込むにはこういう細かいところでズルしない姿勢が大切なのだ。
結局この事態は決められた運命だったのだろう。
というかそれ以前にパンドラの名よりもファザコンが世間に定着しているってどうなのか
突き刺さる視線に耐えながら必死に体を縮こませやっとの事で目的の駅に着いた。
しかしまだまだモモンガの苦難は続く。
「はいっ！　こちらキャンキャンチャンネル～！　今回はですねぇあの雄英体育祭で見事３位に輝いた重度のファザコンで有名な鈴木くんのお父さんにインタビューしていきたいと思いまーす！」
サングラスをかけた２人組が行き先を塞いできた。この時間は朝の通勤ラッシュである。邪魔すぎる
「あの、会社行きたいんでどいてください」
「せっかく出会えたんですからそんなこと言わずに～」

「いやいやいや」
モモンガは抵抗してみたがどいてくれる気配が全くない。
この見た目だからこそ舐められているようだ。死の支配者スタイルだったら絶対に絡まれなかった。
「どんな教育したらあんな風に育つんですかー？」
「画面の向こうにいる視聴者が待ってますよー？」
勝手に質問タイムが始まってしまった。このままでは他の人にも迷惑がかかってしまう。現にすれ違う人が怪訝な顔でこちらを見ていた。
（いっそのこと不死者の接触（タッチ・オブ・アンデス）でも使うか）
人目は多いがしょうがない。体調不良で倒れたことにしてもらおう。
邪魔者2人に手を触れようとした瞬間
『その人嫌がっているじゃないですか！』
中性的な青年が声をかけてきた。
モモンガには翻訳された言語が聞こえてくるようになっているので問題ないが、話しかけられた邪魔者はギョッとしたような表情になる。
『そもそもこんなところで絡むなんて通行人の邪魔になりますよ！少しは考えて行動してください』
「おーけーおーけ！　シーユーアゲイン！」
「グッバイ！　グッバイ！」
知らない言語で捲し立てられてビビったのか邪魔者は逃げるように帰っていった。
「ダイジョウブデスカ？」
『うん、ありがとう』
『!?　僕達が使う言葉！　喋れるんですか!?』
青年は驚いているがこれも魔法の一種だ。別に言うことでもない。それよりもモモンガは追い払ってくれた礼を確実に伝えたかった。
『少しだけな、本当にありがとうね。煩わしくて仕方なかったんだ』
『とんでもない！　僕達はここではヒーローを名乗れる免許を持って

いるんです。ヒーローを名乗るなら当たり前の行動をしただけですよ！』
ふんすと胸を張る様子は微笑ましい。イラッとした気持ちも浄化されるようだ。
『ニニャ――！　早く行くぞ！』
『あっ連れが呼んでいるのでこれで失礼しますね。それでは良い一日を！』
『うん、良い一日を』
青年が向かう先には男が3人居た。仲が良さそうにじゃれあっている。
（俺たちみたいに強い絆で結ばれているんだな）
朝からいいものを見た。時間が押しているので自分もさっさと移動する。そして帰ったらパンドラに説教しようとモモンガは心に決めた。

???

雄英体育祭から2日後、
あいにくの雨だが今日からまた学校が再開される。
体育祭後のＬＨＲの連絡によると今日はプロヒーローからのドラフト指名が発表される予定だ。
ブラドが苦笑しながら「ほぼ興味みたいなもんだからそんな身構えなくていいぞ！」とこぼしていたが、それは逆に言うと興味持っただけで取るとは言っていない。一方的なキャンセルが有り得るわけだ。
（どれだけ指名が来たか楽しみですね）
自分がどれだけアピールできたか明確に数字で表示される。パンドラとて少しはドキドキしているのだ。
キーンコーンカーンコーン……

「おはよう！　みんな楽しみヒーロー情報学の時間だ！　指名の発表だ！」
「「来た――――！！！」」
「説明は２日前にしたから早速集計結果を出すぞ」
Ｂ組指名件数
パンドラ（鈴木）　４２５９
塩崎　２８６
鉄哲　６７
拳動　２３
物間　８
骨抜　１
小森　１
「まぁ、我がクラスではパンドラがぶっちぎりだったな。３位の結果とやはり個性の万能性が買われたみたいだ。同じ理由で物間にも何件か指名が来た。ちなみにパンドラのドラフト数は１年でトップだ」
「ははは！　そうだよね！　僕達自慢のパンドラはやっぱり１位だったんだ！　結果は体育祭の順位であらずプロヒーローにどれだけ認めっグハァ」
いつの間にか拳動が物間の近くにいた
「話が進まないから少し黙っとこ、私のは出身中学校のネームバリューもあるだろうなぁコレ」
「それでも指名が来ただけまだいいじゃないか～」
「そーそー私らなんかゼロよゼロ」
凡土と取陰が不貞腐れたようにヤジをとばす。
「はい静かに！　この結果を踏まえて君たちには職場体験に行ってもらう。後で指名が来た者は個別にリストを渡すから自分で選択するように、なかった者にはこちらからオファーした全国の受け入れ可能な４０件から選んでもらうぞ。それに当たって今日はお前たちに決めて貰わないといけないことがある……」
教室にピリッとした緊張がはしる……

「そう！　コードネーム！　ヒーロー名を決めてもらう!!」
「「待ってましたぁぁぁぁぁ！」」
「ＹＥＡＲＲＲＲＲＲ！」
　生徒の叫び声と合わせてプレゼント・マイクが飛び込んできた
「マイクうるさいぞ。恥ずかしい話俺にはそういうセンスは自信なくてな。最初はミッドナイトに頼もうと思ったがイレイザーに先とられた。コイツはそのイレイザーの名付け親だと聞いて急遽頼んだんだ。多分俺よりはマシなセンスをしているはず」
「ごしょーかいドウモ、今から板を配るからそこに自分の魂のヒーロー名を刻みこめぇ！　そして出来たやつから壇上で発表！　俺がリスナーのヒーロー名をクールにｃｈｅｃｋ！　Ａｒｅ　ｙｏｕ　ＯＫ？」
（あの髪型でまともな判断が出来るんでしょうか）
　プレゼント・マイクに何を言われようがパンドラは自分のヒーロー名を変えるつもりはない。なぜならこの名前は
「名は体を表すって言葉があるだろ？　将来なりたい自分にふさわしい名前を考えるよーに」

――１５分後

「そろそろ決まったヤツがいるかな!?　発表するやつＨａｎｄｓ　Ｕｐ！」
「はい！」
「１番手パンドラァァァ！　早速オープン！」
　スタスタと壇上にあがり、ひとつ礼をしてから板を掲げた。
「私のヒーロー名はパンドラズ・アクター。私の存在はこれ以上でもこれ以下でもありません。この名を侮辱する者は現世から退場してもらいます」
「俺に判断させる気ゼロッ！　けど語感もいいしいいんじゃない!?

グレート！　ほらほら他のやつもパンドラズ・アクターに続けぇ！」
　クラスメイトは慌てたように手を挙げ始めた
　クラス全員がパンドラのヒーロー名を聞いた瞬間、それが本当の名前だと言っても過言ではないほど彼にピッタリだと感じた。それに驚いて少しの間ポカンとしてしまったのだ。
「リアルスティール!!」
「分かりやすい！」
「マッドマン」
「マンは王道！」
「スパイラル！」
「回れまわれぇ！」
「？ンパンマン」
「やめよう庄田」
「ワン？ンマン！」
「逆になんで角取」
「アマイマスク」
「さっきヒーロー名侮辱したら殺すって言ってなかった？」
　なんだかんだ言ってクラスメイト全員が授業内にヒーロー名を決め終えた。
「このクラス英語表現が多いな！　俺をリスペクトしてんのか!?　嬉しいぜ！」
「んなわけないだろ、じゃあ配った紙から職場体験先を決めとけよ。悪いが期限は2日後、相談があるならいつでも乗るからな！」
　そう言ってブラドとマイクは教室から出ていった。
「パンドラ・・君、その量やばいな・・」
　前の庄田が若干引いたような声色で話しかけてきた。
　パンドラの手元には辞書レベルといっても過言ではない厚さの紙の束が置かれている。
　何気なしにパラパラめくっていると
「おや・・」
「何かあったのかい？」
・

そこにあったのは

エンデヴァーヒーロー事務所

（Ｎｏ．２からのお誘いですか、Ｎｏ．２に呼ばれた実績は後からの評価に繋がりそうですね。候補としてはいいかもしれません。本当はＮｏ．１がいいんですけど…頼んでみましょうか？）

……

――時は経ち放課後

「よしっ俺はフォースカインドのとこに行くっ！　そこで俺は漢になる！」

「私は…ウワバミのところかなぁ、指名の中で１番知名度高いし女の先輩ヒーローとして聞きたいことあるし」

教室では職場体験について盛り上がっていた。

パンドラは今日のスキマ時間で全ての事務所に目を通しきったが、やはりこの中であればＮｏ．２の所が妥当だろう。

（オールマイトに断られたらＮｏ．２の所にしましょう）

早速オールマイトを探そうとパンドラが席を立った瞬間、ドアの外から丁度オールマイトの声が聞こえた。

オールマイトが個人的に教室に来る場合は大抵緑谷目的だ。きっと今回もそうなのだろう。パンドラとしてはこの上ないナイスタイミングだ。バックを持ち直し挨拶もそこそこにオールマイト達の後を急いで追いかける。

「オールマイト！　緑谷くん！」

２人はビクッと肩を揺らし恐る恐るこちらを見た。オールマイトは何故かダラダラと汗をかいている。緑谷は緑谷でどんな顔をすれば良いか分からないとばかりに目を泳がせまくっていた。

パンドラに秘密がバレてからの初めての邂逅である。オールマイトからバレた話を聞いていた緑谷の背筋に謎の緊張が這い上がる。

「そんな警戒しないで下さいよ……私悲しくなっちゃいます。それより

もまさか貴方たち、懲りずにまた誰が聞いているか分からない廊下で話を始めようとしているわけないですよね？」
２人の肩が揺れる。呆れたようにパンドラはため息をついた
「秘密に少しでも関係することなら仮眠室で話しましょう。オールマイト、貴方ならその体調を理由にすれば学校側は快く貸してくれるでしょう？」
「うん」
オールマイトは体を小さくしながら職員室に向かっていった
「さて、私達は先に仮眠室の前で待っときましょう」
「うん」
オールマイトと同じように緑谷も体を縮こませながらパンドラに続いて足を踏みだした。

「お２人に欠けているのは圧倒的な周りへの警戒心の薄さです。私の父なんか秘密の話をする時は石橋を破壊して石橋を作り直す勢いで周りを気にしていますよ！　見習ってください！　私の！　父上の！　素晴らしい慎重さを！」
「返す言葉がございません」
無事仮眠室使用権利をＧＥＴしてきたオールマイトと緑谷を部屋に連れ込みパンドラはまず説教から始めた。慎重をモットーにしている父から育てられた身からしたら、２人の行動はそれほどまでに信じられないものだったのだ。
「で、オールマイトは緑谷くんに何を話したかったんですか？」
「あっうん、緑谷少年にひとつ指名が来ていてね。それが私の担任だった方なんだよ　ワン・フォー・オールのこともご存知だ」

おっ？　とパンドラは心の中で前のめりになる。今のところナザリックが把握していない情報を手に入れることができそうだ。
「グラントリノは先代の盟友、もう隠居してるからカウントしてなかった。私のかつての名を出して指名してきたよ。怖ぇ怖ぇよ。私の指導不足のせいかなどう思う？」
全身が震えているがパンドラには関係ない。グラントリノについてはそこまで目新しい情報でもない。パンドラは少しだけ残念な気持ちになったが気になる単語があった。
「私的には指導不足に1票です。それよりも私は先代について教えて欲しいですねぇ」
「オールマイトがガチ震えしている。先代のことは僕も気になります！」
そう、話に出てきたお師匠について、この前オールマイトが白状した話は主にワン・フォー・オールの成り立ちや性質ばかりだった。パンドラ達ナザリック勢はオールマイトになる前の過去などについては知らないことの方が多い。
「私の。お師匠だった人だよ。名は志村菜奈、個性は【浮遊】」
「。ワン・フォー・オールを受け継ぐような個性じゃありませんね」
「そりゃそうだ。この力は託し託されて、やっとの事でここまで受け継がれてきたものだからさ。はい！　この話はおしまい。どうする緑谷少年？　グラントリノの所へ行くかい？」
強引に話を打ち切った。これ以上言うつもりはないようだ。だが今後も話を聞く機会は沢山ある。パンドラはとりあえずそれ以上の詮索をやめた。
「ぜひとも行きたいです！」
「うん分かった。パンドラ少年の方は職場体験どうするんだい？」
オールマイトの方から話を振ってきた。
「貴方の所ってダメなんですか？」
「ＨＡＨＡＨＡ！　ごめんねお断りさせてもらうよ！　最近活動限界がヤバくてね。それに君は体育祭で一瞬だけ見せたあの動きを常にできるのかい？　できるなら考えるけど出来ないなら。酷いこと言

うけどヒーロー活動の邪魔になるのはちょっと困るなぁ」
本当に欲しいのはＮＯ．１の所で職場体験をしたという実績だが、そう言われてしまうとパンドラは何も言い返すことが出来ない。
職場体験はあくまで本場のヒーローの邪魔にならない程度でちょこっとお邪魔するだけ。
本当の身体能力を制限されているこの身では例えホークスやミルコの個性を使ってもオールマイトについて行くことすら難しい。
かといって抱えて移動させられてもこちらはダメージを喰らうし、一瞬の判断がものを言う現場ではいるだけで活動を阻害するだろう。
更に言うとオールマイトの戦い方は誰にも真似できるスタイルでは無い。得るものは己の無力さとオールマイトの規格外さを再認識することだけだ。
「聞いてみただけです。大人しくエンデヴァーの所に行きますよ私は」
「えっエンデヴァーに誘われてんの!?」
「Ｎｏ．２に選ばれるなんて凄いよ！　やっぱり個性の万能性が目に付いたのかな、それともブツブツ」
目を見開いて驚きを露わにするオールマイトとお得意のブツブツが始まった緑谷、２人の顔を見てパンドラはもうひとつため息をついた。

オールマイトと別れた２人は並んで駅まで歩いていた。
特に話も無く、無言が続いたのでパンドラは適当に今日気になった

ことを聞いてみる。
「そういえば今日お隣から委員長の声がしませんでしたね？」
飯田の声はよく通るのだ。１年Ｂ組の生徒は１日１回は飯田の声を廊下越しに聞いている。
「あっ…うん、１回学校に来たんだけどね、すぐ早退しちゃった」
「？　何かあったんですか」
「お兄さんが…あっ飯田くんのお兄さんってインゲニウムっていうヒーローなんだけど意識不明の重症らしいんだ、ほらこれ、もう記事になってる」
緑谷がスマホを操作して見せてきた記事には

『続くヒーロー殺しの凶行！　保須市の３人目の犠牲者はインゲニウム！　先月死亡したヒーローと同様全身を拷問されたような痕跡を残しておりヒーロー殺しの残虐な性根が垣間見られ――』

どこかで開演のブザーが鳴り響いた気がした

続く

轟少年の受難

「えっ葛餅がお好きなんですか？　顔に似合わないですねぇ」
「黙れ、1回黙れ。その空いた口を1回閉じろ」
（なんでこうなった？）
轟焦凍は移り変わる景色を眺めながら、何故こんな状況になったのか一生懸命考えていた。

数時間前

「待っていたぞ焦凍」
窓から差し込むオレンジ色の光が轟親子に影をつくる。轟は自分の職場体験先であるエンデヴァー事務所にやってきていた。
「ようやく覇道を進む気になったか」
そんなつもりはサラサラない。そう口に出そうとしたが
「あいつを指名したのは無駄ではなかったな、きっとお前のいい踏み台になるだろう。ん？　ところであいつはお前と一緒じゃないのか？」
轟は首を傾げる。
あいつとは一体誰のことなのかと
「おい、あいつって誰だ」
「？　聞いていないのか、個性だけみれ「お待たせしました！」ば来たか」
派手に音をたてながら部屋に入ってきたのは埴輪のような顔をした隣の生徒だった。
「ブラド先生のお話が思いのほか盛り上がりまして予定の電車を1本逃してしまいました。どうも鈴木二重です。ヒーロー名はパンド

ラズ・アクター！　是非とも轟くんとは電車の中で語り合いたかったのですがね！　残念です」
パンドラから自分の名が出て、轟はピクっと肩をあげた。
バクバクと鼓動が早くなっていく。
1週間ほど前だっただろうか、轟はおかしな症状に悩まされていた。例えば廊下を歩いている時、登下校、食堂、パンドラを見る度に轟の鼓動は性急に活動するようになったのだ。
最初は気の所為だと無視していたが、何度も何度もうるさくなる鼓動に轟は原因解明に乗り出した。その結果分かったことは1つ、体育祭に何かあったらしい。
らしいと言うのは体育祭の一部の記憶が轟には無かった。
何があったのか体育祭の録画、ＤＶＤ、動画に挙げられていたものを全て見返してみたが、失われたであろう記憶に差し掛かったところで意識が強制的にシャットアウトされてしまう。
ならば人に聞こうとしたが、失われた記憶の間でパンドラと戦った常闇に聞いても「いい同士に出会えた」としか言わないし、緑谷に聞いても「ああ・・・うん」と誤魔化されかけた挙句最終的に教えてくれたようだが轟の耳はその話を脳に届けてはくれなかった。
よって轟にとってパンドラとは、目に入るだけで自分の鼓動をあげる意味のわからない生物という認識だった。
「2人揃ったか、じゃあ行くぞ」
「どこへ？　何しに？」
詳しいことは何も話さずさっさとドアに向かって歩くエンデヴァーの背中に轟は慌てて声をかける。答えは自信に満ち溢れた声色で帰ってきた。
「お前らにヒーローというものを見せてやる」
「Ｎｏ．２の？」ボソッ
「黙れ、ヒーロー殺しを捕まえに保須市に出張する。今すぐ保須市に連絡しろ！」

冒頭に戻る

移動手段は新幹線だった。
席は1つ前の座席を回転させ四人席をつくった。何かあってもすぐ動けるようエンデヴァーは通路側に座る。轟はエンデヴァーの前はもちろん隣も嫌なので必然的に斜め前になる。パンドラは奥に座るのがめんどくさかったのかエンデヴァーの目の前に座った。これがいけなかったのかさっきから2人の会話は（主にエンデヴァーが）殺伐としている。
近くの席にいる中性的な青年含む外国人男性4人組が心配そうにこちらを見ているが轟は無視した。2人に関わりたくないのも理由の1つだが轟の身には数時間前から新たな問題が発生していたからだ。
それにより会話を止めることが出来なかった。
（心拍があがるのに加え冷や汗と体の震えと頭痛が止まらねぇ）
どうもエンデヴァーとパンドラを一緒に見ると体調がより悪化し始める。
理由はさっぱりだがこの職場体験を有意義にするにはこれを克服する必要がある。逆に見続ければ慣れて治まるかと思い、実践してみたが5分ほどで体が限界を迎えた。こうなれば2人からできるだけ目をそらすしか轟に方法はない。なのでさっきから轟は見たくもない外をじっと眺めていたのだ。
「父上は最近卵焼きが上手く作れるようになったんですよ！　素晴らしい進歩だと思いませんか!?」
「俺でも作れるわぁっ！　なんならしそ巻入も作れるからな!?」
くだらない話がまだ続いている。黙ってそれに耳を傾けるよりは自分の体調悪化の原因を考えている方が何倍も有意義だ。
轟の優秀な頭は周りの雑音を排除し高速で動き出す。

周りの変化、世間の流れ、クラスメイトの会話など様々な情報が駆け巡る。その中でひとつピンとくる会話があった。
『このクラスはまだ恋が始まった様子はないかぁー誰か始まりそうな人いない？　ヤオモモとか！』
『いえ　私にはそんな相手　そういう芦戸さんはどうなのでしょうか？』
『残念ながら無し！　あ～私も好きな相手を見てドキッとかしてみたーい！　もしくはそんな状況に陥っている子を見守りたーい！』
症状は似ている。
もしかしてこの胸の高まりは
「これは　恋？」
「轟くん恋してるんですかっ!?」
「どこのどいつだしょしょしょ焦凍ぉぉぉぉぁ!!」
さっきまで騒いでいた2人が揃って轟を注視する。
パンドラは単なる興味本位、エンデヴァーは（ほぼ消えかけている）親としての責務からだ。
「パンドラ、お前を見ていると胸が痛くなるんだ」
一瞬天使が通った
「私　ですか？　いやーはい気持ちは分かりますけどね、うん私カッコイイですもん」
「やめろぉぉぉ焦凍ぉぉぉ考え直せぇぇぇ!!!」
エンデヴァーは思わず立ち上がった。轟は動じず言葉を続ける。
「最近お前を見ていると胸がバクバクする」
「おおー」
「焦凍ぉぉぉぉぉ！」
「今もお前（とエンデヴァー）を見ているとそれに加え冷や汗と体の震えが止まらない」
「　はい？」
「焦凍ぉぉぉぉぉぉ！」
「あと頭痛もする。それを踏まえてお前に俺は恋しているのかと」
「それ恋じゃないですね」

「焦凍ぉぉぉぉぉぉ！」
　ようやく辿り着いた答えを否定された轟はならこの症状をどうすれば説明できるのかとパンドラを見つめる。
　パンドラは真っ直ぐ轟を指さした。
「おそらくそれは？　私に対して憧れを抱いているのでしょう」
「憧れ？」
「んなわけあるかぁ！」
　轟がつぶやくように言葉を繰り返すとパンドラはひとつ頷いた。
「私の知っている方は憧れの人物（どちゃクソ好みのロリ）を見ると（興奮から）体の震えが止まらなくなり（テンション上げすぎて）頭痛をおこし（体の全細胞を活性化させるせいで）汗が止まらなくなるそうです。轟くんの症状と似ていませんか？」
　エンデヴァーに積極的に喧嘩を売りにいくスタイルは素直に凄いと思っていたが？
　轟は出口のない暗闇に光が舞い込んできたように感じた
「そうか？　俺はお前に憧れていたのか。ありがとう理由は分かった。けれどこの症状はどうやったら治る？　このままだと職場体験に差し支えるんだが」
「目を覚ませ焦凍ぉぉぉぉぉぉ！」
「あの方が言うには隅々まで舐め回すように見て目を慣れさせれば次は冷静に（ロリの身体構造を）分析出来るようになると言ってました」
「その方法しかないのか？」
　轟は意を決してポーズを決めながらそのポーズがどういう効果があるか解説し始めたパンドラをガン見する。
　これだけ騒いでいたが席自体は変わっていない。パンドラの目の前に未だブツブツと文句を言いながら座る、体の大きいエンデヴァーが轟の視界の端にバッチリと紛れ込んでいた。
　そのまま５分、１０分、１５分
「おぼろろろろ」
「轟く――ーん!?」
「焦凍ぉぉぉぉぉぉ!?」

吐いた

職場体験２日目
「おはよう、よく寝れたか」
「まぁ」
「それなりに」
本当は昨日の内に職場体験の内容について話終えているはずだったが轟が吐いたため今日に持ち越された。職場体験２人は各自部屋に案内され轟は精神的に疲れたため早々に寝落ちし、パンドラは父の待つ家に嬉嬉として帰還した。
そして現在３人がいるのは保須市を活動地点としているヒーロー事務所につくられた戦闘訓練所、全員コスチュームもバッチリと着込んでいる。
轟の体調がすっかり良くなったのを確認し、エンデヴァーは本題に入る。
「さて、俺達がここに来た目的は今巷を騒がしているヒーロー殺しの確保のためだ。現在保須市ではヒーロー達が連携して２４時間厳戒態勢でパトロールを行っている。お前らは俺と一緒にそこ参加してもらう」
「今からですか？」
パンドラはご丁寧に挙手をしてから質問をぶつけた。
「いや、俺達のパトロールは夜からだ。昼は他のヒーローとの細かな打ち合わせや会議があるんだが、この朝の時間は比較的自由時間、そこでこの時間はお前たちの戦闘訓練に使おうと思う」
「それはそれは光栄ですね」

「……ッチ」
「ではまずお前らの個性の確認だ。自分自身の個性で何が出来るのか、それを俺に説明してみろ。拒否権はないぞパンドラ」
体育祭の時に拒否したことを覚えていたのか、エンデヴァーは絶対逃がさないとばかりに語尾を強調する。
「さすがにこの場合はちゃんと教えますよ……私の個性は【ドッペルゲンガー】他人の姿、個性の８割を再現することができます。さらに１４個までならストックすることも可能です。戦闘に幅を持たせることはもちろん、他のヒーローのサポート、救助、捜査までどんな場面でも対応することが出来ると自負しています」
パンドラは淡々と事実を伝える。
「８割方は惜しいが、やろうとすれば何でも出来る個性だな。ただ効果を最大限発揮するには何万通りの戦略から最善を選ぶ判断力が必要とされる……か」
エンデヴァーは髭を触りながら何か考え込むように下を向いた。と思えばすぐに次はお前の番だとばかりに轟の方を見る。
それを受けて轟は口を開いた。
「俺は【半熱半冷】炎と氷を出せる。炎と氷がお互いのデメリットを打ち消せるから長期間パワーを落とさず戦える。広範囲攻撃も可能、温度や動きの調節はまだ未熟だからサポートとかは自信が無い」
「そうだ、最高傑作であるお前は炎の方も使えば十分能力はあるんだ。さっさと意地を張らずに使え」
「……使うさ、だが勘違いするな、お前に言われたからじゃない」
轟はエンデヴァーを睨みながら小さく呟いた。その言葉にエンデヴァーは満足そうに頷く。
「じゃあ次だ。とりあえずお前ら、ちょっと戦ってみろ」
軽く告げられたその言葉に
「「……」」

２人はお互い顔を見合わせた。

続く

小ネタ

＜母の日＞

皆さん5月といえば何を浮かべるだろうか？　ゴールデンウィーク？　運動会？

様々なイベントがあるであろうこの月には、毎年第2日曜日に母の日がある。

その前日にして土曜日、普通は休みなのかもしれないがこの雄英高校は当たり前のように授業が入っている。ハードな一日を終えたヒーロー科1年B組は、明日母に何を渡すかで盛り上がっていた。

「私は普通にカーネーションかな」

「かたたきけん」

「筋肉ショー」

「それ喜ばれるのか」

「パンドラはお母さんに何かあげるの？」

一人一人が発表していく中、当然パンドラにも出番が来る。しかし

「私に母なんていませんよ」

そう、パンドラには母がいない。それ以前に自分がどうやって生まれたかすら知らないのだ。パンドラ自身それについて特に思うところはない。なんて言ったって自分には愛しの父がいる。その事実だけで十分なのだ。

だが周りは違う。触れてはいけないところに突っ込んでしまったと微妙な雰囲気になった。普段からパンドラの父に対しての盲信的な愛の言動を考えれば、話にひとつも出てこない母の存在には何か事

情があることを察することが出来たはず。声をかけた切陰は軽率すぎたと反省した。
「・・なんか・・ごめん」
「・・えっどうし・・ました？　それよりも母の日のプレゼントですが私、父上にカーネーションの香水を渡そうと思っています」
「なぜ香水？」
　母の日なのに父に渡すのか？　そんな疑問は毎日パンドラの言動を目の当たりにしているクラスメイトは当然のようにスルーした。それよりも興味を持ったのはなぜパンドラは香水を選んだのかということ
「んー母の日、父の日、敬老の日、父上の誕生日、日本には感謝する日が多くありますからねぇ、毎回普段使いできる物を送っているんですけど。ハンカチやらネクタイやらとっくの昔に渡してしまって選択肢が限られてきているんですよ。それでタブ・・・尊敬する知り合いに相談したら香水を勧められました」
　確かに匂いは人の印象を左右する効果をもたらす。その点では香水も普段使い出来る品とも言えるかもしれないと全員納得した。
　まさか敬老の日も父に贈り物をしていたとは考えてもいなかったが、言ってないだけで他の日にも贈り物を渡しているような気がする。突っ込むだけ無駄だ。
「それで香水か・・・そういえば匂いってさ」
・・・

パンドラは夕焼けの中を歩いていた。
思い返すのはクラスメイトの会話
『匂いってさ、運命の相手を見つけるための役割もあるらしい』
見た目だけ見ればモテそうな物間のこのセリフで、一気にクラスの話題は恋愛関係にシフトチェンジした。
黒色がクールさを投げ出して狼狽えていたのが印象深い
それはそうとしてパンドラ的にはどうでも良い話題であった
（父上は無臭です）
人間形態では服などに染み付いた匂いなどがまとわりついているが、モモンガの真の姿は骨だ。基本無臭である
（父には運命の相手などいない）
例えいたとしても匂いでは分からない。モモンガを見つけることなどできはしない。
（もしその運命の人とやらがありもしない匂いを感じ取れたとしても）
パンドラは数日前入手したカーネーションの香水を思い浮かべる。
（カーネーションに邪魔されてしまえ）
ナザリックのメンバーが尊敬、友愛、親愛としてモモンガに接するのは全然構わないのだ。それでモモンガが幸せなら、だがもしパンドラの知らない運命の名がついた何かが、モモンガをパンドラから奪うというのなら
（）
母の日の起源には様々な説がある。有名なのはアメリカの女性が「自分の亡き母を追悼したい」という想いから、教会の参列者に白いカーネーションを配ったことにより始まった説だ。
今日本で定着している赤いカーネーションの花言葉は、「母への愛」や「母の愛」「純粋な愛」「真実の愛」。白いカーネーションの花言葉は「私の愛情は生きている」や「尊敬」
パンドラも傍から見れば亡き母がいるの身なのかもしれない
それでも亡き母に白いカーネーションを渡す気すら湧かない

パンドラは赤いカーネーションをモモンガに渡したかった

（私にとってモモンガ様は父であり母であり神なんです。私にはモモンガ様さえいてくれれば良い）

だけどそれよりも、何よりもモモンガの幸せになるためなら

きっと自分はモモンガの傍を離れることを厭わないのだろう

課題

お互いが見つめあったのはほんの僅かであった。
体育祭後に少し仲良くなった緑谷でさえ訓練では容赦なく戦う。ヒーローとしてのスキルアップのための訓練なら相手が誰であろうと全力で取り組まなければならない。
たとえエンデヴァーに命令されたとしてもだ
轟からパンドラに目掛けて氷が形成されていく。
パンドラも大人しく氷に囚われるつもりはないようで、軽く右にジャンプするついでに赤い羽根を背中から生やす。1秒後にはパンドラの姿は消え、ホークスがその姿を空中に現した。
（上を取られたか）
戦いに置いて位置取りは大切だ。どう足掻いても下からよりは上からの攻撃が優勢なのは覆せない。
（けれど相性的にその選択は悪手だ、パンドラ）
轟は炎に攻撃を切り替えた。
いくらホークスの羽に硬度があったとしても所詮羽は羽だ。燃やせばよく燃える。
轟の考えるように炎に当たりたくないのかパンドラは炎が届かない範囲まで一目散に逃げる。だが逃がすほど轟は甘くない。ここは一般的な体育館程度の広さしかないのだ。移動しながらパンドラの逃げ場を防ぐように炎の向きを変える。
（とりあえず炎で羽を燃やして下に落とそう）

戦闘が始まってから5分たった。

「当たらねぇ」
パンドラに炎が全く当たらない。
しかも全力で慣れない炎を出し続けているせいで思ったより早く身体に熱が溜まってきている。氷で冷やさなければ身体が動かなくなる。
轟は炎の攻撃をやめ氷の攻撃に切り替えた。パンドラだって５分間動きつづけて少しは動きが鈍くなっているかもしれないと希望的な観測を持つ。
（もしかしたら氷で拘束できるか？）
そうは上手くはいかないだろうと思いつつパンドラ目掛けて割と大きめに氷の氷壁をうちだす。
その瞬間パンドラの姿がどろりと溶けた
「ＹＥＡＲＲＲＲＲＲ!!」
氷が砕け散り凄まじい爆音が轟に襲いかかった。
（プレゼント・マイクか！）
ホークスに炎を当てることに熱中しすぎてパンドラは１４の個性を自由に使える新情報がすっかり頭から抜け落ちていた。炎を当てたからって勝ちというわけでもないのに・・・我ながらバカなミスだ。
（いや、反省してる場合じゃねぇ！）
今この瞬間にもパンドラは轟への距離を詰めてきている。
氷では砕かれる。ならばと炎に切り替えたがまだ十分に熱が冷めていない。身体の負担を考えると炎の規模は自然に小さくなった。
最初のようにもっと勢いのある炎だったら
もしくはマイクの身につけている方向性スピーカーをパンドラが再現しきれなかったのなら
未来はまた違ったかもしれない。
炎は音で、無情にもかき消された
「くそっ」
絶え間なく続く爆音でついに轟は自身の目と耳を塞いでしまう。この時パンドラの体はまたしてもどろりと崩れ落ちた。
五感のうち２つを防いでしまったせいか、轟は爆音が収まったこと

に気づくのが遅れてしまった。
慌てて目を開けると
「相澤先生!?」
目の前に現れた担任に動揺する。ご丁寧に個性を抹消してからパンドラは轟の顎に一発入れた。
「ガァッ」
どんなには体を鍛えていても顎に守ってくれる筋肉はつかない。ダイレクトに脳が揺れる。
相澤は【抹消】を有効的に使うため、普通のヒーローよりその生身の筋肉は鍛え上げられている。
たとえ8割しか再現出来なくても繰り出された拳の威力は絶大だ。
「ッぐ」
それでも轟は耐えきった。幼い頃から個性中心ではあったものの肉弾戦もエンデヴァーに叩き込まれていたおかげでギリギリクリティカルヒットは避けることができたのだ。
だがそれだけだった。
個性はまだ抹消されているようで使えない
身体も思うように動かない
(あれ)
気づくとパンドラが消えていた。
「怪我は少ない方が良いですからね」
後ろからピリッと何かを破く音が聞こえた途端、ふと甘い香りが鼻につく
(この香り どこかで嗅いだような)
轟は朦朧とする頭で必死に記憶を呼び起こす。
(! ミッドナイトの個性 やばい)
分かったところでどうしようもない
(ね みぃ)
抗えぬ睡魔に、轟は大人しく身を委ねた

???

「情けない」
エンデヴァーの言葉はナイフのように鋭い
轟は最後にミッドナイトの個性【眠り香】によってトドメを刺された。その後すぐにエンデヴァーに叩き起され反省会がおこなわれていた。
「確かに相手に上を取られたら焦る気持ちも分かる。だが追いすぎたな。あと普通に自身の炎についてきちんと把握しきれていないのは不味い。だから俺の言うことを聞けとあれほど…」
「まあまあホークスの姿ですからつい狩猟本能でも刺激されてしまったんじゃないですか？　でも轟くん。炎の扱いについては私もエンデヴァーと同意見です。ベタ踏みすぎて行動が容易に予測できましたよ」
2人の容赦ない正論で轟は肩をすくめる。
「なんかこう、ドラ？エのメラゾーマとかみたいに形を変えたり出来ないんですか？」
「ドラ？エってなんだ？」
「えっあの名作を知らないのですか？　ヒャダルコとか轟くんにできそうな技ありますのに」
「どんな技なんだ」
「敵の下からこう、氷が突き出すような」
「その話はどうでもいい」
ドラ？エで盛り上がり始めたところでエンデヴァーは話をぶった切った。
「でも氷にしろ炎にしろ、形をコントロールしたり…ヒャダルコのように何も無い空間から出したりとかは出来ないんですかね？」
「何も無い空間から炎を出すことは俺にもできない。どうしても攻撃の起点は自分の身体からだ。多分焦凍もだろう。だが圧力やら温度を調節して形はある程度コントロールすることは可能だ。現に俺が出来るんだからな、見てろ」
エンデヴァーは右手を突き出した

「赫灼熱拳ヘルスパイダー」
　指からまるで蜘蛛の糸のように何本もの細い炎が勢いよく飛び出す。当たった場所は見事に焼き焦げていた。
「見事ですねーこれだと私、ホークスになっても避けきれないかもしれません」
「・・」
・・パンドラは素直に賞賛するが、轟は苦虫を噛み潰したような顔だった。轟だって分かってはいるのだ。父としては最悪だが、エンデヴァーはＮｏ．２ヒーローの実力を持つプロだということを
「焦凍、お前だって俺の言う通りに練習すればこのくらい出来るようになる。もしかしたら氷の方でもより繊細な攻撃が可能になるかもしれんのだ。パンドラに勝ちたいとは思わないのか？」
　エンデヴァーは同意を求めるように首を傾げた。
「チッ・・教えてくれ、炎の使い方」
「そうだ、それでいい。パンドラを呼んだ甲斐があったな」
　パチパチと横から拍手が鳴り響いた。
「おおー親が子供に何かを教える。これぞ理想的な親子関係！　いいですねぇいいですねぇ、私も昔のように父上にご教授願いたい！」
　パンドラが変なところで感動していると
「そういうお前は２つの個性を同時には使えないのか？」
「はい？」
　話の矛先がこちらに来た。
「攻撃する際プレゼント・マイクの【ヴォイス】を止めてイレイザーヘッドに変化しただろう？　その僅かな間で焦凍に少し避けられた。２つの個性を同時に使えればプルスウ・・更なる高みに到達出来るのではないか」
（・確かに）
・・パンドラは小さい頃にナザリックで剣士職最強のたっち・みーと魔法職最強のウルベルトを半分ずつコピー出来れば最強になれると試してみたが結局出来なかったことを思い出した。
（確かあの後その２人に二度とやらないでくれと怒られたのですっか

り忘れてましたね・・・）
　至高の御方達に注意されたこともあるが、この世界に来てから変化にかかる1秒の差程度で苦労するようなことはあまりなかったのだ。
　よってパンドラは2つの個性を同時に使うことを試す発想に思い至らなかった。この程度を思いつけないなど情けないにも程がある と自分自身に落胆する。
　それでもパンドラは反省はするが後悔しないタイプだ。あっという間に気を落ち直す。
「とにかくやってみますね」
　まずパンドラはプレゼント・マイクに変化する。音を出すにはイレイザーヘッドよりマイクの身体が必要だ。ここまではいつも通り、次はマイクの身体にイレイザーの目と個性因子だけを再現する。
「エンデヴァー、そこから動かずに耳を塞いで炎出し続けて下さいね」
　今のパンドラの顔はマイクの目に当たる部分が特徴的な三白眼になっている。音量に気をつけながら【ヴォイス】を発動し

　一旦目を閉じ再び見開いた
「ッ！」
【ヴォイス】の波動を肌で感じていたエンデヴァーの身体から炎が消えた。
　しかし2秒後には
「抹消解けたぞ、ついでに波動も消えた」
・パンドラは元の埴輪顔に戻り膝を着いた。
「・例えるなら右手と左手で別々に筆を持って片方は評論、片方は計算・式を書いているような難しさがあります」
　人間2人の顔だけならミックスさせるのはそこまで難しくないのだ。問題は個性因子だ。異なる2つの個性因子を同時に発動させることにとてつもなく集中力がいる。実戦で使えばヴィランからいい的にされるだけだ。
「個性の組み合わせによって難易度が変わるかも検証した方が良いな

■■■そういえばお前は今何の個性をストックしている?」
「■【抹消】【ヴォイス】【眠り香】【剛翼】【兎】【盾】【洗脳】【創造】【スティール】【セメント】【治癒】【透明】2枠は空きです。直接戦闘的な個性ではなくサポートと自分の身を守れることを意識して編成してみました。じゃあ早速片っ端から試して見ますね」
パンドラは個性の持ち主に変化しながら答えた。
「ふむ、結果は俺に報告しろ。俺はその間焦凍の炎について1から叩き込む。なにか質問があるなら聞いてやらんことも無い」
「おい」
パンドラは全く気にしていないが、明らかに自分と贔屓するエンデヴァーの態度に轟は眉を顰める。
「くだらない質問だった場合パンドラ、俺はお前をぶん投げるからな、質問はよく考えて発言しろ」
「了解です」
パンドラ達は午前中めいいっぱい訓練をした。その後昼休憩をとり会議や他のヒーロー達との顔合わせをおこなう。あっという間に時間は過ぎ気づけば午後5時、いよいよ見回りの時間がやってきた。
轟と並んで街を練り歩く。
「晩飯あれだけで良かったのか」
「私こう見えて胃が小さいんですよ」
もちろん嘘である。そもそも食べる必要がないだけである。もはや胃が存在しているかすら怪しい。
「いやいや、若いうちは食べれば食べた分だけ力もつくし体格も良くなる。いっぱい食べろよ若人!」
突然横から会話に割り込んできた男がいた。
「誰だ」
「いや轟くん、顔合わせでいたじゃないですか■■■保須市を中心に活動しているヒーローネイティブです」
パンドラは小声で轟に話しかける。しかし距離が近すぎた。
「ははは■まぁ影は薄いからな■■体育祭3位に覚えて貰っていただけ光栄だよ。その通り俺はネイテ■イブ、今日君たちとパトロールするヒー

ローの1人だ。保須市のことならぜひ何でも聞いてくれ」
「上手い蕎麦の店教えてください。冷たい方の」
「おすすめのデートスポットを教えてください」
「そっち!?　ヒーロー事務所の場所とかではなく!?」
「「じゃあそっちも」」
「やだこの子達！」
「グズグズするな行くぞ！」
エンデヴァーの鶴の一言でパトロールは開始された。
結果を言おう。この夜は特に何も起こらなかった。強いて言うなら泥酔したサラリーマンが何人か転がっていただけである。パンドラも今は学生の身分であるから、9時からパトロールに参加することは叶わなかった。
「明日も今日と同じ時間に訓練所に来い」
その言葉を皮切りに各自部屋へ戻っていく。
パンドラは昨日と同じ部屋に着くとベッドに寝っ転がった。
（あの頃は私はまだ小さく未熟だった。今なら至高の御方達の能力両方使いが可能なのでは？）
試しにパンドラはたっち・みーとウルベルトをその身に再現してみた。
頭はウルベルト
身体はたっち・みー
「ガアアッ!!」
身体が引き裂かれるような痛みが走る。
（嫌でも分かる。これは拒絶反応・まるで2つの強大な生物が小さい箱の中を暴れ回っているように！）
パンドラはすぐに変化を解いた。
（無理ですねこれは・【個性】なら集中力は必要ですが同時に変化し能力を使うことは可能なのに・・・やはり【個性】と【魔法】は別のものなのでしょうか、この世界は・・・本当に私達が生きていた世界と同じなのでしょうか）
個性とは一体なんなのか？　これはアインズ・ウール・ゴウンの研

究課題の1つだ。

（まぁいい。今日は少し疲れました。精神的にも）

パンドラは寝なくても活動はできる。それでも今日は休みたかった。

〈転移門（ゲート）〉

（父上チャージしなければ）

心無しか重い身体を無理やり動かして、パンドラは父の待つ家に帰っていった。

続く

【番外編】すまっしゅ!!ネタ

＜1＞

街に現れた【性別と個性を反転する】個性を持ったヴィラン！　退治に乗り出した1年A組の面々も次々と敵の個性に翻弄されてしまう。果たして皆は敵をやっつけ・・・いやそれよりも元に戻れるのか!?

「轟どこだァァァ！・いやもう轟じゃなくてもいい!!性別反転している奴出てこォォォい!!」

「新たな可能性を！　新たな性癖を！」

今回の敵の個性は【性別を変える】今までの被害者は飯田、緑谷、どちらも男の性癖にグサッと来るような変化を遂げていた。男として峰田と上鳴が次の展開に期待してしまうのはしょうがないことではないか？

そんな新たな女に変化したクラスメイトを探すため爆走している2人の目に軍帽とトレンチコートを着込む黒髪の人影が映る。

「おい！　あの軍帽・・あれ隣のクラスのパンドラじゃねぇか!?　艶やかな黒髪ロングだと・・お!?　きっと赤の口紅が映えるクール系美女に違いない！」

「俺は逆に童顔美女を推すぜ峰田！」

「パンドラ――――！　とりあえずこっち向いて――――！」

「はい？」

こちらを向いた顔は埴輪だった

「なんでだよ!!」

「いやほんとになんでだよ!!　そこは普通男の時は異形だけど女体化したら可愛いおんにゃのこになるのがセオリーだろ!?　てかなんでここいるんだよ!?」

「そうだそうだ！　なんでなんで髪生やしてオッパイもでかいのに顔変わらないんだよ！　なんだお前ぇぇぇ!!」

顔は変わっていないのにやたらおっぱいがでかくスタイルが良いのがまた2人の癪に障る。理不尽な言われように対してパンドラも

思わず声をあげた。
「いきなりなんなんですか2人揃って！　私だってなりたくてなった訳じゃないですけど!?」
「それよりオイラの夢かえせぇぇぇぇ！　オイラの黒髪、白い肌、赤い唇、冷たい眼差しを携えた美女像を！」
「圧倒的理不尽!!!　なんならお言葉通りに口紅塗りましょうか!?」
パンドラはどこから取り出したか分からない口紅を塗りたくって長い髪を揺らしながらこちらに走ってきた。
「ぎゃぁぁぁぁぁぁあ」
はっきり言おう、ホラーである。
3つの穴のうち口にあたる部分が真っ赤にそまり、黒髪が顔にかかっている状態で追いかけてくるのだ。真昼間でも怖い。
「来んなぁァァァァ」
結局、女体化した相澤先生が反転した【強制発動】をヴィランに使いみんなを戻すまで追いかけっこは続いた。
ちなみにヴィランはしばらくナザリックで遊ばれた
「？愚弟おっぱいでけぇ？ｗ？ｗｗ」
「自分についてても嬉しくないｗ？ｗ？ｗ」

＜2＞
緑谷出久は混乱していた。突如街に現れたヴィランの個性で皆幼児化してしまったのだ。途中まで無事だった相澤先生までもが坊ちゃん刈りの幼児になってしまうし、助けに来た先生方も同じく餌食になった。
（えーどうしよう）
「緑谷くん大丈夫ですか!?」
聞きなれた、よく響く声が緑谷の耳に届く。何故ここにいるかは知らないが今彼が来てしまうと巻き込まれかねない
「!?　パンドラくん来ちゃダメっ！」
ポシュウン
「・・・」
・・・

（あぁぁぁぁぁぁ）
助けに来てくれたであろうパンドラまで小さくなってしまった。
「エグッふぇぇぇん！　ぢぢうえ〟ぇぇぇ！　私をっ私を置いてっいってエグしまったのですか？」
（この頃からファザコンッ!?）
「いい子にしますからっ私をっわたしを見捨てエグないでくださいエグ」
なんか訳アリの過去をプンプンに匂わせているが緑谷にはどうすることも出来ない。
「えっえっとパンドラくん？　お父さんはえっと今ここにいないだけだからね？　すぐに迎えに来るからね？」
「本当ですか？」
パンドラ（小）は目にあたる部分の穴から涙を流しながらこちらを見上げる
なんだか小さい頃の方はマスコット味が強くて可愛らしい
（これがああなるんだ？）
緑谷は時の流れの残酷さを感じた。
「この頃のパンドラは本当に可愛いかったなぁ？」
気づくと緑谷の隣にはどこかで見たような男がいた。
「パンドラくんのお父さん!?」
「体育祭ベスト８の緑谷出久くんだよね？　どうもパンドラの保護者の鈴木悟です」
「あっどうも」？
「どちら様ですか？」
パンドラが鈴木さんを見て首を傾げている。もしかしたら昔と今の姿が違うせいで分からないのかもしれない
鈴木さんは特に気にすることはなく小さくなったパンドラに目線を合わして何か囁く。するとパンドラは鈴木さんの首に抱きついた
「父上！」
（（やっぱり可愛い））
「よし、ちょっとパンドラ大人しくしといてね。とにかくあれだなあ

そこにいるヴィランが原因か」
「はい・・けどもう攻略方法は分かりました！　危ないので避難しといて下さい」
「頑張れー」
　緑谷はヴィランの個性発動が指笛なのを逆手にとり、幼児化した爆豪に耳を爆破してもらいデトロイトスマッシュを敵に打ち込んだ。
「倒したけど皆戻らない・・耳痛い・・」
「ちょっとじっとしてて・・・・・」
　鈴木ことモモンガは懐からこっそりとポーションを取り出し緑谷に軽く振りかける
「・・えっ？・・・　治りました！　聞こえますよ鈴木さん！　鈴木さんの個性ですか!?」
「あっ・・うんそんな感じ」
　モモンガは個性とはなんでもありだなと心の中で呟きながらとりあえず肯定しとく
「じゃあ俺たちはこれで失礼するね」
「ばいばーい」
「えっ・・ちょっと！　警察待たなくていいんですか！」
　個性にかけられた皆は1日1歳ペースで元の年に戻っていった。一方パンドラはナザリックで治療を受け3日で元に姿に成長しきった。段々取り戻していくウザさと厨二病にモモンガが膝をついたとかついていないとか
　ちなみにヴィランはしばらくナザリックで遊ばれた
「ウルベルトさん小さくなるとお人形さんみたいですねw」
「Ｄｏｎ，ｔ　タッチ・ミー!!」

＜3＞

　南国の孤島でサバイバル訓練を行っていた1年Ａ組メンバー、しかしそこには【相手を動物化させる】個性をもつ最悪のヴィランが潜んでいた！
　爆豪は途方もない怒りの矛先を探していた。彼を除いたクラスメ

イトが全員何かしらの動物になってしまったのだ。
「くそがァァァ！」
吠えたところで何も変わらないのは分かっている。ただそうでもしないとやってられないのだ。そんな爆豪の耳にガサゴソと何かが動く音が届く
「誰だ!?　ヴィランか!?」
「俺の名前はうーさー！愛や正義に興味はない！　ちなみに元の名はパンドラズアクター！」
「何やってんだてめぇぇぇ!?」
出てきたのはうさぎのマスコットに3つの穴を空けたような生物だった。
「なんでこんな所にいるんだよ!?　しかも個性食らっちまってるじゃねぇか糞がァァァ」
「さてと・・弱音を吐くかな。・・俺はもうダメだな」
「現れた途端諦めてんじゃねぇーよ」
「出番も貰えたし俺はさっさと家に帰るかな・・・いでよ！　ウルトラ？ンゼロ！」
うーさー（パンドラ）の声に応えて光の中から上半身が青で下半身が赤、胸にタイマーをつけた人物が現れる！
「デアッ！　さあ帰ろう金と肉とギャルがいる世界へ・・」
そのままウルトラマンゼロはうーさー（パンドラ）を連れて飛び去っていった
「・何しに来たあああ!?　俺らも連れて帰れやァァァ!!」
・その後爆豪含む1年A組（動物）は見事にヴィランを倒し、無事5日目で救助されたという。
ちなみにヴィランはしばらくナザリックで遊ばれた
「タブラさん・・前々からタコみたいだなと思っていましたがやっぱりタコだったんですね。ちょっと足貰っていいですか？」
「傷害罪と名誉毀損で訴えますよ？　ぷにっと萌えさん」
＜4＞
なんと雄英高校に敵が侵入してしまった!!　しかもそいつは【人格

や個性を入れ替える】個性をもっているらしい!!　続々と入れ替わってしまう雄英高校生徒・もちろん1年B組も巻き込まれていた！
無事皆戻ることが出来るのか!?
「物間ァ!?　あんた絶対身体触んないでよ？　今私の身体なんだから殴るに殴れない・・」
「ということはずっとこのままなら僕は一生拳籐に殴られずに済むんだね!?　勝った！」・・
「何してんのお前ら・・」
　朝起きて見ると寮の共有スペースで物間と拳籐が騒ぎを起こしていた。これ自体はそんなに珍しい出来事でもないが、今回はいつもとどこか違和感がある。
「なんか知らないけど私達入れ替わっているんだよ」
　物間がまるで拳籐のような言葉遣いで訴えるがそんな簡単に信じられない
「またまたーそんな映画みたいな」
　と最初は馬鹿にしていたB組のメンバーだったがよく見ると物間のように見えた顔は拳籐の顔つきになっているように見えなくもない。
「えっマジ？」
「Guten Morgen！　皆さんそんなところに集まってどうし・おっと」
　少し遅れて共有スペースに到着したパンドラは落ちていた布を踏んづけてしまい転びかける。そしてちょうど近くにいた鉄哲の頭に
　ゴツンッ
「いってぇ！　おいパンドラ気をつけろ！」
「わざとじゃないです？！　けどごめんなさい」
「おい逆じゃね・・」
　鉄哲の顔は3つの穴が空いた顔になり、パンドラの顔は怒ったような鉄哲の表情が張り付いていた。すぐに2人は近くの磨きあげられた窓で自分の顔を確認し
「ぎゃあああ！　俺ハゲになってるぅぅ!?」

「髪生えたぁぁぁ！」
　絶叫した。ここでクラスメイトも尋常ではない事態に巻き込まれていることに気づき始める。そこに校長が飛び込んできた
「おい！　お前ら寮から出るな！　緊急事態だ！」
「「校長先生!?」」
「違う！　俺はブラドだ」
　ブラド先生は校長先生と入れ替わってしまったようだ。よく見ると目付きが厳つく牙が生え凶悪な面構えになっている。
「可愛くない！」
「鉄哲くん！　とりあえず軍帽をこちらに寄越して下さい」
「どーゆことっすか校ちょ・・ブラド先生!?」
「ハゲいやぁぁぁ！」　・・
「てか何人かトレーニングで外出ちゃってますよ!?」
　暴れはしないものの処理しきれない状況に少なからず皆パニクってしまっている。その中でもいち早く冷静さを取り戻したのは学級委員だった。
「皆！　とにかく落ち着こう!?　シャッフルする条件はさっき見たでしょ！」
「そうですよ。多分私と鉄哲くんがシャッフルしたのは頭をぶつけたからです。きっと頭をぶつけたら元に戻るはずです！」
「よし、やろう！　今すぐやろう」
　鉄哲は早く戻りたいのか勢いよくパンドラに突進する。だが人は焦るほどとんでもない失敗をする
「どあっ」
　ガシャーン！
　何人かのクラスメイトを巻き込んで転んだ。
「ちょッ僕切陰さんと入れ替わってる!?」
「ハゲじゃない！　とりあえずハゲじゃない！」
「俺回原になってる！」
「俺泡瀬になってる！」
「お前ら入れ替わってもあんまり変わらないだろ」

「ハっハゲに……主よ……一体私が何をしたというのですか……？」
この後無事にヴィランは確保され、皆元に戻った……
「私ハゲって思われてたんですか？」
パンドラはほんの、ほんの少しだけ傷ついた
ちなみにヴィランはしばらくナザリックで遊ばれた
「ヘロヘロさんどうしたんですか!?　なんでゴキブリたちを暴走させているんですか!?」
「違う！　そいつ私じゃないです！　そいつの中身るし★ふぁーです！」

＜5＞
「……えっ？」
……モモンガは今自分が置かれている状況に困惑していた。
「早くご飯食べちゃいなさいー」
ウルベルトがフリフリのエプロンをつけ料理を作っている
「ふふっ母さんの料理は美味しいからなぁ、残さず食べるんだぞ」
新聞を読みながら食事を促すのはたっち・みーだ
「もう……あなたったらそんな褒めても何も出ませんよ？」
「いや……私は事実を言っているだけだ」
「貴方？」
「母さん？」
「チェンジで」
モモンガは現実から逃げ出した。いつもならパンドラが学校に行く準備をしているのを傍目にネクタイを締めている時間なのにと
「そんなグズグズしてたら遅れちゃうわよ？　雄英高校だってそんな近いわけじゃないんだから」
（えっ俺雄英生なの？）
とにかくこの空間から逃げ出したいのもあって着慣れない雄英の制服を身につけ、雄英高校に向かう。
（俺がおかしいのか？　それとも何か敵の個性？）
個性ならなんでもありだ。もしかしたら世界にまで影響を及ぼす

敵が個性を使ってしまったのかもしれない。
（ん？　そういえばこの前時空ヴィランを倒すためヒーローショー……？
　あれよく思い出せないな？）
　そんなこんなしてる内に雄英高校に着いてしまう。早速中を捜索してみると言いようもないカオスだった。
（えーなんでヴィラン連合雄英生徒になってんの？　なんかキャラ違う人達いるし）
　その中で1人、今のモモンガのように顔を青くしている人物がいた。緑谷だ
「緑谷くん！　これ、これ一体どういうこと!?　いつもの皆と違うんだけど!?」
「鈴木さん！　まともな人がいた！　良かった！　僕だけじゃなかった！」
　2人は話の通じる人物に出会えた喜びで、周りが野次を飛ばすのにも関わらず熱烈にハグする。そこから2人は話し合った。その結果とりあえず周りに合わせて生活してみようということに落ち着く
（やっぱりまともじゃなかったんだ……クソッいざとなったらこの流れ星の指輪（シューティングスター）で……）
「モモンガくんおはよう！　はい！　今日のラブレターだお？」
　心の中で悪態をついていたモモンガに訳の分からないことを喚き散らしながら飛びかかってきたのはパンドラだった。一見いつものように見えるが視線を下に移動させるとズボンではなくスカートを履いている。
「いやあああ！」
「うるせーぞモモンガ！　またボコられたいのか？」
　物騒なことを言いながらこちらを睨みつけるのは雄英高校の制服を着こなしたアルベド？だった
（あっあるべど……）
　そこからはヤンキー装いのデミウルゴスや女の子を見て興奮するコキュートス、ヒーロー教師になったアウラとマーレ、ぐるぐるメガネをかけたシャルティア、ターミネーター風のセバスなどいつもと違

う自分と同じ雄英高校所属設定のナザリックの面々
モモンガは何度も現実逃避を試みようとしたが気合いで耐えきった
そして休み時間
「鈴木さん原因分かりました！　この前僕達が倒した時空ヴィランが少しだけ時空をずらしちゃったんです。何か時空を超えるくらい大きな心の動きを皆に起こせばなんとかなるみたいです！」
「時空ヴィランって何？」
緑谷の説明によると【異世界】という想像力が理を凌駕する個性をもつ人物が自分たちを別の時空に、歳を取らない世界に固定させてしまっていたらしい。その世界から抜け出すために【異世界】個性持ちを倒すヒーローショーを開催し、無事に元の世界に戻したようだが少し元の世界の時空とズレてしまったようだ。
その結果がこれだ
（そういえばパンドラを寮に入れた覚えなんてなかったな）
考えてみれば辻褄が合わないことだらけだ。自分たちに敵はないと思っていたがやはりとんでもない個性持ちがこの世界に存在していた。
「とにかく皆に大きな心の動きを与えればいいんだね!?」
「はい！　元の皆に対しての心の動きだと思われます！」
モモンガは速やかに行動を開始した
「モモンガくーん？お弁当一緒に食べよう？」
パンドラにはありのままの姿で思いっきり抱きしめる？
「モモン・・はっ私は一体・・なぜ父上は私を抱きしめて・・」
「おい無視すんなモモ・・・モモンガ様!?」
「Ｈｅｙ！・・Ｈｅｙ！・・・ッ私は？」
「おっぱい・・ナニヲ？・・・」
「こらーそこ暴れ・・あれ？」
「静かにしてくだ・・」
「わっちの勉強のじか・・ああんモモンガ様!?」
「Ｉ，ｌｌ　ｂｅ・・・おや？　なぜこんなとこに？」

戻った面々を引き連れナザリックでおかしくなってしまった者を順調に戻していく。
「お掃除楽しいな・なんじゃこりゃァァァ!?」
「ハニーが作ったお弁当が美味し・ハニーって何!?」
「エロゲーなど不潔な・なんでエロゲーがゴミ箱に!?」
「女の子は女の子らしく・・・・・うん？」
「神話生物などこの世に・・・いる！」
「作戦とかどーでも・はあ?」
「イタズラなど好みませぬ・んなわけあるかぁ!?」
「ブラック万歳！　・ホワイト万歳！」
そんな数々の困難を乗り越えて
「さて、今日はヒーロー殺しに会えますかね」
――無事にパンドラヒーローアカデミアの世界に戻ることができた。
ちなみに時空ヴィランは後からモモンガが＜現断（リアリティスラッシュ）＞でとどめを刺したとか刺してないとか

開幕

「貰ったァァァ！」
「ッ！　すまんパンドラフォロー！」
「耳塞いで下さい！」
　職場体験3日目の朝、昨日は3人しかいなかった訓練所には保須市在中のヒーローやエンデヴァー事務所のサイドキックが追加され大変賑わっていた。
　現在パンドラはそんなヒーロー達と戦闘中である。
「さて、今日は昨日とは違うことをしてもらう。見ての通り多数のヒーローに来てもらった。お前の成長に必要なのは経験値、遠慮なく思いっきり稼がせてもらえ。俺は引き続き焦凍の面倒を見る」
　エンデヴァーの指示通り打ち合わせの時間までヒーロー達とタイマンや2対2、チーム戦や1対多数など様々な戦闘シチュエーションで戦闘をおこなう。
　訓練に付き合って貰っているヒーロー達は実力的にいえばパンドラに及ばない者も多かったが戦闘における他人の動きを考慮した判断力や即席チームでの連携、コミュニケーション方法と学びとるものは少なからずあった。
（完全に無駄な時間・・・という訳ではありませんね）
　パンドラは基本ぼっちでもなんとも思わないタイプである。アイテムを磨いたりポーズの研究を長時間1人で行っていても全然楽しめてしまう。なので自ら進んでナザリックの仲間たちと一緒にわざわざ戦闘訓練することはほぼ無かったと言っていい。パンドラがここまで強くなったのは元からの素質もあるが、モモンガや至高の御方達が召喚した自分より格上のモンスターを倒しまくった地獄の日々があるからである。もちろんアドバイスは貰ってはいたが倒すのは1人の力でだ。
　パンドラには他者との連携に関する経験値が足りなかった。だが人に合わせるのは種族性か性格ゆえか、それさえそつなくこなしていく。むしろ他人と自分を使いひとつのショー（戦闘シーン）を組み立てていくこと

に楽しみを覚えたぐらいだ。
(学校でのチーム戦は未だ１０対１０以上を経験したことないのでいい機会です。やはり腐ってもプロヒーロー、クラスメイトに比べ判断や連携を組むのが格段に早いのでいつもよりやりやすい)
訓練の合間には現役ヒーローとの交流に勤しんだ。一緒にひとつのことを成し遂げると人との距離はぐんと近くなる。パンドラの実力やキャラも味方して短い間に多くのヒーローの情報ツールを確保することができた。
慌ただしく時間が過ぎ、時は進んで夜
今回はエンデヴァー事務所でメンバーを固めての２回目の見回りが始まった。
ドンッ!!
途端街中のあちこちから悲鳴と煙が上がった
「事件か!? よしついてこい! ヒーローというものをお前たちに見せてやる」
(今注目されている保須の中で同時多発テロ? 売名行為でもしたい輩が暴れ回ってるのでしょうか?)
意気揚々と走り出すエンデヴァーの後ろを真顔の轟と並んでパンドラは騒ぎの元凶についてあれこれ考える。その思考を邪魔するように隣からけたたましい着信音が鳴り響いた。
「▪▪」
(▪▪着信?メール? ――!?)
轟は携帯の画面を見た瞬間踵を返して逆走し始めた
エンデヴァーも轟に気づいたらしく慌てたように声をかける
「ちょっと待て何処に行く焦凍ォ!」
「江向通り４―２―１０の細道、そっちが済むか手の空いたプロがいたら応援頼む。お前とパンドラがいればすぐ解決出来んだろ」▪▪▪
(んん江向通り付近には見た感じ騒ぎは起こっていないようですが▪▪▪応援を呼んでいるということは轟くんにメールを送った相手はヴィランと交戦中?ヒーローがその場にいるならエンデヴァー事務所にも連絡が入っているはずですが?この騒ぎのヴィランでは無い?轟

くんの反応からして多分Ａ組の誰かが単独で戦っている？そうだとしてもなぜ貴方が飛び出す必要がある？）
「友達がピンチかもしれねえ」
　パンドラが声をかける前に轟はあっという間に遠ざかってしまった。
（轟くん。私達はヒーロー免許も仮免許すら持っていない。貴方の個性はどちらかと言うと武力に特化している。ヴィラン相手に使ってしまえば個性使用を誤魔化すことはできない。正当防衛も適用されるか微妙。暴行罪や個性違法行使に問われる可能性が高い。そうなればヒーローとしての経歴に傷がつく。私は貴方を追いかけられない）
　パンドラがヒーローを目指す目的は情報収集のためだ。そのため出来るだけ名声を手に入れ多くの繋がりが欲しい。経歴に傷をつけるのはあまり宜しいことではない。パンドラは轟と友達になりたかった。その強力な個性やブランドから情報収集の役に立つヒーローになるだろうと思ったからだ。友達（予定）に何かあったら困るがだからと言ってここで轟を追いかけて戦闘に巻き込まれるのはゴメンだった。自らの価値を下げる危険に晒されるのはまた別問題。
　そんなこと考えている僅かな間、エンデヴァーは俯いていたが覚悟を決めたように顔をあげた。
「パンドラ、予定変更だ。俺のサイドキックを貸す。他の場所で暴れているヴィランの元へ急行し警察と協力して市民の避難を手伝え。避難を目的とする個性使用はエンデヴァーの名において許可する。俺がこっちに戻ってくるまでに終わらせろ。次の指令はその時に出す」
　きっとエンデヴァーはすぐにでも轟の方へ向かいたいのだろう。だが彼はＮｏ．２ヒーロー、優先されるべきは現在進行形で暴れているヴィランの確保。なので自分が速やかに制圧するための舞台をパンドラに整えとけという訳だ。パンドラならそれが可能だ。
「了解です」
（とりあえずエンデヴァーを早いところ轟くんの所へ向かわせましょ

う。友達候補に何か起こる前に）
パンドラは速やかに行動を開始した
【ヴォイス】で満遍なく指示を出し
パニックによる個性事故は【抹消】で防ぎながら【洗脳】で大人しくさせてから安全な場所まで避難させ
まともな対応が出来なくなっている者は強制的に【眠り香】で眠らして避難場所まで運ぶ
動けない者は【剛翼】、【兎】で【創造】も上手く使い
崩れる瓦礫からは【盾】や【スティール】、【セメント】で守り
身体の損傷が酷いものは【治癒】でひとまず応急措置を施す。
サポート系を取り揃えていた【ドッペルゲンガー】はこの状況下でこれ以上ない有能さを発揮した。
その活躍を目の当たりにした警察官が、市民が、ヒーローが、目の前で起こる惨劇と共にその軍帽を記憶に刻み込む。
（さあ、舞台は整えました。早く来てくださいエンデヴァー）
また1人また1人と勇敢なヒーローが倒れていく。早く、早く、我らがヒーロー。力無き群衆を守ってくれ。だがしかし果たしてそのヒーローは本当にヒーロー（英雄）なのだろうか？
（そういえばたっち・みー様でしたっけ？ヒーローは遅れてやってくるんですってね）

???
――数時間前
そこは薄暗いＢＡＲのような場所だった。しかし今そこで酒を嗜む者はおらず、代わりに殺伐とした空気が蔓延していた。
「信念なき殺意に何の意義がある？　何を成し遂げるにも信念・想いが要る。ない者弱い者が淘汰されるのは当然だ。だからこうなる」
ステインは死柄木を押さえつけ、首にナイフを当てていた。少しでも動かせば死柄木の命はない。
「ハッハハ・・いってえ――」
「クッククク・・フッ・ダサい！　ダサすぎる！　優雅さの欠片もない！・・・・

ッゲホ？ｗ」
ステインの強さに笑いが込み上げた死柄木の台詞に被せるように、バカにするのを隠す気のない容赦ない笑い声が響き渡った。
「誰だ」
ステインはさっきまで誰もいなかったはずのカウンターに腰掛ける男を睨みつける。
その男は山羊を人型にしたような異形だった。黒のシルクハットに上質なマントを身につけ、不気味なマスクで顔の半分を隠し爪は鋭く長い。口元から見える牙や目に灯る邪悪な光も加えて何処と無く見る人に悪魔を連想させた。
「ウルベルトうるさい黙れ二度とその面見せんなってこの前言っただろうが」
「なんで俺がお前のような餓鬼の言うことなんか聞いてやらないといけないんだよ？」
「死柄木、あまりこの方を刺激しないでください。ウルベルト様、申し訳ございませんが来る時は一言連絡を入れて下さるとこちらも助かるのですが」
「心の中でお邪魔しますと言った」
「口に出してもっと事前に言ってください」
「ハァ俺をおいて会話するな」
謎の乱入者に対し苛立つ死柄木と礼儀正しく対応する黒霧、部外者であるステインは何も情報を掴めないまま放置され、より首に当てているナイフに力が籠る。山羊頭の男はカウンターから降り、ステインに向かい深々とお辞儀をした。
「ああこれは失礼した！　初めましてヒーロー殺し、お会いできて光栄です。私の名はウルベルト・アレイン・オードル。貴方のご活躍に興味を持つ者です早速で悪いんですが貴方はなぜヒーローを殺すのですか？」
ステインの背筋に陳腐な表現になるがぞくり、と蛞蝓のような気配が撫でるのを感じた。このウルベルトという男の態度はまるで蟻に対して生真面目に質問を投げかけているような異常さがあった。こ

ちらを同格の存在と認識していないことが言葉にせずとも伝わってくる。そしてそれは間違いではないという事実も
「・・それはだな」
・・それでもステインは特に動じることはなかった。むしろ自分の信念を高らかに宣言できることに目を輝かしていた。
「それは現在のヒーロー観を打ち砕くためだ・・。この世界には多すぎるんだよ・・英雄気取りの拝金主義者が！　偽物が！　ヒーローとは偉業を成し遂げた者のみ許される称号！　自己犠牲の果てに得うるもの！　今の連中はそんなことも分からない！　だからこの世の中に正しいヒーロー観を認識させ正しい社会へ導いてやるのだ！　それが俺の使命！　社会のための信念ある正義の活動だ！」
　ステインは息をきらしながら自分の想いを叫びきった。その目は充血し、飲み込みきれなかったヨダレが口から垂れている。纏う空気は他者を飲み込んでしまうと錯覚するほどどす黒い
　それに対しウルベルトは――口角を上げ牙を剥き出しにして笑った。
「・・フフフッいいねぇいいねぇ嫌いじゃない。特にヒーローの存在については俺もモヤモヤしてるんだよなぁ・・そこは大いに同意するわ、けどなぁ信念ある正義の活動？　そうだなぁ？　お前にとっては正義だよな？　だけどさぁ」

「お前は世の中からじゃあ悪と認識されるだろうな」
　ステインは少しだけ目を見開いた
　ウルベルトは一瞬悲しそうな目をしたが気にせずに続ける
「けれど安心してくれ！俺はそういう信念をもって自らの正義を執行しようともがく悪は好みなんだ！」
　安心できる要素が1つもないが、ウルベルトはステインの目の前で優雅に微笑みかけた。その様子を未だ床に押さえつけられながら死柄木は至極冷めた目で見上げる。
「どーでもいいわ・・」
・

「壊すことしか頭にないお子ちゃまは黙っとけ、見てる側も子供の癇癪よりはこういう悪役の方が見応えあるんだよ」
微笑みを向けたステインとは一転して、死柄木には何の感情もない目で見下す。
「まず俺はお前がオール・フォー・ワンの後継者だなんて認めていないからな。カリスマもクソもないじゃないか。そもそも格好からなってない。その服なんだよニートかお前は」
「確かに・・」
「それは少し同意します」
「黒霧ィ!?」
ステインどころか黒霧にまで頷かれ死柄木は思わず声をあげる
その隣でウルベルトは良いことを思いついたとばかりに手を叩いた
「よし！　俺が一肌脱いでやろう。とりあえず今使わない俺の服やるよ、どれがいい？」
ウルベルトは何もない空間から素人目にも上等な物と分かる服を何着も取り出し無造作に机に並べていく
「どっから出してんだよその量・・おい俺は絶対嫌だぞ！　そんな使い道がいまいち分からない金具がジャラジャラしてる服なんて着たくねぇ!!」
「ウルベルト様それだけはおやめ下さい！　貴方の服なんか貰ったらストライプ赤スーツの悪魔から襲撃確定じゃないですか！　嫌ですよこのアジト失いたくないんですけど」
「・悪魔の好意は受け取った方が身のためだぞ。大丈夫あいつにはちゃんと話つけてやるから」
アドバイスの皮を被った脅迫に悪魔の好意などろくなもんじゃないと心中でぼやきつつ2人は黙り込む。死柄木は不貞腐れた表情を隠しもしない。
「なあステイン、死柄木にはどんなのが似合うと思う？」
「黒だ・・黒は何者にも染まらぬ強い色を」
「王道を攻めるか、そういや裁判官の服もそんな感じの理由で黒だっ

たな・・・正義の色とも言えるのに悪のイメージが強いなんて皮肉なもんだ」・・・

「後やっぱり赤だ・・・こいつは世間にイラついているようだから怒りの色を入れとこう」・・・

「赤は危険のイメージもあるしな！　こいつ辛気くせーし差し色としていいかもしれん。色彩を抑えればシックな印象に・・・じゃあこれとかどうだ」

「黒と赤ってヒーロー殺しの色じゃねぇか！　嫌だ！　色だけだとしても・・・ソロなんて嫌だ！」

「ほお・・・試着してみろ死柄木弔」

「ヒーロー殺し！　おいやめろ服脱がすな！　絵面やべーぞ！　事案だ！　崩壊させっ＜麻痺（パラライズ）＞――!?　身体動かねぇふざけんな！」

可哀想に指1本動かせない死柄木は為す術もなく身ぐるみを剥がされ2人がかりで手早く服を着させられる。黒霧も相手が相手なため手出しできずオロオロするばかりだ。

ドレスシャツの上に光沢のある上着を羽織り前は金色の凝った金具で閉じられている。下も上と同じような光沢のある布を使われ黒の皮のブーツを履かされた。小物や縁の至る所に落ち着いた赤が使われている。イメージは厨2全開の中世貴族風だ。

「この手どうするか・・・お前のアイデンティティだからな、この黄色の部分を黒にすれば着けたままでもいいか」

「おいコラ触んな返せ。てかもう2人とも帰れ死ね」

「ああそうだな・・・俺はもうここに用はない。徒に力を振りまく犯罪者である時点で仲間になるなど論外だ・・・むしろここで殺したいところだがそこにいるウルベルトが止めるだろう・・・それに・・・先程ナイフを向けた時、お前にも歪な信念が芽生えつつあるのを感じた。どう成長するか見届けた後でも始末するのは遅くはない。さあ俺をさっさと保須に返せ」

「やーい！　振られてやんの」

「黒霧ィ！　早くワープゲート出せぇ！」

死柄木は部外者2人の服を引っ張り自身と共にワープゲートに飛

び込む。外に放り出されたステインはその勢いのまま保須の夜を駆けていってしまったが、ウルベルトはその場に立ち止まり保須の夜景を眺めていた。
「お前もはよヒーロー殺しのストーカーでも何でもしにいけよ」
「なぁ結局お前らがやりたいことってステインが自分の信念の元行動した姿を見させて社会に抑圧された連中を焚き付けるためか？　そんでもってそいつらをヴィラン連合に丸々ご招待ってか」
「まぁ簡単に言えばそんな所ですかね。あの方はバラバラだった悪意を今ここに、ステインを餌に大きな悪意に成長させるつもりです」
　質問に答えたのは黒霧だ
「ＡＦＯならステインがヴィラン連合に所属していた事実なんて簡単に創り出すだろうからな…」
「マジでどーでもいいから早く俺の前から消えてくれ」
　死柄木はもう割と限界だった
「ハイハイ、最後一つだけ、ヴィラン連合の仲間にならなかったステインは餌の役目を終えたらもういらないだろ？」
「？　ええまぁ」
　黒霧はウルベルトの真意が読めず首を傾げる
「役を終えた役者なら俺たち観客がどうしようと関係ないよな？」
　鋭い牙が月の明かりによって鈍く光る
　ここで黒霧はヒーロー殺しの残酷な運命を悟った
「今俺たち個性の進化について様々な実験をしてるんだけどさ、この世界の奴ら生命力激弱なんだよねぇ…。あんな強固な意思ならそうそうに壊れないだろ？　【凝血】って進化させればいい線いくと思わないか？」
　月を背景に悪魔は至極楽しそうな顔で笑う
「きっとあいつも自分の正義をさらに執行できる力を手に入れられるんだから喜ぶはずさ！　気に入ってるからこそ俺はあいつを強化させてやりたい！　何年かかるか知らんけどな！」
　なぁ？　と２人に同意を求めるような笑顔を披露した後、今度こそウルベルトは姿を消した。

死柄木は皮膚を引っ掻く。ガリガリと
ガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリガ
「……。ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛イライラする！　イライラする！　ムカつくムカつくムカつく！！　おい黒霧！　脳無だ！　脳無出せ！　ヒーロー殺しもウルベルトも何もかも気に入らないからとにかくぶっ壊す！！！」
死柄木の呼びかけに応えてワープゲートからこの世のものとは思えない化物が３体顔を出した
「あはは！　全部ぶっ壊してやるよ。ウルベルトもヒーロー殺しも思い通りさせねぇーよ！　ざまーみろ！」
お父さんの手で隠された死柄木の顔は悪魔に取り憑かれたように歪んでいる。無理やり着させられた服のフリルだけが、この場に似合わないほど緩やかに風で揺れていた。

続く

仇討ち

――保須市　路地裏

死柄木の放ったヴィランが街中で暴れている中、飯田は兄の仇であるヒーロー殺しと向かい合っていた

「僕の兄さんを、インゲニウムを襲った――」

「おい待て・・・　インゲニウム・・・　はぁ・・・そんな奴知らん」

ステインは何言ってんだこいつとばかりに首を捻る。その態度は飯田を激怒させるには十分だった

「ふっ・・・ふざけるな！　ふざけるなあっ！　お前は自分が粛清した相手の名前すら覚えていないのか!?」

「覚えてるに決まってるだろ・・・それを踏まえて言っているのだ。俺は社会を導く者として嘘などつかん。お前の兄を粛清した覚えはない。言いがかりも甚だしいぞ」

「黙れっ」

怒りに任せ個性を使いステインに蹴りかかる。しかしそれは難なく躱され、逆に足の棘が飯田の腕を傷つける。さらにそこから押し倒しもう片方の腕を刀で刺された。

「ぐぅっ」

「弱いのに加え、勘違いで人を襲う。しかもそこに倒れている偽物は無視。最悪だ。お前はヒーローとして最悪だ。きっとお前の兄とやらもそうなのだろう・・・」

ステインの言葉に飯田の目の前は真っ赤に染まった。立派なヒーローである兄を殺人鬼に侮辱された。その事実に途方もない怒りが身体中を駆け巡る。もう腕の痛みなどどうでもよかった。

「・・・取り消せ・・・その言葉を取り消せぇぇぇ!!」

「?・・・　何に怒っている?・・・　俺はお前の行動を見てそう思っただけだ。お前の兄を1番貶めているのはお前では無いのか?」

飯田ははっと息が詰まる。冷水のように浴びせられた言葉で沸騰した脳が正常に動き出した。それと同時に自身の行動の身勝手さを理解してしまった。

「おっ・・・俺は、俺は！　・・・けどお前は兄を」
「だから・・・俺はお前の兄など知らんと言っているだろう・・・まぁどうでもいい。お前は粛清対象。それ以上でもそれ以下でもない・・・」
　ステインは刀に付いた血を舐めとる。その瞬間飯田の体はピクリとも動かなくなった。
「じゃあな偽物」
　一片の慈悲なく刀を振り上げる。飯田はそれをただただ涙を流して見つめることしか出来なかった。
　――ドゴォ
「ぐふ」
　刀は振り下ろされなかった。そして目の前にいたのは
「助けに来たよ飯田くん！」
「緑谷くんっ！　なぜ・・・」
　緑谷出久だった。・・・
　どうも彼は今までのステインの動向を推測してここまでやって来たようだ。襲われているかもしれない飯田をわざわざ助けに
「助けに来た・・・か、いい台詞じゃないか。だがぶつかり合うのなら弱いものが淘汰される訳だが、さあどうする」
　起き上がったステインの目は殺気に満ちていた。緑谷含むこの場にいる全員を殺そうとしているのは明白だ。だが緑谷は笑って言い返す
「オールマイトが言っていた。余計なお世話はヒーローの本質だってね」
　それを皮切りにステインは笑顔で襲いかかる。緑谷は授業の時には見せていなかったはずの動きで猛攻を捌く。そんな中飯田は地面に這いつくばっていることしか出来ない。そんな己が不甲斐なくて、緑谷をのように他人のために真っ先に動くことが出来なかった自分がさらに惨めで、心はもうぐちゃぐちゃだった。もしも本当にステインが兄を殺していなかったとしたら？　自分は？
　突然緑谷の動きが止まった。ステインはそのまま隣を通り越し、飯田の前で足を止める。

「お前は生かす価値がある。こいつらとは違う」
本当の兄の仇を討つことも出来ず、自身の私欲を優先させた大馬鹿者として死ぬのか
飯田は虚ろな目で今度こそ振り下ろされる刃を見ていた。だが突然横から熱気が伝わってくる
「？」
赤い炎だった
「遅くなっちまったな」
声の方向に振り向くと同じクラスの轟焦凍が炎を纏いながらそこに立っている。緑谷のメールで駆けつけたようだが何故駆けつけたのか飯田には分からなかった。だけどひとつ分かったことがある
（君も・君も僕と違ってヒーローなんだな）
続いて炎と氷が交差する光景の前に飯田は漠然とそう思った
激しい戦いが繰り広げられているが少しずつ轟も押されている
その様子に飯田は思わず叫んだ
「もうやめろ！　やめてくれ！　僕なんかのために君たちが傷つく必要はない！　私欲で動いて！　仇でもなんでもないやつの前にしゃしゃり出て！　返り討ちされるような僕なんかに」
「よく見ろ飯田！　こいつがお前の仇じゃなかったとしてもヒーロー殺しは人々の生活を脅かすヴィランだ！　私欲だろうがなんだろうが捕まえなきゃいけねぇヴィランには間違いないだろうが！」
飯田に向かって轟は怒鳴った。攻撃を何とか防ぎながら言葉を続ける
「確かに私刑で動くのは良くないことだ。けどお前がいなかったらネイティブさんは死んでいた！　お前の行動は人を救ったとそう納得しとけ！　反省も後悔も後回し、自分が今何をするべきか考えろ！間違えたのなら今後どうするかが問題だろうがぁ！」
轟に凶刃が迫ろうとした瞬間緑谷が動き出す
それによって導き出された条件からステインの個性は【凝血】だということが判明した。血液型によって拘束時間が変わるらしい。相手の様子からA型はまだかかりそうだった。

（今後、どうするか……）
　今飯田がやらなければならないこと。それは傷ついたネイティブと友達２人を守る。２人と違って自分が自分のことしか考えていないことは嫌という程理解した。だからと言ってそれを理由に項垂れているだけなんてあってはいけない。たとえそれが取り繕ったものだ言われてもやらなければならないのだ。やらなければ何も変われない。もはやヒーロー殺しが兄を本当に殺していないかどうかは関係なかった。ヒーローと犯罪者として戦うだけだ
（兄さんはあの日から意識を取り戻さない。だからどう思っているかは分からないけど……なぁ兄さん俺はインゲニウムの名を貸してもらって良いだろうか）
　インゲニウムは飯田に夢を抱かせてくれた、インゲニウムは他人のためになれるのが嬉しいと語っていた
（インゲニウムの名を背負わせてくれ、兄さんのようなヒーローになってみせるから、目が覚めたらインゲニウムの名をちゃんと兄さんに返すから）
「動け、動け動け動けぇぇぇ!!」
　またしても轟にステインの刃が迫る。
「僕の」
　脚がちぎれたとしても
「友達に」
　ここで立たなければ
「手を出すなあああ!」
　一生インゲニウムのようなヒーローにはなれない
　もう飯田は２人にもネイティブに血を流させる訳にはいかなかった
　繰り出した蹴りは轟に当たる前に刀を折った。もう迷いはないとステインを睨みつける
「俺は！　インゲニウムの名の元に、ここにいる全員を守り通してみせる！」
「愚か……感化されたようだがお前の本質は変わらない。お前は偽物で

しかない」
飯田を蔑んだ目で見つめるステインは姿勢を低くした。今までと似ているようで違う。さっきまでとは殺気の濃さが段違いだ
（くそっなのにレシプロバーストは切れている。とにかく轟君を守るには…）
「いい加減死ね」

「いや、死ぬのはお前だヒーロー殺し」
突然頭上から声が聞こえたかと思うとステイン目掛けて炎が降り注いだ。
その際、炎を突っ切って轟の方にナイフが２本飛んできたが飯田は轟ごと横に避け、距離をとる。腕の痛みに飯田は顔を顰めたが乱入者の顔を見ようと顔を上に向けた。いや、見なくても相手は誰なのかは予想がついていた。
「クソ親父っ!?」
轟が驚いた顔をしている後ろでは「小僧ぅぅぅ！」と老人に飛び蹴りをくらっている緑谷とさらにその後ろではドタバタと足音が響き渡ったあと、数名が汗だくでひょこっと顔を覗かした。
「エッエンデヴァーゼェさっきまでグフヴィランと難戦していたのにハァなぜ我々より先に到着しているんですか!?」
「…」
…
～エンデヴァーの回想～

1匹目のぶちのめしたエンデヴァー達は2匹目の方へ向かっていた。
「全く、まだ倒しきれないとは何をやってんだあのヒーロー共は」
「無茶言ってやるな轟、相手は個性複数持ちの化け物だ。苦戦するのはしょうがない」
倒しきれていないのなら自分が倒せばいいと、パンドラ達には周囲の市民を避難させるように言っといたのでさっきのよりは倒しやすいはずだと、エンデヴァーは出来るだけ早く焦凍の方へ向かうため全速力で移動していた。
現場につくとヴィランとヒーロー以外に周りに人の気配はなかった。彼らはきちんと仕事をこなしたのだと心の中でエンデヴァーは少しだけ褒めてやる。
『こちらエンデヴァー、お前の側にパンドラはいるか？』
『はい、現在避難所に待機、パンドラは【治癒】で怪我人を治しています』
『うむ、引き続き避難所に待機、そちらにヴィランの被害がいかないよう守れ。パンドラにも避難所を守ることを目的とする場合のみ個性の使用を許可すると伝えてくれ』
『了解』
「さて、やるか」
結果を言うとこちらは直ぐに終わった。足止めしていたヒーロー達によるダメージが蓄積していたのもあったのだろう。
「次は、あれか・・・」
「うーむ俺の【ジェット】で届くか届かないかギリギリの所にいるな・・・厄介な」
エンデヴァー達の目線の先にいるのは空を飛び回っているヴィランと空中戦が可能なヒーロー数人が追いかけっこをしていた。鬼役はヴィランだ。
エンデヴァーは空中に浮くことはできるが飛べるかと聞かれると微妙なところだ。かといって下からだと死角に入り込まれたらめんどくさい。

また戦っているヒーロー達も地味に邪魔だった。ヒーローが離れようとしてもヴィランが親の後を追う子供のようについてきてしまうのだ。
（時間もない、出来ればプロミネスバーン1発で決めたい。市民は避難したことだし多少無茶しても大丈夫だろう）
「戦闘中のヒーロー！　退避しろ！　後は俺がやる!!」
エンデヴァーの言葉で空で戦っていたヒーローは全力でその場を離れる。エンデヴァーは体から炎を放出して宙に浮いた。今までのパターンからヴィランはエンデヴァーの方に来るかと思われたがヴィランは背を向けて逃げ出した。その様子は叱られて逃げ出そうとする子供のようだ。
「おいそっち行くなヴィラン！　やめろ避難所だ！」
よりによって向かった先には避難所があった。そこに行かれるのは非常にまずい。早めに決着をつけなければとプロミネスバーンの体制に入る。もう少しヴィランの行動が制限されていれば当たる可能性も高くなるのだがしょうがなかった。何よりも市民の安全が第一だ。
「おい轟！　建物に当たるかもしれんぞ、もっと確実に当たる瞬間を狙った方が――」
その時ヴィランの行く先に、鋭い羽先を向けた赤いハート型の壁が作られる。思わずヴィランはその場にとどまった。
「はぁ？」
エンデヴァーはその羽に見覚えがあった。この羽の落ち主は今この街にいない。だとするとハートの壁を作り出したのはただ1人
「パンドラァ！」
ヴィランに直接被害は加えていなし、そもそも避難所の防衛に関しての個性使用は許可しているのでダメではない。ダメでは無いがパンドラに少なからず助けられたのは何故か癪に障る。
どこかで「ラァブアンドゥピイイイイイス」と聞こえた気がするが多分気のせいだ。とにかく止まった瞬間をＮｏ．２が見逃すはず訳もなくヴィランは灼熱に包まれあっさりとやられた。

「よし終わった！　待ってろ焦凍ぉぉぉぉぉぉ！」
～回想終わり～
「俺の実力だ」
間が空いたがエンデヴァーは言い切った。
「贋物……」
炎が消えた奥から地獄から響くような声が響いた。血走った目でステインは上を向く。尋常ではない姿に思わず周りはギョッとした。
「贋物贋物贋物贋物贋物贋物贋物おぉ！」
横の壁を蹴ってエンデヴァーの元にナイフを振り下ろそうとする。
がまた炎に阻まれてしまった
「さぁ表に出てもらおうかヒーロー殺し」
ステインは炎を突っ切った手にむんずと腕を捕まれ、広い道路に投げ飛ばされる。直ぐに体制を立て直すが近くにいるヒーローが休む暇を与えず攻撃を仕掛けてくる。いくら体術、戦術を１０年間鍛えてきたとしても広い場所、歴戦のヒーロー達、Ｎｏ．２に囲まれてはステインに勝ち目はなかった。ないはずだった
炎に体を焼かれ、あらゆる方向から打撃を浴びせられ、斬られ、骨を折られ、壁に叩きつけられ、至る所から血を流しても、ステインは戦うのを辞めない
その姿はまるで怨念に取り憑かれた亡者のよう。ステインはずっと血反吐を吐きながら叫んでいた。この世は贋物が蔓延っていると、誰かが血に染ってでも変えなければならないと、本物のヒーローを取り戻さなければと、その場にいた全員が何か得体のしれない化け物と対峙しているようだと思った。
――だけどそれも長くは持たない。遂にステインは動かなくなった。……だが倒れもしなかった。立ったままステインは気絶したのだ
「……」
……そこからしばらく誰も動けない
ステインは紛うことなき犯罪者だ。殺人鬼だ。だがどうにも後味の悪い感触だけが残る。

■こちら側が正義だと言うのに
「■現時刻を持ってヒーロー殺しを確保する。誰か拘束具を持っていないか」
「■っ路地裏のゴミ箱に縄とかあるかもしれません」
■真っ先に動きだしたのはエンデヴァーだった。その次に飯田、縄を探しに歩きだそうと

「あーあ、可哀想」
ステインの姿は消えさった

続く

ヒーロー殺し

「あーあ、可哀想」
　突然響き渡る声にその場にいた全員が警戒体勢に入った。途端ステインの姿が消え、濃い霧が辺りを包み込む。
「誰だ」
「まあー名乗りたいのは山々なんだけど今回俺、匿名希望なんで」
「知るか！」
　エンデヴァーはすぐさま霧に向かって軽く個性を発動するがどうにも手応えがない。
「人が喋ってる時に攻撃するなんてヒーローの風上にも置けない奴だな。ヒーローはちゃんと悪役の口上を聞いてから動き出すのがセオリーだぜ？」
　テレビの中ならそれでいいかもしれないが残念ながらこれは現実だ。エンデヴァーは相手の言葉が耳に入っていないようで霧をかけ分けながらヒーロー殺しがいた場所へ向かう。だがそこにはもうヒーロー殺しの影も形もなかった。
「おい、匿名希望、お前ヒーロー殺し何処にやった？」
「どこだと思う？」
　顔は見えないがニヤニヤしているだろうと容易に想像出来る声色だった。エンデヴァーの顔には筋が浮き上がり、ヒーロー達も顔を顰める。
「俺さぁ、ヒーロー殺しのファンだったんだよねぇ。でもやられちゃったじゃん。いや確かにこいつは社会の必要最低限のルールを破った世間的には悪だよ？　ヒーローに倒されちゃうのはしょうがない・・・が正直お前には倒されたくなかったわ」
　突如低くなった敵意が込められた声にエンデヴァーの背中はじくりじくりと良くないものが這い回っている感覚を覚えた。そして周りにも漠然とした不安が包み込む。
「法に触れるがそこにいるガキ共が３人で協力して倒したーとかだったらドラマとしては面白かったよ。実際は偽物の正義のヒーローが

指揮をとって大人数でボコボコにしただけ。そんな終わり方よろしくない。とてもよろしくない」

戦いにドラマ性もクソもない。それもあるがエンデヴァーにとっては聞き逃せない単語があった。

「おい待て誰が偽物だ」

「俺はお前が、エンデヴァーが正義のヒーローだと認めない。ヒーローとは世の為人の為にと称賛栄誉を求めない。自分を犠牲にしてでも他人を守る者の事だと思っている。世間一般的にはお前はそれに当てはまっているかもしれない。がおい、そこにいる紅白頭、君はこいつが本当に正義たる人物だと思えるのか？　君は今までこいつに何をされた？　君のお母さんの人生は？　自らの欲の為、家族の人生を踏みにじるのは正義の行いか？　なぁ正義のヒーロー様がすることなのか？」

指名された轟は顔から色を無くし俯く。轟は何も答えない。

「ははは だんまり！　そもそも正義と悪の違いって何なんだろうな？

ヒーローとヴィランだって明確な違いは個性を法的に使うか使わないかなだけだろ。だけど個性を法的根拠なしで使うのは本当に悪なのか？　身を守るためなら、人を守るためなら正義として見逃されるのか？　じゃあそれを判断する根拠は絶対に正しいと言えるのか？　、大切なものの仇討ちは悪なのか？　存在するだけで疎まれる個性悪を持ってしまった者はどうすればいい？　そいつらは絶対に排他されなければならないのか？　考えてみろ！　この世に正義はあるのか？　悪を定義するのは簡単だが、皆を納得させられる正義の定義をお前らは説明できるのか？　いっそこの世には正義も悪もないのかもしれないな。結局弱肉強食がこの世の理。だとすると少なくともこいつに粛清されたヒーローは悪なのかもなぁ、ははウケる」

「それは無い！　負けた方が悪なんてそんなことない！」

謎の声に食ってかかったのは飯田だ。その理論が正しければヒーロー殺しに負けたインディア、これまで必死に戦い散ってきた歴代のヒーロー、兄であるインゲニウム全てを否定することになる。それは認める訳にはいかなかった。

「守れなければ意味がねぇんだよ」
　それはまるで独り言のようだった。
「まっ！　これはいくらやっても正しい答えなんて出てこない問答だ。時間を無駄にしてしまったな。じゃあヒーロー殺しは預かるよ。やられるなら殺られるでもっと正義のヒーローらしいヒーローによってドラマチックに退場をして貰わないと納得いかないんでね。お前らだって推しが石に躓いて死んだ結末とか受け入れられないだろ。今まさに俺がそんな状態なんだ分かるよな？　分かってくれるよな？」
「分かるかあああ!!」
　シリアスな雰囲気をぶち壊すような友人に声をかけるような軽い調子で謎の声はさっさとその場から離れようとした。しかしそれは問屋が下ろさない。グラントリノが霧に【ジェット】を使い飛び込み、霧を少し散らす。僅かに見えたヴィランらしき影に向かいエンデヴァー含むヒーロー達が本格的な攻撃を仕掛けた。普通のヴィランなら一溜りもなかったが相手が悪かった。
「＜三重最強化（トリプレットマキシマイズマジック）・火球（ファイヤーボール）＞」
　攻撃は打ち負かされ、更にヒーロー達に向かって炎が飛んできた。直ぐにエンデヴァーが瞬間的に出せる最大出力の炎の壁を作り出し止めたので怪我人はいなかったが思った以上の相手の実力との差にヒーロー達は冷や汗をかく。
「ちっ…。じゃあ今度こそ俺帰るから。皆様お元気で！」
　その言葉を皮切りに霧が晴れていく。まるで夢のような出来事だったが道路にこびりついている血痕が夢ではないことを物語っていた。。
「あいつ…何者だ？」
???
――避難所にて

「よし、パンドラちょっと休憩してこい」
　避難所で個性【治癒】を使い片っ端から怪我人を相手していたパンドラはほっとしたように息を吐いた。周りを見渡してみると痛みに呻いている市民は近くおらず、医療関係者も次々と到着しているようだ。これなら後はプロに任せた方が賢明だろう。
　パンドラはお言葉に甘えて近くの床に座り込んだ。別に【治癒】は相手の体力は奪うが自身の体力は消費しない。だが気疲れはする。特に正常では無い相手などは全く話を聞かず同じことばかり繰り返し訴えかけてくるので精神面の体力が一気に削り取られた。そんな状態でも少し休めば回復するはずだったが冷静さを失っている者はそんなこと考慮してはくれなかった。
「あなたヒーローでしょう!?　うちの子を！　うちの子を探してください！　この避難所のどこにもいないんです!!　この避難所に入る前までは側にいたはずなのに！　どうして！　なんで？」
　目の前には髪を振り乱し若干目が血走っている女性、話からして子供とはぐれてしまった母親のようだ。
「落ち着いて下さい。正確には私はヒーローの卵です。なのでやれることは少ないですがとりあえず放送をかけましょう。案内するので着いてきてください」
「隅々まで探し回りました！　けど居ないんです！　きっと避難所の外にいるんです！」
「私、職場体験中で外には出るなと言われているので放送をかけてみてしばらく待ってみましょう？」
「絶対外に居ます！　お願いです子供を！　子供を早く探しに行ってください」
「いや、あの「子供に何かあったらどうしてくれるんですか!!」うええええん全然話を聞いてくださらない！」
　我が子とはぐれたのだ。冷静さを失うのは分かるがそれにしても酷い。多分このままだと外に探しにいくまで永遠と同じことを言い続けるだろう。そう悟ったパンドラはひとまずエンデヴァー事務所のヒーローに助けを求めた。

「てな事がありまして……外に探しに行くことは出来ませんか？」
「あー困ったな……俺ら今凄く忙しい」
　避難所にいるヒーローは負傷者を運ぶのを手伝ったり、警察や医療関係者との情報のすり合わせなど忙しく働いていた。その中でもエンデヴァー事務所のヒーロー達は中心で動いている。
　パンドラは雄英高校から預かった大事なお客様だ。たとえパンドラがプロヒーローに引けを取らない実力を持っていたとしてもヒーローと共にならともかく1人でまだ危険な外に行かせる訳にはいかない。
「警察に協力を――」
「子供がヴィランとかに襲われていたら対応できないじゃないですか！　ヒーローなら誰でもいいので早く探してください……　いやもういいです！　私自身で探しに行きます！」
「いやいやいや待って奥さん。落ち着いて。支離滅裂になってきていますよ。まだ危ないのでここで待機しといて下さい」
「あのーもし良かったら俺が探しにいきましょうか？」
　駆け出そうとする母親を慌てて止める2人の側に声をかける人物がいた。
「えーと貴方は飯田くんのとこの……マニュアルさんでしたっけ？」
「うん。覚えててくれて嬉しいよ。君はパンドラ君だろう？　体育祭凄かったね」
「お褒めいただき光栄です」
「話戻すけど俺が探しに行きますよ。丁度俺も外に用があるんで」
「んーじゃあすみません。頼みます。よし、パンドラお前は放送をかけに――」
「なんであなたは探しに行ってくれないの!?　あなたもヒーローのようなものなんでしょ！　人手は多い方がいいわ！」
　言葉遣いにも余裕がなくなってきた母親に一同口を噤んだ。もうパンドラが外に探しに行くものだと思い込んでしまっているようだった。この様子では説得しようとしても聞く耳を持ってくれないだろう。

・・・
「・・・俺がパンドラを責任もって監督するので連れて行ってもいいですか・・・」
「まぁ、ヒーローと一緒なら・・・申し訳ないマニュアル。パンドラを頼みます。危険だと判断したら・・直ぐに戻ってきてください。こちらも放送はかけるんで」
「了解です」
「あの私の意見は・・・？　いや別にいいんですけどね別に」
　という訳でパンドラとマニュアルは避難所の外にパトロールに出かけていた。案の定人の気配は感じられない。暴れていたヴィランもエンデヴァーが吹っ飛ばした。警察も動き出している。直にここにも警察の見回りがやってくるだろう。
（多分あの母親の子供、避難所に居るんでしょうねー）
　パンドラは割と勘が鋭い。今までの経験からこの勘も当たっているとほぼ確信していた。
「うーん、やっぱり居ないか・・・」
　マニュアルはマニュアルで・・何か探しているようにキョロキョロと周りを見渡している。
「あの、そういえばマニュアルの外への用とは？　後飯田くんとは別行動なのですか？」
「あーうんそれ聞いちゃうか・・・えっと恥ずかしい話今、飯田くん見失っている状態なんだよね・・俺」
　マニュアルはあっさりと・・白状した。
「飯田くん、俺なんかの所に職場体験しにきたのはきっとヒーロー殺しを探す為なんだと思う。俺も一応忠告はしたけど納得はしていないみたいだったし、もしかしたら今ヒーロー殺しと遭遇してしまっているかも・・・」
（これ１００％轟くん関係していますよね）
　轟が自分から行動する理由としては十分だった。飯田は確実に何か面倒臭いことに巻き込まれている。・・・
「こちらも轟くんが行方ふっ――この匂い・・・」
「どうしたの？」

パンドラは普通の人よりは嗅覚が優れている（肝心な鼻は無いが）だからこそ気づいてしまった。夥しい量の血がそう遠くない場所で流されていることに
「マニュアル！　もしかしたら負傷者がいるかもしれません！　連絡頼みます」
「えっちょっパンドラ？」
パンドラは幾つもの路地裏を迷わずに走り出す。マニュアルも慌てて追いかけるが見失わないようにするのが精一杯だった。追いついたのはパンドラが暗い細い路地裏を見張るように立ち止まっているところだった。
「パンドラッくん早っ早い。どうしたの一体、とにかく連絡は入れたけど」
「静かに、あそこの路地裏、血の匂いがします」
パンドラに言われマニュアルは鼻を動かす。言われてみれば確かに不快な匂いが鼻についた気がした。負傷者がいるなら急いで救出しなければならない。
「．俺が様子を見てくる。パンドラくんは待機」
．マニュアルはゆっくりと警戒しながら路地裏に近づいていく。近づけば近づくほど異様な雰囲気が周りに漂う。中を覗こうと顔を覗かした瞬間

めににぶいひかりが

「危ない!!」
マニュアルが我にかえったのはパンドラに首根っこを掴まれて引っ張りだされた時だった。今さっき自分がいたところには刃渡り３０ｃｍ程の刀が突き出されている。
「あんれ～おかしいなぁ？　目玉を突き刺したつもりだったんだけ

ど」
路地から現れたのはマントで体を覆い隠した若い女だった。被ったフードからちらっと見える顔立ちは整っており、端から見える金髪は美しい。しかしこちらを見つめる眼差しは獲物を見定める肉食獣のように感じマニュアルはゾッとする。
「んーまぁいっか。次で決めればいいしねっ」
物騒なことを言いながら女は持っていたバックパックを地面に投げ捨て手を床につき、クラウチングスタートから更に前傾したような異様な構えをとる
「＜流水加速＞」
常人では見えない速さで2人の元に女が飛び込んでくる。パンドラはマニュアルを掴んだまま足だけミルコに変化しジャンプして避け直ぐにホークスの羽を形成して空に逃げた。
「はァ？　何それ」
上を見上げる女の顔は不機嫌そのものだった。
「複数の個性持ち？　それとも人のをストックする個性？　はぁーどっちにしろ恵まれてる個性かぁ」
「どこの誰だか知らないですけどね、応援はもう呼んでます。大人しくしといた方が身のためでは？」
パンドラはマニュアルが持っていた通信器具を見せつけるように提示する
「たまたま恵まれてるガキが私の上から指図してんじゃねーよ。まぁでもここで捕まるのは勘弁、本当か知らないけど今回は見逃してあげるよ」
女はやけにあっさりと踵を返して落とした荷物を拾い路地裏に戻る。が途中でパンドラ達の方を振り返った。
「けど次会ったらぜぇったい殺す」
キャハッと可愛らしい声で笑いながら今度こそ女の姿は見えなくなった。
「「・・」」
完全に去っていったか確認しながら2人は地面に降り立った。パ

ンドラはマニュアルが止めるのを避け、ずんずんと路地裏に近づいていく。
　そこには明らかに生きていないと分かる男の死体が４体、今にも命の灯火が消えそうな一見男に見える女が１人壁に寄りかかっていた。その体は普通なら目を背けたくなるような拷問のあとが残っている。
（これは残念ですが【治癒】で治せる範囲を超えている）
　女は何かを呟いている。諦めずに手で目を防ごうとするマニュアルをパンドラは再度避け、最後に何か伝えたいことがあるなら聞き取ろうと側に近寄った。
「ねぇさんを助け。ねぇさん」
その言葉を最後に女の目から光が消える。
「」
パンドラはマニュアルに強く腕を引っ張られた。
　続く

そして日常へ

――エンデヴァー事務所休憩所

「――なんでですか!?」

ヒーロー殺し騒動から3日後、休憩所で昼食をとっている最中パンドラは声を荒らげていた。

「気持ちは分かるが落ち着けパンドラ」

パンドラを宥めるのは現在パンドラの職場体験先の責任者エンデヴァー。こちらもこちらでヒーロー殺しを後一歩のところまで追い詰めたのにも関わらず謎の人物に連れ去られ、ヴィラン3体は倒したがヒーロー殺しを逃したヒーローとして世間からは少し叩かれ監督不届きで減給も喰らった可哀想な人物である。マスコミやら事後処理に追われ若干疲れが顔に出てしまっていた。

話を戻すがパンドラが何にそんな興奮しているかと言うとパンドラが3日前遭遇した女のことについてであった。

あの後すぐに応援が到着し、パンドラとマニュアルは警察署で話を聞かれることになった。

その際、パンドラはあの時謎の女の姿をしれっとコピーしていたことを告白。パンドラの手柄によって女の顔や装備は明らかになったが、バックパックを脱いだ時点でコピーしてしまったので女の身元が分かるものは何も無いという残念な結果になってしまった。

しかし腰についていた小さなポーチに今までヒーロー殺しによって回収されていたと思われた多くのヒーロー免許証を発見し、個人の個性によって現れた証拠とヒーローによる証言と根拠は弱いが見逃す訳にはいかない情報に警察は女について調べることを表明していたが、エンデヴァーによると完全に女についての捜査が打ち切られたらしい。理由は先程あげた通り根拠が薄いこと、証拠能力のある物が何も無いのがトドメだそうだ。

別にそれだけならパンドラは声を荒らげたりしない。

そもそもパンドラは女については正体を知っている。ヒーロー殺

し騒ぎの夜、月一回の集まりの場でヒーロー殺しにストーカーという名の調査をしていたウルベルトはヒーロー殺しに便乗して殺しをしている女に気づき、独自に捜査、集まりで正体を暴露していた。
　そして問題は昨日の夜、いつもの通り<転移門(ゲート)>によって家に帰り父と夕ご飯を楽しんでいたそんな時、女が殺した人物の写真、パンドラが最後に看取った女性がテレビに映ったことにより幸せな時間がぶち壊されてしまった。
「っこの子。そうか。殺されてしまったのか。」
「なんとっ! 父上はこの女性とお知り合いでしたか?」
「いや知り合いって程じゃないんだけど。女性ってのも今知ったし。この子俺が困っている時助けようとしてくれたんだよね。連れの人達とも仲良さそうでその日朝からすごい良い気分になれたんだ。そうかー殺されちゃったんだ。」
　明らかにモモンガはしゅんとしている。多分気持ち的には荒らされた花壇を見てしまった程度なのだろうが、それでも愛しい父の気分を害した原因である女と取り逃した自分自身にパンドラは腹をたてた。
(あの時殺しておけば。)
　そうして今現在、捜査が打ち切られたことによって忌々しい女のことを思い出してしまいつい声を荒らげてしまったのだ。
「パンドラがそんな不機嫌なのは珍しい。」
　パンドラの隣で蕎麦を啜っている轟もいつも通りクールだが3日前、幸いにも怪我はなく一応警察病院で検査してもらい緑谷、飯田と共に警察官から何時間に渡り説教を受けた身だ。轟曰くしばらく街ゆく犬にビビり倒すレベルまでこってり絞られたらしい
　さて色々なことがあったが職場体験も残すところあと1日、明日の昼頃にはエンデヴァー事務所とおさらばである。
「そういや今回の脳無とヒーロー殺し、焦凍、お前ら雄英高校を襲ったヴィラン連合? と言うやつが1枚噛んでいるらしいな」
「新聞に載ってた3体のヴィランってやつは俺らを襲った脳無そっくりだった。けどヒーロー殺しの方は知らない。本当にステインと

ヴィラン連合が繋がってるのかは分からねぇ」
「だが世間ではヒーロー殺しはヴィラン連合に属していたとされている。あの夜メディアのカメラに連合のリーダーの姿も確認されている」
　エンデヴァーは持っていた新聞を開き、死柄木が写っているページを2人に見せつける。
「うわっ1ヶ月で随分と趣味が変わってるな」
「うーん嫌いではないですけど趣味ではないですね」
「巫山戯ている格好なのは同意する。いや違う、今それは俺にとってはどうでもいい。俺が気になるのはヒーロー殺しを連れ去った奴だ」
　エンデヴァーは当時を思い出してしまったのか一気に目付きが悪くなった。普通の人なら恐縮してしまう形相だが対面するのはパンドラと轟だ。特に動じることはない。
「あれだけのヒーローの攻撃をあいつは打ち消した。少なくとも俺か、それ以上の実力の持ち主と思われる。無視することは出来んはずだ。なのにっ警察も公安もそいつが存在した物的証拠がないことを理由に清々しいほどに無かったことにしたっ！　そうまるで圧力をかけられているようにな・・くそっ本当にあいつは一体何者なんだ！」
　ドンッと机を叩いたせいで轟の食べていた蕎麦のつゆが机に零れる。机から零れ落ちるつゆと連動して轟のエンデヴァーに対する好感度がどんどん落ちていくが、エンデヴァーはそれに気づかず体を震わすばかりだ。
「それにしてもどうしてこの動画にはその謎の敵は写ってないんでしょうかねぇ。不思議ですねぇ」
　そんな轟親子を横目にパンドラはスマホを取り出し動画配信サービスを開き半殺し動画を再生していた。パンドラはとことん知らないフリをしているが正体がウルベルトであることはもちろん、動画に映っていないのもウルベルトの部下によって撮影者が霧発生前に退散させられたからということまで知っている。しかしエンデヴァーにわざわざバラすような真似はしない。
「思ったよりバッシングは少ないですね。ひとまずヒーロー殺しは活

動できなくなり束の間の安泰は手に入れたから？それとも３体のヴィランはきちんと制圧したからでしょうか？　その代わりか違う意味でのバッシングは盛んです。やりすぎですって、エンデヴァー達がヴィランに見えるってコメントもありますよ」

「ほっとけ！　その動画は削除されているはずなのになんでまだ出回っとるんだ」

「転載、削除、転載、削除でイタチごっこ。無限ループに陥っているからですよ。人の噂も７５日、インターネットは永遠に消えず。これは一生残り続けますね。多分５０年後ぐらいに特集組まれて当時の貴重な資料が――てなるパターン。良かったじゃないですか」

「良くない。何言っとんだ貴様」

「そんな気にしなくてもいいってことですよ。貴方たちは別にルールを破ったわけでもないですし。それより気づいてます？　職場体験あと１日ですよ！　なんだかんだ言ってこの経験は非常に参考になるものでした。まさかやらかした時のマスコミへの対応、処理まで間近で見られるとは！　お呼びいただいて本当にありがとうございます！　さすがＮｏ．２ですね！　いやはやＮｏ．２は伊達じゃない！　Ｎｏ．２！」

「Ｎｏ．２を連呼するなァァァ！」

「おいやめろ！　２人とも顔を突き合わすな、俺の視界に同時に入るな。うっ蕎麦　吐くっ」

マイペースなパンドラ、怒るエンデヴァー、トラウマが治らない轟、職場体験最終日まで同じようなテンションが続き、パンドラと轟は事務所のヒーローから沢山のエールとお土産を手に雄英高校へ帰って行ったのであった。

???

――

???

「あーあつまんないなぁ」

ヒーロー殺し騒ぎから数日後、どこにでもあるような薄暗い路地裏で、1人の女がゴミ箱に腰かけ心底つまらなそうに空を見上げていた。

「ヒーロー殺し捕まっちゃったし」

女は人を殺すことに対して異常な愛情を持っていた。その欲求はそこら辺にいる雑魚を殺すだけでも満ち足りていたはずだった。

しかし彼女はこの日本で変わってしまった。日本に来てすぐの頃、我慢ならず適当な人間をいたぶっていた彼女の目の前に1人のヒーローが現れた。いや現れてしまったと言うべきか。そのヒーローは何か偽善めいたことを喚いていたが女にとって取るに足らない存在。最初は勇ましく襲いかかってきたが次第にその勢いは無くなり、最終的には顔を歪まして己の力不足を嘆き涙を流しながらねじ伏せられた。

女はその様子にたまらなく満たされてしまったのだ。最初から助からないと絶望するのもいい。泣き喚き抵抗するのも良い。だがそのヒーローのように正義は勝つと信じてやまない者が力及ばず無様に散っていく姿は未だかつてなく、最高に愉快であったのだ。

そしてその罪はたまたま日本で話題になっていたヒーロー殺しが被ってくれた。これ幸いにと女は自らの嗜虐心を一般人よりもヒーローで満たすようになってしまったのだ。

だがそのヒーロー殺しはもう居ない。動画も見てみたがあの怪我ではしばらく動くことは不可能だろう。今までのように大っぴらにヒーローを殺していてはその内捕まってしまう。法国にもそれが伝わってしまえばおしまいだ。自分は強大な力に対して抵抗できるような特別な個性(カ)など持ってはいないと女はよく分かっていた。

「もう他の国行こっかなー。そもそもこの国来たのって丁度いいタイミングで乗り込んだ船が日本行きだっただけだしーとにかくあの大陸から離れられればそれで良かっただけ。うん、食べ物うまいしアニメが面白いからちょぉーと居心地が良かっただけ、別に離れるのは全然いいんだけど！　あまり長い間同じ土地にいても危ないからねーうん！　そうだね離れよう！　でも日本以外であんな美味しい抹茶

アイスとか売ってんのかな・・・幼女？記の２期もまだだし・・・あーもうなんかイライラしてきた。ヒーローこーろーしーたーいなー！　拷問したーいなー！」
「じゃあ用意しようか？」
　女は全身の穴から一気に冷や汗が吹き出すのを感じた。声は自分のすぐ後ろから聞こえてきた。ここまで気づかれず接近することなど果たして可能なのだろうか。女は全力で声から距離をとる
「そんな驚かないでくれよ。僕は君を勧誘しに来ただけなのに」
　振り向いた先にいた声の人物は異様な姿をしていた。髪も目も鼻もない。口元にはごついマスクをつけ首から下はやたら質の良いスーツを身につけている。女はいちいちそんなことで動揺はしない。だが女の持つ戦士としての勘が声の人物に対して危険信号をガンガンと鳴らしていた。あれはバケモノであると、自分が知っている最強の存在よりもさらに強いと
　女は勝手に震え出す身体を必死に押さえつけ相手に向き合った。
「私に一体なんの用・ですか？」
「さっき言ったじゃないか。僕は君を勧誘しにきたんだよ。なぁもし良かったらヴィラン連合に入らないか？」
　聞き覚えのある単語に女は首を傾げる
「ヴィラン連合・ってヒーロー殺しが所属していたあの？」
「うん。実はそこでは僕の教え子がリーダーを務めているんだ。だけどまだまだ発展途上。だから君にその子を手伝ってもらいたいんだ。お仕事の内容は簡単さ。ヴィラン連合の邪魔となる者を殺すだけ。もちろんその邪魔者はヒーローもいっぱい含まれているよ」
「いやでもあんまり目立ちすぎる所に所属するのはちょっと」
「君が追われているのは知っている。その点は大丈夫、僕が守ってあげようじゃないか。さてこれで君が断る選択は無くなったかな？」
　女は考え込む。この人物の加護内に入ればもう追ってから逃げなくても済むかもしれないと。たとえあの法国最強の称号を手にするアイツや特別な個性（力）を持った兄が追ってきたとしてもきっと難なく撃退することができるだろう。更にヒーローを殺すのがお仕事など

至れり尽くせり、はっきり言って断る理由はない。
「うーんこれでも足りないのかい？　じゃあ入ってくれたら僕は君にプレゼントをあげよう」
「プレゼント？」
「そう。プレゼントさ。このプレゼントがあれば君はお兄さんよりもずぅっと強くなれるはずだよ」
「っ!!」
　女は様子を伺うように目を向けた。
「さあ君の答えを聞かせてもらっていいかな」
「・・1ついい？」
「なんだい？」
「なんで私？」
「なんでって・・・君が優秀だからだよ」
・・・
　女はその言葉を聞いてきょとんとした表情を浮かべた。しかしそれも数秒後には消え去り、女は無言で首を縦に振る。
「良かった、交渉成立だね。しばらくしたら義爛という者が君の所に訪れるはずだ。後は彼についていけばいい。ああ！　そういえば名乗るのを忘れていたね。僕の名前はオール・フォー・ワン。良ければ君の名前も教えてくれないか？」
「私は・・」
　女は今まで被っていたフードを取り去り、亀裂めいた笑みを浮かべる

「私の名前はクレマンティーヌ。よろしくね？」

続く

小ネタ

＜露出＞

――警察署

「それは本当か！その君たちが見た女の姿になれるって言うのかい!?」

「ええ、私の個性は見ることさえ出来ればコピー出来ます。更にストックにも空きがあったので保存することも可能」

「じゃあ悪いけど変身してもらっていいかな？」

「もちろんです」

その瞬間パンドラの姿が溶けだしマントとフードで身体全体を隠した女の姿に変わった

「さあ刮目せよ！　これが私たちの見た犯人の姿！」

一気に上に着ていたものを剥いだパンドラにその場にいた皆が、特に男共は絶句した

「ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛!!　パンドラが露出魔になったあああ！」

「ビミョーに誤解されるようなこと言わないでください！　名誉毀損で訴えますよ！」

顔を隠しながら悲鳴に近い声をあげたマニュアルにパンドラはツッコミと権利を主張するが、パンドラはどちらかと言うと名誉毀損で訴えられる側である。

しかしマニュアルが声を上げるのはしょうがないことでもあった。

パンドラは今、ボブカットの美しい金髪、肌は白く猫を思わせる可

愛らしくも整った顔立ち、女性らしさを残しつつ鍛え上げられた均整が取れた身体と美女と呼べるにふさわしい姿になっていた。
そこは問題ないのだ。ただ少し、いやかなり露出が激しかった。
簡単に言うとビキニアーマーをもう少しマシにしたレベルの露出だ。
「普通に機動性を重視した結果でしょう。そこまで騒ぐ程のものでは・・というかミッドナイトとかＭｔ．レディとかの方がやば」
「とにかくマント！」
慌ててマニュアルはマントを投げつけるがパンドラは無視して女の装備を弄くり回している
「うーん女の身分証明出来る物が見当たりませんねぇ。もしかしたらあの投げ捨てられたバックパックに手がかりが入っていたのでは？
ああっパンドラズ・アクター一生の不覚！　あの時マニュアルさんほっといてさっさとコピーしとけば！　こんな失態きっと父上に知られたら叱られてしまう！　けどそれはそれでご褒――」
「マント羽織ろう?!!?　君そろそろいい加減にしとかないと訴えられたら負けるぞ!?」

期末テスト
にゃーん

――教室にて

「久しぶりだな俺の生徒達！　皆職場体験はどうだったか？　学んだことは人それぞれだろうが今回の体験を糧にさらに成長していけ！　で疲れているところ悪いが期末テストのことを忘れていないか？」

「「「ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛!!!」」」

「雄英ヒーロー科の期末テストは学力だけではなく実践的なテストも用意してある。くれぐれも！　くれぐれもどちらか一方に偏る無くバランス良く鍛えとくんだぞ！　朝礼は以上だ！　1時間目遅れるなよ」

　朝から爆弾を投げつけ何名か生徒を爆死させたままブラドは教室を後にしていった。

「やべぇすっかり忘れていた！　そういやここ学校だった！　テストあるんだった！」

「馬鹿だね鉄哲、僕は職場体験中もテストのことは忘れていなかったよ。かといって勉強していたかどうかは別さ」

「自慢出来ることじゃないよね物間。ヤバいって自覚してるんじゃん。全身ガッタガタに震えてるじゃん」

　ギャーギャーと騒ぎ出すクラスメイトとはうってかわって庄田とパンドラは落ち着いた様子で騒ぎを眺めていた。

「数名阿鼻叫喚、その点君は筆記については何も心配しなくていいのが羨ましいよ」

「授業をきちんと聞いていれば理解出来ると思うんですけどね」

　パンドラにとって高校の授業内容は小学生の授業と大差なかった。普段の行動からあまり注目されていないがパンドラの頭脳は天才の部類に入る。今までの小テストも現代文以外全て１００点のみ、もちろん中間テストもぶっちぎりの学年1位。教師たちを毎度唸らせている。ちなみに現代文も時々トンチンカンな回答を提出してくるが

その他は満点ばかりだ。
「うーん僕も理解は出来るけど暗記や応用はなぁ。最近体術の方に力入れすぎて遅れ気味だし……そうだ良ければ勉強教えてくれないか？」
名案とばかりにパンドラに提案する庄田を見て近くにいた生徒達がこぞって目を輝かせながら近づいてきた。
「なんだ庄田、パンドラと勉強会するのか？　すまないが俺も混ぜてもらっていいか？　二次関数の応用がごちゃごちゃして頭の中真っ黒でな……」
「Ｏｈ――！　ワタシもパンドラと勉強会ヤリタイ！　ワタシはホウリツのホウデ躓いてマース」
懇願の目で見つめられたパンドラは片手で顔を隠しながらおもむろに椅子の上に立った。そして指の隙間からクラスメイトを見下ろし空いた手でビシッと指さす。
「頼まれたのなら応えましょう！　副委員長としてクラスのレベルアップには全力を尽くしましょう！　しかーし今日は用事があるのでやるなら明日からでお願いします」
「えー用事？」
ブーブーと野次があがる。自分勝手なクラスメイト達である
「黙らっしゃい！　私はちょっと放課後にスト――尾行しなければならないので！」
???
――今日の朝
「お久しぶりです心操くん！　いやー気持ち的には7ヶ月ぶりくらいですかね？　1週間も私と会えなくて寂しくなかったですか!?」
「おはようパンドラ。うん特に寂しくはなかったかな」
「んーそんな嘘つかなくても……　なんか疲れてません？」
「あーいや……。ああでもお前には報告しといた方がいいかもな。実は――」
そんな会話があった日の放課後、心操は相澤先生からヒーロー科に

入るための特訓を受けられるようになったこと。何回か受けたがとてもキツいこと。ジャスティスさんについて聞かれたこと。全てをパンドラに話してしまったことを後悔した。
「そういや私相澤先生とはきちんと話したことがなかったんですよ」
「そう」
相澤先生との特訓場までパンドラにつけられたのは別にいいのだ。問題はパンドラの姿にある。その姿は朝自分が話してしまった悩み事を解決しようと善意で変身したものであり、心操はパンドラに強く言う事が出来なかった。だがどうしても相澤がここに来るまでには変身を解いて欲しかった。
(俺が相澤先生ともう少し打ち解けたいなんて漏らさなければ)
相澤が悪い訳ではない。ヒーロー科を目指す心操に編入のカリキュラムを説明し、忙しい合間を縫って捕縛布、戦闘訓練をつけると申し出てくれたことにはとても感謝している。指導も厳しいが理不尽なことを押し付けたりせず、分からなかったり間違えているところは理解するまでとことん丁寧に教えてくれる。
ただ心操が相澤に話かけられるたび感謝やら畏れやら時間を割いてもらっている申し訳なさで緊張してしまうだけだ。このままでは特訓に集中できない。速やかに解決しなければ相手は合理主義者、こんなことで特訓に身が入ってないのかと飽きれられ見限られる可能性は十分にある。そうなったらきっと心操はもう立ち直れない。自分でも分かっていた。
(だからってだからって!)
「まだ相澤先生いらっしゃいませんね。じゃあこの間に私のこの顔!スタイル! 雰囲気! その目を隠してる手を退けて私を相澤先生と思って接してみて下さい!」
そう低音で叫びながら笑顔で手を広げる相澤――もといパンドラを心操は直視出来なかった。
(いや確かに相澤先生に慣れるために変身してくれるのは有難いと思うよ!? けどそんなキャラじゃないじゃん! 俺これから相澤先生どんな顔で見ればいいの!? そもそもなんで相澤先生が来る場所で

本人に変身する？　絶対あの人嫌がるでしょ・・・。俺も嫌だもん自分と同じ姿の奴がハイテンションでポーズ決めてるなんて。けどなー善意でやってるっぽいしなーやめてくれとは言いづらい。でも早いところやめさせなきゃ・・。ところでなんで今日パンドラ俺についてきたんだ？　好奇心？）・・

「さあさあ何故私を見ないのですか!?　今なら出血大サービスでストリップショー！」

心操がフル回転で頭を働かせているのにも関わらずパンドラはさらに混乱するような言葉を吐きながら近づいてくる。若干涙目になった心操を救ったのは地獄から響いてきたかのような低い声だった。

「個性を乱用するな鈴木。即刻個性を解け」

「相澤先生っ!!」

頭を悩ましている間に到着していたらしい相澤の登場に心操はほっと胸を撫で下ろす。同時に注意されたパンドラは大人しく変身を解いた。

「何故ここに鈴木が居る？」

相澤はどちらにも質問を投げかけているようだったがそんなの心操だって知りたかった。

「まず最初に心操くんは関係ありません。私が勝手にここまでつけてきただけですので怒ったりしないであげて下さい」

「別に怒るつもりはないがストーカー行為はあまり宜しくないぞ」

「私がここに来たのは私も捕縛布の扱いを覚えたいからです！」

「話聞けよ・お前に必ずしも必要とは思えないんだが」

「まあそんなことおっしゃらずに、私も貴方レベルまでマスターしようとは思ってはいません。・【抹消】は使う頻度が高いんです。変化した際捕縛布を使いこなせれば戦略の幅も増えると思いません？」

相澤は納得したように息を吐いた

「そうか、別に参加したいなら参加すればいい。１人も２人もあまり変わらん」

「ありがとうございます！　しかし私は他にもやることが沢山あるの

で毎日は来れません。なので心操くんを第1に優先して下さい。私は心操くんのオマケ程度に考えてくれれば」
「・分かった。頭に入れとく」
「パンドラ・」
パンドラもまた成長していくのだなと心操はしみじみとしていたがここで話の内容を思い返してみる。パンドラが捕縛布を使う場合その姿は・つまりだ。これからの特訓では相澤とハイテンション相澤（中身パンドラ）に挟まれて特訓をすることに
「パンドラァ！　お願いだから特訓の時は大人しくしてて！」
「えっ？　あっはい。了解しました」
「敬礼も無しで！」
「え――ー」
「それは俺からも頼む。さっき自分の満面の笑みを見てゾワっとした」
「え――ー」

???

「さて、訓練に入るのは別に構わないが俺はあくまでA組の担任だからな、鈴木について基本的な情報は頭に入れてる。だが細かいところまでは知らん。とりあえず自身の個性をお前の口から聞きたい」
腕を組み木に寄りかかりながらそう尋ねる相澤にパンドラは元気よく返事を返す。
「はい了解しました！　私の個性は知っての通り【ドッペルゲンガー】見た相手の姿に変身し個性を使えます。写真だけだと姿形のみ。数に限りはありますが個性はストックすることもできます」
「動物や無機物は？」
「無機物はさすがに無理ですね。動物はやろうと思えばできますよ」

「実際に変身する過程がみたい。ちょっとやって貰っていいか？　姿形だけでいい。モデルは――」
　相澤がポッケからスマホを取り出そうとした瞬間、心操はスマホを手にかかげながらパンドラの目の前に躍り出た。
「先生ここは俺に任せといて下さい。パンドラ、この近所のアイドル猫白ちゃんに変身できるか」
「シロちゃん」
　パンドラが目をキラキラと輝かしている心操に困惑している間に相澤がスマホの画面を見せながら心操の前に踊り出てきた。
「待て心操、猫ならこのおすしの方が合理的だ」
「合理的とは？　さっき言い忘れてましたが写真だけだとその部分しか正確に変身できないので見えない部分は私の想像で変身することに――」
「猫を見たら全方面から写真を撮るのは当たり前だろ？」
「ひぇ」
　さも当然のように言われパンドラが己の常識を疑い始めたのを傍目に2人は会話をヒートアップさせていた。
「待ってください先生、ちょっと変身するぐらいなら白ちゃんのような汚れひとつない純白の方が格段にやり易いはずです」
「やるならやるで難しい柄に挑戦した方が個性の練習にもなって合理的だ。おすしはその点優れている」
「そのおすしちゃん？　君？　愛らしい顔立ちですね。毛並みもふわふわで思わず顔を埋めたくなります。何歳ですか？」
「正確な年齢は分からんが１４歳は過ぎている。その白ちゃんとやらもここまで綺麗な毛並みの野良とは珍しいな。可愛さと綺麗さを掛け算したような上品な顔立ちだ」
「ありがとうございます。おすしちゃん１４歳ですか？　だいぶ歳いってますね。それでもこの愛くるしさが持続したままとは。体調とか大丈夫ですか？」
「今のとこ元気だ。猫はどの年齢にもそれぞれ違う魅力がついてくるからな。見てて飽きない」

「ええ全くその通りです」
「何盛りあがってるんですか!?　話ずれてってますよ！　ええい決まらないのなら折衷案です！」
　勝手にパンドラは変身を始めた。パンドラの姿がどろりと解け輪郭が曖昧になってくる。２人の視点からさらに下へと溶けていき小さな影を創り出す。

　しなやかな尻尾、肌色に近い艶やかな黄色の毛並み、手足にはぷにぷにとした肉球、ピンっと張った三角の耳
　首に黒いネクタイを巻き、小さな頭の上にはちょこんと軍帽が乗っかている。

　そして顔には黒い穴が３つと６本の髭
「可愛い（猫）に可愛い（私）の要素を掛けてできた無限の可愛さ！
その名もパンにゃ「「ちぃっ」」舌打ちっ!?」
　パンドラが見上げると２人の眉間には皺がよっていた。
「舐めとんか」
「舐めてますね」
「えっえっ？」
「まず顔に穴の空いてる時点で猫じゃない」
「小さなお口、低い鼻、個性豊かなアーモンドアイ、眉ら辺の毛と髭を生やしてやっとスタート地点だよ」
「猫はそんな２本足で立たない」
「狙ってポーズも取らない」
「尻尾が生きてねぇ」
「肉球はもっとこう艶を持ってないと」
「前提として猫は喋らん」
「にゃ！　にゃにゃーにゃんにゃん（ちょっじゃあこれでどうですか

？）」
　パンドラは慌てて猫の鳴き声を再現するが２人の顔は変わらない
「パンドラ、猫はにゃんだけで構成してると思うなよ。猫なら鼻息まで愛らしくしないと」
「そもそも雰囲気がもう猫じゃない」
「パンドラの成分全面に出しすぎ」
「毛並みはもう少しふわふわの方がいい」
「細かい動きがわざとっぽい」
「ＮＯＯＯＯＯ！　２人揃って流れるようなダメだし！」
　パンドラはいつもの人型埴輪に戻り地団駄を踏んだ。
「なんなんですか！？　なんなんですか!?　２人揃って打ち合わせでもしてたんですか!?　そうじゃなきゃただの似たもの同士ですよ！」
「似た・・もの同士・・」
「おい俺と似たもの同士とか心操が可哀想だろうが」
　真顔で否定する相澤に心操は驚きを隠せない
　相澤が可哀想ならわかるが心操が可哀想とは意味が分からなかった。・・・
「そっ・・そんなことないです！　むしろ似ているって言われてだいぶ、いや結構嬉しい・・です」
「？」　・・・
「心操くん相澤先生に話しかけられて緊張してしまうぐらいですもんね～。もっと仲良くなりたいと私に相談してしまうぐらいですからね～。分かります。私も偉大なる父上を前にすると緊張と共に尊敬の念が湧き上がりもっとお傍に「パパパンドラ!?」はい？」
　よりよって本人の目の前で悩みを暴露され心操は慌ててパンドラの肩を掴み揺らす。バラした本人は何が悪かったのか分からないとばかりにポカンとしていた。
「・・心操」
「ひ・・ひゃい！」
　相澤の呼び掛けに声が裏返る。心操は相澤の方を振り向けなかった。

「俺が怖いか？」
　相澤の声は淡々としておりどんな感情が込められているか察することができない。ここまで来てしまえばもう誤魔化せないと悟った心操は心の内を正直に話すことにした。
「いや怖い・・っちゃ怖いですけど。怖いというか先生には感謝しているんです。・・俺なんかに時間使わせてしまって畏れ多いというかいや俺がほんと！　勝手に緊張してるだけで先生が悪い訳ではないんです！」
「すまんな」
「えっ」
　唐突な謝罪に心操は相澤の顔をマジマジと見てしまう。表情は相変わらずの無表情だが視線は下の方を向いていた。
「お前が俺に対して気を張っているのは分かってた」
「っ」
　緊張がバレていた事実に心操は頭が真っ白になる。しかし相澤は容赦なくそのまま言葉を続ける
「確かに俺は物言いは優しくない。怖いと感じてしまうのも致し方ない・・が怒っているわけではないということはまず理解していてくれ。後・・俺に対して畏れ多いとか考えるな。俺は教師、お前は生徒。教師の・・仕事は生徒を指導することだ。つまり俺は仕事をこなしているだけ、お前がそんなグダグダ考える必要はないし感謝する必要も無い。当・・たり前のことをしているだけだからな」
「・・」
「・・あーまぁ、とにかくだ。お前はただ目標のためにがむしゃらに頑張っていけばいいんだ。俺のことはヒーローになるための踏み台とでも思え」
「そんな踏み台なんて・・・」
「話終わりました？　・・時間は有限ですよね相澤先生？　早いとこ訓練始めましょうよ」
　いつの間にか地団駄をやめていたパンドラがマイペースに会話に割り込んできた。気づけばいつもの開始時間から１０分以上過ぎて

いる。

「はぁ。心操、俺に対してはこんぐらいの気軽さでいい。それに俺は訓練中の無駄口は嫌いだが休憩中は別に咎めたりしない。何か話したいことがあるなら話せ。無視はしないよ」

「今休憩中ですよね？　じゃあハイハイ質問です！　【抹消】使う時に顔に手を当てて隙間から覗き込むように睨むとカッコイイと思うんですけどどう思います!?」

「。話の内容によっては無視する時もある」

「えっ無視？」

「。ぶふっ」

パンドラの質問に対してあまりにも華麗にスルーするものだから心操は堪えきれず小さく吹き出してしまった。なんだか色々と馬鹿らしくなってきていた。

「あーだいぶ時間を無駄にしてしまったな。そろそろ訓練を始めるが心操、何か質問はあるか？」

昨日までならこの言葉に心操は身体を強ばらせ大丈夫ですと返答していただろう。しかし今はもう違う

「じゃあひとつ、先生は猫。好きですか？」

。

きっと近いうち自分は先生に対して自然体で接することができるだろうと、心操は確信に近い予感がしていた。

続く

小ネタ

＜相澤消太の独り言＞

（俺と似たもの同士で嬉しい……か）

心操とパンドラが帰った後、しばらく相澤はその場に留まっていた。

相澤は自身のことを愛想もないし言葉遣いも他の人に比べて厳しい方だと自認している。心操が緊張してしまうのはしょうがないと理解していた。ただ別に心操は緊張してしまった状態でも話はきちんと理解し行動出来ていたのに加え多少空気が張っていた方が集中出来るだろうと考えていたので、まぁいつか慣れてくるだろうと思い口には出さなかったのだ。

（思ったより気に悩んでいたんだな……ちゃんと話し合うべきだった。心操に悪いことした）

ただひとつこの関わった数日間で似て嬉しいと思われるぐらいに相澤自身の好感度が高かったのは予想外だった。

なんで自分が？　と疑問ではあるものの好かれるのは素直に嬉しい。

相澤は捕縛布で口元が隠れているのをいいことにこっそり微笑む。しかしそれは一瞬のことだった。

（だが……心操、お前は俺なんかと似ちゃダメだ）

捕縛布の扱いもいつか自身をも超えて

多くの人も自分も救えるヒーローになって欲しい。それは相澤の偽りのない願いだった。

幸いに心操にも強引に前に引っ張ってくれる友達がいる

そういう奴は無意識に想像以上に他人に影響を与えていたりするのだ

『ショータ!!』

『心操くん！』

（……絶対俺のような人生を歩ませてなるものか、俺のような思いをさせてたまるか）

相澤は誰もいない虚空を睨みつける。

オールマイトのように全てを救うことは出来ない。個人の力など

微々たるものだ。
だけどせめて、抹消の目が届く範囲にいる者達はその身がどうなろうとも守り通したいと思っている。
「そういやパンドラにジャスティスとはなんなのか聞くの忘れてたな」
相澤は独り言を零しながら職員室に戻るため足を踏み出す。

空には夕日を覆い隠すほど大きな雲が漂っていた。

得体

「重要な武装で行う戦闘は活動に問題は無いですが見るものに凄惨さを印象づけてしまうことから人それぞれの個性やキャラクターに合ったアイデンティティをコスチュームで強調するようになりました。例にあげるとプレゼント・マイク等が分かりやすいですかね？さて、このコスチュームの多様性が生まれたことをクラウン・ショックと呼ぶんですけど今回のテストには出ないので覚えなくていいです」

「「じゃあ説明すんなっっ!!」」

「パンドラァァ！　俺今情報詰め込みすぎて頭パンパンなんだよ！余計な情報を与えるんじゃねぇー！　覚えちゃったよクラウン・ショック！」

そう頭を抱え机に顔を打ち付けるのは鉄哲だった。ただでさえテスト期間まで時間が無いのだ。膨大なテスト範囲の単語や数式を頭に無理やり詰め込んでいるところに余計な知識などいれ込まれたらたまったものでは無い。ちなみに【スティール】を発動しているので鉄哲の身体にダメージはない。打ち付けた衝撃で単語のひとつやふたつはとんでいる可能性はあるかもしれないが

「パンドラ～数学分かんないよ～」

「数学は公式を当てはめていけばいいだけでしょう!?　貴方が躓いているとこだって問題の出し方が違うだけです。やり方は前のと一緒です。パズルみたいなもんだと思って諦めないでください」

「英語の存在意義とは？」

「外国人との円滑なコミュニケーションのためです。泡瀬くん、貴方はまず単語が問題です。単語からやって下さい。五感身体記憶全てに染み込ませてから出直してらっしゃい」

「歴史ながい！　細かい！　お前が何したとか興味ねえわっ！」

「故人に八つ当たりしても意味ないですから！　無理やり興味持ってください。歴史は流れ！」

放課後の教室のあちらこちらから悲鳴があがり、その度パンドラは

駆けつけ教え、宥め、励ましサポートしていた。宝物庫守護者の仕事もそれなりに大変な業務であったがこちらはこちらで違う意味で大変である。アイテムは寡黙で決まった効果しか発揮しないが生物は見当違いな思考に着地し勝手に想定外のことをやらかす。
「ふふふ、僕はきっともうダメだ。B組の汚点になるくらいなら今ここで清く死を選ぶううう!!!」
「そんなことで死を選ぶとかバカの考えですよ!? 窓に手をかける暇があるなら単語のひとつでも覚えてください！」
パンドラは追い詰められ窓から足を出そうとする物間を無理やり教室に引っ張り込み息を吐く。本来ボケの役割が多い彼もここ連日ツッコミばかり担当している。今すぐにでも宝物庫に閉じこもりマジックアイテムをひたすらに磨きたいと口には出さないが心の中で何度も願ってしまうほど精神的に疲れきっていた。
（拳動さん、取陰さんと骨抜くんがいなかったらどうなっていたことやら・・けどあの3人、本格的にやばい奴ばっかりこっちに残してくれやがりましたね）
パンドラは想像の中にいる綺麗な笑顔で敬礼している3人に恨みがましい目を向ける。そんなことをしている合間にもまた教室の端っこでうめき声が発生していた。その顔は思考を放棄してしまっている。
（もう！ シャルティア様じゃないんですから!!）
どこぞのポンコツ吸血鬼の幻覚を見つつパンドラはうめき声を止めるべく移動する。期末試験はすぐそこまでやってきていた。
「ああ問題文！ なんで君はそんな意味の分からないことを聞くんだ？ こんだけの情報で何が導き出せるんだってんだい!?」
「問題文にキレても現実は何も変わりませんよ物間くん」

回想終了

（――とまぁそんなこともありましたね）

筆記試験が無事終了し一息つく間もなく演習試験の当日、パンドラ含む1年B組はコスチュームを着用し指定された場所に集まっていた。

「やあ筆記試験お疲れ様！　みんな大好き校長先生なのさ！　君たちなら事前に情報を仕入れているかもしれないけど今回から内容を変更しちゃっているのさっ」

ブラドの肩に乗り、ニコニコしながらそう言い放った校長に一部首を傾げている生徒はいるものの大半は同意を示すように頷く。1年B組の演習試験はA組の次の日であったことからパンドラ含む大半の生徒はA組の生徒から試験の内容を聞き出していた。

「一応説明するけど今回の試験はこちらが事前に独断で組ませてもらった2人1組で教師1人と戦闘をおこなってもらうのさ！　試験の詳しい概要については各々の対戦相手に説明してもらってね。さぁさぁ時間もそんなないし皆気になっている組み分け発表に入ろうかな！」

その言葉に生徒たちは思わず身構える。パンドラも制限時間は30分、教師相手にハンドカフスをかけるか1人でもステージから脱出すれば勝利、教師には超圧縮重りのハンデがある諸々はA組からの情報収集で知っていた。しかし、誰とペアになるのか、どの教師と当たるかについては一切分からない状態だった。もちろん聞き出した情報を元に脳内シュミレーションは繰り返したが、聞いていた教師陣も何名か違うヒーローに変わっておりあまり参考にはならないと思われる。ペアと教師が決まった瞬間からが彼の勝負は始まるのだ。

「まず最初にパンドラと吹出でチームで相手が――」

「わーたーしーが――」

突如ブラドの声に割り込んできた既視感のある声にパンドラは膝から崩れ落ちたくなったが微かな希望を胸に耐えきる。しかし願い虚しく上からオールマイトは落ちてきた。

「うっわ」
「え？」
「ヴィラン役として君たちの相手をする！」
「うっわ」
「くぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ!?!」

今度こそパンドラと、ついでに吹出も膝から崩れ落ちた。

???

「ねっねぇ」
「お黙らっしゃいオールマイト！　吹出くんがまた泣き出しちゃうでしょうが！」
「さめざめっ！　さめざめっ！」

衝撃の組み合わせ発表から数分後、パンドラ・吹出ペアとオールマイトはバスに揺られていた。
「いやぁ割と私達のステージ近いからそろそろ着いちゃうん　だけど、その　大丈夫？」
「これが大丈夫に見えます？」

信じられない物を見るような目で視線をよこすパンドラにオールマイトはうぐっとうめき声をあげた。普通齢１５の子供がＮｏ．１ヒーローと戦わなければならない状況について絶望を覚えない訳が無い。だが彼は先日戦った緑谷と爆豪、特に爆豪の好戦的な態度のおかげで生徒のオールマイトとの戦いに対する心境というものをおおいに誤解していた。現にパンドラに並ぶと言われている超ポジティブ男、吹出でさえ親への遺言状を書かせてくれと泣き叫んでいる。嫌だ帰ると喚いていない時点で戦うことに関しては受け入れているのであろうがただただ感情云々が受け入れ辛いのであろう。

オールマイトもこうも項垂れている様子を見せつけられるとチクチクと罪悪感を刺激された。

（でもなぁ、こっちも仕事だし・・・）
吹出を慰めているパンドラの様子をチラリと伺う。先程は地面に膝を着いて絶望感を醸し出していたがすぐに立ち直ったようで彼の様子は普段と特に変わらない様子だった。
（パンドラズ・アクターを見極めろ・・・か）

――数日前

話は試験前の会議室に戻る。
「「異議なし」」
「じゃあ鉄哲と宍田はセメントスに任せます。次は・・・と」
「パンドラ・吹出ペアですね。彼らの長所はバリエーションの豊かさ・・・。パンドラは状況によって個性を、吹出は攻撃と環境を変化させられる。伸ばすべきは状況に数ある戦略から正解を導き出す判断力ってとこですかね。パワーローダー、彼らの相手やりたくないか？」
「冗談じゃないよブラド、空飛ばれたらこちとら手出しできねーてかその点で相手出来る教師は限られてるんじゃないの？」
１年Ａ組の組み合わせが終わり教員数名を入れ替えての組み分け会議が始まってから３０分以上が経過していた。今まですんなりと決まっていたがここで初めてつまづき会議室の空気がつまる。後回しにしようと誰かが口に出す直前に根津校長が手をあげた。
「オールマイトを相手にするのはどうなのさ？」
「私・・・ですか？」
指名されたオールマイトは顎に手をあてる。確かにオールマイトならば空を飛べる訳ではないが空への攻撃手段は事欠かない。
「そうさ！　圧倒的なパワーを持つ君を相手にした時、どう立ち回るかによって彼らの真価が問われるのさ。これこそまさしくパワーＶＳ戦略の戦い！」
「そうですね。オールマイト、俺からも頼みます。桁外れのパワーを

見せつけてやって下さい。それがきっと彼らの成長を引き出すいいきっかけになるはずです」
「ブラド・・・分かりました。お受け致しましょう。私に任せてください」
「よし！　じゃあ次は――」

「オールマイト、ちょっといいかい？」
　会議が終わり職員室に戻る途中でオールマイトは根津に呼び止められた。なんだなんだと歩き出した彼の後ろをついて行くと仮眠室に引っ張りこまれる。
「ここに来ると言うことは何か皆には聞かれたくない話が？」
　オールマイトがすかさず話を振ると根津はおもむろに頷いた。
「実は・・・さっきの組み分け会議のことなんだけど、パンドラ・吹出ペアに君をあてがったのはあの理由だけじゃあないんだ。もちろんその理由が８割は占めている。けど・・・？残り２割は鈴木二重のことについて」
「パンドラがどうかしたんですか・・・」
「うん、君にパンドラズ・アクターの実力を見極めて欲しいのさ。なぜ？　という顔をしているね。君が疑問に思うのは当然なのさ、教育者として１人にこだわり過ぎるのは宜しくない」
「・・・ましてや彼が我々の敵になった場合の対応策を考えるためだとしたら」
「校長は彼が将来私達と対立すると考えていらっしゃるのですか!?」
　無意識に机を力いっぱい叩いてしまったことによる痛みを気にすることなくオールマイトは根津に詰め寄った。教育者とは生徒を導く者である。その教師が生徒をなんの根拠もなく悪とみなすことはあってはいけない。たとえその素質があったとしてもそうならない

よう寄り添い導くのが彼の考える教師の使命である。根津も拳を握りしめて苦しそうな声で言葉を続けた。
「ああ分かっているのさ！　私が彼に対して考えていることは教育者としてあってはいけないことも！　だけど私の残っている野生の勘が反応しているのさ！　彼が何か得体の知れない、我々と違う何かであると、悪でもないが正義でもない。絶対敵に回してはいけない何かだと。オールマイト、君にはそう感じたことはないのかい!?」
　常日頃冷静な校長の取り乱しながら投げられた問いにオールマイトは直ぐには答えられなかった。なぜなら彼もパンドラに対して根津と同じようなことを感じたことがあるからだ。自分のオールマイトとしての勘は信用しているが実際のパンドラと関わりあってからは気にしなくなっていた。たとえ正義感がひとつも感じられなくとも軍帽を被ったあの生徒はＢ組と切磋琢磨しながらヒーローになるための日々を過ごし、入試では心操を救い、なんなら巻き込まれたのにも関わらず自分に向かって協力を申し出てくれた。オールマイトはパンドラにヒーローの素質は備わっていると認めていたのだ。少なくともヴィランになるはずないと
　だがそれと同時にほんの少し感じる違和感
　例えばオールマイトというヒーローを見る目、緑谷へ向ける目、食堂のＴＶに映るヴィラン達を見つめる目、そして緑谷と同じようにＡＦＯについて説明する自分を興味なさげに眺めているあの目
　底なし沼を思わせる黒い穴のような彼の目は世界の裏まで見透かしているようで、それはまるで全てを知りつつ1歩離れた所で自分たちを観察しているように
　（そしてあの体育祭で見せたあの一瞬の動きも‥）
　考えが突拍子過ぎるはずなのに嫌な想像に溺れていく。どうして自分がそんなことを考えてしまうのか分からなかった。そしてそこまでしてパンドラを信頼しきれていない自分自身に嫌気がした。
「その反応は‥」
「パンドラは‥ヒーローの卵です。それでも校長がそこまで心配するならお願いを引き受けましょう。それでこの話は終わりです」

「ああ……私だって自身の生徒を疑いたくない。けれど確実にパンドラは何か……を隠している。入試のあの映像を見てからその疑いが頭から離れてくれないのさ」

「……では仕事が残っているので」

……

普段よりも少し荒く閉められたドアの音で、オールマイトは根津のぽつりと漏らした独り言に気づけなかった。

「出来ることならこんなこと気づきたくなかったよ。全くこの身が恨めしいね……。私だって本気で彼が敵になるとは思っていない。だって彼は――……パンドラズ・アクターは雄英高校の、私達の生徒なのだから」

そこに居たのはただの1人の校長であった。

続く

ラスボスの倒し方

――演習場

「まず最初に言っときます。オールマイトとパワー勝負は勝ち目がありません。諦めましょう」

「初っ端からテンションガガガン！　けど現実に向き合うことは大切だね！」

「ゲームに例えると最高レベルのプレイヤーが魔法や特技にスキルポイントを使わずに全て身体能力に注ぎ込んだ感じですね」

「なんで追い討ちかけてくんのさ⁉」

　ポジティブに考えようとする吹出にいきなり絶望を叩きつけ、しれっと追加攻撃をくらわせ頭を抱えさせたのもスルーし、パンドラは大袈裟なジェスチャーを交えて話を続けた。

「ではここでクーイズ！　こういう圧倒的な敵を倒す際、必要な要素は？」

「努力！」

「必要不可欠ですが今更どうしようもないですね」

「友情！」

「コミュニケーションの円滑化もよろしいですが今回に限っては私達の能力値では大した効果は発揮しないでしょう」

「勝利！」

「それは目的です」

「うわあああん⁉　じゃあもうあれだ！　自爆覚悟のドギャーッン！　なんか上手く行く気がする！　むしろ上手く行く気しかしない！」

「しっかりしてください！」

　吹出はいつものポジティブ思考を取り戻したかのように見えたが実際は悪い意味でポジティブになっていた。そんな吹出の頬らしき部分にパンドラは手のひらを叩きつける。世間一般で言うビンタだ。

「なんでパーンッ⁉　親父にもぶたれたことないのに！」

「私だって父上に壁ドンはされてもぶたれたことはないです！」

「知らないよ⁉　てかツッコんでよ⁉」

ふざけているのかないのかよく分からない会話を行なうこと1分、時間にしては短いが一通り騒いだ2人はやっと現実に目を向け始めた。
「茶番はこのくらいにして作戦会議です。吹出くんも調子を取り戻したようですし」
「・・なんだかんだ言ってもボクだってヒーロー希望だから、覚悟は決めてるよ。ヒーローになればこんなことときっと日常茶飯事だし気持ちは別としてヒーローが真っ先に逃げちゃったら残された人達はどうなるんだって話」
「・・凄いですね」
「・・あっいや、だからといって今回の試験では逃げる選択肢は視野には入れているからね？　戦いたい訳では無いからね？」
その後何かごにょごにょと続けていたがパンドラが凄いと口に出したのはそこではなかった。吹出が当たり前のように名も知らない市民を守る対象として考えていることの方である。パンドラにとって父が優先第一、その下にアインズ・ウール・ゴウンの身内、あとはギリギリ友達と呼べる関係性の者以外基本どうでもいい。今はヒーローとなるため日常でも市民に手を貸したりすることもあるが、目的がなければ例え目の前で幼児がヴィランに引き裂かれそうになっていてもガン無視を決めているだろう。そんなパンドラにとってヒーロー、またヒーロー志望の吹出の考えはどのような思考回路をすれば辿り着けるのかてんで理解出来なかった。自分の関わりのある者を守りたい気持ちはまだ理解できるがその他を守る義理などない。
パンドラは一切表情を変えずに不思議に思いつつも感心していた。ただ彼自身がその考えに賛同するかどうかは別であるが
「まぁオールマイト相手ですから戦いたくない気持ちも分かります。逃げる方向性で考えるとそうですね・・さっきオールマイトと聞いて咄嗟にいくつか使えそうなクラスメイトの個性をコピーしといたんですけどその中に取陰さんもいるんで吹出くんが【コミック】でモクモクでも出して囮を務めて貰っている間に【トカゲのしっぽ切り】で色んなコースでこっそりゴールを目指せば・・」
・・

「おお！　ってボク囮!?」
「けどオールマイトなら囮を数秒で吹っ飛ばし全部見つけそうな気が…」
「ボク数秒でぶっ飛ばされんの？」
「もしくは全部更地にされて隠れる場所ないね！　あっパンドラみーっけ!!　とか笑顔で言いそうです」
「ボク達生かす気ゼロだね！　泣きそう！」
　わざわざ個性でシクシクと周りの湿度をあげながら泣き真似をする吹出をまた華麗に無視しつつパンドラは話を続ける。
「で話戻すんですけどパワーじゃオールマイトには叶わない。逃げるのも難しい。かと言ってジャンプ三原則も自爆もダメ。こうなると出来ることは限られていますよね？　今ラスボスの倒し方のトレンドは……」
「トレンドは……」

「状態異常!!」

???

「オールマイトはやばいということは分かりますがその限界は私の頭脳をもってしてでも予測がつきません。なのでこの作戦も確実とは言えませんし、全く効きもしない可能性もあります。もしも他にいい案があるのならば今すぐ遠慮なく仰ってくださいね。さて、私は準備の為ここを離れます。何かあった場合はすぐにこの通信機で知らせて下さい。…お互い生きて帰りましょう」
　パンドラは【創造】で作り出した通信機を渡すとあっという間にビルの影に消えてしまった。取り残された吹出はやけに静かなビル街に不気味さを覚えながら貰った通信機を両手で握りしめる。パンドラは何か案があるならばと言ったが自分に思いつくような策は、しか

もオールマイトに対してなどまるでなかった。頭に浮かんだものを片っ端からシュミレーションしても全て笑いながらねじ伏せられる様しか再生されず精神衛生上良くないので吹出は頭を振って考えるのをやめた。

吹出は【コミック】という曖昧かつ無限の可能性のある個性を持って生まれた。確かに自身の頭部は少しユニークで極小数の可哀想な人達が何か言っていたような気がするが優しい両親や気の合う友達に囲まれすくすくと健康的に育てられた。そのおかげか自分だけでなく周りの人間も特に子供に笑顔になって欲しい。出来るのならば自分が笑顔にしたいとそう思うようになった。だが現実は甘くもなく今日もヴィラン達は暴れまくり悲しみに暮れている人は後を絶たない。吹出はそんな人たちを救いたかった。そんな彼は気づけば小学校の卒業文集の夢の欄にヒーローと書いていた。

彼の中では正直逃げたい気持ちはまだ消えていない。いくら自他共に認めるポジティブ思考でも楽観的とは違う。自身の置かれた状況がやばいということを吹出は十分に理解していた。それでも逃げることはしない。

人を笑顔にするにはまず自分が笑わなければならない。

ここで逃げたら吹出はヒーローとして胸を張って笑えなくなると確信していた。今回相手取るオールマイトはどんな時にも常に笑っている。そしてそれは多くの人の心を救い人々の笑顔を取り戻した。自分もあんな風に笑いたい。今回オールマイトに向かい合うことで吹出は目指す理想のヒーローに1歩近づけるような気がしていた。

(もうここはバシッと覚悟を決めてやるしかない!)

決意を新たに自分の身体の最終調整を行う。今日の自分の喉は身体は精神は、隅々まで確認していく。

「はあぁー明日声出るかな・・――っっ!?」

何気なしにそう呟いた瞬間空気が変わった。

そして響く轟音と荒れ狂う土埃、ビルの影にいたおかげで直接的なダメージは受けていないがビリビリと身体に鳥肌が立つ。まるで自身が無力な獲物になってしまったように吹出の身体は細かな震えが

止まらない。
　そんな身体を必死に動かし周りの様子を伺うと閑静なビル街はどこに行ったのか窓は全て割れ、道路は抉られていた。もし自分がそこに居たらと考えると怖くて仕方がないと吹出は自身の身体を抱きしめる。
「わーたーしーがーヴィランとしてやってきた!!」
　そんな遠くもない距離から響く、いつもなら頼もしく聞こえる声も今ここでは吹出に死を運んでくる鎌持った骸骨としか思えない。嫌でも理解していた圧倒的な実力の差に決めた吹出の覚悟が萎みそうになったタイミングで丁度無線からパンドラの声が響き渡った。
『吹出くん生きてますよね⁉　土埃を起こしてくれた今がチャンスです。容赦は不要です。レッツラゴーゴーオオ!!』
「分かってるよっ!!」
　吹出が無線に応えた数秒後、屋上からオールマイトに向けられたマイク（パンドラ）の全力の【ヴォイス】はかろうじて残っていた窓ガラスを一片の欠片さえ残さず割り尽くす。それと同時に耳栓をしていても伝わってくる威力に身体を震えさせながらも吹出は抉れた地面に飛び出し息を大きく吸った。
【ピッカアアアアアア】
【コミック】によって具現化されたオノマトペはピとカとアの形をした目を潰すレベルの光を放つ物体となりオールマイトに向かってゆく。
　今の攻撃が上手く決まっていればオールマイトは五感のうち２つを失ったことになる。それでも飽き足らず吹出はもう一度息を吸い込んだ。
【ねっばねば!!】
　先程のオノマトペと同じ軌道をえがき今度はネバネバした粘着質な物体がオールマイトに命中する。
　土埃が晴れてオールマイトに無事個性が決まったことを一瞬で確認した吹出はカフスを手にもがいているオールマイトの元へ走り出す。一時的に目と耳と手足の動きを制限されているとしても敵であ

るオールマイトに近づくのは恐ろしくて仕方がなかった。しかし吹出は足を止めない。なぜなら彼は信じているからだ。パンドラがこの瞬間、【抹消】によってオールマイトの個性を消していると

オールマイトの個性は長年謎に包まれ今もまだ分かっていない。いくら個性を消せる【抹消】であってももしかしたらの事がある。その可能性が頭を過ぎらない訳がない。

それでもだ。

それでも吹出はパンドラの事を信じ、足を踏み出す。

【ガッチガチ】

オールマイトの実力はこちらとて良く知っている。よく知っているからこそ遠慮はしない。経験上1番硬いであろうオノマトペを発動しダメージを与える。やりすぎだと言う考えは全くなかった。

――ドゴッ

さっき放った時には聞こえなかった音と共にオノマトペが砕け散り吹出は思わず足を止めそうになる。オールマイトは素の身体で攻撃を受けきったことに驚きを隠せなかった。だが無事ではないらしく鼻から赤い液体が流れているのが確認できた。吹出は鼻血を裸眼ではっきりと確認できる位置まできていた。

吹出はカフスを嵌めようと手をあげる。その瞬間オールマイトもネバネバして動きづらそうな腕を動かし、砕けた先程のガッチガチの破片を掴みとる。

そして――

（えっ!?）

投げた

破片は凄まじい勢いで飛んでいく。
オールマイトが投げた先は、吹出の記憶が正しければパンドラが待機している場所のはずだった。

――ドゴンッ

数秒前オールマイトからなった音と似通った音が吹出の鼓膜らしき部分を揺らす。
オールマイトはまだ目を閉じたままである。鼻だけではなく耳から赤い液体が流れていた。個性も消されていたはずだった。
(なんで！　なんでだ！　どうして??　いやそれよりパンドラはっ!?)
吹出は猛烈に嫌な予感がした。そして嫌な予感ほどよく当たる。
「ふぅっっっん!!」
オールマイトが腕を一振するだけで上半身のネバネバが辺りに散らばる。さらに続けて身体を一捻りしたかと思えばコマのように回転するオールマイトを残し下半身辺りにかろうじて存在していたネバネバも意味をなすものでは無くなった。
そんな場面を吹出は間近で見てしまった。
「あっ・・あっ・・」
目の前には何の障害も拘束も無くなった確約された死がいる。生き残るために、反射的に吹出の身体は感覚を鋭くさせていた。しかしそれも相手の絶望的までの差を知らしめるだけであり、より一層精神的に吹出を追い詰める。
次の瞬間何が起こるか全く分からない。起こったとしてもそれを吹出は認識できるのだろうか
「なっ・・んで・・」
呼吸さえも思い通りにいかない口から溢れ出たのは心からの疑問だった。
「なんでって?」
オールマイトはアメリカ人のように大袈裟に肩をすくめる。その

仕草は偶然かわざとかパンドラを想起させるものであった。
「気合いさ!!」
そう言って白い歯を輝かせたオールマイトに、吹出は両手で顔を覆い天を仰いだ。ついでに一言
「んな訳あるかぁあ!」
コミックのつっこみキャラ達がスタンディングオベーションで拍手を送るであろう見事な一言であった。
それは一種の吹出の出来る精一杯の悲しい現実逃避だったのかもしれないが
続く（のか？）